湖西線関係遺跡調査報告書

本　文　編

滋賀県教育委員会

湖西線関係遺跡調査報告書

本　文　編

1973. 5

滋賀県教育委員会

滋賀県文化財保護協会

序　　文

比叡山塊と琵琶湖にはさまれた狭長な大津北郊は，崇福寺跡や南滋賀町廃寺，あるいは滋賀里百穴など多くの史跡や埋蔵文化財を包蔵した文化財の一大宝庫であります。

ところが，昭和49年に完成をめざす国鉄湖西線が，江若鉄道の廃線敷に沿って敷設されることになり，滋賀里縄文遺跡をはじめ，いくつかの埋蔵文化財が破壊の危機にたつことになりました。

このため本委員会では，文化庁と協議を重ね，当地域にかねてより想定されてきました「大津京跡」の推定地域として，滋賀里縄文遺跡を含む錦織から穴太にまたがる3.4kmを全域調査する運びとなりました。

本報告は，二年間にわたる調査，整理の集大成であり，調査委員，調査員の絶大なご努力の賜ものにほかなりません。

この報告書が有効に利用されますとともに今後の文化財保護の高揚に幾分なりとも益するところがあれば幸いであります。

おわりに，調査委員会各位，ならびに格別のご協力とご支援をいただきました関係機関，調査員その他地元の方々に深く感謝の意を表する次第であります。

昭和48年3月

滋賀県教育委員会

教育長　柳　原　太　郎

例　　言

1．本書の構成は時代別におこない，第1章 縄文時代，第2章 弥生時代，第3章 古墳時代，第4章 飛鳥時代以降とした。このうち第3章では6世紀末までを扱い，以後を第4章としたが，これはあくまでも便宜的な分割にすぎない。

2．本文中の数ページにわたる表は，関連する各章末へ一括挿入した。

3．遺物番号の表示は，本書の図版・図面・表・本文を通じて統一した。まず，各章の時代区分にしたがって縄文時代をA，弥生時代をB，古墳時代をC，飛鳥時代以降をDとし，さらに遺物の種類によって木製品をW，石器・石製品・玉類をS，骨角器をB，土製品をC，瓦をR，古銭をMとした。なお，土器については種類別表示の記号を除いた。以上，2つのアルファベット記号の組合せによって，遺物の時代と種類を示し，その後に個々の遺物の整理番号を付した。たとえば，BW10は弥生時代の木器の10であり，C20は古墳時代の土器の20である。

4．本書の執筆者および執筆分担は以下の通りである。

田辺昭三　序章，終章

加藤　修　第1章，第3章・2・(4)・土器

丹羽佑一　第1章・1・(4)・Aのうち，精製土器の部分を分担執筆

吉川義彦　第1章・1・(4)・B・石器，第3章・2・(4)・石製品

高谷美由紀　第1章・1・(4)・A・晩期以前の土器

太田芳美　第2章・1・(1)，第3章・1・(1)，……井守と共同執筆

井守徳男　第2章・1・(1)，第3章・1・(1)，……太田と共同執筆

萩本　勝　第2章・1・(2)，第3章・1・(3)・ⅢE区の調査

福岡澄男　第2章・2，第3章・1・(2)・立地，Ⅳ区の竪穴住居址群，小結，(3)・ⅣB区南半の調査，同2・(1)，同(2)，

松沢　修　第3章・1・(2)・小結，同(3)・ⅣD区の調査，VA区の調査，VD区西の調査，VD区東半の調査，2・(3)・6世紀後半の土器，小結，第4章1，2・(1)，同(2)・瓦，銭貨，金銅製止め具，鉄器・銅器・鞴羽口，

永田信一　第3章1・(3)・ⅣB区北半の調査

野元晴範　第3章・2・(3)・**ⅢE区下層の土器，ⅣB区下層の土器，ⅢE区上層の土器，小結，**

江口千恵子　第3章・2・(4)・**木器，**第4章・2・(2)・**木器，**

5．第4章末の〔「大津京」関係文献目録〕は，西田弘『湖都大津』所収の文献目録に，井上満郎および永田信一製作の文献目録を加え，これを石田利子が検討・整理したものである。

6．本書の構成，編集については田辺が立案し，編集実務は主として加藤が担当した。最終的な調整・校正は田辺・加藤が共同で行った。

湖西線関係遺跡発掘調査報告

本 文 目 次

序 章 発掘調査の経緯

1 調査にいたる経緯 …… 1
2 調 査 の 経 過 …… 2

第1章 縄 文 時 代

1 滋賀里遺跡の調査 ……11
(1) 研究の歩み ……11
(2) 遺跡の立地 ……11
(3) 墓址と貝塚 ……13
(4) 遺物の検討 ……33
A 土 器 ……33
B 石器・骨角器・木器・土製品 ……31

2 各 地 区 の 調 査 ……43
(1) IF区の包含層 ……43
(2) 他の地区出土の縄文式土器 ……44

第2章 弥 生 時 代

1 遺 跡 の 調 査 …… 113
(1) 方形周溝墓 …… 113
(2) 溝跡・その他 …… 116

2　遺跡の検討 ……119
(1)　方形周溝墓出土の土器 ……119
(2)　各地区出土の土器 ……120
(3)　石器・木器 ……122

第3章　古墳時代

1　遺跡の調査 …… 133
(1)　方形周溝墓 …… 133
(2)　竪穴住居址 …… 135
(3)　溝跡・その他 …… 138

2　遺物の検討 …… 147
(1)　方形周溝墓出土の土器 …… 147
(2)　竪穴住居址出土の土器 …… 147
(3)　各地区出土の土器 …… 148
(4)　木器・その他 …… 152

第4章　飛鳥時代以降

1　遺跡の調査 …… 193
(1)　溝跡・掘立柱建物の調査 …… 193
(2)　ⅡH区の調査 …… 194

2　遺物の検討 …… 196
(1)　土　　器 …… 196
(2)　瓦・木器・その他 …… 199

終　章 ――総括にかえて―― …… 211

「大津京」関係文献目録 …… 222

挿　図　目　次

挿図１　ⅢＣ区墓址81号集骨墓実測図（製図　吉川）……15
2　突起の種類（製図　桃野）……22
3　凹底に認められる使用痕（撮影　森）……25
4　樹皮紐で補修した鉢（Ａ250）（撮影　森）……26
5　滋賀里Ⅱ～Ⅴ深鉢，甕，鉢，椀，壺（東北・北陸系土器）（製図　丹羽）……27
6　ⅢＣ・ⅢＤ区出土の石器実測図（実測・製図　吉川）……38
7　ⅢＤ区出土の弓（ＡＷ19）の弓弭部（撮影　森）……41
8　ⅢＣ区出土の樹皮巻きの把手（撮影　森）……41
9　ⅢＤ区出土の火鑽臼と火鑽杵（撮影　森）……41
10　Ⅰ区１～３号溝実測図（製図　吉川）……117
11　各地区出土の石器実測図（実測・製図　吉川）……123
12　Ⅰ区１号溝出土の鍬実測図（実測・製図　福岡）……124
13　Ⅳ区９号住居址実測図（製図　福岡）……136
14　ⅣＤ区遺構実測図（製図　吉川）……141
15　ⅤＡ区18号溝東北辺内の杭列（撮影　荒木一紀）……143
16　ⅤＡ区19号溝の溝内セクション（撮影　荒木）……143
17　ⅤＤ区西半４号溝（方形囲溝）東南辺と溝内セクション（撮影　荒木）……145
18　ⅤＤ区西半５号遺構内の土錘出土状態（撮影　荒木）……145
19　ⅢＥ・ⅣＢ区出土の手づくね土器実測図（実測・製図　野元）……150
20　ⅤＡ区１号住居址出土の琴柱・用途不明木器とⅤＡ区出土の琴柱実測図（実測　江口，製図桃野）……153
21　各地区出土の紡錘車実測図（実測・製図　吉川）……154
22　各地区出土の砥石実測図（実測・製図　吉川）……155
23　各地区出土の玉類実測図（実測・製図　吉川）……156
24　ⅢＥ区出土の石製模造品・子持勾玉実測図（実測・製図　吉川）……156
25　各地区出土の土錘実測図（実測　加藤，製図　松沢）……157
26　ⅤＤ区西半大溝内の板・杭材の出土状態（撮影　荒木）……193
27　南滋賀廃寺出土の瓦（撮影　西田　弘）……199
28　ⅡＨ区出土の金銅製止め具実測図（実測・製図　松沢）……200
29　比叡山中腹より「大津京」推定地付近を遠望（撮影　森）……211
30　抜歯人骨（ⅢＣ区163号土壙墓）（撮影　森）……212
31　弓（ＡＷ18）の出土状態（撮影　森）……214
32　６世紀後半の建築材出土状態（ⅣＢ区開析谷中の褐色粗砂層）（撮影　森）……217
33　溝の護岸用石材と建築材（７世紀前半，ⅤＤ区東半６号溝）（撮影　荒木）……218

表　目　次

第１表　土壙内出土の土器型式……16
第２表　突起の種類……23
第３表　滋賀里遺跡の晩期土器組成……26
第４表　滋賀里遺跡出土晩期以前の土器型式……20
第５表　石斧の観察……32
第６表　石鏃の出土層位……33
第７表　石鏃の型式別比率……34
第８表　石鏃の型式別重量……34
第９表　遺跡出土石匕・石錐・不定形石器の観察……35
第10表　石錘の重量及び出土層位……36
第11表　砥石・敲石・石剣類の出土層位……37
第12表　出土石器・玉類の観察……39
第13表　ⅢＣ区墓址主要な遺構の観察……51
第14表　滋賀里遺跡出土の晩期縄文式土器の観察……60
第15表　滋賀里遺跡出土の骨角器の観察……105
第16表　滋賀里遺跡出土の木器の観察……108
第17表　滋賀里遺跡出土の土製品・紡錘車の観察……111
第18表　弥生時代の石器……122
第19表　方形周溝墓内弥生式土器の観察……127
第20表　各地区出土弥生式土器の観察……128
第21表　竪穴住居址の観察……163
第22表　土錘の分類……158
第23表　方形周溝墓内土師器の観察……166
第24表　竪穴住居址出土の土器の観察……167
第25表　各地区出土古墳時代土器の観察……169
第26表　古墳時代木器の観察……185
第27表　古銭の種類……200
第28表　飛鳥時代以降の土器・陶磁器の観察……202
第29表　飛鳥時代以降の木器の観察……208

序　章　　発掘調査の経緯

1　調査にいたる経緯

1967年の分布調査　　山科を起点に，琵琶湖西岸を北上して沓掛にいたる国鉄湖西線の建設事業がはじまったのは，1964年のことであった。

滋賀県教育委員会では，この湖西線が「大津京」推定地，滋賀里縄文遺跡など，既知の重要遺跡地内を通るため，建設工事の着工にさきがけ，1967年に国庫補助事業として，既知の遺跡の範囲確認と路線にかかる新遺跡の発見とを目的とした分布調査を実施し，その結果をまとめた。[1)]

発掘調査の準備　　われわれが発掘調査を予定した範囲は，1967年に実施した分布調査の結果にしたがい，さらにその後の新知見を参考にして決定した。

調査予定範囲は，大津市錦織から同穴太までの南北約3.4kmとし，東西の範囲は路線幅の10m前後に限定した。

この調査範囲の決定にあたって最も重視したのは「大津京」推定地であり，従来考察されてきた有力な宮跡推定地のすべてを含むよう留意した。[2)]しかし，発掘調査の実施にあたって，調査対象地内の埋蔵文化財については多少にかかわらず全て調査することを原則とし，これを実行した。

発掘調査は，まず遺跡の規模を，より正確につかむために，調査範囲全般にわたる緻密な遺物分布調査，ボーリング調査，試掘調査を実施することとし（第一次調査），次いで，第一次調査の結果にもとずき，重点的な発掘調査を実施することにした（第二次調査）。なお，第一次調査で特に遺構や遺物の確認できなかった地点については，旧地形を復原するための土層調査を行うことにした。

発掘調査の期間は，滋賀県教育委員会，日本鉄道建設公団とわれわれ調査団との間で，再三にわたる協議の結果，1971年３月より1972年３月までの13カ月間とし，1972年４月から1973年３月までの１カ年間を発掘資料の整理と報告書作成の期間とした。

上記の調査計画にしたがって，調査費は次のように決定した。

第一次発掘調査費	20,000,000円
第二次発掘調査費	36,000,000円
整　理　費	18,000,000円
＊人骨取りあげ費	1,000,000円
＊整理室建設費	2,000,000円
計	77,000,000円

（＊印は発掘調査及び整理作業の進行過程で追加されたものである）

発掘調査を担当する調査団は，調査委員（5名），調査団長（1名），調査員（15名），調査補助員（30名）をもって編成したが，発掘調査の進行過程で調査員および調査補助員には大幅な出入りがあり，当初の予定よりもはるかに大規模なものとなった。調査委員および調査団の構成については，次節に掲げた通りである。

2　調査の経過

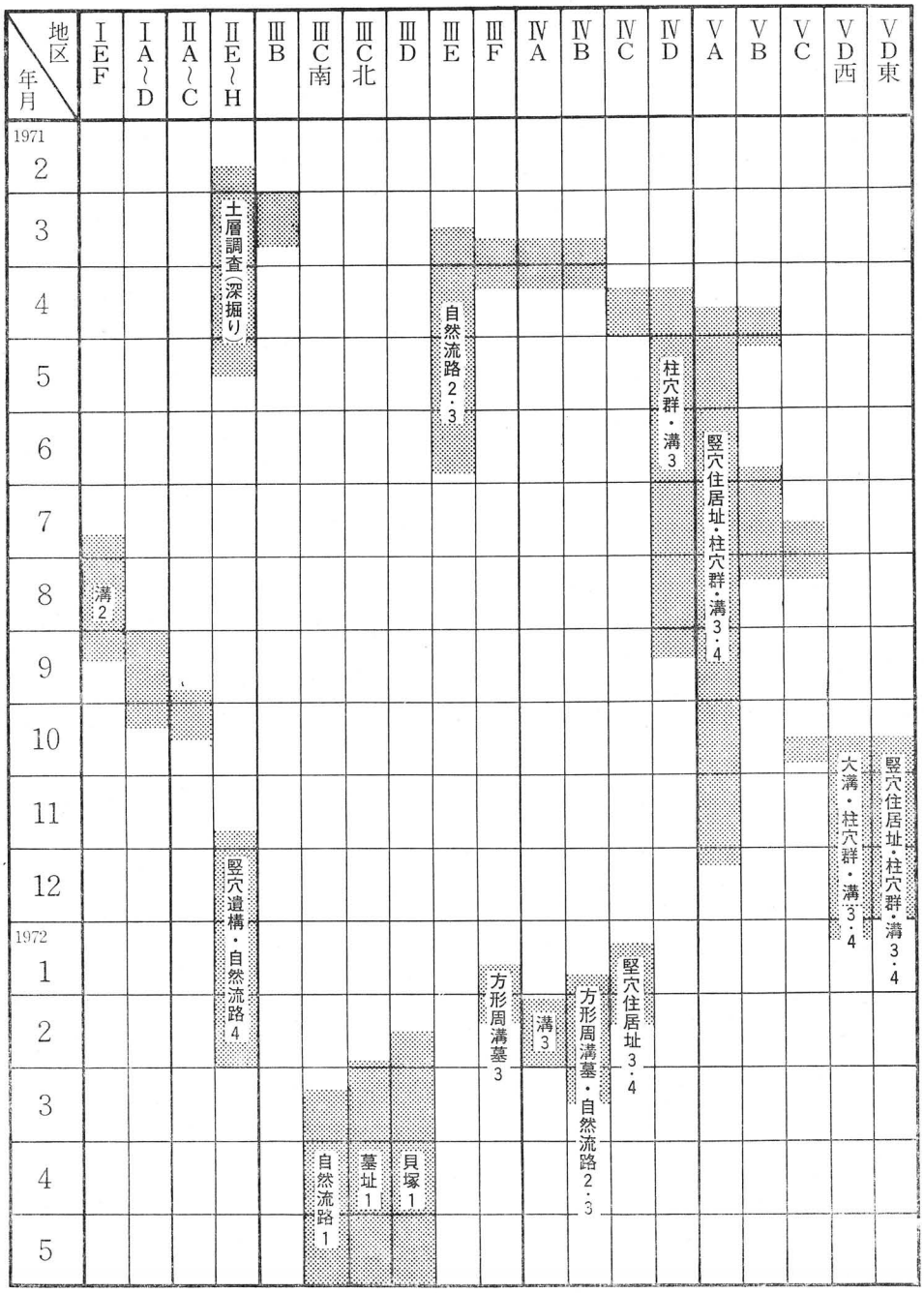
調査の方法　今回の調査は，鉄道線路敷内という限定された範囲について実施したため，調査の方法に関してさまざまな配慮が心要であった。

調査範囲は，先に述べた通り錦織から穴太までの南北約3.4kmに及ぶが，東西幅は路線敷の約10mに極限された。ちょうど，湖西の平野部を幅10mのトレンチで南北に縦断するかたちとなる。調査対象地のこうした条件を生かして，調査の目的を十分に達成するためにはどのような調査方法をとるべきか，それがわれわれにとって先決の問題であった。

われわれは，まず調査範囲全体を南から北へむかって，Ⅰ～Ⅴ区に地区区分した。各区の境界は条里推定線上にのる川や道路に求めたので，南北の距離は各区ごとに一定でない。この各区を，さらに100mごとに小区分し，南から順にA，B，C……とした。但しⅠ区のみは調査範囲の拡大を想定して北から南へA，B，C……とした。小区分した範囲はこれを1mごとに細分して最小単位とした。したがって，調査地内における南北の位置表示は，例えば「ⅢC—50」（Ⅲ区の基点より北へ250mの地点）となる。

また，東西の位置表示については，調査予定地の西端から，さらに西へ寄った地点を仮の基点とし，西から東へ数字とアルファベット2文字の組合せによって，順に1mごとに区分した。すなわち，基点を1aaとし，東へ1mごとに1ab，1ac，……1zz，2aa……となり，東限はない。ただ，この場合基点の設定と，そこから調査地点まで定点を移すこととが技術的に困難なため，現実にはⅡA—00の地点を東西線の2aaと定

発掘調査の進行状況



1．縄文時代　2．弥生時代　3．古墳時代　4．飛鳥時代以降

め，ⅡA－2aa－00の点を実際上の基点として，全区の割付けを行なった。

上記の約束にしたがって，南北，東西の位置表示を組合せることによって，調査範囲内の全ての地点を1m×1mの単位で位置ずけることが可能となった。例えば，「ⅢD－2az－50」は，Ⅲ区の基点より北へ350m，東西線の基点としたⅡA－2aa－00の点から東へ25mの地点ということになる。

以上のように，今回の調査でわれわれが採用した地点表示法は，やや複雑であり，しかも東西の位置表示にアルファベットを用いたため実距離がすぐに判明し難いなどの難点をもっている。しかし，この地点表示法を採用することによって，今回の調査対象地を含む湖西平野の全ての地点を記号で表示することが可能となり，また既知の遺跡や今後の調査による新遺跡の記録にも適当であると考え，敢えて採用した。

なお，本報告書中での地点表示は，複雑化を避けるため，原則として南北の区分（例えばⅢE区）のみに限った。

発掘調査の経過　発掘調査に着手したのは1971年2月末であった。

調査の進行状況については，およそ別表の通りである。発掘調査は，一応1971年6月を目途に第一次調査を完了し，引き続き第二次調査へ進むこととしてスタートした。しかし，用地問題などがからみ当初の予定通りに進行させることが困難となったため，臨機の処置をとって調査を進めた。そのため，予備調査と本格的調査とが並行して行なわれた期間もあった。

第一次調査は，主として旧江若鉄道敷を対象にして実施した。この旧江若鉄道敷と湖西線予定地とは，Ⅱ区北半部とⅣ区南半部とで重なっているが，大半の地区では多少の間隔をもってずれている。しかし，両者の最大間隔は50mをこえないので，新路線予定地がずれているところでも旧江若鉄道敷内で遺構や包含層の存在を確認し，その結果を参考にして，第二次調査で新路線予定地の調査を行うこととした。なお，新路線と重複しない旧江若鉄道敷の遺跡については，例えばⅢB～ⅢD区のように，縄文晩期の遺物包含層を確認したが，その上面で止め，本格的発掘調査を行なわず，そのまま埋め戻したケースもある。これは，当面遺跡が破壊されることはないと判断したからである。

第二次調査の進行過程で，多くの遺構遺物を検出したが，その中には各期にわたる大量の植物遺体があった。また，滋賀里遺跡の調査では，人骨，鳥・獣・魚骨，貝類，植物遺体，木器，石器などの各種遺物が出土した。これらの遺物については，それぞれ専門研究者の鑑定・指導を受け，その成果の一部は本文中或いは付論文として本報告書中に収録した。

発掘調査にあたって，遺構や遺物の検出に意を注いだことはいうまでもないが，同時に調査地全体の旧地形を復原するための土層調査を実施した。必要個所に4m×4mのグリッドを設定し，ほぼ－4mまで掘り下げて，層序と各層内の混入遺物とを観察し，各層の堆積年代を推定した。ⅡH区では，－4mでなお奈良・平安時代の遺物を含む個所もあったが，そのような場合はさらにハンド・オーガーを用いてボーリング調査を実施し，－4m以下の堆積状態まで観察し，旧地形復原の資料とした。

滋賀里縄文遺跡をはじめ予想をこえた遺構・遺物が検出されたため，発掘調査は1972年5月末まで延長した。この15カ月間にわたる発掘調査に参加した調査員および調査補助員の延人数は，11671人に達した。

整理と保存　1972年6月から，発掘調査にひきつづいて出土遺物と調査記録の整理を開始した。

整理作業は，一応時代別に分担を決め，各時代の主担者を以下の通りとした。

縄文時代	加藤　修	弥生時代	福岡澄男
古墳時代	福岡澄男	飛鳥時代以降	松沢　修

このほか，整理作業に専従し，整理作業の一部を責任分担した者は，以下の通りである。

梅川光隆，江口千恵子，岡戸恵子，寿福　滋，高谷美由紀，永田信一，丹羽佑一，野元晴範，萩本　勝，宮地美千代，桃野真晃，吉川義彦

調査と整理の進行過程で，事前の協議にもとずき，われわれは調査地全域の中で6カ所の遺構について保存を要望したが，日本鉄道公団側の了解によって，要望地点の全てを保存することになった。すなわち，高架路線の橋脚の間隔をひろげ，或いは設計変更によって橋脚の位置を移動することで，遺構を保護したのである。保存した遺構は次の6カ所である。

地　点	保存範囲
ⅢC区開析谷の木器（縄文晩期）出土地点	22.0m
ⅢC区墓址（縄文晩期）	35.0m
ⅢD区貝塚（縄文晩期）	22.0m
ⅣB区方形周溝墓（古墳時代）	19.0m
ⅣB区方形周溝墓群（弥生時代）	19.0m
ⅣC区竪穴住居址群（古墳時代）	22.0m

なお，ⅢC区墓址のうち，建設工事の諸事情によって破壊の止むなきにいたった人骨を

伴う土壙墓３個所については，これを土壙ごとに切取って保存することにした。人骨を土壙ごとに取上げることは，これまで試みられた例がなく，技術的に極めて困難なため，奈良国立文化財研究所技官沢田正昭氏の直接指導によってこれを実施し，成功した。

保存の決定した各遺構については，石灰を用いてその位置を明確にしたのち，埋め戻した。出土遺物と記録類の整理は，1973年３月末をもって一応終了したが，検討の余地を残した問題は多く，今後，再検討の機会を待ちたい。

出土遺物の総量は，調査の最終段階で平箱2000箱をこえた。整理作業終了後，これらの遺物は湖西線高架下に新設した整理室へ仮りに保管し，管理の難かしい木器類などは，近江風土記の丘資料館へ保管を依頼した。だが，このような遺物保管の現状はあくまで暫定的な措置にすぎないので，今後，早急に各種遺物の万全保存体制と必要な施設の建設が実現するよう要望したい。

調査団の構成　２年間にわたって実施した湖西線関係遺跡の調査は，日本鉄道建設公団の委託により，文化庁の指導を受けて滋賀県教育委員会が主催したものである。また，発掘調査にかかわる事務は，これを滋賀県文化財保護協会が行った。

遺跡の発掘調査及び整理作業を直接担当したのは，湖西線関係遺跡調査団であり，調査の計画，実施にあたって調査委員会の指導を受けた。以上の関係諸機関及び調査団の構成は，次の通りである。

日本鉄道建設公団

総　　裁　篠原武司
理　　事　松田鉄也
用地部長　渡辺武男
同　課　長　伊藤四郎
同　係　長　呉林淳一，豊福　源，勝又　昇
大阪支社長　長野逸人，藤田雅弘
用地部長　広瀬迪夫，木下忠義
同第一課長　前川広義
同第三課長　大角朋伸
同　担　当　竹内友一，小野　豊，神本伸一，
　　湖西線部長　浜田正巳，荒井満雄
同第一課長　井内友雄
同　　係長　井角幸一

大津鉄道建設所長　加藤仁敏

株式会社熊谷組所長　佐藤純一
株式会社奥村組所長　赤星博生

滋賀県教育委員会　教育長　柳原太郎
次　長　磯田英夫
文化財保護課長　井上佐助
同　課長補佐　大機俊一郎，松井清
同　庶務係　治田弥平，駒井明美
同　紀念物係長兼専門員　高橋曽一
同　技師　丸山竜平，近藤　滋

滋賀県文化財保護協会　藤村真治，松井静三，北川顕治，井上　剛，茶野美恵子，田中恵美，早藤弘美

調査委員　小林行雄（京都大学講師）
沢村　仁（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部遺構調査室長）
柴田　実（滋賀県文化財専門委員，関西大学教授）
田辺昭三（平安高校教諭）
坪井清足（奈良国立文化財研究所平城跡発掘調査部長）

調査団　団　長　田辺昭三
副団長　西田　弘
調査員　市川良子，井守徳男，江口千恵子，太田芳美，岡戸恵子，加藤　修，柴田　稔，高谷美由紀，玉村登志夫，中島正善，永田信一，野元晴範，丹羽佑一，萩本　勝，福岡澄男，松沢　修，宮地美千代，本弥八郎，桃野真晃，安田幸一，安田竜太郎，吉川義彦

調査員（写真担当）荒木一紀，牛嶋　茂，森　　昭

補助員　**大阪工業大学**：大機博芳

大谷女子大学：川本弥生，清田　良

関西学院大学：巽　朋子

京都大学：泉　拓良，井上裕正，梅川光隆，遠藤直孝，大朝利治，新川登茂宣，百々順一，松下　潤，森謙二

京都女子大学：石田利子，石丸美枝，一の瀬尚子，上園恵子，奥田紀美子，小嶋億子，勝木稔子，加藤千栄子，鎌村敦子，川端恭子，米崎嘉良子，小上泰代，佐々木澄江，鈴木誉子，沢　仁美，大東妙子，高橋妙子，立石彰子，田中伸子，辻本悦子，中川喬代，布山彰子，野尻真理，馬場千以，平野美智子，平松久美子，福井美恵，藤沢佳子，藤本和美，前川典子，村上すみ子，村木裕子，森　洋子，柳川真理子

京都産業大学：恩田季代巳，甲斐寛，河相俊平，河野智子，寺田行夫

近畿大学：大谷　隆，甲谷善久，後藤哲也，小松茂樹，榊原正博，坂口公美子，城富次男，玉置昌志，花原康生，守分大治，安井幸雄，横田豊幸

国学院大学：池田大助，伊藤　潔，江見正己，榎本善繁，貝羽忠栄，勝田琢也，千田　潤

東海大学：石川絹子，小田村宏，尾野畑潤子，笠間英二，柏葉成人，黒見理恵，鈴木久祐，菅田薫，長谷川達，平方幸雄

奈良大学：板倉玲子，加藤徹，志道和直，白石敬器，鈴木久男，城山弘子，竹原布佐子，玉田隆，田中順子，中野雅美，宮脇　薫，伊藤　実

仏教大学：中川真澄

立命館大学：石田実，岩田　隆，浦上雅史，尾上　実，

木下保明，木村芳子，河野敬一，妹尾直子，長谷川清，山崎　博，山本裕宣

龍谷大学：岡田洋一郎，片岡道太郎，鈴木広司，松本乗正

：寿福　滋，田中　均，中島志郎，中村敦，渡辺　晃，

中学・高校生：大津・打出中学校，大津高校，京都・成安女子高校，京都西高校，大阪・浪速高校，京都・平安高校

*　　*　　*

発掘調査にあたって特に指導・助言をいただいた方々は，以下の通りである。

池田　次郎（京都大学教授）
石田　志朗（京都大学助教授）
市原　寿文（静岡大学教授）
井上　満郎（奈良大学助教授）
井本　伸広（京都教育大学助教授）
小野山　節（京都大学文学部助手）
金子　浩昌（早稲田大学講師）
亀井　節男（京都大学教授）
小宮　恒雄（横浜・港北ニュータウン埋蔵文化財調査団）
佐原　　真（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館学芸室長）
沢田　正昭（奈良国立文化財研究所技官）
清水　芳裕（東北大学大学院生）
田中　　琢（文化庁記念物課）
都出比呂志（京都大学文学部助手）
寺門　之隆（大阪市立大学助教授）
徳丸　始朗（大阪門真高校教諭）
那須　孝悌（大阪市立科学博物館）
藤岡謙二郎（京都大学教授）
水野　正好（大阪府教育委員会）
山田　　治（京都産業大学助教授）
横山　浩一（奈良国立文化財研究所飛鳥藤原発掘調査部長）

なお，発掘調査期間中の炊事は，寿福節子，小楠志津代，山本静子，松田るみ子，後藤幹子，中川恵美子の諸氏に，また現場事務は増田保子氏にお願いした。このほか大津市職員（故）加賀美譲，同市教育委員会水田正一郎氏には種々の協力をいただき，また，地元大津市在住の多くの方々が，人夫としてこの発掘調査に参加された。

註 1) 『国鉄湖西線関係遺跡分布調査報告書』滋賀県教育委員会　1968年

2) これまでの研究による「大津京」推定地は，ほぼ大津市街地，同粟津，旧滋賀村地内の三カ所である。このうち旧滋賀村説は，さらに数説にわかれ，同村内の内裏推定地に関する見解は一定しない。

第1章　縄　文　時　代

1　滋賀里遺跡の調査

(1)　研　究　の　歩　み

滋賀里遺跡の発見　戦時中，海軍飛行場に付属する兵舎建設のために，付近一帯は地ならしがおこなわれ，それによって包含層が露出したものと思われる。戦後，この兵舎の撤去によって再び地表にあらわれた包含層が，地元の蒐集家塚本権右衛門氏によって発見された。[1)]

1948年の調査　旧海軍施設の農地開放に先がけて，1948年（昭和23）の初頭に京都大学考古学教室は滋賀里遺跡を調査した。その結果，複合扇状地上の小さな開析谷が発見され，その谷内の堆積土より，縄文式土器・石器・玉類・骨角器などの遺物が獣骨・木の実などの自然遺物とともに出土した。この調査の責任者の一人坪井清足氏は出土した土器を検討して，主体となる一群の土器を滋賀里式と命名して晩期初頭に位置づけた。以来，滋賀里遺跡は近畿地方縄文晩期の標識遺跡とされてきたが，今回の調査によってさらに豊富な資料が得られ，滋賀里縄文人の生活を復元する手がかりをつかむことができた。[2)]

(2)　遺　跡　の　立　地（図版1，第1・2図）

自然環境　大津北郊の湖西地域には，比叡山系の土砂を運ぶ流れによって，数多くの複合扇状地が形成されている。[3)]この複合扇状地の接合部には大小の開析谷が発達し複雑で不安定な地形となっている。滋賀里遺跡はこの様な複合扇状地の裾部に立地している。遺跡は海抜95mに位置し，我々が調査した区域以東の地は，戦時中よりの地ならしによって，現状ではほとんど地形に起伏が見られない。

琵琶湖を前面にひかえた当遺跡の東南方の瀬田川畔には著名な石山貝塚[4)]や螢谷貝塚があり，更に最近，南方1.5kmの地点に北大津駅遺跡が発見され[5)]，縄文時代前期の包含層が確認され，早期の押型文土器も出土している。一方，比叡山塊を越えて，西方の京都盆地に

は早期から晩期におよぶ修学院・一乗寺・北白川の諸遺跡が展開している。[6] 特に，主要な食料源の一つをこの比叡山塊に求めた滋賀里縄文人は，京都盆地側の縄文人との間に密接な接触があったものと考えられよう。

扇状地と開析谷　滋賀里遺跡は比叡山塊より琵琶湖に向かって東西にのびる扇状地上に立地するが，調査によって得られた旧地形の復原によれば，南北約100m 幅の扇状地の高みに晩期の墓址が発見され（ⅢC区墓址），この高みの北と南にはそれぞれ開析谷が形成されている。この内，高みの北方にある開析谷（ⅢE区谷）の北向き斜面には晩期の小貝塚が形成されている（ⅢD区貝塚）。扇状地の高みは削平を激しく受けていることを考えると，墓址と貝塚との間に，住居址があったことが確実に推定される。このように，今回の調査によって，扇状地の高みに基盤を据えた晩期滋賀里縄文人の生活の跡が，一つの単位をなして発見された。

扇状地の高みの南方の開析谷（ⅢC区谷）には，流れる位置を変えながらも基本的には北西から南東方向に流れる３つの流路がある（第６図）。この内の主要な流れは上層から順に黄褐色砂層・第２ピート層[7]・黄灰色砂層・灰白色砂礫層からなり，これらの流れ堆積と淀み堆積との互層堆積によって，この谷はほぼ埋っている。第２ピート層・黄灰色砂層・灰白色砂礫層からは，後期から晩期の滋賀里Ⅲ[8]までの土器が出土し，最上層の黄褐色砂層からは，後期から晩期終末の滋賀里Ⅴまでの土器が出土している。これらの層からは石器や土偶などの土製品も出土しているが，弓などの木器や椀・腕輪などの漆器の出土が注目される（図版８）。木器原材はⅢD区貝塚下層のピート層から多数出土したが，ⅢC区のこれらの層からも少量出土している。また，第２ピート層はカシ・シイ・トチなどの木の実と木の葉がびっしりと堆積したもので，かつて滋賀里縄文人が生活していた時代には，遺跡周辺が森林におおわれていた景観がわかり，豊かな自然資源の一端が知られよう。[9]

この主要な堆積が谷を埋めつくした後に，これを切って淡青灰色砂層の流れがあり，その流路は南方にずれ，調査した範囲を越えて更に南に続いている。この層からは後期から晩期終末の滋賀里Ⅴまでの土器が出土している。更に，主要な流れのやや北方に流路をかえて，灰白色粗砂層の流れがあり，この層からは弥生第１様式の甕の破片が１片確実に出土しており，３つの流れの内では，この灰白色粗砂層の流れが弥生前期にまで下ることがわかった。耕土下の青灰色細砂層とその下層の第１ピート層からは遺物が発見されなかった。

扇状地の高みの北にあるⅢE区の開析谷については，その一部を貝塚の項で，またその

主要部は第3章において取り扱っている。

遺跡の範囲（第2図）　今回の調査によって，南北約100mの東西にのびる扇状地の高みに晩期の墓址が確認され，この高みの北斜面に貝塚が形成されていることから，墓址に隣接して住居址の存在が推定された。またこの高みの南・北両側の開析谷には晩期を中心とした遺物の包含層があり，特に木器・漆器が出土したことは注目される。今回我々が調査できたのは滋賀里遺跡のごく一部である。特に東西の調査幅が約10mに限定されていたため，滋賀里遺跡の全体の規模を考えるには，今回の調査でほぼ明らかになった遺跡の南北の拡がり[10]を東西方向に及ぼす必要がある。特に西方の山側には相当広く続くことが推定され[11]，旧海軍施設建設の際の削平もそこまで及んでいないことから，遺跡の保存状態はより良好であるものと確信される。

滋賀里遺跡は海抜95m上に位置し，現在の琵琶湖の平均湖面は海抜85mであり，約10mの比高差がある。しかしながら，1885（明治18）年測量の地図や石山貝塚での検討結果[12]や現存する小字名[13]などを総合するならば，近世以降に湖岸線の大幅な後退があったことがわかり，滋賀里縄文人が生活していた時代には，湖水が現在の海抜90m付近にまで入り込んでいたものと考えられる。従って，遺跡の東側への拡がりは西側より少ないと推定される。

(3)　墓址と貝塚（図版2～8，第3～6図，第13表）

墓址の構成（第3図，第13表）　扇状地の高みの南半部に南北約34mにわたって縄文晩期の墓址が発見された。扇状地の高みは北部ほど旧地形で高くなっているが，戦時中以来の削平によって36号・47号・52号土壙を結ぶライン以北では，耕土下にいきなり土壙が現われており，墓址は更に北方に拡がっていた可能性もある。一方確認できた最南端の土壙と南方のⅢC区の開析谷との間は20mあり，扇状地の縁辺部にあたっている。この部分には古墳時代の自然流が東西・南北に錯綜して，縄文包含層を切っているが，もはや墓址は続いておらず，他の遺構も発見されなかった。

土壙のベースとなる土層は扇状地の一般として均一のものではないが，基本的には無遺物の青灰色泥砂層であり，墓址の南半部では中津式の土器片を含む黄褐色粗砂の流れがベースとなるところもある。このベースとなる土層の上に晩期の滋賀里Ⅴを最も新しい土器として含む黒色泥砂層が堆積している。既に述べたように，36号・47号・52号土壙を結ぶライン以北ではこの層は削平されており，以南の地区でも建築物が建てられていたのでこの層の上半部は攪乱されている。また，墓址内には南北方向に古墳時代の自然流が走り，

包含層や遺構を破壊している。

総数にして300近く発見された土壙の内，明らかに土壙墓といえるものが44例，人骨こそ残っていないがプランから判断して土壙墓と考えられるものや，人骨片がありながらも小形の規模のものなどが37例，甕棺墓が25例あった。また，26号・27号の土壙中に動物の骨片があったが，その種類や埋葬されたものか混入したものかなど明らかではない[14]。墓址の南端には2つの特殊遺構がある。273号は現代の溝によって南半部を破壊されているが，一種の石組み遺構であり，その内に2個体分の甕が破片で出土している（図版5・第5図）。この甕はいづれも滋賀里Ⅲに属し，黒色泥砂層が堆積する以前の遺構と考えられ，火を使用した痕跡はない。この遺構から西に2mのところにある270号では，円形土壙内に花崗岩の細長い石が垂直に立って発見された。

発見された墓址の内，213号・227号・259号・290号の甕棺墓や，83号・149号・173号・236号の土壙墓は黒色泥砂層を切り込んでつくられたと考えられるが，これらの例を含めて，遺構の確実な発見は，ベースとなっている青灰色泥砂層の上面でしかできなかった。

土壙墓（図版3・4，第4図）　土壙の平面は長方形で，最大の規模は207号の1.5m×0.9m，最小の規模は257号の0.8m×0.6mであり，1m×0.7mの規模が平均的な土壙の大きさといえる。土壙の深さは20～30cmであるが，先述の様に黒色泥砂層を切り込んだ土壙のある点を考慮する必要がある。遺体は全て屈葬されており，その内には仰臥タイプと横臥タイプとがある。216号と217号とはごく接近した時間内に葬られた男女と考えられ，一方が仰臥タイプで他方が横臥タイプであるので，この2つのタイプは時間的な差異とはなり得ない。また，106号は足の組み方が特殊であり，頭部と脚部との下に掘り込みがあり，遺体を板の上にのせたか或いは棺に入れて葬った可能性があり注目される。

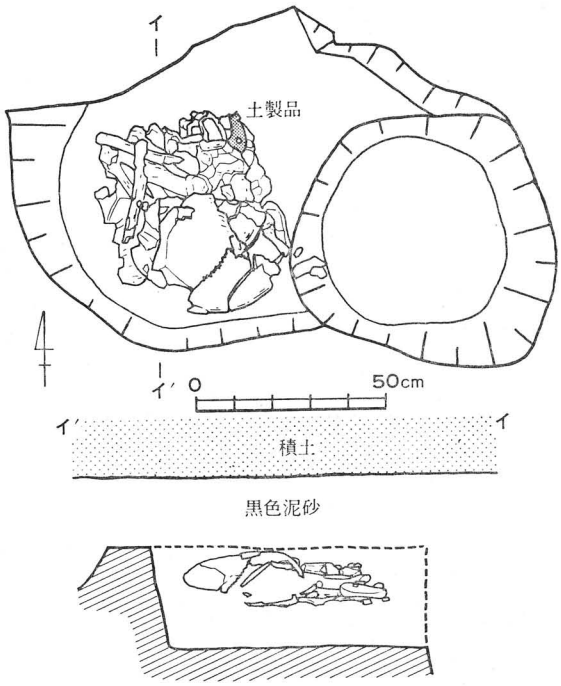
墓標のような地上施設といえるものは発見されなかった。長期間にわたる墓址で，しかも墓標などがない結果として，土壙墓の切り合いが生じている。この点に関連して集骨葬の存在に注目したい。81号は小円形の土壙に，頭蓋骨を上に置いてその下に他の骨を集骨しており，1体分の骨が全て集骨されているかどうかは今後の検討にかかっている（図版4，挿図1）。236号は黒色泥砂層を切り込んで作られており，頭蓋骨以外の骨が3つのブロックにわかれて数体分集骨されている（図版4）。特にこの236号の集骨は，新しい墓壙造営に際してつぶされた古い墓壙の人骨を改葬した可能性がある。

216号と217号のように近接した時間内に葬られたものは土壙の長軸が大体同じ方向をとっている可能性がある。この観点から土壙墓をみるならば，確然とした一定の方向性はな

いにしても，北東方向に頭部をもってくる一群と北西方向に頭部をもってくる一群とが多く，時間的な差異となる可能性がある。

甕棺墓（図版5，第5図）

発見された25例の甕棺の内，8例は古墳時代の流れや現代の削平によって破壊された底部のみの残欠であり，時期のわかるものは滋賀里ⅢからⅤにおよんでいる。甕棺として使用された土器の内外面には有機物やススの付着がみられ，日常生活で使用していた土器を甕棺に転用したものといえる。また甕棺として使用する時の穿孔は基本的には認められず，103号甕棺・230号甕棺など数例に体部下半以下を打ち欠いて使用したことが認められる。



挿図1　ⅢC区墓址81号集骨墓実測図

墓址全体の中での甕棺墓の分布には若干の傾向が認められる。第1には，最北端にある71号から162号を結ぶ北西～東南方向のラインより以南に甕棺墓が分布し，そのライン以北にはないこと，第2にはこの甕棺分布地域内において，多くは単棺葬であるが，230号・269号・290号の3例では甕棺の口縁部を別の土器の大きな破片でおおっており，255号のように大洞系の甕を棺とし，浅鉢片で蓋した例など，単棺以外の甕棺墓が墓址南半部の東部に集中していることである。273号石組み遺構の存在とも考え合わせ，墓址内での特殊な意味をもつ地区の想定も可能であろう。

主要な葬法である単棺墓は，103号のように体部下半以下を打ち欠くものは掘り方内にほぼ垂直に据えられているが，完形品を使用する一般のものは掘り方内に斜方向に据えられている。この場合，掘り方の底面も甕棺の長軸にあわせて傾斜している。また多くの場合，掘り方の底面と甕棺との間には数センチの間隙が認められる。これに対して，230号・255号・259号・290号では別個体の土器の大きな破片で蓋をしており，特に新生児が葬ら

れていた255号は，使用している土器の組み合せから，この被葬者の特殊な位置づけが暗示される。これら4例ともに，掘り方内に甕を斜方向に据えているのは，単棺葬の場合と同じである。甕棺内に骨の残存していたものは4例あり，この内172号の人骨は壮年男性，他は新生児～小児骨との鑑定をうけた[15]。更に問題となる点は，255号の新生児は全ての骨が納められていたが，他の3例では頭蓋骨を上に置いて2～3本の四肢骨を下に納めているだけであった。一般に甕棺内の骨の残りはよくないので，慎重に結論する必要があるが，この3例の場合は人骨の一部を納めた可能性が強い。

墓址の年代と問題点　甕棺墓は墓址の年代を推定する手掛りを与えてくれる。甕棺に使用されている土器の型式は滋賀里Ⅲ～Ⅴにおよび，滋賀里Ⅰ・Ⅱのものはない。おおよその年代はこれによって推定できるが，甕棺墓と土壙墓との切り合い関係によれば，滋賀里Ⅰ・Ⅱの土壙墓の存在の可能性もありうる[16]。土壙内に含まれる土器片の検討[17]（第1表）と，土壙墓中に頭部を東北におくものと西北におくものとのグループがある点とを総合すると，頭部を東北におく土壙墓が西北におく土壙墓よりも古い可能性がある。一方，土壙墓には黒色泥砂層を切り込んで土壙をつくる例もあり，滋賀里Ⅴにまで下る土壙墓が考えられる。従って今回の調査部分では，滋賀里Ⅲ～Ⅴの時期に継続的にいとなまれた埋葬が主体をなし，土壙墓に限ってはより古いものの存在を認める余地があるといえよう。

第1表　土壙内出土の土器

土器	土壙番号
滋賀里Ⅴを含むもの	36　47　164　146　188　192　194　213　227　258　284
滋賀里Ⅳを含むもの	30　31　39　51　52　66　72　86　91　101　104　106　116　129　130　133 166　141　149　159　170　177　180　183　187　197　198　206　232　242 243　247　262　264　268　271　272　274　275　277　281　286　290　292
突帯文（滋賀里Ⅳ～Ⅴ）は検出されなかったもの	50　59　64　69　71　73　84　88　93　95　98　103　105　117　126　134 135　137　140　158　163　168　169　171　173　175　182　184　190　193 195　199　207　208　209　210　211　214　215　216　217　218　219　223 225　226　230　231　233　236　237　238　240　241　248　249　250　256 257　261　266　270　273　276　279　282　283　285　287　288
巻貝調整の土器しか検出されなかったもの	42　138

被葬者と葬法との間に一定のルールがあることは十分予測されることである。土壙墓の多くは成人を葬っているが，幼児や小児を葬るものもあり，一方甕棺墓も全てが幼児・小児を葬るものとは言いきれない事実は，年令による葬法の差異という問題では片づけられ

ない。土壙墓と甕棺墓という埋葬形態の差異を問題にする前に，一体分の埋葬と人骨の一部を選択して埋葬する場合との差異に注目する必要がある。事実に即して言えば，一体分の埋葬には一般の土壙墓と255号甕棺墓があり，選択的な埋葬には236号集骨墓と３例の甕棺墓があげられる。選択的な埋葬の内，236号集骨墓は改葬された可能性が強く，３例の甕棺墓の性格が問題となろう。

副葬品を伴う埋葬例はなく，土壙の規模に大きな差のないことなど，従来の縄文時代の墓制のあり方と軌を一にしているが，装身具を伴う埋葬例が81号と207号とに見られた[18]。ともに粘土を漆で練り固めて作った可能性のある朱塗りの土製品であり，81号の所見では，有孔の扁平な腰飾状のものと考えられる[19]（挿図１）。

貝　塚（図版６～８，第６図）　晩期の墓址が立地する扇状地の高みは，住居址の存在が推定される空白部を経てⅢＥ区の開析谷に傾斜している。この扇状地の高みの北斜面に晩期の小貝塚が形成されている。この小貝塚は開析谷の中央部をはしる古墳時代以降の流れ[20]によって削られ，また斜面の中程より上方は戦時中の削平によって既に消失している。

この北斜面に貝塚が形成される以前に，第３ピート層から第１ピート層にいたる，砂層とピート層との互層堆積がこの谷を埋めている。各層からは後期を主体として晩期も含む土器が少量出土し，かなり短かい期間にこの谷が埋まった状況を知ることができる。また灰褐色砂泥層では出土する土器の傾向は同じであるが，その包含量が多く，獣骨なども出土しており，後期の包含層の二次堆積と考えられ，付近に後期の生活址のある事を示している。貝塚が形成される直前に，この谷は一時湿地状態となっており，その時の堆積が第１ピート層[21]にあたる。この層からは木器群が出土し（図版７），その種類は豊富で，弓・石斧柄及び未製品・櫂状木器・木槍・火鑽臼と杵・籃胎漆器片・木椀・などがあるが，圧倒的に多いのは原材である。しかも凹地の中にあたかも井戸枠のように原材を組んだ状況や（図版７－２），住居址の柱材とも思われる全長4mの３本の丸木があたかも縛られていたように木口をそろえて出土していることなど，湿地を利用した原材の貯木場が付近にあった可能性がある[22]。この層から出土する土器は滋賀里Ⅰを主として後期も少量含み，石器類や紡錘車も若干出土している。

貝塚は基本的には灰褐色泥土層と上層の黒色砂混泥土層とに分層でき，厳密な意味での貝層は，大小のブロック状をなして黒色砂混泥土層の内に散在するだけである。この黒色砂混泥土は平均して30cm～50cmの堆積で，均一な堆積ではない[23]。ほぼ中ほどの－30cmのレベルに集中して，セタシジミを主体としてナガタニシ・イケチョウガイ・イボカワニ

ナが大小のブロックをなして発見された[24]（図版6－1）。下層の灰褐色泥土層には貝類はないが，魚のウロコが層をなしたブロックや，魚骨を多量に含む灰のブロックなどが観察された[25]。両層ともシカ・イノシシを主体とする獣骨が多く出土し，鳥骨・スッポンなどや糞も出土している。

灰褐色泥土層の土器は滋賀里Ⅱを主体として滋賀里Ⅰや後期の土器を少量含み，黒色砂混泥土層は滋賀里Ⅲ～Ⅴの土器を主体としている。両層からは石器・骨角器・土製品・紡錘車など豊富な遺物が出土した。

(4) 遺物の検討

A 土器（図版22～45，第17～39図，第14表）

観察の視点　縄文時代の後・晩期は単に土器相に共通点があるだけでなく，遺跡の立地や生産用具のあり方など生活様式を規定する要素からして，それ以前の時期と区別される。土器編年上の区分が社会生活の変革と対応している好例といえよう。しかしこれから扱う晩期という時期概念は，今のところ土器相上の区分概念にすぎない。山内清男氏は，三叉文の成立する広義の亀ヶ岡式土器が，東日本はもとより中部地方や近畿地方にいたる各地で移入されたり模倣されている事実から，後期の土器と区分される晩期の土器を設定した[26]。この点は土器研究上の業績として評価されねばならないが，一方において，東日本とは異質な土器を主体とする西日本の土器研究が進むにつれて，従来の晩期という大時期区分の規定の弱味が出てくる。この弱さの由来するところこそ，文様研究中心の従来の視点であり，土器の組成・製作技術・文様などの検討をふまえた土器の時間的変化を先ずとらえ，その横えのひろがりまたは接触を問題としていかねばならない。

従来近畿地方の晩期の土器は，滋賀里式，丹治式，橿原式，船橋式の4型式に細分されている[27]。今回の調査によって滋賀里遺跡から出土した土器は，この全型式に及んでいる。しかしながら，従来の型式設定では不充分なところが多くあり，今回の整理にあたって，仮に滋賀里Ⅰ～Ⅴの型式をもうけることにした[28]。各型式とⅢD区貝塚の層序との対応は，ピート層がⅠ，灰褐色泥土層がⅡ，黒色砂混泥土層がⅢ～Ⅴである。この内，黒色砂混泥土層の土器を型式学的に検討した結果，貝ブロックのある－30cmを境として，－40cm～－50cmに主体的なものが滋賀里Ⅲで，－30cm以上に主体的なものが滋賀里Ⅳ～Ⅴとに分けられる。しかし，製作技術や器形の変化のないものは区別することができず，この点は滋賀里ⅣとⅤの区分に関して更に深刻である。今回検討の対象としたのは，層位的関係の明

らかなⅢD区貝塚出土の土器を中心に据え，ⅢC区墓址やⅢC区開析谷出土の土器は，欠を補う必要のあるものにとどめた。特に数量的操作はⅢD区貝塚出土の土器に限定した。[29] 個々の土器の観察結果は，土器の観察表に一括したので参照されたい（第14表）。

製作技術の検討（図版45）　土器の製作は，粘土ひもを積み上げて大体の形をつくる成形の段階と，その内外面をととのえて仕上げる調整の段階とに分けられる。文様の施文や突起・突帯のはりつけは，調整がすんだ最終段階におこなわれている。

(イ) 成形手法　山内清男氏の指摘[30]のように，滋賀里遺跡出土の土器も粘土ひもを積み上げて成形されており，観察できた限り巻き上げ成形はない。粘土ひもの幅は各型式間で差はなく，幅1.5cm～2cmとなっている。接合面はヘラ状のもので平坦面をつくり，多くの場合その平坦面に沈線状の凹みをつけており，山内清男氏の指摘[31]する下段は凸，上段は凹という模式のように単純ではない。

次に胎土の問題にもふれておく必要がある。深鉢や甕[32]のような大型品は，1～5mm大の砂粒（長石が多い）を含むが，用途の異なる概して小型の浅鉢・椀類には微少な砂粒しか含まれていない。しかし，滋賀里Ⅳに出現する浅鉢 G_2 には大きな砂粒が含まれており，滋賀里Ⅰ～Ⅲの浅鉢・椀類は胎土を選択している可能性がある[33]。

(ロ) 調整手法　原則的には，浅鉢・椀類と深鉢・甕類とは調整手法を異にしている。浅鉢・椀類に認められる調整手法は磨きとナデである。浅鉢・椀類の場合，基本的には深鉢・甕類と相反して内外面ともに平滑な仕上げをおこなおうとする意図をもっている。滋賀里Ⅰ～Ⅲにはいわゆる黒色磨研土器が盛行するが，滋賀里Ⅲ以降鉢 B_2 や浅鉢 G_2・G_5 などのナデ調整によるものが共存し，特に滋賀里Ⅳで出現する浅鉢 G_2 は，数量的にも浅鉢の主体をしめている。丁寧に磨研して燻べ焼きするという浅鉢・椀類の製作上の規制が，滋賀里Ⅲ以降弱まりはじめて滋賀里Ⅳでほとんど失われることが指摘できる[34]。

深鉢・甕類に認められる調整手法には，巻貝調整[35]（図版45—1），削り調整（図版45—4・5），二枚貝調整[36]（図版45—2），ナデ調整（図版45—3・6）などがある。内面の調整は各型式ともヘラ状のものによって水平方向にナデ調整（図版45—8・9）され，滋賀里Ⅰ・Ⅱでは巻貝調整をほどこした後に，また滋賀里Ⅲでは二枚貝調整の後にナデ調整するものもある。内面の調整は外面のそれにくらべて丁寧におこなわれており，土器の使用目的との有機的な関連がみられる。

外面の調整手法の内，主体的なものに巻貝調整と削り調整とがあり，器形と密接な関係が認められる。滋賀里Ⅰ・Ⅱの深鉢類には巻貝調整がみられ，器形とともに宮滝式の深鉢

の延長線上にあるといえる。これに対して滋賀里Ⅱに出現し，滋賀里Ⅲ以降深鉢にとって代る甕類には，ヘラ状のものによる削り調整がみられる。この様な調整手法の変化は，滋賀里Ⅰ～Ⅴまで継続する唯一の器形である深鉢Gにも反映し，滋賀里Ⅲ以降巻貝調整から削り調整に転換している。

深鉢・甕類の巻貝による調整の一般的な手法は，口縁部または頸部付近を水平方向に調整し，以下底部に向って左上りの斜方向に1～2段，更に垂直方向に2～3段の調整をおこなっている。調整の方向をよみとれるものがないが，次に述べる削り調整と同じであると推定される。

削り調整とは，1～1.5cmの幅にヘラ状のもので器表を削る手法をいうが，胎土中の砂粒が移動した軌跡からその方向がよみとれる。[37]一般的な手法は，体部を2～3段にわけて底部から口縁部の方向に削り上げ，頸部近くなると左上の斜方向となり，頸部付近では時計廻りの水平方向に削る。使用する原体の差こそあれ巻貝調整の手法と全く一致しており，むしろその手法を原体を替えて踏襲しているという方が正確であろう。滋賀里Ⅲの甕類には，器壁が限界近くまで薄く削られているものがあるが（図版45—4），滋賀里Ⅳ～Ⅴでは全般に軽い削り調整となり（図版45—5），更に滋賀里Ⅴには，大阪府船橋遺跡出土の土器にみられるような繊維束状の原体による条痕もみられる。[38]（図版45—7）。

二枚貝調整には，A85やA191のように体部外面にほどこされる少数例もあるが，一般には口縁部外面にほどこされる。この調整手法は滋賀里Ⅱに出現し，滋賀里Ⅲ以降かなりみられるが，滋賀里遺跡では主体的な調整手法ではない。全てが二枚貝によって調整されたものとはいえないまでも，山口県岩田遺跡の4類，[39]岡山県黒土遺跡のH類，[40]愛知県吉胡貝塚の「晩期中類」[41]にみられるハイガイ条痕に類似するところがある。海浜に面していない滋賀里遺跡の性格上，海に面した地域との交渉が推測される。

ナデ調整も主要な外面調整手法で，口縁部や文様帯の部位におこなわれるほか，体部に巻貝や削り調整がおこなわれたのちに，ナデ調整を重ねるものがある。このような二次的な調整でなく，体部外面をナデ調整のみで仕上げるものがある。特に滋賀里Ⅲ以降この種の土器が多くなり，粘土ひもの継目が残るほどの軽い調整である。ナデ調整の原体は明らかでないが，A192のように皮状の原体でおこなわれたと考えられるものもある（図版45—3）。

文様の検討　滋賀里遺跡出土の晩期の土器には文様のある土器とない土器とがあり，両者の比率は各形式によって変化している。深鉢・甕類についてみれば，滋賀里Ⅰで有文

と無文の比率が25％：75％（計測個体数128），滋賀里Ⅱで18％：82％（計測個体数288），滋賀里Ⅲで１％：99％（計測個体数753），滋賀里Ⅳ～Ⅴでは有文のものはない[42]（計測個体数353）。一方浅鉢・鉢・椀類についてみると，滋賀里Ⅰで47％：53％（計測個体数47），滋賀里Ⅱでは44％：56％（計測個体数173），滋賀里Ⅲで14％：86％（計測個体数203），滋賀里Ⅳ～Ⅴでは有文のものはなく（計測個体数257），深鉢・甕類と同じ傾向を示している[43]。大洞系や北陸系土器の搬入品を除いて，滋賀里遺跡の土器製作は滋賀里Ⅲ以降無文化の方向にむかっており，滋賀里Ⅳ・Ⅴにおいて完全に実現されている。

(イ) 深鉢・甕類の文様　深鉢類の内では，文様で飾られる器形が深鉢Ａ～Ｃに限られている。晩期の全時期に継続する唯一の器形である深鉢Ｇには，終始文様がないのと好対称をなしている。しかし有文の深鉢にも明らかに煮沸に使用したものがあり，文様の有無に意味があるとすれば，土器の用途以外の面で検討されねばならない。波状口縁をもつ深鉢Ｃのように，波頂部直下の空間を各種の文様構成でうめるものがあるが，深鉢類の文様の主体は口縁に平行する沈線文である。この沈線文には２本単位と３本単位とが認められる。３本単位の沈線文は滋賀里Ⅰにはかなりみられるが，滋賀里Ⅰ・Ⅱを通して，２本単位の沈線文が主体をしめる。この点は，半截竹管による２本単位の沈線文が滋賀里Ⅱに出現して，滋賀里Ⅲに及ぶことからもうなづけよう。

沈線文の施文具としてはヘラ状の原体が主体をしめるが，一部に巻貝頂部による沈線文がある。また巻貝の頂部や底部を利用した刺突文や円棒状のものによる刺突文は，滋賀里Ⅱに出現しⅢに及んでいる。巻貝が文様の施文具として使用されるのは滋賀里Ⅱまでといえる。

甕類には文様で飾られるものがほとんどなく，製作技法の検討結果とあいまって機能主義的な性格が認められる。ごく少数の文様例は，半截竹管による馬蹄状の刺突文か円棒状の刺突文であり，前者は岡山県原遺跡[44]や同県前池遺跡[45]に類例がある。

(ロ) 浅鉢・椀類の文様　施文手法には，陽刻による文様表現と陰刻による表現とがあり，前者に大洞系土器と北陸系土器の一部が，後者に北陸系土器と当地域の土器がそれぞれ属している。陰刻による表現は２地域の土器に分かれてみられ，各々施文方法が異なっている。北陸系土器はヘラ状施文具を器壁に対して垂直にあてており，一方当地域の土器は口縁を上にした器壁に対して斜め下からあて，それぞれ沈線をひいている。この方法は滋賀里Ⅰ～Ⅲに連続してみられ，特に滋賀里Ⅱ・Ⅲにみられるいわゆる橿原式文様に顕著である。この橿原式文様は，沈線にみられる陰刻表現の伝統を継承しながらも，三角形のくり

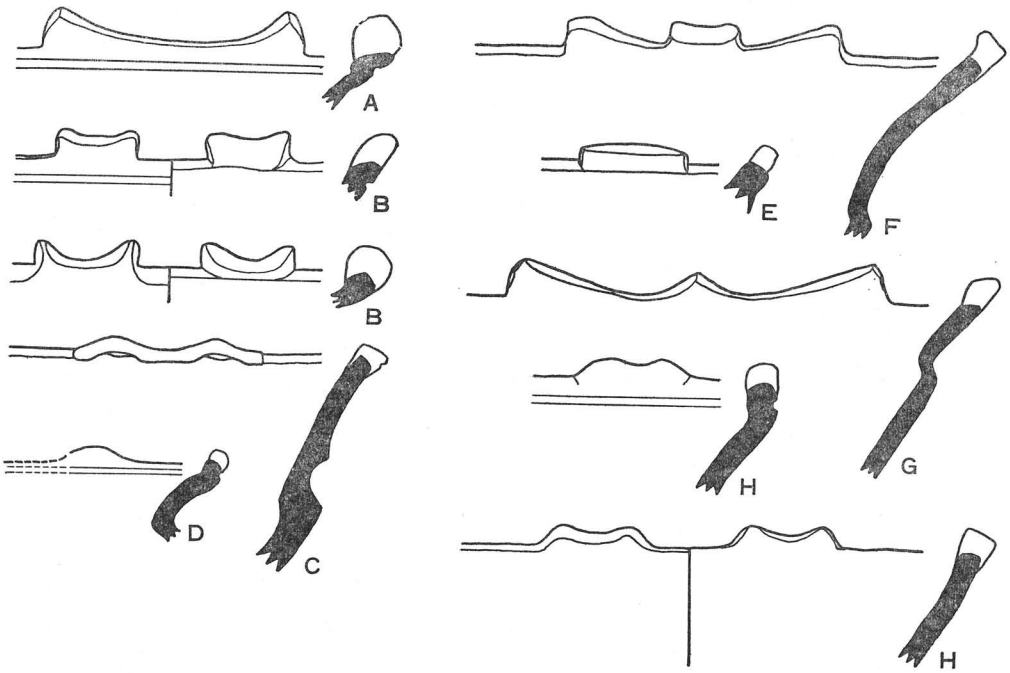
込みをもちいて陽刻表現を採用している。なお少数ではあるが，A372・A373のように櫛状の施文具による例が滋賀里Ⅱに認められる。[46]

文様には，山形沈線文，山形反転沈線文，平行沈線文，橿原式の文様などがあり，山形沈線文と山形反転沈線文とは浅鉢類に，他の３種の文様は浅鉢・椀類にほどこされる。

滋賀里Ⅰの浅鉢C_1にみられる山形沈線文は，滋賀里Ⅱの浅鉢A_4・同F_1の山形反転沈線文へと，形態の変化とともに受け継がれている。また山形沈線文は，変形山形沈線文をも生み出し，滋賀里遺跡に固有の文様といえよう。[47]

橿原式文様は滋賀里Ⅱに出現し，滋賀里Ⅲにまで続いているが，両形式を比較して顕著な差異は認められない。滋賀里ⅡのA124と滋賀里ⅢのA427とを比較すれば発展してゆく文様をみてとれるが，この文様を構成する諸要素（三角形のくり込み，沈線，刻み）はバラバラではあるが滋賀里Ⅱに出現しており，また一方では，これらの諸要素がセットとして施文された土器が主体をしめるという現象は，滋賀里Ⅱ・Ⅲを通して観察されず，刻み目の欠落など不完全なものが相当数あった。[48]

(ハ)　突起と刻み目　口縁部に突起のつく器種は甕・浅鉢・鉢類に限定されており，滋賀里Ⅱの甕A92に出現し，滋賀里Ⅲで浅鉢・鉢に拡がりをみせ，滋賀里Ⅳ・Ⅴでは甕類には



挿図2　突　起　の　種　類

突起のつくものがなくなり，浅鉢・鉢にのみ継続している。突起はA～Ⅰの9タイプに分類され（挿図2，第2表），この内，A～Hは西日本一帯に多くの類例が見られ，C・Ⅰは東北・北陸系土器との関係も推定される。突起の起源に関しては東北・北陸系土器との関係だけでは説明しきれない。突起がかなりみられる滋賀里Ⅲには急激に波状口縁が退化減少しており，A137のように波状口縁が退化して小突起化したと考えられることも考慮する必要がある。この点に関連して突起が何ヶ所につくかという問題がある。破片が小さくて正確にわかるものはほとんどないが，滋賀里Ⅲの甕A62やA205では明らかに1ヶ所にしかついていない。器種をとわず，突起のつく土器の個体数は少なく，突起をもつ土器の意味が問題となろう。

第2表 突 起 の 種 類

タイプ	個体数	特　　徴	器　　形	備　　考
A	6	◦箸枕状突起 ◦断面円形ないし楕円形	◦浅鉢 A_1・A_3・A_7・E_4（滋賀里Ⅲ～）	奈良県橿原遺跡・大分県田村遺跡に類例がある
B	5	◦リボン状突起 ◦断面は円形ないし楕円形	◦浅鉢E_4（口縁端部外面に沈線をもつもの）（滋賀里Ⅲ～） ◦甕E_1（滋賀里Ⅱ）・J（滋賀里Ⅲ）	奈良県橿原遺跡・大分県大石遺跡・長崎県深掘遺跡・宮崎県松添貝塚に類例がある
C	5	◦2つあるいはそれ以上の半円形突起 ◦断面は隅丸方形	◦浅鉢A_1・A_3・A_8・E_6（滋賀里Ⅲ～） ◦甕C_1（滋賀里Ⅲ）	奈良県橿原遺跡に類例がある 滋賀里Ⅳ・Ⅴの壷W（A609）もこのタイプに入るか
D	11	◦半円形ないし山形の突起 ◦断面は方形	◦浅鉢A_1・A_3（滋賀里Ⅲ） ・鉢B_2・B_3（滋賀里Ⅲ～） ・甕E_2・F_2（滋賀里Ⅲ）	
E	14	◦方形ないし台形の突起 ◦断面は方形	◦浅鉢A_1（滋賀里Ⅲ～） ◦鉢B_2・B_3（滋賀里Ⅲ～） ◦甕D_1・D_2・E_1・E_2・F_2・G_2（滋賀里Ⅲ）	岡山県原遺跡に類例がある
F	3	◦Aタイプの中央に方形突起（Hタイプ）を付加した突起	◦浅鉢A_1（滋賀里Ⅲ～） ◦甕E_2・G_1（滋賀里Ⅲ）	奈良県橿原遺跡・大分県田村遺跡に類例がある
G	1	◦Aタイプの中央に山形突起（Dタイプ）を付加した突起	◦浅鉢A_1（滋賀里Ⅲ）	奈良県橿原遺跡に類例がある
H	13	◦方形あるいは山形に近い形をとり，中央部を凹ませたり，沈線を施したりする ◦断面は方形	◦浅鉢A_1・A_3・A_7・H_3（滋賀里Ⅲ～） ◦鉢B_3（滋賀里Ⅲ～） ◦甕D_2・E_2・F_1・G_2(滋賀里Ⅲ)	岡山県船津遺跡・大分県大石遺跡・鹿児島県黒川遺跡に類例がある A585は大洞系のB突起に近い A228はAタイプに近い
I	1	◦アルファベットBの反転形の突起 ◦断面は半円形	◦鉢B_3（滋賀里Ⅲ～）	大洞系土器は個体数から除外

甕類を主体として一部深鉢Gなどの口縁部上端面に，刻み目がほどこされるものが認められる。滋賀里Ⅱの甕の小破片4例に出現を認めることができ，盛用されるのは滋賀里Ⅲ以降であり，突起の出現と展開の動向と軌を一にしている。滋賀里Ⅲの甕類で，刻み目のあるものとないものの比率は13%：87%であり，滋賀里Ⅳ～Ⅴでも25%：75%となっている。滋賀里Ⅲは従来の編年上丹治式の内容に近い。しかし滋賀里遺跡では滋賀里Ⅲ以降刻み目手法がみられはするが，その個体数は少なく，一般的な特徴とはなり得ない。この点でも突起のつく土器と同様の問題をはらんでいる。

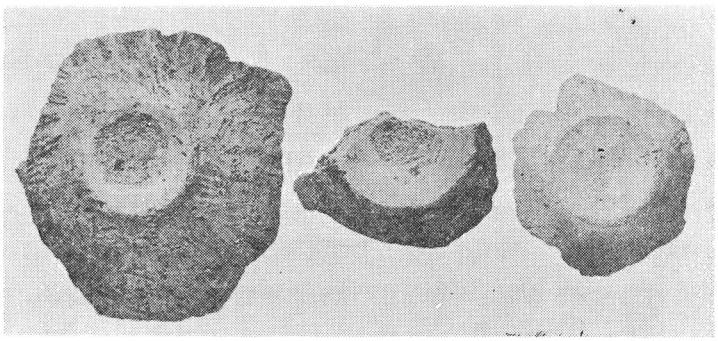
刻み目には大きく3種類のものが認められる。ヘラ状の原体の端面を利用して幅狭に文字どおり刻むもの（刻み目A）（図版45—12・14），その平坦面を利用し押し引きによって刻む菱形のもの（刻み目B）（図版45—15），同じく平坦面を利用した長楕円形のもの（刻み目C）（図版5—13），刻み目Bタイプには，二枚貝状のものを押し引いた菱形のもの（刻み目B′）（図版45—10）もある。滋賀里Ⅱの4例は全てAタイプの刻み目で，発生的にはこのタイプの刻み目が古いことが考えられる。滋賀里Ⅲ以降この4種が併存するが，Bタイプが量的には主体をしめ，滋賀里Ⅳ以降突帯上にも応用されている[49]（図版45—7）。刻み目B′は滋賀里Ⅲに出現し滋賀里Ⅳでより多くなってはいるが，菱形の刻み目の内で，BタイプとB′タイプとの比率は90%：10%であり，量的には少ないが，二枚貝調整の存在とあいまって，西日本全般に共通する二枚貝状の原体の使用が認められる点に注目したい。

用途の検討　(イ) ススの付着　深鉢・甕類は煮沸や貯蔵用に使われたと考えられるが，その内煮沸に使用した深鉢・甕類の口縁部外面付近には，ススまたは吹きこぼれの付着が認められ，火が直接あたる下半部には付着が認められない。また内面にも有機物の付着がしばしば認められ，内面の底部中央からやや上方にはじまり，幅約20cmほどの帯状に有機物が付着している。深鉢・甕類の多くのものが，文様や突起の有無に関係なく，煮沸用に使用されたことがわかる。

一方浅鉢・鉢・椀類にもススの付着する例が観察される。ススの付着する土器の割合は，滋賀里Ⅰで42%，滋賀里Ⅱで22%となり，時期が下るにつれて減少するようである[50]。器形との関係からは，滋賀里Ⅰの浅鉢B_1・B_2・C_1椀A_1に，滋賀里Ⅱの浅鉢A_4・B_2・D_1椀A_1・A_2・A_4に付着例が多く，椀は全般に，浅鉢では特定の器形にススの付着が多いといえる。深鉢・甕類のススの付着が外面上半部に限られているのに対して，浅鉢・鉢・椀類のそれは，外面全体や内面にまでも及ぶものがあり，そのかわり有機物の付着は全く認められない。朱塗り土器もまた例外ではない。このように浅鉢・鉢・椀類のス付着は，深

鉢・甕類のあり方とは異っており，他にその因を求めねばならない。

(ロ) 底部使用痕　深鉢・甕類の底部には，凹底，とがり気味の丸底，平底の３種類があり，滋賀里Ⅰ～Ⅲでは凹底が主体をしめ，滋賀里Ⅱ・Ⅲに出現した丸底は滋賀里Ⅳで主体をしめ，滋賀里Ⅴでは円盤はりつけの平底が主体をしめる。



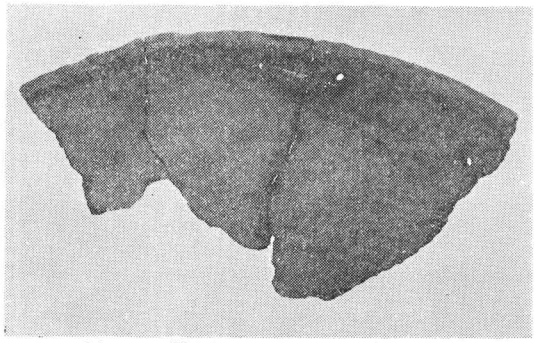
挿図3　凹底に認められる使用痕

ここで問題となるのは凹底の底部である。一般に滋賀里Ⅰ～Ⅲの凹底の凹面は丁寧にナデ調整されている。[51] その凹面を観察すると，何か物体に当たって器壁が剥落しているものが多いことに気付く。更に，中央部だけでなく凹面のほぼ全面に剥落が及び，もとのナデ調整面が端部にしか残っていないものも存在する。凹底の総数569の内で，ナデ調整面の完全に残っているものは23%，凹面の中央部に剥落のあるものが60%，ほぼ全面に剥落のあるものが17%である。特に凹面中央部の当りが激しく，もとの器壁の半分以上もくい込んで剥落しているものがあり，大体中央部に直径約2～3cmほどの剥落のあるものが多い。

この様な現象は，煮沸時における土器の固定方法との関係で生じるものと考えられ，凹底に対応して凸出するものの上に土器がすえられたことが推定される。剥落面の観察によれば，単純な磨擦による器表の剥落とは考えられず，火を受けた凸出物に何度か据えられた結果，器表から徐々に剥落したようであり，使用される回数が多いものほど，深く，ひろく器表が剥落していったことが考えられる。

丸底や平底の出現は，このような煮沸時の土器のすえ方に変化のあったことが予測されるが，丸底や平底のものには使用痕らしきものは認められなかった。住居址などの確認ができなかった今回の調査では，具体的な施設との対応はつかめなかった。

(ハ) 補修孔　北陸系の鉢（A250）は，器壁の割れ目をはさんで両側に孔を穿ち，この孔に樹皮を芯として同じ樹皮を巻きつけて作った紐を通して結合した状態のまま発見された(挿図４)。この種の孔が従来いわれているように補修孔であることを実証した。樹皮紐が孔にとおっている例は他にも１例あり，補修の実体の一端が明らかとなった。



挿図4　樹皮紐で補修した鉢（A250）

この種の孔が穿たれている土器は，深鉢・甕・浅鉢・鉢・椀とほとんどの器種に及んでおり[52]，これらが全てA 250 例のように補修孔であるならば，補修してまでその土器を使用しつづけなければならなかった理由が問題となる。特に，深鉢・甕類では補修によっては本来の機能を果せないことはいうまでもなく，単なる修繕ということ以外に理由を求める必要がある。

組成の検討　滋賀里遺跡出土の晩期の土器の基本的な組成は，大型の深鉢・甕類と小型の浅鉢・鉢・椀類とからなり，これに微量の注口土器・高杯・壺と，少量の東北・北陸系土器が加わっている。滋賀里Ⅴの内容が不明確であるが，器種と機能との関係は弥生式土器にくらべて未分化である。

基本的な組成である深鉢・甕類と浅鉢・鉢・椀類との組成比率は，各型式ともほぼ一定

第3表　滋賀里遺跡の晩期土器組成

時期	土器の系統	土器組成　（ ）内は個体数
滋賀里Ⅰ	滋賀里	深鉢（129）浅鉢（29）鉢（1）椀（17）
	北陸系	深鉢（3）浅鉢（1）鉢（1）椀（1）
滋賀里Ⅱ	滋賀里	深鉢（255）甕（32）小甕（3）浅鉢（107）鉢（7）椀（58）注口土器（4）
	北陸系	深鉢（2）浅鉢（3）鉢（2）椀（3）壷（1）
	東北系	中甕（2）椀（1）注口土器（1）
滋賀里Ⅲ	滋賀里	深鉢（133）甕（618）小甕（4）浅鉢（136）鉢（31）椀（36）壷（1）注口土器（3）
	北陸系	深鉢（3）鉢（3）
	東北系	甕（4）小甕（8）
滋賀里Ⅳ・Ⅴ	滋賀里	深鉢（60）甕（293）小甕（3）浅鉢（212）鉢（27）椀（18）壷（2）注口土器（4）高杯（1）
	北陸系	深鉢（3）甕（2）浅鉢（1）鉢（1）椀（1）
	東北系	小甕（12）鉢（3）壷（3）

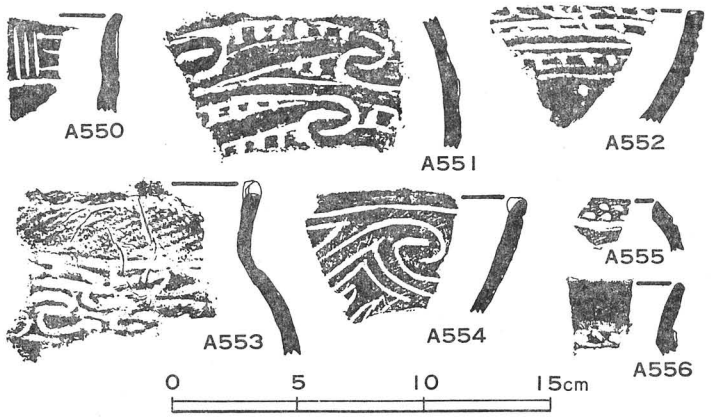
※　滋賀里Ⅳ・Ⅴの浅鉢212の内，確実にこの時期の特徴をもつものは54であり，他は滋賀里Ⅱ・Ⅲに属する可能性が強い。

※　東北・北陸系の土器に関しても，滋賀里Ⅲ～Ⅴについては，各々の時期に対応するものかどうか断定はできない。

している。個体数の比較によれば[53]，滋賀里Ⅰでは71%：29%，滋賀里Ⅱでは63%：37%，滋賀里Ⅲでは78%：22%，滋賀里Ⅳ・Ⅴでは77%：23%となる[54][55]。また，東北・北陸系土器の比率は，各型式とも土器全体の２～４%をしめるにすぎない。

基本的な組成は各型式間で変化が認められないが，一方では器形の消長がみられる。滋賀里Ⅰ・Ⅱでは，宮滝式の伝統を受け継ぐ深鉢類が盛行しているが，滋賀里Ⅱに出現する甕類は，滋賀里Ⅲ以降深鉢にとって代わって主体をしめる。ここで注目されるのは深鉢Gで，深鉢が急激に衰退する滋賀里Ⅲ以降もかなりの量をもって継続しており，他の深鉢や甕類と使用上の区別があったことが考えられる。一方，浅鉢・鉢・椀類は深鉢・甕類の変換とややずれをみせ，滋賀里Ⅰ以来の器形が滋賀里Ⅳで消失するものが多く，かわって浅鉢G_2のような黒色磨研土器でないものが，滋賀里Ⅳ以降主体をなしている。

東北・北陸系土器の観察によると，滋賀里Ⅰに八日市新保遺跡[56]の土器，滋賀里Ⅱに八日市新保・御経塚遺跡[57]の土器と大洞B・同BC系土器滋賀里Ⅲに八日市新保・御経塚・勝木原遺跡[58]の土器と大洞BC系土器，滋賀里Ⅳ～Ⅴに御経塚・勝木原遺跡の土器と大洞BC・同C_1系土器に各々類例を求めることができる[59]。この内には搬入品と模倣品との２種類の存在が考えられるが，いづれにせよその機能が問題となる[60]。第３表からは次の事柄が認められる。



挿図５　滋賀里Ⅱ～Ⅴ 深鉢・甕・鉢・椀・壺（東北・北陸系土器）

1. 当遺跡の同一形態の土器と比較すると，一般的に東北・北陸系土器はその数量が極めて少ない。
2. 滋賀里Ⅰの鉢，滋賀里Ⅲ・Ⅳの小甕，滋賀里Ⅳ・Ⅴの壺などにみられるように，東北・北陸系土器の数量が，当遺跡の土器に匹敵あるいは上まわる場合がある。
3. 滋賀里Ⅱに伴う北陸系の壺のように，滋賀里固有の土器にみられないものがある。
4. 当遺跡の土器組成と東北・北陸系土器のそれとを比較するとき，滋賀里Ⅲを除いて北陸系土器の組成は，当遺跡のそれに近い。一方東北系土器の組成は，北陸系土器の

それにくらべて近似性が認められない。

5. 北陸地方固有の土器組成と，滋賀里遺跡出土の北陸系土器の組成との間に大きな差異は認められない。一方東北地方固有の土器組成と当遺跡出土の大洞系土器の組成とはかなり異なっている。

東北系土器は，それが搬入品であれ模倣品であれ選択的に受け入れられ，稀少的な価値をもって土器組成を補完する位置を与えられたと推定され，一方北陸系土器に関しては，その組成に類似性がみられ，このことから，北陸の土器生産が東北系のそれに対して，当遺跡の土器生産により近かったことを反映するものであろう。

晩期の土器編年　滋賀里Ⅰ・Ⅱは後期の宮滝式の伝統上にあり，巻貝調整による深鉢と，独自の文様を展開する黒色磨研製の浅鉢・椀類とに特徴があらわれている。特に浅鉢・椀類の文様の展開は滋賀里Ⅱで頂点に達し，七宝文も出現している。深鉢類では滋賀里ⅠとⅡとの間に，口縁部の内傾度や巻貝条痕が器面に残る度合いにおいて差異が認められる。一方，滋賀里Ⅱに少量ながらも削り調整や二枚貝調整による甕が出現し，宮滝的伝統に対する新しい動向の芽ばえが認められる。

この新しい動向は，滋賀里Ⅲにおいて宮滝的伝統にとってかわって主体の座をしめ，巻貝調整手法や深鉢は少数残存するが，主体は削り調整による甕によってしめられる。浅鉢・椀類は，七宝文を継続させつつも文様をもつものが減少し，無文化の方向にふみ出している。器形の変化が少ないのはこの器種の性格からくるものと思われるが，文様の減少や突起のつくものの出現など，従来この器種のもっていた固有の特徴をこえて，土器全般の傾向に近づきつつある。

滋賀里Ⅳでは宮滝的伝統は全く消えうせ，西日本に共通する色彩で塗りつぶされる。甕類には滋賀里Ⅲにみられたバラエティーがなくなり，丸底で口縁部に突帯をもつ定形化した器形が主体をしめている。この時期の浅鉢・椀類には滋賀里Ⅲのものが残る可能性もあるが，新たに平底の浅鉢 $G_{2\sim5}$ が出現し，主体をしめている。この浅鉢は黒色磨研製ではなく，つくりが悪くなる傾向が認められ，文様をもつものは全く見られない。

滋賀里Ⅴは土器数が少なく，内容がはっきりとせず，２条の突帯をもつ平底の甕類の存在がわかる程度で，浅鉢・椀類が存在するかどうかは不明といわざるをえない。

従来の近畿地方の晩期の土器編年との対応関係から，次のことが指摘される。丹治遺跡[61]出土の土器には，巻貝調整の深鉢と，削り調整らしい甕とがあり，また甕の口縁上端面に刻みをもつものが多いことから，滋賀里ⅡとⅢとの土器が混在しているようである。橿原

遺跡の報告書[62]で橿原式と命名された七宝文で飾る浅鉢・椀類は，滋賀里Ⅲ（もしくは滋賀里Ⅱ）にあたり，突帯のつく甕類は滋賀里Ⅳに属しており，この2群の土器は明らかに時期を異にしている。従って今後，従来いわれてきた橿原式という型式概念を使う場合には注意が必要であろう。

滋賀里Ⅱに芽ばえ滋賀里Ⅲにおいて展開される新たな動向には，基本的な土器の組成は変わらないとしても，甕類にみられる機能主義的な性格や，浅鉢・椀類の無文化など，それ以前の土器の規制を打ち破る方向性が認められる。この動向が滋賀里の内で自生的に展開されたものかどうかの問題は残るが，少なくとも，滋賀里Ⅱに出現する甕類には，それ以前の深鉢との形式学的な関連はほとんど認められないし，二枚貝を原体とする二枚貝調整の存在など，他地域からの影響のもとに起ったことが考えられる[63]。

この新たなる動向は，滋賀里Ⅳにおいて宮滝的伝統・規制をほぼ完全に消し去り，若干の地域色をもちながらも[64]，西日本一帯から東海地方におよぶ斉一的な特徴となってあらわれている。この共通の土器文化圏に含まれる地域に，弥生文化が最初に定着しているのである[65]。

晩期以前の土器（図版43，第33・37～39図）　滋賀里遺跡出土の土器は晩期に属するものが主体をしめているが，後期を主として古い時期の土器も出土している。その内でも多く出土している層には，ⅢE区開析谷の黒褐色泥土層・茶褐色砂礫層，ⅢD区貝塚地点の貝塚形成以前の堆積である黄白色粗砂層・緑灰色細砂層・第2ピート層・黄灰色砂層・第3ピート層・黒灰色泥土層・灰褐色砂泥層・黄灰色泥砂層，ⅢC区墓址の一部の墓壙のベースである黄灰色砂礫層・青灰色砂層などがある。ⅢC区墓址のベースの層は後期の中津式を純粋に包含するようであるが，他の全ての層は含む土器の傾向が同じで，後期の土器を主体としつつもかならず微量の晩期の土器を含んでいる。

後期の土器では中津式が他を圧して多く，厚手の白っぽい色調のものや，やや薄手の黒っぽく堅緻なものがある。文様は，磨消縄文技法を駆使して角ばった構成と曲線的な構成とがあり，沈線にも，結節沈線や沈線内に刺突を施すものがある。1片ではあるが，瀬戸内地方にみられるような縄文のかわりにヘナタリによる条痕をつけ，沈線で画したものもある（A519）。

中津式以外は少量であるが，福田KⅡ式・津雲A式・稲口式・元住吉山式・宮滝式と，後期の全時期におよんでいる。また関東地方の堀ノ内Ⅱ式・加曽利B式の土器も微量ながら出土している。

第4表 滋賀里遺跡出土の晩期以前の土器

時期・形式	土器番号	備考
早期	A468	◦ⅢD区灰褐色砂泥層出土
中期	A469　A470	◦ⅢE区黒褐色泥土層出土
中津式	A342　A343 A500～A522	◦A342・343・522はⅢC区墓地ベース出土 ◦A503・504・506～508・512～520はⅢD区灰褐色砂泥層出土 ◦A510・511・521はⅢD区黒灰色泥土層出土 ◦A505・509はⅢD区黄灰色泥砂層出土 ◦A500～502はⅢE区黒褐色泥土層出土
福田KⅡ式	A471　A474 A477　A478	◦A471・474・478はⅢD区灰褐色砂泥層出土 ◦A477はⅢD区黒灰色泥土層出土
津雲A式	A344　A346 A405　A472 A473　A475 A479～A483 A476　A486	◦A472・473・475・479～482・346はⅢD区灰褐色砂泥層出土 ◦A344・483はⅢD区黒灰色泥土層出土 ◦A405はⅢD区ピートⅢ層出土 ◦A486はⅢD区ピート混入砂層出土 ◦A476はⅢE区黒褐色泥土層出土
稲口式	A487	◦A487はⅢD区灰褐色泥土層出土
崎ケ鼻式	A345　A347	◦ⅢD区黒灰色泥土層出土
堀ノ内Ⅱ式	A488～A490	◦ⅢD区灰褐色砂泥層出土
加曽利B式	A491	◦ⅢD区灰褐色砂泥層出土
元住吉山式	A494～A496	◦A495・496はⅢD区灰褐色砂泥層出土 ◦A494はⅢD区ピート混入砂層出土
宮滝式	A349～A352 A492 A497～A499	◦A350～352・492・497～499はⅢD区灰褐色砂泥層出土 ◦A349はⅢD区黒灰色泥土層出土
後期の形式不明	A523～A549	◦A523～529・533・534・536・539・540・543～546・548・549はⅢD区灰褐色砂泥層出土 ◦A538はⅢD区黒灰色泥土層出土 ◦A542・547はⅢD区ピート混入砂層出土 ◦A532はⅢD区ピートⅡ層出土 ◦A537はⅢD区黄灰色砂層出土 ◦A535・541はⅢD区ピートⅢ層出土 ◦A530・531はⅢE区黒褐色砂泥層出土

後期以外では，早期の押型文土器1片と中期の土器2片が出土しているだけである。

晩期以前のこれらの土器は，開析谷への流れ堆積層より出土したものばかりであるが，滋賀里の扇状地に縄文人が生活の基盤を求めたのは後期初頭であり，以後晩期終末まで一貫して生活が続けられたことがわかる。たまたま今回の調査地点では晩期の墓址・生活址しか確認できなかったわけで，後期の生活址も山寄りの地点に存在することは確実である。[66)]

B　石器・骨角器・木器・土製品（図版44～56，第40～49図）

石　器（図版46～49，第40～44図）　滋賀里遺跡のⅢC，ⅢD区から，2000点に近い多数の石器が検出された。石器を出土する主な層はⅢC区墓址黒色泥砂，ⅢC区開析谷黄褐色砂，ⅢD区貝塚黒色砂混泥土・灰褐色泥土層等である。各層内における土器と石器の対応関係，層相互の関係についてはⅢD区黒色砂混泥土，灰褐色泥土層を除けば明らかではない。黒色砂混泥土層と灰褐色泥土層は層位的にも土器型式の点からも明らかに差があり，一部の石器の形態はこのような差異と軌を一にしている。しかしながら，黒色砂混泥土層は石器の出土量が他に比べて卓越しており，他の層は数量がこの層の半数にも満たず，特に異る特色もないので石器は一括して扱った。

(イ)　石斧（図版46，第40図）　石斧は体部の仕上げの違いから打製，敲打製[67]及び磨製に分類し，磨製石斧は形態，大きさにより三分した。当遺跡では，一般に乳棒状石斧と呼ばれているものは全て敲打製に含まれ，この型にはＡＳ10，ＡＳ12のような変種も存在する。敲打製の石斧には特異な刃つぶれ痕を有する例のある事が愛知県馬見塚遺跡で報告されており[68]，当遺跡ではＡＳ11がその例と同様の特徴を有する（図56―5）。この石斧は層位的には縄文時代の遺物であると断定できないが刃部の損傷は他の型の石斧には稀なもので，この石斧の用途が他の型の石斧とは少し異る事を示すものである。

乳棒状の石斧の断面は円形に近い形を呈するものが多く，偏平な断面を有するものはここでは２例しか発見されていない。これに対し，大型の磨製石斧で刃部の形が蛤刃を呈するものは，例外なく横断面が偏平で楕円形を呈する。磨製の大型[69]・中型の石斧は大きさや幅に大小の差異がありながら断面の厚さが2～3cmで，弥生時代の石斧に比べるとやや偏平な感じである。

小型磨製石斧は，刃部に残る使用痕[70]から手斧として使用されたと考えられ，木器製作の主要な工具であったと考えられる（図版45―６～９）。縦の断面を見ると刃の中心が片側に寄って，片刃に近い断面を呈するものが多いが，ＡＳ４のような例外もある。打製石斧の出土例は少いが，使用痕を明瞭に残すものがある。ＡＳ２の刃部には，図版56―4に見るような長い使用痕が両面に残っている。使用痕は斧の長軸に対して少し傾きをもっている。セミョーノフの論文によると，土掘具に特徴的な使用痕であるが，柄の装着法が今日の鍬と同一ではないと考えられる。土掘具はＡＳ10を含めて僅か４例を数えるだけである。ＡＳ13はこの遺跡の石斧の中では特異な存在で，所謂方柱状石斧に似た外観をしている。体

第5表　石　斧　の　観　察

種類		石器番号	出土層位	材質	形態の特徴
打製石斧		AS 1～3 他に類例1あり	※AS1はⅢD黒色砂混泥土層，AS2はⅢD灰褐色泥土層。 ※AS3はⅢC2 38号土壙から出土。	※AS1とAS3は粘板岩，AS2はホルンフェルス製。	※AS1とAS2は分銅形石斧に類似した形態で刃部が広がっている。 ※AS3は刃部が欠損し，体部の上部がくびれている。 ※この他は，短冊型石斧の破片である。 ※AS2は明瞭な使用痕がある。
	敲打製石斧	AS 10～12 AS 13 AS 15 他に類例10	※AS10はⅢDピート層，AS11はⅢC灰白色砂層，AS12・13・15はⅢD黒色砂混泥土層。 ※ⅢC黒色泥砂層からも出土している。	※AS10～12は輝緑凝灰岩層中の玄武質熔岩製。 ※AS13は粘板岩，AS15は安山岩製。 ※他の類例は安山岩製。	※体部を敲打整形し刃部を研ぎ出している。 ※乳棒状石斧のように断面は円に近いが，全長は短く，刃部が最大幅となる。 ※AS10は「く」の字形に曲る石斧か。刃部には石斧の長軸に対して傾いた長い使用痕を残している。 ※AS11は頭部の極く一部が破損しただけの一応完形品。刃部は使用によると考えられる損傷がある。 ※AS12は片面だけ敲打仕上げで，敲打による抉りが3面に認められる。 ※AS13は柱状の石斧，四隅に抉りがある。 ※AS15のような乳棒状の石斧はすべてこの類に含まれる。
磨製石斧	蛤刃石斧	AS9，AS224 類例 14	※AS9はⅢDピート，AS224はⅢD黒色砂混泥土層 ※ⅢD黒色砂混泥土層からの出土が多いがⅢC黒色泥砂層からも出土している。	※AS9は結晶片岩，AS224は安山岩製。 ※輝緑凝灰岩層中の玄武質熔岩製のものもあるが，多くは安山岩製。	※刃部は両面から研ぎ出し，断面は扁平な楕円形を呈する。厚さと幅の比は2：1前後。 ※AS9は打撃による整形の跡を少し残しているが，入念に研磨されたものが多い。 ※AS224は刃部の片側の損傷が他の側より多い。
	定角式石斧	AS 14 AS 16 AS 221 AS 225 類例2	※AS14・225はⅢC黒色泥砂，AS16はⅢD灰褐色泥土，AS221はⅢD黒色砂混泥土の各層から出土。	※AS14は砂岩，AS16・225は安山岩，AS221は蛇紋岩製。 ※他は安山岩製。	※全面入念に研磨，断面は少しふくらんだ長方形，各稜線は明瞭。 ※AS14は扁平な乳棒状石斧とも考えられるが，全面研磨，断面の形からこの類に含めた。 ※AS225は当遺跡で発見された石斧の中で最大の幅を有し，復元すると，最大の石斧になると考えられる。
	小型磨製石斧	AS 4～8 AS 222 AS 223 他に類例5，	※AS4・6・8はⅢD黒色砂混泥土層，AS5・7はⅢC黒色泥砂層，AS222・223はⅢE耕土。	※AS4・7・8は蛇紋岩，AS5・6・223は安山岩，AS222は結晶片岩製。	※全面入念に研磨，一般に定角式石斧の縮小型が多い。 ※AS7・8は片刃に近い両刃で使用痕がある。 ※AS4は撥形で断面はカマボコ形。 ※AS223，AS4はこの類では最大のもので，AS4は重量70gである。最小はAS7で重量19.5g。 ※AS222は蛤刃石斧を小型化した形，AS223は風化が激しい。

部は打撃により成形し，片側は自然の平坦な面を利用している。体部中央の四隅には敲打調整された抉りをつくり出している。刃部は破損しているので正確な原形の推測は困難であるが，残存部の形から考えて，片刃に近い両刃であったと考えられる。

磨製石斧の材料には安山岩が最も多く使われ，輝緑凝灰岩層中の玄武質熔岩，蛇紋岩，砂岩なども使用され，打製石斧の材料にはホルンフェルス，粘板岩等を使用している。定角式石斧の比較的小さいものや小型磨製石斧には蛇紋岩がしばしば用いられ，大型の石斧は安山岩が多く，結晶片岩を使用しているのはＡＳ９の一例だけである。

(ロ) 石鏃（図版47—１，第41図）　当遺跡から発見された石鏃の数は1000個を越え，縄文時代の遺物包含層から出土したものは700個余である。出土数はⅢＤ貝塚地区が最も多く，黒色砂混泥土層から425個，灰褐色泥土層から87個の石鏃が出土している（第６表）。出土数量と土器型式との対応関係などの点から，ⅢＤ区の包含層を中心に分類[71]，及び種々の計測[72]を試みた。石鏃の形は５型式に分類し，各々平基式，凹基式，円基式，突起式及び尖基式で，ここでは，それをⅠ～Ⅴの文字で表現し，Ⅱ類はさらにａ～ｃに細分した。

Ⅰ 類：ＡＳ33～38・55

Ⅱａ類：ＡＳ50～59・61～93・95～104・112～114

Ⅱｂ類：ＡＳ29～32・49

Ⅱｃ類：ＡＳ39～48・60・110・111

Ⅲ 類：ＡＳ107・108

Ⅳ 類：ＡＳ18～27

Ⅴ 類：ＡＳ94～105・106

第６表　石　鏃　の　出　土　層　位

出土層位	石　器　番　号（ＡＳ）
ⅢＤ黒色砂混泥土層（表面～－30）	17 22 27 36 38 39 44 46 52 53 60 65 66 71 75 78 79 80 81 82 84 86 87 88 90 92 93 94 99 103 105 106 107 108 110 111 112
ⅢＤ黒色砂混泥土層（－40～－50）	31 42 43 45 47 55 57 58 62 64 68 72 100 101 114
ⅢＤ灰褐色泥土層	40 41 49 50 59 76 85 89 91 102
ⅢＣ　ピ　ー　ト　層	51 74
ⅢＣ　黒色泥砂層	19 20 23 24 25 26 29 34 35 54 60 63 67 69 95 96 97 113 226
ⅢＣ　黄褐色砂層	30 48
ⅢＣ　灰白色砂層	18 21 28 32 33 37 56 61 70 77 83 98 104 109

ＡＳ17・18・28は一応完形品と考えられ使途不明であるが，ＡＳ28は『橿原』で石鏃に含められている[73]。

石鏃の形は基本的に三角形であるから，石鏃の頂点と最大幅を結ぶと図上の三角形ができる。この三角形と実際の外形式とは必ずしも一致せず各型式により差異がある。因にⅡ類の石鏃にこの三角形を当てはめると，Ⅱａ類は先端の角度と三角形の頂点の角度に大きな差はないが，Ⅱｂ類は先端の角度の方が大きく，Ⅱｃ類もⅡｂ類に似た傾向を示し，Ⅱａ，Ⅱｂ類は基部の抉りが三角形の内側へ入るが，Ⅱｃ類は入らないものの方が多く，内側へ入り込むものは少ない[74]。Ⅱ類はこのようにしてａ～ｃに細分したが，図上に想定した三角形と外形との関係は分類上のものであって，製作の際に意識されていたかどうかは断言できない。このような三角形は長さと幅に規定され，一般に長さと幅の比は2：1～1.5前後で，Ⅳ類，Ⅴ類は少し異り，Ⅴ類は他に比べて細長い形で，長さと幅の比は約2.5～5：1[75]である。

第7表　石鏃の型式別比率（%）

石鏃型式＼出土層位	黒色砂混泥土層（表面～－30）	黒色砂混泥土層（－40～－50）	灰褐色泥土層	ⅢＣ区 黄褐色砂層
Ⅰ	7.2	13.9	6.8	
Ⅱａ	61.2	57.0	40.2	69.0
Ⅱｂ	2.5	6.3	5.0	15.5
Ⅱｃ	17.8	21.5	45.8	15.5
Ⅲ	7.8	1.3	2.2	
Ⅳ	2.5			
Ⅴ	1.8			

各層別の石鏃各型式の全体に対して占める比率を第7表に示したが，Ⅱ類が各層で80%を越え，なかでもⅡａ類が卓越した数値を示し，晩期の最も一般的な形である事が明らかになった。重量は第8表に，各型式を層毎に最大，最小，平均の数値を示した。Ⅱ類の石鏃は1g前後の重量のものが多く，Ⅰ類はⅡ類よりやや重く，Ⅲ・Ⅴ類では平均値が倍に近い数値を示している。Ⅴ類の石鏃は縄文晩期の石鏃の中では最も大きく，重い事が明らかである。このようなⅤ類やⅣ類の石鏃は，灰褐色泥土層からは検出されていないため，滋賀里Ⅲ～Ⅴの時期に出現したものと考えられる。黒色砂混泥土層内では，この

第8表　石鏃の型式別重量（単位ｇ）

石鏃型式＼出土層位	黒色砂混泥土層（表面～－30）			黒色砂混泥土層（－40～－50）			灰褐色泥土層			ⅢＣ黄褐色砂層		
	最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均
Ⅰ	2.4	0.6	1.2	2.4	0.7	1.29	3.4	0.7	1.86			
Ⅱａ	3.3	0.3	1.05	2.7	0.4	0.94	2.8	0.2	1.08	1.8	0.5	0.96
Ⅱｂ	1.6	0.8	1.08	1.35	0.3	0.85	1.5	0.8	1.42	1.4	0.8	1.08
Ⅱｃ	4.8	0.3	1.14	1.9	0.6	1.09	1.8	0.8	1.02	3.1	0.9	1.83
Ⅲ	6.5	1.9	3.64	1.7		1.7	5.3	1.2	2.35			
Ⅳ	2.3	1.0	1.72									
Ⅴ	4.95	1.6	3.15									

第9表　石匕・不定形石器・石錐・その他の観察

種類	石器番号	出土層位	材質	形態の特徴
石ヒ	AS 115～122 AS227	※AS115・117・118・120はⅢD黒色砂混泥土層。 ※AS116はⅢD茶褐色砂泥層。 ※AS119・122はⅢC黒色泥砂層。 ※AS121はⅢC淡青灰色砂層。	AS118はチャート，他はすべてサヌカイト製。	※AS115・121は縦形石ヒで階段状の剥離痕がある。 ※AS116・117・119・120・125は大剥離面を有する。 ※AS118は小さく，入念な調整をしている。 ※AS119・122は横長剥片を使用している。 ※AS116・122は片面を主に調整している。
不定形石器	AS 123～125 AS 126～128 AS 130～141 AS228	※AS123はⅣB耕土，AS124・134・139はⅢC黒色泥砂層。 ※AS125～128・131・136・141・228はⅢD黒色砂混泥土層 ※AS132・138・140はⅢD灰褐色泥土 ※AS130はⅢC灰白色砂層。 ※AS135はⅠE表採。 ※AS137はⅣA耕土。	サヌカイト製。 AS130・137はチャート製，他はサヌカイト製。	※AS123はナイフ状の石器，刃部は両面から調整しているがAS123の刃は鋭くない。 ※AS124は使途不明，AS127のようなものの未成品か。 ※AS125は階段状剥離痕を残す。 ※AS137・138・228はナイフ状の石器，AS228は両面から入念に刃部を調整している。AS137は旧石器か。 ※AS126～128・130～134・140・141は横長の剥片を使用し，片面から刃部を調整している。AS128・130・140・141は両面から調整。 ※一側縁を刃部として使用しているのが多い。
その他	AS129 AS133	※ⅢD黒色砂混泥土層。	サヌカイト製。	※削器の一種と考えられる。使用痕は認められない。 ※AS133は一部自然面を残す。
	AS 142～144	※AS142はⅢD灰褐色泥土層。 ※AS143・144はⅢD黒色砂混泥土層。	サヌカイト製。	※AS142は石核と考えられるが，AS143は不明。AS143の刃縁部状の所に使用痕はない。 ※AS144は自然面を残し，両側から剥離して刃部状にしている。刃部と考えられる場所に階段状の剥離痕が認められる。
	AS 236・237	※ⅢC黒色泥砂層	軽石	※人工的な加工は施されていない。 ※軽石は湖西地方には見られない石である。
石錐	AS 145～156 AS229・230・231 232・233	※AS145～147・151はⅢD黒色砂混泥土層。 ※AS148はⅢD灰褐色泥土層。 ※AS149・152～156はⅢC黒色泥砂層 ※AS229・230・231・232・233はⅢE・ⅢD区表採。	AS233はチャート製，他はサヌカイト製。	※つまみのあるものと棒状のものがある。 ※先端は欠損しているものが多く，完形品はAS230・233等極く僅かである。 ※AS145はつまみの部分に自然のくぼみがある。

層の性格上土器との対応関係は明らかにできないが，Ⅳ類・Ⅴ類の石鏃がこの層の浅い深度にしか見られない事は，土器の在り方と軌を一にするものであろう。

当遺跡の石鏃はサヌカイトを用いて製作され，チャート製は1％程度である。大剥離面を有する石鏃は，黒色砂混泥土層に於いて全体の28％で，両面に大剥離面を残すものは極く僅かである。大剥離面を残す石鏃は横長剥片を使用している事が確認できる。石鏃の大半に階段状[76]の剥離痕が一，二箇所認められるがこれが全面に及ぶものはない。

(ハ) 石匕・不定形石器・石錐（AS115～AS156）（図版47—2，第42図）

AS 125は彎曲した縁を有する一種の刃器と考えられるが，使用痕が残っていないので内側と外側のどちらを作業に用いていたのか判定できなかった。刃器は形の一定しないものが多く，これらは一辺を刃部として使用している三角形または四角形を呈するものと，ナイフ状のものとに分類できる。不定形石器は大剥離面を有するものが多く，横長剥片の一端を調整して刃部としている。刃部は片面の調整が多いが，AS144は両面から調整し，大きな階段状の剥離痕が一箇所だけ認められる。

石錐は遺跡全体から28個検出されているが，使用による磨滅の痕跡を残すものは発見されていない。

第10表 石錘の重量及び出土層位

	番号（AS）	重量（g）	出土層位
磨製	158	15.2	ⅢD 灰褐色泥土層
	159	11.5	〃 黒色砂混泥土層
	160	28.0	〃 灰褐色泥土層
	161	19.5	〃 〃
	162	24.5	〃 〃
	163	18.5	〃 黒色砂混泥土層
	164	8.5	ⅢC 溝内灰白色砂層
	165	29.0	ⅢD 灰褐色泥土層
	166	45.5	〃 黒色砂混泥土層
	167	35.5	ⅢC 黄灰色砂層
	168	60.0	ⅢD 黒色砂混泥土層
打製	169	41.0	〃 〃
	170	74.0	〃 〃
	171	51.5	〃 灰褐色泥土層
	172	85.5	ⅢC 黒色泥砂層
	173	28.0	ⅢD 灰褐色砂泥層
	174	95.5	ⅢD 黒色砂混泥土層
	175	105.5	ⅢC 灰白色砂層
	176	119.0	〃 黄褐色砂層
	181	218.5	〃 黒色泥砂層
	182	205.0	ⅢD 黒色砂混泥土層

※ 表には完形或は完形に近く縄文時代の遺物と考えられるものだけを記載した。
※ 破損品の中で復元してこれらの値を加えると考えられるものはない。
※ AS235は磨製石錘としては最大で60.0g

(ニ) 石錘（AS158～176・181・182）（図版48—1，第43図） 磨製と打製に分類でき，技法の違いだけでなく，重量の点からも，一般に磨製石錘は小型で軽く，打製石錘は大型で重い。重量は第10表に示した。石錘は縦長が普通であるが，AS 171のように少し横に長い例もある。石錘の材料には安山岩，砂岩，ホルンフェルス，粘板岩，サヌカイト（AS172）等の手頃な大きさの河原石を使用している。

(ホ) 砥石・石皿（AS177～181・189）（図版48—2，第43図） 砥石は151個出土している。砥石はAS179～181のように，作業の結果生じた凹みや平坦な研磨面を有するが，AS 177は少し異り周縁に作業面を有

している。材料は安山岩が多く，砂岩も使用されている。

第11表 砥石・敲石・石剣・石刀類の出土層位

出土層位	石器番号（AS）
ⅢD黒色砂混泥土層	180 191 194 196 197 198 199 200 206 240 241 244～247
ⅢD灰褐色泥土層	178 179 187 203 205 242
ⅢD灰褐色砂層	192 195
ⅢD青灰色砂層	193
ⅢDピート層	208
ⅢC黒色泥砂層	202 204
ⅢC灰白色砂層	201 209

石皿（AS189）は安山岩製で僅かな凹みを有している。凹みの部分は滑らかで，この凹みは磨滅によってできたものである。滋賀里遺跡では深い凹みを有する石皿は発見されていないが，AS189のような特徴を有する石片は10片を数える。

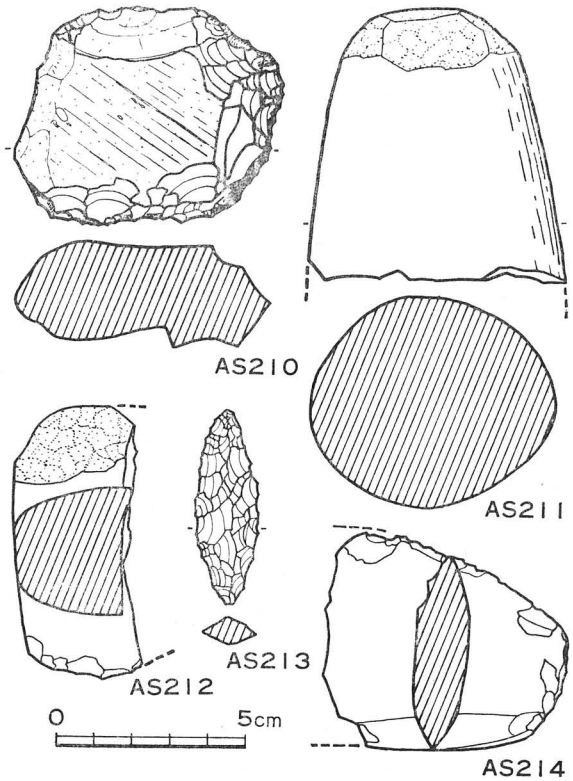
(ヘ) 石冠（AS185）（図版48—2，第43図） ⅢC区墓址の黒色泥砂層から出土しており，遺構に伴うものではない。平面形は楕円形で，体部に横方向の浅い凹みが帯状に一周している。表面は平滑である。

(ト) 敲石類（AS183～184，186～188）（図版48—2，第43図） アバタ状の敲打痕を石の側面に帯状に有するもの，敲打による凹みを有するもの，及びこの両方の特徴をもつものを敲石とした。AS188はこの特徴の他に磨石として使用された痕跡もあるが，このような種々の作業の痕跡の時間的関係は確認できない。AS188は磨石としては最も代表的な形態をしており，最も顕著な磨滅の痕跡を残し[77]，一部は光沢を帯びている。

敲石は片手で操作できる程度の楕円体のものが多く，玢岩，花崗岩，安山岩及び熔結凝灰岩などの岩石を素材としている。堅田直氏は凹みのある石を石器製作の工具，石槌であるという見解[78]を発表しているが，この見解について同様の実験を試みた結果，同様の結論が得られ，賛同できるものである。堅田直氏は凹みの中に斜に走る列状の打痕があると指摘しているが，これは滋賀里遺跡の敲石にも見られ，また橿原遺跡[79]，吉胡貝塚[80]出土の敲石にも見られ，特異なものとは言えない。このような作業面に残る打痕は，細長く舟底状を呈するものが多く，石の長軸に対して右上りに傾いている。石が小片のため長軸のはっきりしないものや，石の長軸に直角なものも少数存在する。

敲石に残る凹みは剥片の調整作業等によって生じたもので，凹みが右上りなのは右手に石槌を持って剥離作業を行った結果と考えられる。[81] 凹みのある石の中でも，片手で容易に操作できる石は敲石として使用され，持ちにくい石（ＡＳ187）や重量が1kgを越えるような大きい石は，作業の際の台石として使用された可能性がある。凹み石は石器製作の工具である事は明らかになったが，凹みのある石の全てが工具と言うわけではなく，打撃や研磨によって入念に丸く調整された凹みを有する石は，石槌とは別の用途が考えられる。ここではこの種の凹み石は発見されなかった。側面にアバタ状の敲打痕を有する石も石器製作の工具とすれば，凹みを生じない程度の弱い打撃痕の集積と考えられるが，他の用途があったのかもしれない。[82]

(チ) 石剣・石刀・石棒（ＡＳ190～209）（図版49，第44図） 諸刃の石剣はAS190だけで，他は一側縁を刃部とする石刀である。刃部は両面から研ぎ出しているが，刃は鈍く実用の利器とは考えられない。これは全ての石剣・石刀に共通の特色である。 AS195は一部破損しているが完形品で，石棒か石刀の再生品かも知れない。AS199は刃部が内彎するもので，当遺跡ではこの一例のみである。[83] ＡＳ200は背部にＶ字形の溝が刻まれ，上端は装飾のための溝の所で破損している。ＡＳ207は打製の完形品であるが，研磨する前の未成品と考えられる。ＡＳ208と209は結晶片岩製の石棒で，ＡＳ191も同様の石材を使用している。石刀や石剣はホルンフェルスを使ったものが多く，粘板岩製のものも見られる。



挿図6 ⅢＣ・ⅢＤ区出土の石器実測図

(リ) 小結 滋賀里遺跡から検出された剥片は非常に多く，重量にして百数十キログラム程になる。剥片はサヌカイトが90

第12表 石 器・玉 類 の 観 察

石器番号	出 土 層 位	石 材	備 考
AS 210	ⅢD黒色砂混泥土層	サヌカイト	自然石を粗く打ち欠いて刃部状にしている。打撃を加える事によって生ずる細い傷が刃部状の所にある。
AS 211	ⅢE耕 土	安 山 岩	蛤刃石斧か？弥生時代の石斧の可能性が強い。
AS 212	ⅢD黒色砂混泥土層	〃	頭部は敲打痕があり刃部は刃つぶれが激しい。石斧の破損品を再利用したクサビか？
AS 213	ⅢC黒 色 泥 砂 層	サヌカイト	小型の石鏃か？入念に剥離，調整してある。Ⅴ類の石鏃に含まれるか？
AS 214	〃 〃	安 山 岩	両面から刃部状に研ぎ出している。刃は鈍く，実用利器とは考えられない，使用痕は確認できない。
AS 215	〃 〃	結 晶 片 岩	磨製管玉
AS 216	ⅢD黒 色 泥 砂 層	〃	自然石に多少手を加えた粗雑な磨製の管玉
AS 217	ⅢD灰 褐 色 砂 層	ホルンフェルス	全面磨製。表面には研磨の際の擦痕が残り，胴部には帯状の溝がある。漁具か？
AS 218	〃 黒色砂混泥土層	〃	〃 〃
AS 219	〃 〃	〃	全面入念に研磨。表面は光沢を帯びている。上端と下端が横方向へわずかにふくらむ。
AS 220	〃 〃	〃	穴は自然のままに。外面を雑に研磨。部分的に研磨が足りないため自然面が残っている。

%を占め，残りの10%は花崗岩，安山岩，ホルンフェルス，粘板岩，チャート等である。大量の剥片の存在は当遺跡で石器が製作された事を示すものである。石鏃や刃器にはサヌカイトが使用され，打製石斧・石剣類はホルンフェルス，粘板岩等の当遺跡の近くに産する石を主として用いている。軽石及び結晶片岩や蛇紋岩製の石器と剥片とが当遺跡で検出されたが，これらの岩石は湖西地方に産しないもので，石器と石材の産地との関係が問題である。

当遺跡の石鏃でⅣ類と称しているものは奈良県橿原遺跡や愛知県馬見塚遺跡にも同様のものが見られる。橿原遺跡の石鏃は材質が滋賀里遺跡のものと同じサヌカイトであるが，馬見塚遺跡の石鏃は黒雲母安山岩を使用している。形態も良く似ており，石材も安山岩を使用しているのだが，使用されている安山岩の違いから，Ⅳ類の石鏃は黒雲母安山岩を使用している地域からの搬入ではない事が明らかである。滋賀里遺跡に於ける石器の変遷は，石鏃を除いては判明しなかった。石鏃は滋賀里Ⅰ～ⅡとⅢ～Ⅴの時期には形態の上で差異が認められる。滋賀里Ⅰ～Ⅱの時期にⅣ類の石鏃は見当らないが，滋賀里Ⅲ～Ⅴの時期にはⅣ類の有茎鏃やⅤ類のような比較的大型の石鏃が見られる。

石器の製作については注76で触れたが，石槌を使用した剥離作業が行われていた事は，敲石の存在から明らかで，石槌を使用して打撃を加えるのはプラットフォームなどの除去には極めて有効なものである。また石槌で加える打撃の方向の不正確さが階段状の剥離痕

を生ずる主な原因と考えられる。完成した石器にも階段状の剥離痕が認められるから，石器製作の大半の工程に石槌を使用していた可能性がある。

滋賀遺跡出土の石器は生産用具，日常生活用具，その他に大別できる。発見された石器の組成を見ると石鏃61%，敲石７%，石斧6.5%，砥石７%，石錘2.5%，石刀類6.5%，石匕等の刃器1.5%，石錐１%，その他７%となった。数字は概要を示すものであるが，石鏃が圧倒的に多い事が明らかである。石斧の中で打製石斧は３例で，打製石斧と同様の機能を持つと考えられるものを含めても４例を数えるのみである。このように打製石斧が少いのは，日常生活の中で，打製石斧を使用するような作業の比重が，それ程大きいものではなかったためではないだろうか。晩期の遺跡の一つのあり方として直視する必要があろう。[84]

骨角器（図版50・51—１，第45図，第15表）　滋賀里遺跡出土の骨角器は全てⅢD区貝塚から出土し，狩猟用具と考えられる根バサミ・牙鏃・弓筈と，漁撈用具と考えられるモリ・ヤス・針・釣針とが圧倒的に多く，その他には角斧，ヘラ状製品，装飾品などがある。出土した遺跡の性格から，骨角器の多くは破損しており，原材や加工中の未製品も少なからず出土している。さきに灰褐色泥土層は滋賀里Ⅱに，黒色砂混泥土層は滋賀里Ⅲ～Ⅴに比定したが，この点を考慮すると，根バサミに形態上の差異が認められる。根バサミBタイプが全て黒色砂混泥土層から出土しているのに対して，根バサミAタイプは灰褐色泥土層に確実な例があり黒色砂混泥土層にもおよんでいる。この事から一つの可能性として，Aタイプの根バサミがより古い形態となることが考えられる。

骨角器と材質との関係[85]は有機的に結びついており，材の性質に応じて使い分けられている。ニホンジカの骨角の利用が他を圧して多く，生産用具のほとんどがこれによってしめられている。根バサミは全て鹿角でつくられており，角斧や装飾品を除けば鹿角の利用は根バサミに集中している。ニホンジカの中手・中足骨や肋骨は，骨の緻密層が強くて弾力性があり，この性質を利用してモリ・ヤス，針がつくられている。

食用に供された量からはニホンジカに劣らないイノシシの骨の利用は少なく，牙や趾根骨の利用に限られている。イノシシの牙のエナメル層は強靱であり，これをうまくとり入れて釣針，ヘラ，牙鏃などがつくられている。イノシシの利用はこの牙が主体であるが，腰飾や特異な形態の装飾品は，イノシシのグロテスクな形状の趾根骨を巧みに利用している。

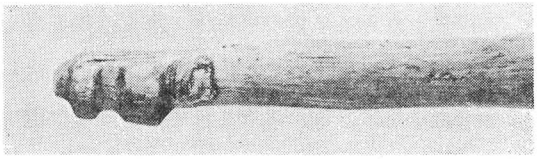
製作技術からみれば，骨角器の製作も木器と同様に，１次加工と２次加工とに分けて考

えられる。1次加工は原材を得る作業であり，骨や鹿角をある長さの単位に切り離すことから始まる。この作業は，鋭い刃物で材の堅緻部に刻み目を入れ，おし切るか割って切断している。更にこの単位材を縦割りする場合もある。

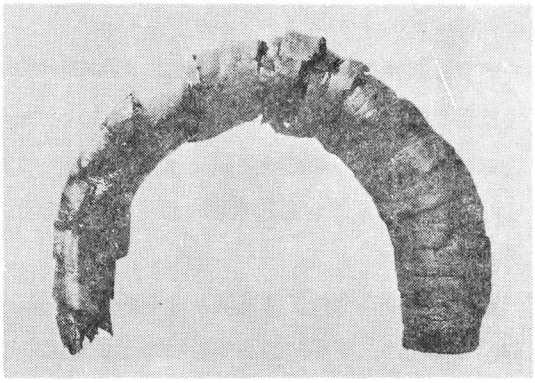
2次加工は製品を原材からつくり出す作業である。モリ・ヤスや針などの未製品と思われるものの観察によれば，その端部を尖がらしたり丸棒状のものにするには，削るかまたは細かい縦割りによって原材の端部をとがり気味につくり，次に荒い磨きが原材の長軸方向に対して直角かやや斜方向におこなわれて，大体の形をつくり上げている。この荒磨きの擦痕は，仕上げの磨きがかけられてもなお骨角上に明確に残っている。最後に仕上げの細かい磨きが原材の長軸方向にそっておこなわれる。この仕上げの磨きは，痕跡としてつかめないほど平滑なものもあるが，明らかに，荒磨きとは使用した道具が違っている。骨角器の製作には主として石器類が使われたことが考えられるが，具体的にはつかめなかった。

木　器（図版52～55，第46～48図，第16表）　ⅢD貝塚地点の貝塚形成以前の堆積であるピート層と，ⅢC開析谷の黄褐色砂層・第2ピート層・黄灰色砂層から多くの木器と原材が発見されたことは一大収獲であった。この内，ⅢDピート層出土のものは，滋賀里Ⅰに時期を限定して考えられるが，晩期内での時期差を問題にできる段階ではないので一括して扱うことにした。

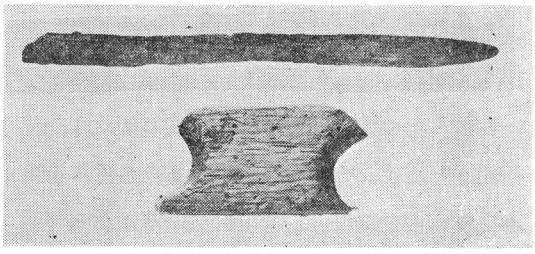
木器は，その用途から4種に分類できる。狩猟具として弓，木槍が，工具として石斧柄が，日常用器として木椀，漆塗り木椀，籃胎漆器，杓子形木器，火鑽臼・杵が，装身具として漆塗り櫛，漆塗り腕輪がそれぞれ認められる。用途不明の木器の内では，櫂状木器の機能が問題となろう。AW7は明らかに



挿図7　ⅢD区出土の弓（AW19）の弓弭部



挿図8　ⅢC区出土の樹皮巻き把手



挿図9　ⅢD区出土の火鑽臼と火鑽杵

半製品であるが，AW６のように端部を扁平につくらないAW５が完成品であるかどうかが用途を決める上でポイントになる。材質の鑑定を済ませていないが，この櫂状木器は石斧柄と同じカシのような堅緻な材から作られている。

籃胎漆器を含む漆の広範な活用が確認されたことは特筆すべきであろう。骨角器にも漆を塗る例があり（AB36），土製品にも漆を用いた可能性があるが，容器類や装身具類を中心として弓なども含む木器類にその主体が認められる。漆に混ぜる顔料は未分析であるが，黒色と朱色との２色の漆があり，一般的に容器や装身具には朱色が，弓には黒色が塗られ，AW15の弓では２色が使い分けられている。漆塗りの木器の性格に関して，弓類のように，漆塗りのものが主として生産活動以外の場で使用されることも考えられるが，AW13の朱漆塗りの木椀のように，朱塗りの黒色磨研土器椀と材質こそ違え同じ効果を発揮しており，両者間には全く共通した目的を考えることができるのではないか。

木器を上まわる多量の原材は，木工技術を考える上で重要である。原材の加工は４段階に分けられる。まず，切りだした原木の枝をはらって70cm～120cm の長さの単位に切断した丸木材を基本とし，逐次これを縦方向に半割りして，½円周材，¼円周材，⅛円周材を得る。当然のことながら，径の大きい丸木材の場合はその中央部に板材をとっており，½円周材の中にはその残りの部分のものも含めている。このような各種の原材をつくりだすのが木器製作の第１次工程であり，丸木を一定の長さの単位に切断するために大型の石斧を使用したことが認められる（図版56—１）。半製品が出土している石斧柄や櫂状木器では，丸木材→⅓～¼円周材→半製品→完成品という製作過程をたどることができる（図版56—３）。このような原材を貯木場にたくわえておき，必要に応じて木器をつくったことが考えられよう。

木器製作の２次加工は荒削りとみがきとによっておこなわれている。石斧柄や櫂状木器の半製品には，小形磨製石斧を手斧として使用したと考えられる削り痕が明瞭であるが，その完成品にはみがきがかけられて，加工痕は観察できない。AW18の弓の側面に認められる擦痕によれば，このみがきにも荒みがきと仕上げの細かいみがきとがあったことがわかる（図版56—２）。

弥生文化の定着による生産様式の変化は，それに対応する木器を生み出し，木器製作に使用される工具の変化は，木器製作の能率を向上させた。しかしながら，これらの事実は弥生文化の定着にともなう社会変革によって生み出されたことであり，滋賀里遺跡出土の晩期の木器にみられる木工技術は，基本的には弥生時代にひきつがれていることが認めら

れよう。この点に関して，AW14の木椀がロクロを使うことなく，削り技術だけによって仕上げられている事実は，弥生文化の横軸ロクロの存在を再検討する必要があることを示唆している。

土製品・紡錘車（図版44・51，第49図，第17表）　滋賀里遺跡出土の土製品の内，特に注意を必要とするものは，粘土を漆で練り固めてつくられたと考えられる3例の土製品である。一見した限りでは焼成品と見誤るものであるが，断面の観察によれば胎土は火を受けていない。全体の形態のわかるものはないが，2種類のものが出土している。1種はAC10で，中空の円孤状をなし，この構造は樹皮を芯として同じ樹皮をその芯に巻きつけたものに，粘土を漆で練り固めたもので巻いてある。元来は中空でなく，植物質の芯の大半が腐蝕したものであろう。他の1種は芯などのない扁平な製品で，ⅢC墓址の墓壙中から2例出土し，その内81号土壙出土のものは，一端に孔のある腰飾と考えられる。この土製品の構造は成分分析の結果をまちたい。

紡錘車には実際に紡錘車として使用されたものかどうか疑わしいものもあるが，周囲を打ち欠いてほぼ円形につくり中央に穿孔しているものを第1基準とし，更に円周端面を磨いているものや，孔の周囲に同心円状の擦痕のあるものを第2基準とした。第1基準のものが34例中25例をしめ圧倒的に多いが，この内には紡錘車として疑わしいものも含まれている。第2基準のものは9例あり，より紡錘車としての可能性が強いわけであるが，この内4例に同心円状の擦痕が認められ，使用痕となる可能性がある。しかしこの擦痕のある例は少なく，孔の両面にこの擦痕のある例も1例あり，残された問題は多い。[86]

2. 各地区の調査

(1) ⅠF区の包含層（第33図）

Ⅰ区では弥生時代の溝が発見されたが（挿図10），この内の3号溝の肩になっている褐色泥土層より滋賀里Ⅴの甕（A360～A363）が出土している。溝の肩になっている土層の内，最上層は弥生第5様式を含む暗茶褐色砂利混泥土層で，この褐色泥土層はその下層にあたる。褐色泥土層はその内に有機化した部分を含む不均質な堆積で，晩期の土器はこの有機化した部分より出土し，泥土質の部分からは微量の後期の土器片も出土している。このような状態は，滋賀里Ⅴの包含層が2次堆積したものと考えられ，調査地点より西方の山寄りの高みに，この時期の生活址の存在が推定される。[87]

ＩＦ区出土の滋賀里Ⅴの土器は，滋賀里遺跡の同時期の土器にくらべると，外面の調整手法においてナデ調整が多い点が指摘される。

(2) 他の地区出土の縄文式土器（第33図）

今回調査した各地区より少量の縄文式土器が出土している。ⅡＥ・ⅡＦ・ⅡＧ・ⅣＢ・ⅣＤ・ⅤＢ・ⅤＣの各地区の開析谷または再開析谷中の堆積に含まれるもので，現在の地表面より2m～3mの深さの砂層や砂礫層から出土している。多くの土器は時期すらわからないほど磨滅してしまっているが，ⅤＣ区で元住吉山式の鉢が，ⅤＢ区では滋賀里Ⅰと考えられる深鉢（A359）が，それぞれ確認されている。これらのことから，調査地点の西方に，滋賀里遺跡以外にも縄文時代の生活址の存在が推定される。

註 1）遺跡の発見のいきさつやその後のことなどについて，皇子山中学校教諭西田弘氏より教示を受けた。

2）1948年の調査地点が，今回の調査地区のどこに対応するものか，具体的には明らかでない。滋賀里遺跡に関しては以下の文献に紹介されている。

坪井清足「滋賀県大津市滋賀里遺跡」（『日本考古学年報』1）1951年

坪井清足「縄文文化論」（『岩波講座日本歴史』1）1962年

3）松下進『日本地方地質誌　近畿地方』1953年

京都新聞社編『比叡山―その自然と人文―』1961年

4）坪井清足他『石山貝塚』平安学園考古学クラブ 1956年

5）1971年の夏に湖西線の北大津駅建設のための整地作業中に発見された縄文時代から平安時代におよぶ複合遺跡である。同年の夏に滋賀県教育委員会によって調査され，縄文前期の包含層，古墳時代（4世紀から5世紀）の住居址，7世紀末の東西・南北溝，奈良時代以降の掘立柱建築址，井戸などが発見された。

6）京都市史編纂所『京都の歴史』1　学芸書林　1970年

7）地質学の用語としてのピート層は泥炭層という意味であり，この点からすれば本報告書中に使ったピート層という用語は正しくない。木の葉層あるいは木屑層というのが正確な表現に近いが，便宜的にピート層という用語を使用した。

また，本報告書中の層の命名は土の粒度によって粘土・泥土・砂・礫と区分し，それに肉眼で観察できる色調を加えておこなった。また砂質泥土，泥土質砂は各々砂泥，泥砂と略した。

湊正雄・井尻正二『日本列島』1958年

8）晩期の土器を滋賀里Ⅰ～Ⅴに分別した。詳しくは土器の項参照。

9）木の実の鑑定は，京都大学理学部大学院・那須孝悌氏におねがいした。また，このⅢＣ区開

析谷の第2ピート層とⅢD区貝塚下層の第1ピート層の花粉分析を，那須氏と大阪府立門真高校教諭徳丸始朗氏とにおねがいした。

10）ⅢCの開析谷の南限についてはつかんでいない。

11）湖西線予定地のやや西方にある旧江若鉄道敷では，発掘調査はしなかったが，広範な晩期の包含層を確認している。

12）縄文時代早期の瀬田川の川面は，大体現在の海抜90mであることが述べられている。
坪井清足他『石山貝塚』平安学園考古学クラブ 1956年

13）滋賀里遺跡の周辺の小字名には以下のものがある。
畔ノ内，笹畔，薑畔，中畔，立オサ，白米田，三反田，鍋田，小島田。今回調査したところは，立オサと白米田とである。
滋賀里遺跡の現在地は，大津市見世1丁目と2丁目にまたがっている。

14）晩期にはイヌの埋葬が多く認められているが，滋賀里遺跡ではこの26号・27号にその可能性があるだけである。

15）人骨の鑑定は，大阪市立大学助教授寺門之隆氏と京都大学教授池田次郎氏におねがいした。

16）遺構保存のためにたち割りをおこなっていないので，更に下から墓壙が発見される可能性もある。

17）滋賀里Ⅲ～Ⅴの甕の体部片は調整手法が同じであり区別がつかない。また口縁部に突帯のある滋賀里Ⅳ・Ⅴの土器を含まない土壙にしても口縁部の破片の量が問題であり，この点をもって滋賀里Ⅲに属するとは決められない。

18）この他に，217号土壙墓の人骨の腰付近から獣骨製品らしいものが出土しているが，詳細はわからない。

19）81号集骨墓の頭蓋骨下の集骨中にこの土製品が入り込んでおり，現在のところこの土製品を取り出していない。

20）青灰色微砂層から灰褐色砂層までの堆積は，古墳時代の遺物を含んでいる。

21）以下の本文の記載でⅢD区貝塚のピート層と略称するものはこの第1ピート層のことである。

22）この木器原材の放射性炭素による年代測定を京都産業大学教授山田治氏におねがいした。

23）斜面堆積の複雑な土層であるため，便宜的に10cmを単位として掘り下げていった。

24）ブロック内での貝の種類別算定は，今回の整理ではその一部しか実施できなかった。

	セタシジミ	ナガタニシ	イケチョウガイ	イボカワニナ
個体数	4,660	46	28	11
比　率	98.2%	1.0%	0.6%	0.2%

セタシジミが圧倒的に多い事は他のブロックでも同じであり，今後シジミの種類が増える可能性はあるが，全体として淡水性の貝に限定されている。

この様な貝ブロックは一度に消費された単位と考えられるが，静岡県西貝塚の検討と同じように，食料資源の中で貝類のしめる役割りは副次的なものといえる。

麻生優・市原寿文他『西貝塚』磐田市教育委員会 1961年

25）魚骨の鑑定は，早稲田大学講師金子浩昌氏におねがいした。

26）文化財保護委員会編『吉胡貝塚』（『埋蔵文化財発掘調査報告』1）1952年

27）小島俊次「各地域の縄文土器―近畿」（『日本考古学講座』3）河出書房 1956年

岡田茂弘「近畿」（『日本の考古学，縄文時代』）河出書房 1965年

末永雅雄・藤井祐介「近畿」（『新版考古学講座』3，先史文化）雄山閣 1969年

28）滋賀里Ⅰ・Ⅱは従来の滋賀里式，滋賀里Ⅱは丹治式の一部と橿原式の一部，滋賀里Ⅳは突帯文土器（橿原式の一部），滋賀里Ⅴは船橋式とそれぞれ対応する。

29）ⅢC区墓址とⅢC区開析谷出土の土器量はⅢD区貝塚出土のものの$\frac{1}{10}$以下であり，小破片が多い。接合作業をおこなっていないので貝塚地点の土器と同列には扱えなかった。

30）山内清男「縄文土器の技法」（『世界陶磁全集』1）1958年

31）註30に同じ。

32）外反する口縁部と体部との区別が，単に形態上のみならず製作手法上からも明確に意識されている土器を，深鉢と区別して甕とした。

33）これとは逆に，多くの砂粒を含む深鉢・甕類には意識的に砂粒が混ぜられたことも考えられ，その場合同じ現象が指摘されている弥生前期の土器との関連が注目される。

34）滋賀里Ⅰ～Ⅲの浅鉢・椀類は，黒く仕上げることに意味があったことが考えられる。

35）琵琶湖の河口付近に現在でも採集できるイボカワニナが，その原体と考えられる。

36）東海地方や瀬戸内地方でハイガイを使用した貝殻条痕と呼ぶものに似るが，A85のように彫りの深いそれらしきものは少なく，その影響を受けてイボカワニナのイボの欠損したものを使ったのではないかと思われる例があり，この調整の原体に関しては検討の余地が多い。

37）縄文式土器の検討で，削りの方向まで観察したものは少なく，静岡県天王山遺跡の報告例はその数少ない一つである。天王山遺跡出土土器の削り調整は滋賀里遺跡のものと全く逆方向で，口縁から底部の方向に削ると報告されており，同じ調整手法にみられる地域差であろうか。

和島誠一・市原寿文他『清水市天王山遺跡』清水市郷土研究会 1960年

38）この滋賀里Ⅴの繊維束状の原体による条痕は，削り調整の一種と理解したが，具体的には削り調整ともナデ調整ともつかぬものである。

39）潮見浩「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」（『広島大学文学部紀要』18号）1960年

40）坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』笠岡市教育委員会 1956年

41）註26に同じ。

42）口縁部の突起・突帯や口縁上端面の刻み目は，土器の観察表では文様欄に扱ったが，この数量操作では文様とはみなしていない。

43）東北・北陸系土器は除外している。東北系土器には搬入品と模倣品とがあり，後者の比率が時期の推移とともに低くなっているようであり，土着土器の無文化と軌を一にする。搬入品か模倣品かについて検討するために，東北大学大学院清水芳裕氏に胎土分析をおねがいした。

44）鎌木義昌・江坂進「岡山県御津町原遺跡」(『瀬戸内考古学』2）1958年

45）南方前池遺跡調査団「岡山県山陽町南方前池遺跡」(『私たちの考古学』7）1956年

46）櫛状の施文具を使用する例は，吉胡貝塚をはじめ尾張地方の晩期の古いところにある。

47）変形山形沈線文はA126，A127を典型とし，A373，A384，A387をさす。山形沈線文から山形反転沈線文への移行は，前者の数条からなる沈線が山形沈線と口縁あるいは肩稜部に平行な直線に分解反転したものか，あるいは上下2段に施した山形沈線の下段の単位をずらした結果によるものか断定できないが，明らかな点はその推移における構図の変化である。山形沈線文は，口縁部をめぐる沈線の集合にすぎないが，山形反転沈線文は上下2段の文様構成をとり，文様帯の出現ともいえる。

48）山形反転沈線文と橿原式文様との関係について観察されたことは以下の5項目である。

① 山形反転沈線文も橿原式文様もすでに完成された様相で滋賀里Ⅱに出現する。

② 滋賀里Ⅲで山形反転沈線文は姿を消すが，橿原式文様や変形山形沈線文は継続している。

③ 文様の構成要素を比較すると次のようになる。

山形反転沈線文：沈線，棒状刺突文

橿原式文様　　：沈線，刻み目，三角形くり込み

変形山形沈線文：沈線，棒状刺突文

④ 表現方法を比較すると次のようになる。

山形反転沈線文：陰刻文様帯

橿原式の文様　：陽刻文様帯

変形山形沈線文：陰刻文様帯

⑤ 施文される器形を比較すると次のようになる。

山形反転沈線文：浅鉢A_4，C_2，F_1

橿原式文様　　：浅鉢A_5，E_2，椀A_3

変形山形沈線文：浅鉢E_3，H_1，I，椀A_4

山形反転沈線文と橿原式文様の類似点を挙げると，出現時期，文様の要素である沈線，文様帯の3点となる。差異点は，消滅時期，沈線を除く文様要素，陰刻と陽刻による表現の違い，施文される器形である。

山形反転沈線文に，三角形のくり込み，刻み目，さらに文様帯の発展を加えることによって橿原式文様の出現をみたと仮定することもできるが，完成された文様として両者が滋賀里Ⅱに出現した事実はむしろその仮定を否定するものであろう。このことは器形との関係からもいえる。山形反転沈線文は，浅鉢C_2のように滋賀里Ⅰの伝統をもつ形態にも施文されるが，橿原

式文様はその主体が椀であり，浅鉢に施文される場合も，滋賀里Ⅱ以降の新しい要素である浅鉢Eに多い。また椀A_4のA124，A375のように，本来浅鉢に施文される山形沈線文や山形反転沈線文が，変形されて椀に施文されていることなど，山形反転沈線文から自生的に橿原式文様が出現したとは考えられないほど，器形と文様とに流動性が認められる。

49）滋賀里Ⅳの突帯上にみられる刻み目の各タイプの比率は以下のとおりである。

刻み目のないもの　9%

刻み目Bタイプ　76%

刻み目B′タイプ　13%

刻み目Cタイプ　2%

また，滋賀里ⅤではBタイプが主体をしめるが，Aタイプも認められる。（図版45—11）

50）滋賀里Ⅲ以降は計測しなかったが，確実に減少している。愛知県馬見塚F地点からは，滋賀里の浅鉢G_2，G_3，G_4と手法・形態とも全く同じ土器が出土しているが，馬見塚の例は火にかけて使用された痕跡が明瞭であると報告され，一方滋賀里ではススの付着があるものの火との関係は稀薄であり，大きな差異が存在する。澄田正一他『新編一宮市史　資料編1』1940年

51）手法の観察が可能な凹底の総数569のうち，凹面が未調整のものはわずかに2%にすぎない。

52）木椀AW14にも補修孔がある。

53）個体数は実測可能な破片までに限って算定しているが，その欠をおぎなう意味で，深鉢・甕類と浅鉢・鉢・椀類との総重量を出し，深鉢・甕類と浅鉢・鉢・椀類との平均的な重量比を4：1と仮定して個体数の比率算定を試みた。

滋賀里Ⅰは79%:21%，滋賀里Ⅱは78%:22%，滋賀里Ⅲは81%:19%，

滋賀里Ⅳ・Ⅴは79%:21%となった。

54）浅鉢のうち，滋賀里Ⅳ・Ⅴの特徴的器形である浅鉢Gのみを計算している。

55）坪井清足氏が滋賀里遺跡出土の土器で検討した数値71%:24%と，各時期ともほぼ同じ結果が得られた。

坪井清足「縄文文化論」（『日本歴史』1）岩波書店 1962年

56）高堀勝喜「金沢市近郊八日市新保並びに御経塚遺跡の調査」（『石川県押野村史』）1964年

57）註56に同じ。

58）小島俊彰他『富山県高岡市勝木原遺跡』1　県立高岡工芸高校地歴クラブ 1967年

59）滋賀里Ⅲ～Ⅴの東北・北陸系土器に関しては，同一層から出土したものであり，厳密には分期できないが，－30cmを境とした出土深度によって一応分期したものである。

60）東北系土器の取り扱いに関して，その一端を知る資料として，土器の体部上半部あるいは下半部を打ち欠いた形跡が認められる。A333は後者に属する。

61）小島俊次「吉野川流域の古文化について」（『奈良県綜合文化調査報告書　吉野川流域』）1954年

62）末永雅雄他『橿原』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』17）1961年

63）山口県岩田遺跡の土器の様相は，滋賀里Ⅱに最も近い。註39に同じ。

64）愛知県馬見塚遺跡の突帯文のつく甕はほとんど平底であり，滋賀里遺跡の丸底と様相が異っている。註50に同じ。

65）土器の検討にあたり静岡大学教授市原寿文氏と港北ニュータウン調査団の小宮恒雄氏から多くの教示を受けた。特に小宮氏との討議によって，本遺跡における晩期の土器の動向をつかむことができた。また，土器の観察表中に引用した遺跡の内，他でふれていない報告書を列記しておく。

河野通哉・喜谷美宣『日笠山貝塚』（『高砂市文化財調査報告書』３）1968年

田辺昭三編『船橋Ⅱ』平安学園考古学クラブ 1961年

杉原荘介・外山和夫「豊川下流域における縄文時代晩期の遺跡」（『考古学集刊』２巻３号）1964年

「鳴神貝塚発掘調査報告」（『和歌山県文化財学術調査報告書』第三冊）1968年

66）晩期以前の土器に関して，港北ニュータウン調査団の小宮恒雄氏から多大の教示を受けた。

67）体部にアバタ状の打痕を残しているものを称している。

68）註50に同じ。滋賀里遺跡のものは，図版56―５に示した。

69）ＡＳ218が最大と考えられる。現存長7.8cm，幅8.9cm，厚さ3.0cmで，重量220g，刃部付近が全体の$\frac{1}{2}$～$\frac{1}{3}$程残っている。

70）エス・アー・セミヨーノフ 『先史時代の技術』1964年。 論文の一部は田中琢氏が『考古学研究』56，1968年に訳文を発表。Ｍ・Ｗ・トムスン訳の英語版からは小山修三氏が『国学院大学考古学会先土器研究会・資料１』1969年などに邦訳，紹介されている。この文では使用痕，柄の着装法に関する記述は全て，この論文を前提としている。

71）小林行雄・佐原真『紫雲出』詫間町文化財保護委員会 1964年

石器に関する用語はこの『紫雲出』で佐原真氏が使った用語を用いている。

72）各種計測は完形品，形態分類には形の識別し得るものを全て使用している。計測には黒色砂混泥土層（表面～－30）166個，同（－40～－50）79個，灰褐色泥土層59個を使用した。他の層は計測可能なものが30個に満たない。

73）『橿原』の図版80の３，４，５に似ている。

74）竪田直『岸和田市春木八幡遺跡の研究』（『帝塚山大学考古学研究報告』第１輯）帝塚山大学考古学研究室 1965年。石鏃の抉りについて，幅との関係による分類をしているが，ここでは単純に平面形で分類した。

75）長さと幅の比は，Ⅳ・Ⅴ類の場合は茎を含めた長さである。数値の上で細長く感ずるのは，このことも一つの理由と考えられる。茎の部分の長さを含めない場合，Ⅳ類はⅡ類と大差ないが，Ⅴ類はⅡ類よりやや細長く，先端の角度はⅡ類より鋭い傾向を示す。

76）佐原真氏は『紫雲出』で，弥生時代の石器に残る階段状の剝離痕を階段状剝離と命名し，*Stepflaking* という英語の単語で表現している。*Stepflaking* については，M・バーキットが『old stone age』の中で定義しているが，それによれば剝片が階段状に剝離する原因に対する定義は佐原氏と同じであるが，バーキットは刃部を薄くするための二次加工としている点が異る。このような剝離痕の定義に対しK・P・オークリー（『先史時代の技術』国分直一訳 1971年）のように単に打撃を加える位置・角度によるとする見解もある。佐原氏は石器の調整を表現するのに「階段状の剝離を用いて」としているからこれを石器製作の技法と考えている事は疑いない。

しかし，石器の剝離痕が全て階段状になっている石器の例は今のところ発見されていないし，特定の場所にだけ残っているわけではなく，不規則に残るなどの点から，フリントの握斧の刃部を薄くするというような特殊な技法と同じであるとは考えられない。また佐原氏の定義によると階段状の剝離痕が生ずるのは打撃の方向が一方向に限定されるが，サヌカイトはこの一方向に限らず，打撃の角度が垂直（内側，外側という語で表現すると内と外との間）に近い場合でも生ずる。このような点から剝片を剝離した痕跡が階段状になるように意識して打撃を加える技法の存在は極めて疑わしい。従ってここでは石槌などで剝離，調整する際の打撃方向の不正確さによって偶然階段状の痕が石器に残るもので，これを特殊な技法とは考えていない。文中の階段状の剝離痕という語はこのような意味で用いている。

77）木村剛朗「実験よりみた敲石とその用途」（『考古学ジャーナル』No.74・75）1972年。石が磨滅するような作業を実験的に復元している。この実験の結論に賛同できる。

78）註74に同じ。

79）註62に同じ。図版48参照。

80）註26に同じ。

81）最も自然な姿勢で作業すると右上りの痕が生じる確率が高い。実験の条件により結果が多少異ると思われるが，左手では右上りの痕はつくりにくい。

82）註77の木村氏のような見解もある。

83）内反りの石刀が出土している。小林行雄・中村春寿・藤岡謙二郎「近江坂田郡春照村杉沢遺蹟」（『考古学』第9巻5号）1938年

84）石材の鑑定は，京都大学理学部助教授石田志朗氏におねがいした。

85）骨角器の材質鑑定は京都大学理学部教授亀井節夫氏におねがいした。また早稲田大学金子浩昌氏からは有益な教示を受けた。

86）第17表中に引用した遺跡の報告書を記しておく。『馬場川遺跡調査概報』東大阪市教育委員会 1969年。

87）I区内の近接地点からは弥生第1様式(中)の土器も発見されており，この滋賀里Vの生活址の存在は注目する必要がある。第2章参照。

第13表　ⅢC区墓址主要な遺構

土坑No.	種　類	土坑の規模(単位m)	人　骨	葬　法	特　記
1	土坑墓	1.3×0.6×0.15	頭蓋骨，骨片 骨に朱がついている。	N-20°-W	・現代の穴によって一部切られている。 上部削平されている。
26	土坑墓？	1.2×0.8×0.3			・土坑の覆土上面に獣骨片が散在するが，土坑にともなうものかどうか，不明である。 ・上部削平されている。
30	土坑墓	1.4×0.8×0.2	♂？	仰臥屈葬　N 下肢右	・32を切る ・上部削平されている。
36	土坑墓	2.2×1.5×0.1	A ♀？若年～壮年 B頭蓋骨，上腕骨 C成人	A横臥屈葬(左下)， N-40°-W B　N-40°-W？ C集骨か，骨が原位置にない。	・B→C→Aの順に切り合っている。各々の土坑のプランは正確につかめなかった。 ・上部削平され，南部は現代の溝で切られている。
41	土坑墓	0.5×0.4×0.15	骨片		・上部削平されている。
47	土坑墓	1.1×0.9×0.07	骨片		・上部削平され，土坑のプランは明確でない。南半部を現代の溝によって切られている。
48	土坑墓	0.7×0.5×0.04	頭蓋骨片		・上部削平されている。
50	土坑墓	0.9×0.5×0.3	指骨片		・上部削平されている。
51	土坑墓	0.7×0.6×0.4	骨片		・上部削平されている。
52	土坑墓	1.2×0.4×0.1	頭蓋骨，骨片		・上部はほとんど削平され，南半部は現代の溝で切られている。
59	土坑墓	1.2×0.9×0.4	骨片		・60，61を切っている。 ・上部削平されている。
60		0.5×0.5×0.2	骨片		・61を切り，59に切られている。 ・現代の溝によって南部は切られている。
64	土坑墓	1.3×0.7×0.1	♀？　成人	仰臥屈葬 N-30°-E 右手伸，左半分ヤラレ，下肢右	・上部削平されており，頭蓋骨の上半部はとばされている。
69	土坑墓	1.2×0.9×0.3	骨片		・上部削平されている。
81	土坑墓	0.6×0.4×0.15	頭蓋骨，骨	集骨葬 頭蓋骨を上に置き，下に一体分の他の骨をあつめているようである。完全に1体分の骨が集骨されているかは目下のところ明らかでない。	・79，80，82によって切られている。 ・骨中に，表面に朱を塗り，一孔をうがつ土製品がある。腰飾かとも思われるが，骨を分解していないで，詳細は不明。焼成品ではなくて粘土を漆で練り固めた可能性がある。
83	土坑墓	1.2×0.7×0.1	♂老年	仰臥屈葬 N-35°-W 右手肩，左手伸，下肢右	・84を切っている。 ・黒色泥砂層を切り込んだ土坑か。
84	土坑墓	1.3×0.6×0.06	骨片		・83に切られている。

土坑No.	種　類	土坑の規模(単位m)	人　骨	葬　法	特　記
91	土坑墓？	1.4×0.9×0.2			・88，90を切っている。 ・土坑の覆土上面に10cm大の角礫9個が土器片やイノシシの骨とともに発見されたが，土坑に伴うものかどうか明らかでない。
99	土坑墓？	1.1×0.6×0.1			・6世紀代の流路によってほとんど削られている。
101	土坑墓？	1.0×0.7×0.25			
102	土坑墓？	0.9×0.6×0.25			
104	土坑墓？	1.9×1.2×0.04			・103，105を切っている。
105	土坑墓	1.2×0.9×0.35	♂？　成人	横臥屈葬(左下)　N 左右手伸，下肢左	・103(滋賀里Ⅲの甕棺)・104によって切られ，更に6世紀代の流路と現代建築物の破壊を受けている。
106	土坑墓	1.8×0.85×0.15	♀　壮年 右Femur373	横臥屈葬(右下) N-88°-E	・埋葬形態が他と異なり，下肢の組み方が特異である。あぐらをかくような組み方と思われるが，正確な組み方はわからない。 ・頭部と足部とに，0.5×0.25の掘り込みがある。人骨の形態と考え合わせて，底板または棺を使用した可能性もある。
112	土坑墓？	1.0×0.6×0.2			・土坑の覆土上面に25cm大の花崗岩が3個発見されたが意識的に置かれたものか不明。
114	土坑墓？	0.9×0.5×0.4			
122	土坑墓	1.2×0.6×0.2	♂ 右脛骨327 (156.4cm)	仰臥屈葬　N-20°-E 右手肩，下肢後方	・頭部付近は現代の溝で切られ，土坑上部を現代建築物によって破壊されている。
123	土坑墓	1.0×0.6×0.1	頭蓋骨片，骨片	屈葬　N-25°-W	・現代の溝によって切られ，6世紀代の流路によって削られている。
124	土坑墓	1.0×0.8×？	下顎骨片		・6世紀代の流路によってほとんど削られている。
129	土坑墓	1.1×0.8×0.1	♀	仰臥屈葬　N-45°-E	・128を切り，127によって切られている。 ・上部削平されている。
138	土坑墓？	1.5×0.7×0.2			・185・139によって切られている。 上部の削平を激しく受けている。

土坑No.	種　類	土坑の規模(単位m)	人　骨	葬　法	特　記
141	土坑墓	1.3×0.8×0.4	♂？ 成人 左 Femur 407	横臥屈葬(右下) N-55°-E 腰椎前面にliking 下肢右	
142	土坑墓	1.3×0.9×0.2			・6世紀代の流路によって上部を削られている。
145	土坑墓	1.0×0.7×？	頭蓋骨片，骨片， 子供		・黒色泥砂層を切り込んだ土坑で，ベースの砂層に土坑底が達しておらず，土坑のプランははっきりとつかめていない。
146	土坑墓？	1.6×0.8×0.1			・145・159によって切られ，一部現代の穴によって破壊されている。
147	土坑墓	0.3×0.3×0.02	長骨片		・確認できたのは円形のピットであるが，黒色泥砂層を掘り込んでつくられた土坑と思われる。プランはつかめなかった。 ・149によって切られている。
149	土坑墓		長骨片，成年		・黒色泥砂層に掘り込まれたらしく，土坑のプランははっきりとつかめなかった。 ・147を切っている。
153	土坑墓	0.6×0.8×0.2	頭蓋骨片，骨片	N-35°-W？	・152，154によって切られており，155を切っている。土坑の大半は切り合いによって破壊されている。
154	土坑墓？	1.1×0.8×0.3			・153を切り，現代建築物の破壊を受けている。 ・角礫が土坑覆土中に入っている。
163	土坑墓	1.0×0.6×0.2	♀ 壮年 左 Humerus 263 (143.9cm) 歯の残りはよくないが，抜歯があるようだ。	仰臥屈葬 N-30°-W 右手肩，左手腹， 下肢右	・黒色泥砂層を切り込んだ土坑と思われるが，はっきりとつかめなかった。 ・人骨の残りがよい例で，樹脂で固めて取り上げた。 ・164に切られている。
164	土坑墓？	1.0×0.5×0.25			・現代の穴によって切られ，163を切っている。
165	土坑墓	1.0×0.4×0.5	骨片		・164，166によって切られ，現代の穴によって一部破壊されている。
166	土坑墓？	0.8×0.5×0.45			・165を切る。
167	土坑墓？	1.5×0.7×0.1			・168によって切られている。
173	土坑墓	1.0×0.6×0.2	♀ 壮年	横臥屈葬(右下) N-45°-E	・黒色泥砂層を切り込んだ土坑か。
177	土坑墓	1.3×0.8×0.2	♀ 成人	仰臥屈葬 N-35°-W 右手曲(直)，左手(鋭)	・土坑の中央を横切って現代の溝が走り，その付近の骨

土坑No.	種　類	土坑の規模(単位m)	人　骨	葬　法	特　記
				下肢右	は動いている。
184	土坑墓	1.3×0.8×0.2	♀ 壮年 歯の残りはよくないが，抜歯があるようだ。	横臥屈葬(左下) N-20°-W 右手腹，左手伸，下肢左	• 186を切っている。
190	土坑墓？	1.2×0.5×0.1			• 191によって切られている。
191	土坑墓	1.0×0.7×0.2	骨片		• 190を切る。
194	土坑墓	1.2×0.8×0.15	♀？ 成人	仰臥屈葬 N-60°-W 右手肩，左手腰，右下肢後方	• 193，196によって切られ，195を切っている。
195	土坑墓	1.0×0.5×0.1	♂ 小児 右 Femur 297 2大臼歯ははえかわっている。	仰臥屈葬 S-45°-W 左手腹，右手胸，下肢左	• 194によって切られ，南半部を現代の穴によって破壊されている。
206	土坑墓？	1.0×0.8×0.2			• 207との切り合い関係はつかめなかった。
207	土坑墓	1.5×0.9×0.25	♂？ 成人 抜歯はない。	仰臥屈葬 N-45°-W 右手顔，左手腹 右足膝が肘近く，左足立	• 208によって切られており，206との切り合い関係は不明 • 腰のあたりに，薄い小片であるが，朱塗りの土製品片がある。81の集骨中にあったものと同じく焼成品ではなく，粘土を漆で練り固めたもののようである。
214	土坑墓	1.0×0.6×0.35	♀ 壮年～熟年	横臥屈葬(右下) N-40°-E	• 213(滋賀里Vの甕棺)によって切られている。 • 頭蓋骨から5cmほど離れ，土坑の壁に接して，19cm×7cm大の角礫が，あたかも石枕のように入っていた。 • 人骨の残りのよい例で，樹脂で固めてとり上げた。
215	土坑墓	1.0×0.7×？	頭蓋骨～腰の骨，足の骨なし	仰臥屈葬？ N-40°-W？ 骨は移動している	• 黒色泥砂層を切り込んだ土坑らしく，はっきりとプランはつかめなかった。 • 6世紀代の流路によって削られており，人骨は原位置にない。
216	土坑墓	1.1×0.6×0.3	♂ 壮年 右 Humerus 315 (161.8cm)	仰臥屈葬 N-30°-E 両手上，顔面を斜め下に，下肢右	• 6世紀代の流路によって上部を削られている。 • 土坑の主軸と位置関係からみて，217と時間的に接近した埋葬か。
217	土坑墓	1.1×0.7×0.2	♀ 35才～45才 左 Humerus 290 (152.5cm)	横臥屈葬(左下)，仰臥屈葬に近い N-30°-E 左手上，右手伸，下肢左	• 6世紀代の流路によって南半部は削られている。 • 土坑の主軸からみて，216と接近した時期の埋葬か。 • 腰付近に獣骨片があり，装飾品の可能性もあるが明ら

土坑No.	種　類	土坑の規模(単位m)	人　骨	葬　法	特　記
					かでない。
219	土坑墓		♂	仰臥(?)屈葬　N？	・黒色泥砂層を切り込んだ土坑らしく，プランはつかめなかった。 ・6世紀代の流路によって削られている。
226	土坑墓	1.0×0.6×0.15	頭蓋骨片，骨片	N-15°-E？	・227(滋賀里Vの甕棺)によって切られている。 ・6世紀代の流路によって削られ，大半の骨は撹乱されている。
231	土坑墓	0.9×0.6×0.05	♀？	仰臥屈葬　E 右手曲，左手伸，下肢右	・230(滋賀里IIIの甕棺)を切っている。 ・東部は現代の穴の破壊を受けて頭蓋骨はない。
236	土坑墓	1.3×0.9×0.03	骨片	集骨葬 数個体の人骨が，3ブロックに集骨されている。	・黒色泥砂層を切り込んだ土坑らしく，プランははっきりとつかめていない。 ・235，240によって切られている。
237	土坑墓？	1.0×0.6×0.07			・現代の溝によって切られている。
238	土坑墓？	1.0×0.7×0.1			・現代の溝によって切られている。
244	土坑墓？	0.7×0.6×0.3			・245(滋賀里III～IVの甕棺)によって切られている。 ・調査区域外におよんでいる。
250	土坑墓	1.1×0.7×0.04	♀	仰臥屈葬 N-50°-E 右手胸，下肢左	・251によって切られている。
256	土坑墓	1.1×0.8×0.25	♀　老年？ 右 Femur 412 (153.0cm)	横臥屈葬(左下) N-60°-E 両手胸	・255(滋賀里IIIの甕棺)によって切られている。
257	土坑墓	0.8×0.6×0.1		横臥屈葬(左下)，N 右手腹，下肢右？	・258を切っている。
263	土坑墓	0.7×0.6×0.1	頭蓋骨と付近の骨 幼児骨 Femur 110		・南半を現代の穴で破壊され西部は調査地域外におよんでいる。
264	土坑墓？	1.3×0.7×0.2			・現代の穴によって一部切られている。
265	土坑墓？	0.7×0.7×0.1			
266	土坑墓？	0.7×0.4×0.3			
267	土坑墓？	0.7×0.5×0.15			
268	土坑墓？	1.1×1.0×0.4			・269(滋賀里IIIの甕棺)を切っている。
275	土坑墓？	1.3×0.6×0.5			・276を切っている。
281	土坑墓？	1.0×0.6×0.4			・280(滋賀里IIIの甕棺)を切っている。
289	土坑墓		骨片，移動している。		6世紀代の流路によって移動

土坑No.	種　類	土坑の規模(単位m)	人　骨	葬　法	特　記
					した土坑の一部と考えられる。
291	土坑墓	1.0×0.7×0.3		仰臥屈葬 N-80°-W	・290(滋賀里Ⅳの甕棺)の下にあり，292によって切られている。
270	土坑	0.6×0.55×0.6			・長さ35cm，幅15cmの細長い花崗岩の大石が，土坑中に垂直に立った状態で発見された。土坑の底面より約10cm浮いている。
273	石組遺構	0.7×0.7×0.1			・南半部を現代の溝で破壊されているが，わずかに掘り凹めた掘り方の周囲に約10cm大の石を組み，底面にはやや小さい石を敷いている。 ・底面に接して滋賀里Ⅲの甕が2個体分破片で出土した。(A189) ・火を使用した痕跡は全くない。
71	甕棺墓	0.6×0.5×0.3	骨片	・堀り方底面は甕棺の長軸にそって傾斜しており，滋賀里Ⅲの甕(A170)を斜方向に置いている。N-10°-E 開口。 ・甕と堀り方底面との間に1cmほどのすき間がある。	・6世紀代の流路によって上部を削られており，一部現代の溝の破壊を受けている。
93	甕棺墓	0.9×0.6×0.2	骨片	・堀り方底面は，甕棺の長軸にそって傾斜しており，滋賀里Ⅲの甕(A202)を斜方向に置いている。N-15°-W開口。	・6世紀代の流路によって上部を削られている。
98	甕棺墓	0.9×0.8×0.35	骨片	・堀り方底面は甕棺の長軸にそって傾斜している。滋賀里Ⅲの甕(A203)を斜方向に置いている。N開口。 ・甕と堀り方底面との間には4cmほどのすき間がある。	・現代の穴の破壊を一部受けている。

土坑No.	種　類	土坑の規模(単位m)	人　骨	葬　法	特　記
103	甕棺墓	1.0×0.7×0.25	頭蓋骨，上腕骨 乳児 洗骨しているか	・滋賀里Ⅲの甕（A191)の体部下半を打ち欠いて，掘り方内に垂直にすえている。	・6世紀代の流路によって上部は削られている。 ・105を切り，104によって切られている。
162	甕棺墓	0.5×0.5×0.1	骨片	・滋賀里Ⅲの甕を使用しているが，上部破壊され，底部のみ残っている。	・6世紀代の流路によって削られている。
171	甕棺墓	0.9×0.5×0.25	頭蓋骨，太腿骨 幼児？ 臼歯成長していない 洗骨しているか	・掘り方の底面は甕棺の長軸にそって凹凸をもちながらも傾斜している。滋賀里Ⅲの甕(A194)を斜方向にすえている。N-65°-W開口。	・南半部を現代の井戸によって破壊されている。
172	甕棺墓	0.6×0.6×0.25	頭蓋骨	・滋賀里Ⅲの甕（A174)を斜方向にすえている。 N-40°-E開口	・骨の残りが悪いが，洗骨の可能性がある。
174	甕棺墓			・滋賀里Ⅲの甕（A218)を使用しているが，大半は攪乱されている。	・6世紀代の流路によって削られており，掘り方の規模など不明の点が多い。
175	甕棺墓		頭蓋骨片？	・滋賀里Ⅲの甕（A197)を斜方向にすえている。 N-40°-E開口	・6世紀代の流路に削られて，掘り方の規模不明。 ・頭蓋骨片は甕からずれており，他に土坑墓があったのかもしれない。
180	甕棺墓	0.7×0.7×0.3	上腕骨，骨片	・掘り方の底面は，甕棺の長軸方向にそって傾斜している。滋賀里Ⅲの甕（A193)を水平に近い斜方向にすえている。S-20°-E開口 ・甕棺は掘り方底面より16cmも浮いている。	・一部現代の穴によって破壊されている。
181	甕棺墓	0.3×0.3×0.1		・甕は大半が破壊され，体部の破片のみ残っていた。体部には削り調整がみられる。	・現代の溝によって破壊され更に調査区域外におよんでいるので，掘り方は¼ほどしか確認できなかった。
200	甕棺墓	0.4×0.4×0.2		・甕の体部下半を打ち欠いて，垂直にすえている。口縁部は破壊されてい	・上半部は削平されている。

土坑No.	種　類	土坑の規模(単位m)	人　骨	葬　法	特　記
				る。体部には削り調整がみられる。	
213	甕棺墓	1.1×0.8×0.1	頭蓋骨片，骨片	・滋賀里Vの甕（A281)を斜方向にすえたものと思われるが，上半部の破壊が激しく正確にわからない。	・掘り方は不明確であるが、黒色泥砂層を切り込んでいると思われる。 ・214を切っている。
225	甕棺墓	0.5×0.3×0.15		・垂直に甕（A178）をすえていたらしいが，甕の上半部は破壊されている。（滋賀里II～III）	・224によって切られ，6世紀代の流路によって削られている。
227	甕棺墓	0.9×0.7×0.03	頭蓋骨片	・滋賀里Vの甕（A279)を斜方向にすえているが，上半部は破壊されている。 N-45°-E開口	・226を切っている。 ・6世紀代の流路によって削られており，掘り方をはっきりとつかめなかった。 ・掘り方は黒色泥砂層を切り込んだものか。
230	甕棺墓	0.8×0.6×0.2	頭蓋骨片	・滋賀里IIIの甕（A205)を斜方向にすえ，同じく滋賀里IIIの波状口縁の甕（A171）を割って大きな破片を利用して，口をおおっている。 N-40°-E開口	・231によって切られている。
232	甕棺墓	1.0×0.5×0.05		・滋賀里IVの甕（A291)を斜方向にすえたものと思われるが，上半部はかなり破壊されている。底部は打ち欠いているものか。 N-50°-E開口	・掘り方は不明確であるが，黒色泥砂層を切り込んでいると思われる。 ・234によって切られている。
245	甕棺墓	0.6×0.6×0.35	骨片	・滋賀里III～IVの甕の底部のみ残存し上部は破壊されている。	・掘り方は不明確であるが，黒色泥砂層を切り込んでいると思われる。 ・244を切っている。
249	甕棺墓	0.6×0.4×0.25		・滋賀里IIIの甕を垂直にすえていたものか。上半部は破壊されている。	
254	甕棺墓	0.8×0.6×0.2		・滋賀里IIIの甕（A177)の底部のみ残り，上半部は破壊されている。	・253を切っている。
255	甕棺墓	0.8×0.5×0.15	新生児	・大洞系の甕(A153)	・256を切っている。

土坑No.	種　類	土坑の規模(単位m)	人　骨	葬　法	特　記
				を斜方向にすえている。 S-10°-E開口滋賀里Ⅲの浅鉢(A233)を蓋としていたようであるが，調査では正確な状況をつかめていない。	
259	甕棺墓	0.7×0.6×0.2	骨片	・突帯のある滋賀里Ⅳの甕(A274)を斜方向にすえている。S開口。突帯のない甕(A292)を割って，大きな破片を利用して，口をおおっている。	・黒色泥砂層を切り込む掘り方と思われるが，下層の青灰色泥砂面でしか確認できなかった。 ・一部現代の穴によって攪乱されている。
269	甕棺墓	0.6×0.4×0.2		・滋賀里Ⅲの甕を斜方向にすえたものと思われるが，底部のみ残存し，上部は破壊されている。S-30°-E開口	・268と現代の溝とによって切られている。
280	甕棺墓	0.8×0.6×0.3	骨片	・滋賀里Ⅲの深鉢(A144)を斜方向にすえている。 N-15°-W開口	・281，279，278によって切られている。
290	甕棺墓	0.7×0.6×0.1	頭蓋骨片	・滋賀里Ⅳの甕(A267)を斜方向にすえている。S開口。深鉢(A300)を割った大きな破片で蓋をし，更に甕棺の底部上面を，滋賀里Ⅳの甕(A252)を割った大きな破片でおおっている。	・291の上につくられている。 ・一部現代の溝によって切られている。 ・黒色泥砂層を切り込む掘り方か。

※人骨の葬られる方向については，葬法の欄に，頭がおかれる方位を示した。
※この表に掲げなかった番号の土坑は縄文時代に属すものであるが，性格が不明のものである。

第14表　滋賀里遺跡出土の縄文晩期土器観察

滋賀里Ⅰ

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
深鉢 A_1	18	A 1 A 2 A11 A13	・体部に2つの段をもうけ，口縁は上段部よりいったん内傾し，端部は直立ぎみにつくる。 ・上段部には，稜をつくらず丸味を帯びるものと，屈曲が強くて稜をなすものとがある。 ・口縁端部は，丸味をおびつつ重厚なつくりである。 ・口径は32cm～38cmが主体で，24cm前後のやや小型のものもある。 ・凹底。	・基本的な調整は巻貝でおこなわれ，ナデ調整がからみ合っている。 ・口縁から体部の下段部までの外面は，水平方向の巻貝調整がおこなわれ，下段部以下は，漸移的に斜方向から垂直方向の調整となる。この巻貝調整のあと，口縁と上段部との間をナデ調整したものや，全面を丁寧にナデ調整して，巻貝条痕をほとんど消しているものなどもある。 ・内面は，ほぼ全面に水平方向の巻貝調整をおこなった後に，水平方向のナデ調整を局部的におこなっている。		・褐色～黒褐色。 ・焼成良好で堅緻。 ・砂粒を含む。 ・A1，A2の外面には吹きこぼれが付着し，体部下半部の内面に，帯状の有機物の付着が認められる。
深鉢 A_2	19	A 3 A 7 A12	・形態は深鉢A_1と全く同じだが，文様がある。 ・口径は31cm～36cmのものと，22cm～25cmのものとがある。 ・凹底。	・基本的な調整は深鉢A_1と同じである。　外面の巻貝調整の方向に関して，完形品がないので不明点が多いが，体部のかなり下半部まで水平方向の調整となっている。 ・深鉢A_1にくらべて，巻貝調整後のナデ調整が，より広く施されている。	・ヘラ状のものまたは巻貝で沈線文をつけている。 ・沈線文は口縁と上段部の間と，上段部と下段部の間とにつけられる。その種類は，A 3のような2本・2本の組み合せが3例，A 4のような3本・2本が2例，A 4の逆で2本・3本が2例，A 5のような2本・2本・2本のものや，A 7のような1本・3本の特殊例もある。基本的には2本単位と3本単位との構成があり，2本単位の構成がやや優越している。	・褐色～黒褐色。 ・焼成良好で堅緻。 ・砂粒・雲母片を含む。 ・A6，A7，A12の外面に吹きこぼれかススかが付着している。
深鉢 B_1	2	A 8	・体部には，調整によって丸味を帯びる2つの段があり，口縁部は内彎させておさめている。 ・口縁端部は丸味をおびつつ重厚なつくりである。器壁は厚い。 ・口径は37cm 。 ・凹底。	・外面は，口縁から下段部の間を水平方向の巻貝調整をほどこし，下段部以下は，漸移的に斜方向から垂直方向に巻貝調整をおこなう。下段部以下は更に水平方向のナデ調整をおこなっている。		・白褐色～灰褐色。 ・焼成良好で堅緻。 ・砂粒を含む。 ・小破片ではこの器型を区別

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
				・内面は丁寧な水平方向のナデ調整。		するのがむずかしく，個体数は多くなるかもしれない。 ・口縁から体部の外表に吹きこぼれかススかが付着している。
深鉢 B_2	7	A 9	・基本的形態は深鉢B_1に同じであるが，沈線文様で飾られている。 ・口径の計れる個体は少なく，19cmの小さい例しかわからないが，30cmを越える例もあると思われる。 ・凹底。	・基本的な調整は深鉢B_1に同じであるが，巻貝調整後のナデ調整がより広範囲におよんでいる。	・ヘラ状のものと巻貝頂部とによって沈線をひいている。巻貝利用のものは，7例中2例である。 ・基本的には深鉢A_2の文様と同じ傾向をしめす。A 9は全体のわかる唯一の例で，2本単位の沈線が4組ひかれている。口縁部の破片では，2本単位のものが3例，3本単位のものが3例ある。	・褐色～茶褐色。 ・砂粒を含む。 ・A 9の外面全面にわたり吹きこぼれかススかが付着し，内面にも所々有機物が付着している。
深鉢 C_1	4	A 10 A 408 A 563 ～ A 565 A 569	・波状口縁となる深鉢をCタイプとし，深鉢C_1は，その形態が深鉢Aと同じものである。波頂部を中心として，多種の文様で飾られている。 ・口径は18cm。 ・凹底。	・基本的な調整は深鉢A_1と同じであるが，文様で飾るため，ナデ調整がより広範囲におよんでいる。	・施文には，ヘラ状のものか巻貝による沈線文と，巻貝による刺突文の2種がある。 ・深鉢A_2や深鉢B_2の沈線文の最上部の単位が，波頂部にそって走る結果生じた空間を埋めるため，A 408のように巻貝を刺突したり，波頂部から垂直に沈線を下したりする。 ・沈線文には3本単位と2本単位とがある。	・灰褐色～黒褐色。 ・焼成良好 ・砂粒を含む。 ・A10，A 408はともに宮滝式の特徴をもっているが，滋賀里Ⅰにおける古い要素と考えている。 ・A 10の外面上半部に吹きこぼれかススかが付着し，内

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
						面の上半部にもびっしりと有機物が付着している。
深鉢 C_2	2	A410 A418	・破片のみで，全体の器形は明らかでないが，深鉢C_1の上段部と下段部との間のくびれの強い器形と考えられる。	・基本的には深鉢C_1と同じ調整であるが，A410は平滑なナデ調整の前に，巻具調整がおこなわれたかどうかわからない。	・ヘラ状のものによる3本単位の沈線が口縁にそってめぐり，波頂部には，A418では太く短かい垂直の棒状刺突文が，A410では半円弧文が対称的につけられている。	・黒褐色。 ・砂粒を含む。
深鉢 D	15	A14 〜 A16	・深鉢Aが体部に2つの段をもっていたのに対して，この類は1つの段しかないもので，口縁部の特徴は同様に，一たん内傾して端部は直立気味におさめている。 ・器壁は厚く，口縁端部は丸味をもった重厚なつくりで，この点も深鉢Aと共通の特徴をしめしている。 ・大小の2種類があり，口径27cm〜31cmの大形品は口径よりも器高が大きいが，口径21cm前後の小型品は器高の方が小さいようである。 ・凹底。	・口縁部外面はナデ調整。 ・体部外面は巻具によって調整しており，頸部付近は水平方向におこない，以下漸移的に斜方向から垂直方向に調整している。 ・底部付近は，巻具調整の後にあらい面取り風の仕上げをおこなっている。底部の凹部外面は粗面となっている。 ・内面は全面水平方向のナデ調整をおこなっている。ナデ調整の前に巻具調整をおこなったかどうかわからないほど，丁寧なナデ調整である。		・褐色〜黒褐色。 ・焼成良好で堅緻。 ・砂粒を含む。 ・A16の体部上半の外面に吹きこぼれが付着し，内面の底部よりやや上ったところに，帯状の有機物が付着している。
深鉢 E	4	A17	・口縁部と体部との接合部に段をもち，口縁部は深鉢Dにくらべて長く，直立している。 ・口縁端部は丸味をおびつつ重厚なつくりである。 ・口径22cm。	・口縁部外面は水平方向のナデ調整。 ・体部外面は巻具調整をおこなう。頸部付近は水平方向に，以下漸移的に斜方向から垂直方向に調整している。A17では，斜行部が左下から右上に走り，巻具調整の通例と異っている。 ・内面は水平方向のナデ調整。		・褐色〜黒褐色。 ・砂粒を含む。 ・A17の外面全面に吹きこぼれか，ススかが付着している。
深鉢 F	1	A18	・浅鉢形に近い体部に，長く大きく外反する口縁部をもつ。 ・口縁端部は丸味をおび	・外面は巻具調整されており，口縁部とその直下は水平方向に調整し，以下漸移的に斜方向か		・黒褐色。 ・焼成良好で堅緻。 ・砂粒含む。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
			重厚なつくりである。 ・口径は，20cmで，この類には大型品はない。	ら垂直方向におこなっている。 ・内面は，頸部付近に巻貝調整の痕跡が認められるが，全面にわたって水平方向のナデ調整をおこなっている。		・口縁部外面に吹きこぼれ付着し，内面には全面に有機物が付着する。
深鉢 G	57	A19〜A22	・体部と口縁部との区別の全くない器形で，口唇部はやや内彎気味におさめている。 ・口縁端部は，丸味をおびつつ重厚なつくりである。 ・口径は22cm〜24cmの小型のものと，30cmを越える大型のものとがある。	・外面の調整には2種類がある。1つは巻貝によって口縁付近を水平方向に調整し，以下漸移的に斜方向から垂直方向におこなうもので，そのあと軽い水平方向のナデ調整をおこなうものもある。他の1種は，巻貝調整をせずに，ナデまたは磨研によって平滑に仕上げるもので，A21のように粘土紐の継目が残るものもある。 ・内面はいづれも水平方向のナデ調整。 ・A21の粘土紐の幅は1cm強である。		・褐色〜黒褐色。 ・一般的に焼成良好で堅緻。 ・砂粒・雲母片を含む。 ・A19，A20，A22の外面には吹きこぼれかススかが全面に付着している。
深鉢 Z_1	2	A435 A436	・波状口縁をなし，波頂端部はやや内傾する。 ・底部不明。	・内外面磨き。体部外面はやや荒くなる。 ・A435は極めて丹念な磨きである。	・A435は口縁波頂部に，三叉文と沈線文との組み合わせによる七宝文に類する文様が施されている。口縁部には平行沈線文がめぐると推定される。 ・A436は口縁波頂部に縦・横の三叉文を施し，口縁部には，端部に平行する沈線によって囲まれた三叉連結文を施す。	・北陸系。 ・内外面にススが付着する。 ・石川県八日市新保遺跡に類例あり。
深鉢 Z_2	1	A439	・波状口縁をなし，波頂部も口縁部と同じく直立に近い。 ・底部不明。	・内外面磨き。特に体部の磨きは丹念である。	・口縁波頂部に横位三叉連結文を施し，その間に列点文を入れる。三叉文は2条の沈線によって囲まれる。	・北陸系。
浅鉢 A_1	8	A23	・口縁部は外反し，平縁である。 ・明確につくり出された肩部は稜をなし，その径は口径より小さい。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。		

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
			・丸底か。			
浅鉢 A_2	3	A29〜A31	・口縁部は短かく外反し、平縁である。 ・肩部のはり出しに強弱があり，特にA31は口縁部と体部との区分が明確でない。 ・丸底か。	・内外面磨き ・黒色磨研土器。	・口縁部外面に3本・5本単位の平行沈線文を施す。 ・A29，A30は内面に2本の平行沈線を施す。	・A29は内面に朱を塗っている。 ・A30は内外面に朱を塗っている。
浅鉢 B_1	2	A25	・口縁部は短かく外反し，口縁の四分点に突出部をつくる。端部は断面三角形を呈し，内面に削り出しの段を1段つくる。 ・体部には弱い肩部をつくる。 ・丸底か。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・口縁の突出部とその直下の肩稜部に，各々棒状刺突文を施す。	・A25にはススが付着する。
浅鉢 B_2	8	A24 A26	・浅鉢B_1と形態は似るが、口縁に突出部をもたない。 ・丸底か。 ・A26は肩部の稜をつくることなく体部に移行している。	・A24は内外面丹念な磨きであるが，口縁部と体部との接合部の内面に，削り痕を残す。黒色磨研土器。 ・A26は外面丹念な磨きであるが，内面は同様に磨くも，削り痕を残す。黒色磨研土器。		・ススの付着するものがある。 ・A26は内外面にススが付着する。
浅鉢 C_1	8	A27 A28 A558	・口縁部は外びらきに内彎し，波状口縁をなしている。 ・口縁部と体部とは，一周めぐる幅広いえぐりによって区別されている。 ・丸底か。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・波状口縁にそって，3本・5本単位の山形沈線文を施す。 ・A28の体部上半には1本の沈線がめぐる。 ・A588は無文であり，数量的(1例のみ)にも特異である。	・内外面にススの付着するものが多い。 ・山口県岩田遺跡に類例あり。
浅鉢 Z_1	1	A33	・口縁部は内傾する。 ・口縁部と体部とは稜をなして接合されている。 ・底部不明。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・口縁部に横位三叉連結文を施し，その上半部に3本の平行沈線文を，下半部に連続斜行沈線文を入れる。また三叉文間には縦位沈線を入れる。	・外面に朱を塗る。 ・ススが付着している。 ・北陸系。
鉢 A	1	A32	・口縁は直立気味におさめている。また口縁の内面に2つの段を削り出している。 ・底部不明。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・口縁外面に2本の平行沈線文を施す。	・外面に朱を塗る。 ・皿形に近い形態である。
鉢 Z_1	1		・幅広い口唇部をつくっている。	・内外面やや荒い磨き。	・口唇部に縦位細隆線を貼りつけ，その間に縄	・北陸系。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
			・底部不明。		文を施す。	
椀 A_1	8	A 34 A 35	・口縁は内彎しておさめられている。 ・体部中央はやや張り出し，急な角度で底部に移行する。 ・丸底。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。		・ススの付着するものが多い。
椀 A_2	9		・椀A_1と特徴は同じであるが，文様をもっている。	・椀A_1と同じ。	・口縁部に数本の平行沈線文を施す。	・朱を塗っているものが1例ある。
椀 Z_1	1	A 440	・口縁は内彎ぎみにおさめる。 ・平縁か。 ・底部不明。	・内外面磨き。	・体部上半に，平行沈線文と縦位の2列点文を施す。	・内外面にススが付着する。 ・北陸系。

滋賀里II

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
深鉢 A_1	91	A36〜A48	・体部に2つの段をもうけているが，滋賀里Iの深鉢A_1にくらべて，段部の稜を明確につくるものが多くなっている。 ・口縁部はより長くなる傾向をしめし，一たん内傾する度合いが減る。端部は直立気味におさめているが，A46のように外反するものもある。 ・口径は18cm ～ 39cmまでの各種のものがある。 ・凹底。	・巻貝による調整とナデ調整の組み合わせがみられる。 ・体部外表は巻貝によって口縁部付近は水平方向に調整し，以下漸移的に斜方向から垂直方向におこなっている。口縁部は水平方向のナデ調整をおこない，段部と段部の間をナデ調整するものや(A36, A44)，下段部まで全面ナデ調整するもの(A45, A47)があり，ナデ調整によって巻貝条痕を消している範囲が滋賀里Iより広くなる傾向が認められる。 ・内面は巻貝調整を水平方向におこなった後，水平方向のナデ調整をおこなっている。 ・A48の頸部接合部外面をヘラ状のもので強く一周ナデている。		・灰褐色～黒褐色。 ・一般的に焼成は良好だが，悪いものも混じる。 ・砂粒，雲母片含む。 ・A36の体部下半の外面，A44，A46の口縁部外面に吹きこぼれかススかが付着し，A44，A46の体部内面に有機物が付着する。 ・A42は滋賀里Iの特徴をもっている。
深鉢 A_2	26	A49〜A52 A416 A419 A560 A561 A566 A568	・深鉢A_1と同じ形態であるが，文様で飾られている。 ・深鉢A_1と同様に，口縁部はより長くなり，一たん内傾する度合いが減り，端部は直立かやや外反気味におさめている。 ・口径は17cmを最小とし，26cm～28cmのものと，38cmの大型品とがある。 ・凹底。	・巻貝調整とナデ調整の組み合せがみられ，深鉢A_1と同じ特徴をしめしている。	・巻貝かヘラ状のものによる沈線文と巻貝頂部刺突文とが組み合わさっている。 ・沈線文は，2本単位の構成が3本単位のものより圧倒的に優勢であり，26例中，3本単位が確認されたのは8例であり，口縁部片6例と，口縁部2本単位，くびれ部3本単位の1例と，その逆の組み合わせ1例のみである。 ・A50，A52では，沈線間に巻貝頂部による刺突文が配され，特にA50では，文様帯としての意識が強くはたらいている。	・褐色～黒褐色。 ・焼成良好で堅緻である。 ・砂粒，雲母片を含む。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
深鉢 B_1	6	A57	・体部に不明瞭ながらも2つの段をもち，口縁部は内彎している。滋賀里Ⅰ深鉢B_1との差異はない。 ・口径は22cm。 ・凹底。	・調整手法の上からも滋賀里Ⅰの深鉢B_1と全く同じであるが，A57のように全面をナデ調整したものもある。		・褐色～黒褐色。 ・砂粒，雲母片を含む。
深鉢 B_2	3	A56 A61	・形態は深鉢B_1に同じであるが，文様で飾られている。 ・口径は25cm。 ・A61は厳密には口縁の特徴を異にしているが，この類に入れておいた。	・調整手法も深鉢B_1と同じである。 ・A61は，内外とも平滑なナデ調整をおこなっている。	・ヘラ状のものによる平行沈線文で飾り，A56では恐らく4ヶ所に垂直の短線を入れて平行沈線文を切っている。 ・2本単位と3本単位の構成がある。	・黒褐色～灰褐色。 ・砂粒，雲母片を含む。
深鉢 C_1	7	A409 A412 A413 A417 A562 A567 A568 A570	・形態は深鉢Aと同じであるが，波状口縁をなし，各種の文様で飾られている。 ・凹底。	・調整手法も深鉢Aと同じである。	・ヘラ状のものか半截竹管で2本単位の沈線文をめぐらし，最上段の単位は波状部にそって走るため，結果として生じる空間をA412では，山形文で，A409では垂直の沈線文で埋めている。A409のように長い垂下文でなく，太く短い例もある。これらヘラ状のものによる沈線文だけで文様を構成するものは滋賀里Ⅰに含めるべきかもしれない。 ・これに対して，A413やA568のように，巻貝の底部刺突文や巻貝頂部刺突文の組み合わさるものや，半截竹管による沈線文などは，滋賀里Ⅱの特徴と考えられる。A567では突起がついている。	・黒褐色。 ・砂粒，雲母片を含む。
深鉢 C_3	4	A53 ～ A55	・形態は深鉢Aと同じであるが，波状口縁となっている。しかし文様のない点で，深鉢C_1と区別される。 ・口径は20cm前後のものと，29cmの大型品と	・調整手法は，巻貝調整を主とし，その手法は深鉢Aと全く同じである。 ・粘土紐の幅は1cm～1.5cmである。		・褐色～灰褐色。 ・砂粒，雲母片を含む。 ・A54の内面には有機物が付着している。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
			がある。 ・凹底。			
深鉢 C_4	4	A58 A60 A62 A411	・形態は，深鉢Bと同じであるが，波状口縁をなし，文様で飾られている。 ・口径は16cmと27cm。 ・A62はやや特異なくせのある土器であるが，この類に入れておく。小片で全体の形態はわからない。 ・A58は波状口縁と見るか，平縁に突起のついたものと見るか微妙なところである。このような波状口縁の退化現象は，滋賀里IIの特徴の1つであろう。	・調整手法は，深鉢Bと全く同じである。	・半截竹管やヘラ状のものによる沈線文と，巻貝頂部や棒状のものによる刺突文とがある。 ・A60は半截竹管による2本単位の沈線文に，巻貝頂部刺突文を組み合わせている。 ・A58は円棒状のものによる刺突文で飾っている。 ・A411は，巻貝頂部刺突文を波頂部に配し，波頂部間を2本単位の半截竹管による沈線の連続山形文で飾っている。	・黒褐色～褐色。 ・砂粒，雲母片を含む。 ・A60は焼成良好。 ・A62の外面に吹きこぼれかススかが付着している。 ・奈良県丹治遺跡に類例あり。
深鉢 C_5	3	A59	・形態は深鉢C_4と全く同じであるが，文様をもたない。 ・口径は32cm。 ・波状口縁としては，かなり退化している。	・調整手法は深鉢C_4と全く同じである。 ・A59は外面を全面にわたって平滑にナデ調整をおこなっている。		・灰褐色。 ・砂粒を含む。
深鉢D	39	A64 ～ A66	・口縁部と体部との接合部に段をつくるもので，滋賀里Iの深鉢Dにくらべて，口縁部の一たん内傾する度合いが減り，直立ないしは外反するものすらある。 ・口径が29cm～32cmの大型品と，22cm～24cmの小型品とがあり小型品は滋賀里Iの深鉢Dと同様に，口径に対して器高が小さく，浅い形態となっている。 ・凹底。	・調整手法は滋賀里Iの深鉢Dと全く同じである。 ・小型品の中で，全面を平滑にナデ調整しているものがある。		・褐色～黒褐色。 ・一般的に焼成良好で堅緻。 ・砂粒を含む。 ・A66の外面には吹きこぼれかススかが付着している。 ・A65は，単に形態上からいえば甕形への移行過程にあるものともいえる。
深鉢E	7	A63 A72 A416	・深鉢Dと基本的な形態は同じであるが，口縁部が長く，直立からやや外反気味におさめる。滋賀里Iの深鉢Eと差異はない。	・調整手法は滋賀里Iの深鉢Eと同じである。 ・A63は内外とも巻貝調整の後，軽いナデ調整を全面におこな	・A63は波状口縁ではないが，4ヶ所に巻貝頂部刺突文を配し，その間を巻貝頂部を利用して2本単位の沈線文で対称形に結	・黒褐色。 ・焼成良好。 ・砂粒を含む。 ・A63の外面には吹きこぼれかススかが付着して

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
			・A63とA416とは，口縁部に文様をもっている。 ・A72は形態においてやや異なるところがあるが，この類に入れておく。	っている。 ・A72は内外面とも全面平滑なナデ調整がおこなわれ，口縁部内面にヘラ状のものによる沈線が1本めぐっている。	んでいる。波状口縁と有機的に結びついていたこの文様構成が，器形から遊離して純粋な文様としてとり入れられている。 ・A72の外面は，ヘラ状のものによる1本単位と2本単位の沈線文で飾られている。	いる。
深鉢F	5	A67 A68	・形態は滋賀里Ⅰの深鉢Fと同じで，浅い体部に大きく外反する口縁部がつく。 ・A67のように退化した波状口縁となるものもある。 ・口径は15cm～18cmのものに限られるようだ。	・調整手法は滋賀里Ⅰの深鉢Fと同じである。 ・A68の口縁部外面は垂直方向にナデ調整している。		・茶褐色～灰褐色。 ・砂粒を含む。
深鉢G	58	A73 ～ A79	体部と口縁部との区別のない深鉢で，滋賀里Ⅰの深鉢Gと形態は全く同じである。 ・口径は21cm～35cmの各種のものがある。 ・凹底。 ・A79は屈曲部に稜をもつ特殊例であるが，この類に含めておく。	・巻貝を使う調整が主体であるが，わずか1例であるが削り調整が出現していることは見逃せない。 ・巻貝調整は滋賀里Ⅰの深鉢Gと全く同じであるが，斜方向に調整する部分が左下→右上方向で，通例と逆のものがかなり見受けられる。巻貝調整の後，軽くナデ調整するものもあり，また全面を平滑にナデ調整する例も相当な量がある。 ・削り調整は，基本的には巻貝調整と同じルールでおこなわれており，底部から口縁の方に向けて垂直方向に削りあげ，口縁部付近は時計廻りの水平方向に削っている。 ・A78は削り調整のあと，軽いナデ調整をおこなっている。		・灰褐色～黒褐色。 ・砂粒，雲母片を含む。 ・A74，A75，A77の内面には有機物が付着し，A79の口縁部外面に吹きこぼれかススかが付着している。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
深鉢 H	2	A95 A96	・深鉢Gの形態に，直立する短かい口縁部をつけたもの。 ・A95のように，4ヶ所に半円形の突起をもつものもある。 ・口径は30cm前後。	・内外面とも丁寧にナデ調整をおこなっている。ナデ調整の前に，体部外面を巻貝調整しているかどうか不明である。 ・口縁部内面にヘラ状のものを斜にあてて一周させ，段をつくっている。	・恐らく4ヶ所と思われるが，巻貝底部刺突文を配している。 ・A95の上段の刺突文は，巻貝によるものかどうかわからない。	・褐色。 ・砂粒，雲母片含む ・A96の外面には吹きこぼれかススかが付着している。
深鉢 Y_1	1	A550	・やや外反する波状口縁である。 ・体部，底部不明。	・口縁の内外面とも磨き。	・口縁に数条の平行沈線文を施し，波頂部には数条の縦位沈線文を配する。	・内外面にススが付着する。 ・北陸系。
深鉢 X_1	1	A446	・波状口縁の波頂部にやや内反する突出部をつくる。 ・体部，底部不明。	・口縁の内外面とも磨き。	・波頂部直下に，三叉連結文と凹点からなる魚眼文を施す。	・北陸系。
甕 A_1	3	A86	・外反する口縁部と体部とはなめらかに移行する。 ・口縁端部は，折り曲げるように直立させている。 ・口縁端部内面に，ヘラ状のものを斜めにあてて一周させ，段をつくっている。 ・口径は39cm。 ・口縁端部は重厚なつくりである。	・口縁部から体部にかけての外面を，巻貝によって削りに近かい痕跡を残して，時計廻りの水平方向に調整している。 巻貝調整のあと，ナデ調整しているものもある。 ・内面は水平方向のナデ調整。		・灰褐色。 ・焼成良好で堅緻。 ・砂粒を含む。 ・甕に分類したが，甕A_1と甕A_2とは深鉢との区別が明確でない。 ・山口県岩田遺跡に類例あり。
甕 A_2	8	A84 A571	・外反する口縁部はなめらかに体部に移行している。 ・口縁端部が肥厚している。 ・A84は退化した波状口縁である。明確に波状口縁となるものは5例ある。 ・口径は22cm。	・内外面とも平滑なナデ調整がおこなわれているが，口縁端部の肥厚部の外面を，巻貝によって水平方向に削り風に調整している。 ・A571の口縁外面は水平方向に巻貝調整されている。		・褐色～黒褐色。 ・砂粒，雲母片を含む。 ・山口県岩田遺跡に類例あり。
甕 B	3	A87	・器高の大きい深い体部から，折れ曲るように外反する口縁をもつ形態を甕類として分類したが，この甕Bは波状口縁となる甕である。	・口縁部外面は水平方向のナデ調整。 ・体部外面は，削り調整のあと，ナデ調整をおこなっている。 ・内面は水平方向のナデ調整をおこない，口縁部は特に丁寧に	・波頂部の両側の口縁上端面に刻み目を入れるものある。 ・波頂部外面に丸棒状の刺突文を配するものもある。	・灰褐色。 ・砂粒を含む。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
			・A87は定型化した甕になり切っていない形態をしめし，波頂部は直立させている。 ・口径は20cm。 ・凹底。	おこなっている。 ・底部凹面はナデ調整。		
甕 C_1	3	A89	・外反する口縁部に，ほとんど胴の張らない体部がつくもの。 ・体部の最大幅は，口縁部との接合部にあるといってよい。 ・口径は25cm。	・口縁部，体部外面は巻貝で水平方向に調整している。 ・体部外面を削っているものもある。 ・内面も巻貝調整のあと，ナデ調整。		・黒褐色。 ・内面に有機物付着する。
甕 C_2	2	A88	・形態は甕C_1に全く同じだが，調整手法が異っている。 ・A88はこの類でもやや特異のもので，口縁部と体部との区別が明確ではないが，一応この類に入れておく。 ・口径26cm。	・口縁部外面は水平方向のナデ調整。 ・体部外面は削り調整をおこなう。A88は下→上に垂直方向に削っているが，時計廻りの水平方向に削るものもある。 ・内面は水平方向のナデ調整。		・褐色。 ・砂粒，雲母片含む。
甕 D_1	8	A85 A91 A93 A94	・外反する口縁部に，肩部がやや張る長胴形の体部がつく。 ・口径は肩部最大幅よりも大きいか，ほぼ等しい。 ・口径は24cm～41cmである。 ・A85は重厚なつくりで，口縁内面に沈線をめぐらし特異であるが，この類に入れておく。	・口縁部外面をA91のように巻貝調整するものもあるが，多くの場合は二枚貝調整をおこなう。A94はその後に軽くナデ調整し，A85では平滑にナデ調整している。 ・体部外面には，A93のように巻貝調整やA85のように二枚貝調整も見られるが，A91，A94にみられる削り調整が量的には多い。削りの方向は，体部上半では時計廻りの水平方向で，下半では下→上の垂直方向である。 ・内面は外面の調整に対応して，A93では巻貝調整，A85では二枚貝調整の後にナデ調整する。これに対してA93，A94ではナデ調整だけおこ		・褐色～灰褐色。 ・砂粒，雲母片を含む。 ・A85は焼成良好で堅緻である。 ・A93には補修孔らしき孔が2孔ある。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
				なっている。 ・A93，A94の頸部接合部外面をヘラ状のもので一周強くナデている。		
甕 E_1	3	A92	・外反する口縁部に胴の張った体部がつく。 ・胴部の最大幅は口径よりも大きい。 ・口径は28cm。	・口縁部外面は二枚貝調整をおこない，後にナデ調整をして，貝殻条痕を消しているものもある。 ・体部外表は削り調整しているが，A92では，更にナデ調整をおこなっている。	・A92の口縁には，リボン形の突起が3個一組となってついている。これが何ヶ所につくものか不明であるが，4単位として復元しておいた。	・淡褐色。 ・砂粒を含む。
甕 E_3	2	A90 A572	・形態は甕E_1と全く同じである。 ・口径は21cm。	・内外面ともに磨研風のナデ調整をおこない，口縁部外面と内面は水平方向に，体部外面は垂直方向におこなっている。	・A572の口縁上端面には細かい刻み目がつけられている。	・淡褐色。 ・砂粒，雲母片を含む。 ・口縁部外面に吹きこぼれが付着している。
甕 J	3	A80 〜 A82	・口径が12cm〜13cmの小型の甕である。 ・口縁部のつくりは変化があり，A80は内彎気味に外にひらき，A81は外反し，A82は直立気味にのびている。	・内外面ともナデ調整によるものが多いが，A82は体部外面を下→上の垂直方向に削っている。 ・A81は手づくね的なあらいつくりである。		・灰褐色。 ・砂粒を含む。
甕 Z_1	1	A130	・外反する口縁部はなめらかに体部に移行する。 ・底部不明。	・内外面丹念な磨き。	・口縁にB突起を多数もつ。 ・体部上半の各々2本の沈線で画された文様帯に羊歯状文を施している。	・外面は黒色を呈する。 ・内外面にススが付着する。 ・焼成良好。 ・大洞BC併行。
甕 Z_2	1	A83	・やや内彎しつつ外に開く口縁部に，胴の張らない体部がつく。 ・口縁部と体部の接合部外面をヘラ状のもので強く一周ナデている。	・内面は平滑なナデ調整。 ・口縁部外面は水平方向のナデ調整をおこない，体部外面は結節縄文（LR）を施こしている。縄文を施した後に，部分的に軽くナデ調整している。	・口縁に山形突起（Dタイプ）が4ヶ所つく。	・外面にススが付着する。
浅鉢 A_1	9		・形態は滋賀里Ⅰ浅鉢A_1に同じ。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。		

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
浅鉢 A_3	35	A97 〜 A100 A573	・口縁部は大きく外反し，口縁端部は立ち上がっておさめられている。この立ち上がりには，垂直に近いものや，水平に近いものや，外面に沈線を入れるものなどの変化が認められる。 ・肩部は稜をなし，その径は口径よりも小さく，浅鉢A_1と比較してその比は大きい。 ・丸底か。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。		・口縁端部の立ち上がりの変化の量的関係は，水平に近いもの＞沈線をもつもの＞垂直に近いものの順になる。 ・A97は端部の立ち上がりが弱く，むしろ浅鉢A_1に近い。内面に1本の沈線をもち，外面にススの付着をみる。 ・山口県岩田遺跡，広島県中山貝塚に類例あり。
浅鉢 A_4	9	A101 A365 〜 A367 A577	・口縁部は大きく外反し，口縁の四分点に突出部をもつ。 ・口縁部内面には1〜2段の段を削り出している。 ・強弱の差はあるが，肩部は稜をなしている。 ・丸底。	・内外面磨き。 ・黒色磨研土器。	・口縁部の4つの突出部とその直下の肩稜部とに頂をもつ山形反転沈線文を施す。頂部には棒状刺突文を施している。	・ススの付着するものや，内外面に朱を塗る例が多い。
浅鉢 A_5	1	A102	・口縁部不明。 ・肩部はあまり明瞭ではない。 ・丸底か。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・体部上半に2条の刻み目を施し，その間に三角形のくり込み文や山形沈線文を入れる。	
浅鉢 B_2	17	A103 〜 A105 A574 A627	・形態は滋賀里Ⅰの浅鉢B_2と似るが，肩稜部が明確になり，ふくらみをもたずに底部に移行する。 ・丸底か。 ・A105は断面方形状を呈する口縁端部をもち，明確な肩稜部から直線的に底部に移行している。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。		・A103の内面に朱が塗られている。 ・ススが付着する例が多い。 ・A105は奈良県橿原遺跡に類例がある。
浅鉢 C_2	2	A364	・形態は滋賀里Ⅰの浅鉢C_1と同じだが，体部に肩部をつくり出していない。 ・丸底か。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・波状口縁にそう山形反転沈線文を施す。頂部には棒状刺突文を施す。	

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
浅鉢 C_3	1	A401	・形態は滋賀里Ⅰの浅鉢C_1に同じ。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・肩稜部に刻み目を施し，それと平行の刻み目帯を口縁部にめぐらしている。	・奈良県橿原遺跡に類例あり。 ・A423(滋賀里Ⅲ)もこの類に入る。
浅鉢 C_4	2	A374 A382	・形態は浅鉢C_2と似るが，平縁である。 ・丸底か。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・口縁部に平行沈線文を施し，その間に山形沈線文を配す。頂部には棒状刺突文か縦位の沈線文を施す。	
浅鉢 D_1	3	A106 A107 A575	・口縁部は短かく，やや外に開く。 ・口縁部内面に段を削り出している。 ・肩部径は口径と等しいかやや大きい。 ・底部不明。	・内外面丹念な磨き。A575の外面は雑な仕上げである。 ・黒色磨研土器。		・A107は内外面とも朱を塗り，外面にはススが付着している。
浅鉢 E_1	1	A108	・口縁部は外に開き，端部は内傾気味におさめ，その結果内面に段が生じている。 ・肩部は大きく張り出し，その径は口径をはるかに上まわっている。 ・丸底か。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・肩上半部の上限を1本の太い沈線で，下限を肩稜部の刻み目帯で画した空間に，3本と4本の沈線による2単位の条線文を施し，条線の結束部に棒状刺突文を配する。	
浅鉢 E_2	1	A110	・口縁部不明。 ・肩部の張り出しは浅鉢E_1より弱いが，基本的な差異はない。 ・丸底。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・頸部接合部と肩稜部とに刻み目帯を施し，その間に三角形のくり込み文を配している。	・奈良県橿原遺跡に類例がある。
浅鉢 E_3	1	A373	・口縁部不明。 ・肩部は張り出しが弱く，深い器形になるかもしれない。	・内外面やや荒い磨き。	・肩部に5本の平行沈線による直線的山形沈線文を施す。平行沈線は櫛歯状の原体による可能性がある。	・外面にススが付着している。
浅鉢 F_1	7	A111 A368 A370 A371 A376	・口縁部はわずかに外反するも直立に近い。 ・口縁内面に1～2の段を削り出している。 ・肩部径は口径とほぼ等しい。 ・丸底か。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・口縁部に山形反転沈線文，山形沈線文を施す。沈線頂部に棒状刺突文をもつものもある。	・A370は深い器形になるかもしれない。
浅鉢 F_2	9	A112 A380	・基本的な形態は浅鉢F_1と同じだが，口縁部のカーブに差異がある。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・口縁部に数条の平行沈線文を施す。A112では5本の平行沈線文となっている。	・A112の外面にススが付着する。
浅鉢 G_1	1	A405	・口縁部は直立し，平縁である。口縁端部内面を斜めに削って	・内外面丹念な磨き。	・口縁部に2条の刻み目を施し，その間に山形沈線文を配する。	

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
			・いる。 ・体部には肩部をつくり出していない。 ・底部不明。		・沈線のほりが浅く，文様は不明瞭である。	
浅鉢 H_1	1	A109	・口縁部は長く，外反するか？ ・明確な肩部をつくり出している。 ・丸底。	・外面はやや荒い磨き。 ・内面はナデ調整。	・口縁から肩部上半に文様があるらしく，肩稜部付近の2本の平行沈線を下限として，直線的山形沈線文を施している。	
浅鉢 H_2	3	A69〜A71	・口縁部は長く外反し，体部はごく浅い器形である。 ・肩部は稜をなしている。	・外面は平滑な水平方向のナデ調整。 ・内面もナデ調整が一般的であるが，A71では巻貝調整がおこなわれている。		・褐色〜淡褐色。 ・砂粒，雲母片を含む。
浅鉢 I	4	A385 A386 A388 A389	・口縁部，底部不明。 ・体部には肩部をつくり出すものと推定される。	・内外面磨き。しかし手法に一定性を欠く。	・文様の全体の構成は不明であるが，直線的連続山形沈線文，格子目文を施す。総じて沈線は直線的である。	・奈良県橿原遺跡に類例あり。
浅鉢 Z_1	2	A133 A443	・形態は滋賀里Ⅰの浅鉢Z_1と同じ。	・内外面磨き。	・A443は滋賀里Ⅰの浅鉢Z_1と同じ。 ・A133は滋賀里Ⅰの浅鉢Z_1と基本的に同じであるが，横位三叉連結文の下半部も，上半部と同様平行沈線を入れる。	・北陸系。 A133の外面に若干のスス付着がみられる。 ・A133は黄土色に近く，A443は茶色味を帯びた黒色。
浅鉢 Z_2	1	A444	・口縁端部は内反する。 ・底部不明。	・内外面ともナデ調整。 ・内面に粘土紐の継ぎ目が残る。粘土紐の幅は約2cm。	・口縁端部の太い沈線を上限として横位三叉連結文を施す。三叉文の上下部分に斜沈線を入れ，三叉間には三角形くり込みと竹管文1個を施す。	・北陸系。
鉢 B_1	6	A113〜A118	・口縁端部のおさめ方に変化がみられる。 ・丸底，平底。 ・A114は皿形に近い浅い器形であるが，ここに一括する。	・内外面とも極めて荒い磨き。		・褐色〜淡褐色。 ・砂粒を含む。
鉢 C	1	A372	・口縁端部がやや外反する。 ・底部不明。	・内外面丹念な磨き。	・5本からなる平行沈線文2単位が，口縁付近に施されている。 ・平行沈線文は櫛歯状の原体による可能性も	

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
					ある。	
鉢 Z_2	1	A448	・形態は滋賀里Ⅰの鉢Z_1と同じであるが，口唇部の文様構成が異っている。 ・底部不明。	・内外面ともやや荒い磨き。	・幅広い口唇部に縦位の細隆線を貼りつけ，これを起点として1本の太い沈線がめぐる。またこの間に縄文を施している。なお，滋賀里Ⅰの鉢Z_1は小片の為文様全体は不明であるが，この類に入るかもしれない。	・石川県八日市新保遺跡，同・御経塚遺跡に類例をみるが，三叉文の欠落に差異がある。 ・北陸系。
鉢 Z_3	1	A449	・形態は鉢Z_2と同じであるが，口唇部の文様構成が異る。 ・底部不明。	・内外面とも磨き。	・口唇部に横位の三叉連結文を刻み，三叉間に縦位の沈線を入れる。	・石川県八日市新保遺跡に類例をみる。 ・北陸系。
椀 A_1	22	A119 A576 A628	・滋賀里Ⅰの椀A_1と形態は似るが，やや深身となっている。 ・A576は口縁端部の内傾度が弱く深身である。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。 ・A576は極めて薄手の土器である。		
椀 A_2	10	A120	・形態は滋賀里Ⅰの椀A_2と同じである。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。 ・A120の内面はナデ調整している。	・口縁付近に平行沈線文をめぐらしている。A120は3本である。	・奈良県橿原遺跡に類例をみる。
椀 A_3	15	A121 〜 A123 A125 A392 〜 A394 A396 A397 A399 A400 A402 A407	・形態は滋賀里Ⅰの椀A_1と同じだが，文様をもっている。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・体部上半に，三角形くり込み，平行沈線，刻み目からなる七宝文を施す。いわゆる橿原式文様である。 ・A125は，三角形くり込みによる浮彫部分に縄文（ＬＲ）を施している。	・奈良県橿原遺跡に多くの類例をみるが，滋賀里ⅡかⅢかは決定できない。
椀 A_4	11	A124 A126 A127 A375 A369 A381 A383 A384 A387 A390 A391	・形態は滋賀里Ⅱの椀A_3と同じである。	・内外面磨き。磨きはやや荒いものが多い。 ・黒色磨研土器。	・体部上半の平行沈線で画された文様帯に，沈線上に頂点をもつ山形沈線文を配している。この場合，頂点に棒状刺突文あるいは縦位の沈線を施すものがある。 ・文様帯中に，直線的連続山形沈線を配すものもあり，この場合にも頂点に棒状刺突文を施している。 ・A387は巻貝を刺突	・奈良県橿原遺跡に類例あるが，滋賀里ⅡかⅢかは決定できない。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
					している。 ・A390格子目文である。	
椀 B	1	A128	・小型の椀であるが，底部が平底になるかあるいは脚付となる。	・内外面荒い磨き。		
椀 Z_2	2	A441 A445	・体部がやや張る器形。他は不明。	・内外面とも極めて良好な磨き。	・A441の体部には，縦位三叉文による磨消縄文を施す。 ・A445の体部には，横位三叉文による磨消縄文が施されていると推定される。	・器形が不明であり，文様も異るが，A442もこの類であろうか。 ・北陸系。
椀 Y	1	A437	・口縁端部は直立気味におさめられている。 ・底部不明。	・内外面とも磨き。	・磨消縄文（LR）。 ・三叉文の組み合わせが，魚眼状の文様を構成する。	・内外面にススが付着する。 ・大洞B併行。
椀 X	1	A132	・口縁部欠損のため椀形になると断定できない。 ・平底。	・内外面とも磨き。	・体部上半の平行沈線文で画された文様帯に，横位三叉連結文を施す。三叉連結文で区分された空間には平行沈線を入れ，三叉間には縦位の平行沈線を入れる。	・深鉢になるかもしれない。 ・北陸系。
注口土器 A	4	A129 A619 A621	・全体のわかる例はないが，A129では肩の張らない体部に注口部をつくっている。	・A129の外面は巻貝調整のあと荒くナデ調整され，内面はナデ調整されている。	・A129の頸部に2本の沈線がめぐる。	・褐色～灰褐色。 ・砂粒を含む。
注口土器 Z	1	A131	・口縁端部は欠損しているが，口縁部下半は内傾している。 ・体部はなで肩状に張り出している。 ・底部不明。	・外面は丹念な磨き。 ・内面はナデ調整をおこない，指圧痕が残る。	・口縁部下半から体部上半にかけて，楕円孤沈線文を組み合わせて施し，その交点にコブを貼りつける。	・福島県新地村小川貝塚に類例あり。 ・黒色。
壺 Z	1	A447	・口縁部不明であるが肩部の張る壺形と思われる。 ・底部不明。	・内外面ともに磨き。	・肩部上半に三叉連結文，凹点によって魚眼文を施す。	・外面赤褐色，内面黒色。 ・北陸系。

滋賀里III

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
深鉢 A_1	4	A134 A137	・滋賀里I以来の深鉢A_1の特徴である体部に2つの段をもうける形態で，形態的には滋賀里IIの深鉢A_1と同じである。 ・口径は18cm～23cm。 ・凹底。	・外面はナデ調整が主体をなすようであるが，A134では，体部の下段以下を左下→右上の斜方向に削っている。 ・内面もナデ調整が主体であるが，A134では巻貝調整を水平方向におこなっている。	・A137には半円形とも山形ともつかぬ突起が4ヶ所についている。波状口縁の退化したものとも考えられる。	・灰褐色。 ・砂粒を含む。 ・A134の外面には吹きこぼれかススかが付着している。
深鉢 A_2	1	A138	・深鉢A_1と形態は全く同じであるが，文様をもっている。 ・口径は36cm。 ・凹底。	・A138の外面は巻貝調整をおこない，更にナデ調整している。下段部以下は特に強くナデ調整している。 ・内面は水平方向のナデ調整をおこなっているが，口縁部には巻貝調整の痕跡が残っている。	・A138では口縁部と下段部の上方とに，半截竹管による2本単位の沈線文を2組ずつめぐらしている。	・灰褐色。 ・砂粒を含む。
深鉢 B_1	9	A135 A136	・体部に2つの段をもち，口縁が内彎気味におさめられている。体部の2つの段は退化してほとんどなくなってしまっているものもある。 ・A135は口縁が直立気味でやや異っているが，変種としてこの類に含めた。 ・口径は18cm～25cm。	・外面は全面をナデ調整したものが主体か。 ・A136は体部外面を水平方向に巻貝調整し，その後で全面軽いナデ調整をおこない，上段部と下段部の間を更に二枚貝調整している。体部下半はヘラ状ないしは巻貝頂部などによって，垂直方向にあらくナデられている。 ・A135は体部外面の下段部以下を時計廻りの水平方向に削っており，それより上部は水平方向のナデ調整がおこなわれている。 ・内面はいづれも水平方向のナデ調整である。		・褐色～灰褐色。 ・砂粒，雲母片を含む。
深鉢 C_1	1	A415	・滋賀里IIの深鉢C_1と特徴は同じ。 ・口縁部のみの破片である。	・口縁の内外面ともナデ調整。	・2つの段部には刻み目をつけ，上段部と口縁との間に2本単位の山形反転沈線文を施し，その頂部には丸棒状の刺突文を配し	・滋賀里IIになる可能性がある。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
					ている。上段部と下段部の間は平行沈線文を施している。	
深鉢D	1	A144	・口縁部と体部の接合部に段をもつ形態で，段部はかなり退化している。滋賀里Ⅰ～Ⅱの深鉢Dの系譜上にあるものと思われる。 ・口縁部はより長くなり外反し，端部のつくりは薄くなっている。 ・丸底。 ・口径は30cm。	・口縁部外面は，二枚貝調整をおこなった後にナデ調整をおこなっている。 ・体部外面は，下→上の垂直方向から斜方向に4段にわけて削り上げ，頸部付近は時計廻りの水平方向に削っている。 ・内面は二枚貝調整を水平方向におこなった後に，水平方向のナデ調整をおこなっている。	・頸部の接合部付近を半截竹管による爪形文で飾っている。 ・口縁上端面に刻み目をつけている。	・灰褐色。 ・砂粒を含む。 ・A144は280号甕棺として使用されていた。 ・岡山県原遺跡に類例あり。
深鉢E_1	8	A141 A142	・長い口縁部はわずかに外反している。 ・口径は30cm前後。	・基本的には巻貝調整とナデ調整との組み合わせで，A141の口縁部外面は意識したように整然と二枚貝調整している。A142は口縁部の内外面とも，ナデ調整の後に部分的に巻貝でナデている。 ・体部外面は，巻貝で水平方向に調整するものと，水平方向から斜方向に調整するものとがあり，全面をナデ調整するものもある。 ・内面は水平方向のナデ調整をおこなう。		・灰褐色～黒褐色。 ・砂粒を含む。 ・A141の体部内面に有機物が付着し，口縁部外面に吹きこぼれかススかが付着している。 ・A142は焼成良好で堅緻である。
深鉢E_2	4	A139 A140	・基本的な形態は深鉢E_1と同じであるが，小型品である。 ・口縁部のつくりは深鉢E_1とやや異なり，A139のようにわずかに外反するものや，A140のように口縁端部を外反させるものなど一定していない。 ・口径は19cm～22cm。	・巻貝調整とナデ調整との組み合わせである。 ・A140の外面は細かい条痕が走っているが，一応巻貝調整と考えておく。 ・A139では，口縁部の内外面とも水平方向にナデ調整し，体部は巻貝調整している。		・灰褐色～黒褐色。 ・砂粒，雲母片を含む。 ・A139の外面に吹きこぼれかススかが付着し，体部内面には有機物が付着する。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
深鉢F	1	A143	・口径14cmの小型品で，口縁部は外反する。 ・わずかに波状口縁の名残りをとどめるように突起状の波頂がある。	・口縁部外面は平滑なナデ調整をおこない，体部外面は削り調整で，下→上の垂直方向から斜方向に削り，頸部付近は時計廻りの水平方向に削っている。 ・内面は水平方向のナデ調整。	・波頂部直下に半截竹管による爪形文をつけた後に，頸部接合部を同様の爪形文で飾っている。 ・口縁上端面に細かい刻み目をつけている。	・褐色～黒褐色。 ・焼成良好。 ・砂粒を含む。 ・岡山県原遺跡に類例あり。
深鉢G	102	A146 ～ A152	・体部と口縁部との区別のない深鉢で，口縁は内彎しているのが一般的である。 ・口径は15cm～35cm。 ・底部は丸底。凹底のものが全くないとはいい切れず，巻貝調整のものは凹底となる可能性がある。	・外面調整に関して，102例中67例は精粗の差はあるがナデ調整で，あらい仕上げのものは粘土紐の継ぎ目を残している。また，この内には削り調整の後に，ナデ調整している例も含まれている。 ・削り調整は23例あり，一般的には下→上の垂直方向に削り上げて，口縁付近は時計廻りの水平方向に削っている。全て垂直方向に削る例もある。 ・巻貝調整は12例あるが，この時期にまで併存するものかどうか不明で，滋賀里IIに属する可能性がある。 ・粘土紐の幅は1cm～1.5cm。	・口縁上端面に，細かい刻み目またはA152のような押し引きによる菱形の刻み目あるいは長楕円形の刻み目がほどこされる例は，わずか8例しかない。 ・A151は口縁直下に，発達してはいないが突帯をもつ特殊例である。あるいは滋賀里Ⅳ～Ⅴに属するのかも知れないが，突帯の形状からみて，ここに分類した。	・褐色～灰褐色。 ・砂粒，雲母片を含む。
深鉢H	2	A145	・長い口縁部は，大きくゆるやかに内彎し，端部は直立している。 ・口径は26cm。	・A145の口縁部外面は，水平方向の巻貝調整のあとナデ調整をおこない，体部外面は二枚貝調整をおこなっている。 ・内面は水平方向のナデ調整。 ・他の1例は，口縁部の内外面とも平滑なナデ調整である。		・黒褐色。 ・砂粒を含む。 ・この深鉢Hは，滋賀里IIでは分類されていないが，それらしき破片はあるので継続しているとも考えられるし，これ自体が滋賀里IIに属するとも考えられる。 ・岡山県原遺跡に類例がある。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
深鉢 Y_2	1	A453	・やや外反する波状口縁である。 ・体部以下は不明。	内外面やや荒い磨き。	・波頂部に三叉文を施し，口縁部に1本の，頸部に2本の沈線をめぐらす。	・外面にススが付着する。 ・北陸系。
深鉢 X_2	1	A459	・二又状につくられた波状口縁の突出部である。 ・体部以下は不明。	・内外面磨き。	・波頂部外面には，縦位の三叉文によって2分される山形沈線文を施す。 ・波頂部内面には二又部を中心として，3ヶ所に各々2本の沈線による円孤文が施される。この内，波頂部のものは内側の沈線が波頂部上端面に施されている。	・内外面にススが付着する。 ・北陸系。
深鉢 W	1	A455	・波頂部が台形状の波状口縁である。		・波頂部外面に2条の刻み目帯で区画された文様帯があり，縦位の沈線で区画された長方形空間に綾杉状文を施し，波頂終了部を三叉文でうめている。	・A438もこの類に入るか。 ・北陸系。
甕 A_1	2	A158	・外反する口縁の端部を直立気味におさめており，滋賀里IIの甕A_1と同じである。 ・口縁端部内面にヘラ状のものをめぐらして段をつくっている。 ・口径27cm。	・外面は巻貝調整か二枚貝調整のあと，ナデ調整している。 ・内面は平滑なナデ調整。		・黒灰色。 ・砂粒を含む。 ・滋賀里IIに属するのかもしれない。
甕 A_2	3	A156 A157	・長くて外反する口縁の端部が肥厚している。滋賀里IIの甕A_2と同じである。 ・口径は27cm～35cm。	・外面は水平方向に巻貝調整をおこない，A157ではその上をナデ調整している。また口縁の肥厚部だけを丁寧にナデ調整している例もある。 ・内面は水平方向のナデ調整が基本で，A157のように口縁の肥厚部に巻貝調整をおこなった後に，ナデ調整している例もある。		・茶褐色～黒褐色。 ・砂粒を含む。 ・滋賀里IIに属するのかもしれない。 ・山口県岩田遺跡に類例あり。
甕 B_1	7	A167 ～ A169	・波状口縁をもつ甕をBタイプとし，甕B_1は調整手法上，二枚	・口縁部外面は二枚目調整か巻貝調整をおこない，その上をナ	・波頂部をA169のように半截竹管による爪形文によって飾る	・褐色～黒褐色。 ・砂粒を含む。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
			貝調整や巻貝調整のみられるものである。 ・A167は口縁部と体部との境界が明確ではない。 ・口径は31cm～36cm。	デ調整する例もある。 ・体部外面は削り調整する例と，削ったのちナデ調整する例とがある。 ・内面は水平方向にナデ調整している。	例がある。A169はまた口縁上端面に細かい刻み目を入れているが，他の爪形文をもつ例では，波頂部中央を刺突して凹ませているだけである。 ・口縁部上端面に刻み目のある例は1例のみである。	・岡山県原遺跡に類例あり。
甕 B2	40	A170 ～ A176	・形態は甕B1と全く同じであるが，調整手法において，巻貝調整や二枚貝調整のないもの。 ・口径は22cm～38cmまで各種ある。 ・凹底。 ・波頂部の頂中央を軽くおして少し凹ませた例が1例ある。	・口縁部外面は水平にナデ調整し，体部外面は下→上の垂直方向から斜方向に削り上げ，頸部付近は時計廻りの水平方向に削る。これが削り調整の一般的方式である。削り痕の当り幅は1cm前後である。 ・A172やA175のように削り調整の後にナデ調整を加える例もある。 ・内面は全て水平のナデ調整をおこなう。 ・底部凹面は，A170，A174ではあらいナデ調整のみである。 ・A170，A174，A175の頸部接合部外面を，ヘラ状のもので一周強くナデている。 ・粘土紐の幅は1cm～1.5cm。	・A175のように波頂部に棒状の原体で刺突文を配する例が2例あり，他の1例は縦列に4個配している。 口縁上端面に細かい刻み目のある例は14例あり，A171のような刻み目は9例をしめ，A172のように断続的に刻む例もある。A170のような押し引きによる菱形の刻み目は3例，長楕円形の刻み目は2例ある。	・褐色～灰褐色。 ・砂粒，雲母片を含む。 ・内面に有機物が付着し，外面に吹きこぼれかススかが付着するものも多い。 ・A170は71号襲棺に，A171は，230号襲棺に，A174は172号襲棺に，A177は254号襲棺に，A178は225号襲棺に使用されていた。
甕 C1	8	A179 ～ A182	・平縁の甕で，外反する口縁部に，その最大幅が頸部接合部にあるような体部がつく。 ・調整手法に巻貝や二枚貝調整のあるもの。 ・口径は30cm～40cm。	・この類の一般的な手法は，口縁部外面を二枚貝調整し，体部外面は下→上の垂直～斜方向に削り上げ，頸部付近は時計廻りの水平方向に削っている。口縁部は二枚貝調整の後にナデ調整を加えるものもある。 ・A179は口縁部外面を水平にナデ調整し，体部外面を水平方向	・A182は口縁上端面に幅広い刻み目があり，3つの連続した半円形突起がつく。突起が何ヶ所につくものか不明。	・灰褐色～褐色。 ・砂粒，雲母片を含む。 ・A181の外面には吹きこぼれかススかが付着し，内面には有機物が付着する。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
				に巻貝調整した後にナデ調整を加えている。 ・内面は全て水平のナデ調整。		
甕 C_2	5	A183 〜 A185	・形態は甕C_1と全く同じである。 ・調整手法上，巻貝や二枚貝調整がなく，削りとナデとで調整をおこなっている。 ・口径は28cm〜32cm。 ・A184は口縁部の意識が弱く例外的であるが，この類に入れておく。	・口縁部外面は水平ナデ調整し，体部外面は下→上の垂直〜斜方向に削り上げ，頸部付近は時計廻りの水平方向に削る。A183のように水平方向の削りがない例もある。 ・A184は特殊例で，体部・口縁部の区別なしに削り上げている。 ・内面は精・粗の差はあるが全て水平ナデ調整。 ・粘土紐の幅は1cm〜1.5cm。		・褐色〜黒褐色。 ・砂粒，雲母片を含む。 ・山口県岩田遺跡に類例あり。
甕 D_1	8	A186 A191	・外反する口縁部に，やや肩部の張る長胴形の体部がつく。 ・口径は肩部の最大幅よりも大きいのが一般である。 ・調整手法上，巻貝や二枚貝調整のあるもの。 ・口径は34cm〜39cm。	・口縁部外面は巻貝調整か二枚貝調整をおこない，その後に水平ナデ調整をしている例もある。 ・体部外面は削り調整がおこなわれ，一般に下→上に削り上げているが，A191は時計廻りの水平方向に削っている。A191では更に，二枚貝調整を体部下半部におこなっている。 ・内面は平滑な水平ナデ調整。 ・A186の体部の削り調整には巻貝が使われた可能性がある。 ・頸部接合部外面をヘラ状のもので一周強くナデた例もある。	・台形の突起がつくと思われる破片が2例ある。	・褐色〜黒褐色。 ・砂粒を含む。 ・A191は103号甕棺として使用されていた。 ・A191は限界に近いほど薄手のつくりで，縄文式土器の中でも最高の調整技術を発揮した優品である。 ・兵庫県日笠山貝塚に類例あり。
甕 D_2	50	A187 〜 A190 A192	・形態は甕D_1と全く同じであり，調整手法上，巻貝調整や二枚貝調整のないものであ	・口縁部外面は水平方向のナデ調整。 ・体部の調整には，33例の削り調整によるもの	・口縁上端面に刻み目をもつものは23例あり，10例は細かい刻み目で，7例はA192	・褐色〜灰褐色。 ・砂粒，雲母片を含む。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
甕 D₂	50	A187 〜 A190 A192	る。 ・口径は27cm〜34cm。	と17例のナデ調整によるものとがある。削りは一般的には下→上に削り上げ，頸部付近は時計廻りの水平方向に削る。A187はこれと全く逆の特殊例で，上→下に削り，頸部付近は逆時計方向に削っている。削り調整のあと，ナデ調整を加えているものもある。 ・削りにも2種類あり，粘土紐の継ぎ目を消さないほどに軽く削るA189などは，ナデ調整との区別が微妙である。 ・体部外面をナデ調整するものは，多くは粘土紐の継ぎ目を残す程度の軽いもので，A192は皮状のものでナデ調整したものではないかと思われる特殊例である。 ・内面は全て水平ナデ調整である。 ・粘土紐の幅は1cm〜1.5cm。 ・頸部接合部をヘラ状のもので強くナデている例が3例ある。	のような押し引きによる菱形の刻み目，6例はA190のよる長楕円形の刻み目である。 ・突起のつく例は2例あり，半円形突起の中央を凹ませたものと台形突起とであり，それぞれ何ヵ所につくものかわからない。	・A189はIII C墓址の石組遺構内（273号）出土の土器である。 ・A188の外面には吹きこぼれかススかが付着している。
甕 E₁	42	A202	・「く」字形に外反する口縁部に胴の張る体部がつく。 ・調整手法の上で，巻貝調整や二枚貝調整のあるもの。 ・口径は31cm〜35cm。 ・凹底。	・口縁部外面に巻貝調整か二枚貝調整をおこない，多くの場合その上をナデ調整するので条痕はほとんど消えてしまう。 ・体部外面は削り調整によるものとナデ調整によるものとがある。ほとんどが削っており，下→上に削り上げて頸部近くは時計廻りの水平方向に削っている。削った後をナデ調整する	・口縁上端面に細かい刻み目をもつものが2例あり，台形突起のつくものも2例ある。この突起が何ヶ所につくかは不明。	・褐色。 ・砂粒，雲母片を含む。 ・A202の体部内面に帯状に有機物が付着している。 ・A202は93号甕棺として使用されていた。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
				ものもある。 ・内面は水平ナデ調整が基本であり，A202の口縁部から肩部にかけて巻貝調整がみられる。 ・A202の底部凹面はナデ調整されている。		
甕 E_2	270	A193 〜 A201 A203 〜 A205	・形態は甕E_1と全く同じで，調整手法の上で巻貝調整や二枚貝調整のないもの。 ・口径は17cm〜35cm。 ・A194，A199，A203では凹底で，A193は平底である。 ・A197の口縁部は他とくらべて薄いつくりで，端部などのつくりも他と異っており，滋賀里Ⅳ〜Ⅴに下がる可能性もある。	・口縁部外面は全て水平ナデ調整がおこなわれるが，体部外面の調整には，削りによるものが187例と，ナデによるもの69例とがある。削り調整の方式は，下→上に削り上げて頸部付近は時計廻りの水平方向に削るのが一般的であるが，A198のように全面時計廻りの水平方向に削るものもある。 またA197，A199，A200のように，削った後に部分的あるいは全面をナデ調整するものもある。 ・全面をナデ調整で仕上げるものは，多くの場合粘土紐の継ぎ目を残している。 ・A205の頸部接合部をヘラ状のもので一周強くナデている。 ・A199，A203の底部凹面はナデ調整しているだけだが，A194では，磨研した跡が周囲に残り，中央は使用痕なのかアバタ状となっている。 ・底部のつくりがよくわかるのはA194で，円盤状の底に粘土紐を積み上げている。 ・粘土紐の幅は1cm〜1.5cm。	・口縁上端面に刻み目を入れる例は全部で84例あり，A203のような細かい刻み目は23例，A199やA200のような押し引きによる菱形の刻み目は36例，A204のような同じく押し引きによる長楕円形の刻み目は25例である。A201は小突起の連続したようなもので特殊である。 ・突起のつく例は7例あり，半円形の突起が1例，A194のような台形の突起が2例，A205のような台形突起の中央を凹ませたもの3例，A195のようなもの1例である。 ・A205は完形品であり，明らかに突起は1ヶ所にしかつかない。またA194は½円周片であり，2ヶ所に突起のつく可能性はあってもそれ以上にはつかない。	・褐色〜灰褐色。 ・砂粒，雲母片を含む。 ・A194，A198，A203の体部内面には有機物が帯状に付着している。 ・A193は180号甕棺，A194は171号甕棺，A197は175号甕棺，A203は98号甕棺，A205は230号甕棺として使用されていた。 ・A196は薄手の作りで焼成も良く，優品である。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
甕 F_1	14	A206 〜 A210 A581	・口縁部は外反し，胴の張った体部とはなめらかな曲線を描いて接続する。 ・調整手法の上で，巻貝調整や二枚貝調整のみられるもの。 ・A206は，焼き方や口縁部内面に沈線のあることなど他と異った特徴をしめしているが，ここに分類しておく。 ・口径は20cm〜39cm。	・口縁部外面は巻貝か二枚貝調整をおこない，A207，A209のように更にその上からナデ調整を加えているものもある。 ・体部外面は7例が削り調整，7例がナデ調整によって仕上げられている。削りは下→上に削り上げられている。A207は体部下半にのみ削り調整を加えているが，軽い削りであってナデ調整とあまりかわりがないくらいである。 ・ナデ調整のものはA209，A210のように平滑な仕上げもあるが，多くは粘土紐の継ぎ目を残す程度の仕上げである。 ・内面は全て水平ナデ調整。 ・粘土紐の幅は1cm〜1.5cm。	・口縁部上端面に刻み目をもつ例は7例あり，A210のような細かい刻み目は1例，他は全て押し引きによる菱形の刻み目である。 ・突起，文様をもつものはA208 1例である。台形突起に2つの凹みを与えた3頂突起で，突起下に丸棒状のもので刺突した円文が垂直にならんでいる。恐らく4単位の文様，突起の構成であろう。	・褐色〜灰褐色。 ・砂粒，雲母片を含む。 ・A206，A209の外面にはススか有機物かの付着がある。 ・岡山県黒土遺跡に類例あり。
甕 F_2	150	A211 〜 A214 A578	・形態は甕F_1と全く同じであるが，調整手法の上で巻貝や二枚貝調整のないもの。 ・口径は20cm〜37cm。	・口縁部外面は水平ナデ調整をおこない，体部外面には甕F_1と同様に削りとナデとの調整がある。削り例は95例，ナデ例は55例あり，甕Fは他の甕にくらべてナデ調整のものが多い。 ・体部外面の削りは，一般には下→上に削り上げ頸部付近を時計廻りの水平方向に削るが，A212のように水平方向だけに削るものもあり，しかもこの場合逆時計廻りに削っている。	・A213は半截竹管の押し引きによる連続した爪形文で口縁部を飾っている。垂直に施文しているところは本来波頂部となるのだが，本例は心もちわずかに盛りあがるかという程度で，波頂部は退化してしまっている。A578には波頂部が認められる。 ・口縁上端面を刻むものは45例あり，A213のような細かい刻み目は6例，押しびきによる菱形の刻み目は28例，長楕円形の刻み目は11例である。	・褐色〜灰褐色。 ・砂粒，雲母片を含む。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
					・口縁に突起のつく例が4例あり，半円形山形突起の中央を凹ませた突起が3例，台状突起が1例である。	
甕 G_1	2	A215 A216	・甕Gは，甕Fと同じように口縁部と体部とはなめらかに接続するが，口縁部は直立気味にわずかに外に開く。体部はやや肩の張るものもあるが，多くはなで肩である。 ・甕G_1は，調整手法上巻貝や二枚貝調整のみられるもの。 ・口径は19cmと29cm。	・口縁部外面は巻貝調整か二枚貝調整をおこない，A216のようにその上をナデ調整するものもある。 ・体部外面は，A215では下→上に削り上げており，A216では軽いナデ調整をおこない粘土紐の継ぎ目を残している。 ・内面はいずれも水平ナデ調整をおこなう。	・口縁上端面には，A215では菱形の，A216では長楕円形の，それぞれ押しびきによる刻み目が加えられている。 ・A216には台形突起の上面に2つの凹みをつけた3頂突起がついているが，何ヶ所につくものか不明。	・褐色～灰褐色。 ・砂粒を含む。 ・A215の体部内面に有機物が付着している。
甕 G_2	14	A217 ～ A223 A579 A580	・形態は甕G_1と全く同じだが，調整手法上，巻貝や二枚貝調整のないもの。 ・口径は22cm～35cm。	・口縁部外面は水平方向のナデ調整。 ・体部外面は削り調整によるものとナデ調整によるものとがあり，どちらも7例ある。 ・削りは下→上へ削り上げ，頸部付近は時計廻りの水平方向に削るものが一般的であるが，A219のように逆時計廻りの水平方向に削る特殊なものもある。削り調整の後にナデ調整を加える例もある。 ・内面は全て水平ナデ調整。 ・粘土紐の幅は1cm～2cm。	・口縁上端面に刻み目を入れるものはA222の1例で，押し引きによる菱形の刻み目である。 ・口縁に突起をつける例は5例あり，A218のような台形の突起が2例，A219，A221，A223のように台形突起の中央を凹ませたものが3例ある。 ・A580の頸部に，コブ状の貼りつけがある。	・褐色～灰褐色。 ・砂粒を含む。 ・A218は174号甕棺として使用されていた。 ・A219の頸部に，外面と内面の両側より穿孔しているが，位置がずれて貫通していない。補修孔の失敗か。
甕 H	2	A159 A160	・形態からは甕Eに近く，外反する口縁部に胴の張る体部が屈折するようにつく。しかしながら口縁部は短かく，体部も幅広く丈の短かい器形となっている。	・A159の外面は丁寧な磨研風のナデ調整。内面は，体部に巻貝又は二枚貝調整をおこなった後に丁寧にナデ調整している。 ・A160は，体部外面を時計廻りの水平方		・白褐色～灰褐色。 ・砂粒を含む。 ・A159，A160ともに外面に吹きこぼれかススかが付着している。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
			・口径は24cmと27cm。	向に削り調整し，口縁部外面と内面の全てはナデ調整している。		
甕I	1	A224	・小破片であるが短かく外反する口縁をもち，口縁の内面に沈線をめぐらしている。 ・口径は20cm。	・内外面ともに水平ナデ調整。		・灰褐色。 ・砂粒を含む。
甕J	4	A161 〜 A164	・各形態の小型の甕。 ・口径は11cm〜18cm。 ・A161は丸底となるようであり，A162，A163はわずかに凹んだ凹底であろう。	・口縁部外面はナデ調整。 ・体部外面は，A161，A162では下→上に削り上げており，A163，A164は全面を平滑にナデ調整している。 ・内面は全て水平ナデ調整。	・A164は口縁上端面に細かい刻み目を入れている。 ・A162はリボン形の突起を1ヶ所だけにつけている。	・褐色〜黒褐色。 ・砂粒，雲母片を含む。
甕Z_3	1	A153	・口縁部は短かく外に開き，最大幅が口縁部との接合部にある体部がつく。 ・底部は平底に近いが中央部がわずかに凹んでいる。	・口縁部外面と全ての内面は磨き。 ・体部外面は結節縄文（LR）を施した後に，結節部を中心にナデ調整を加えている。 ・底部付近は，縄文を施した後に，ヘラ状のもので水平方向と垂直方向とに磨いている。	・口縁部外面に文様帯がある。陽刻による羊歯状文を端部に施し，その下に簡略化された羊歯状文と平行線文を陽刻であらわす。	・この土器はIIIC墓址の255号甕棺として使用されていた。 ・大洞BC併行。
甕Z_4	2	A15b A551	・口縁部は欠損しているが，外開きのものであろう。肩部にも文様帯をもつ甕である。 ・大型である。	・内面は磨き。 ・体部外面は縄文（LR）を施し，文様帯は磨いている。	・口縁部不明。 ・体部上半の文様帯には，大きな羊歯状文を配する。	・灰褐色，黄白色など黒色を呈さない。 ・大洞BC併行。
甕Z_5	1	A154	・外反する口縁部になで肩の体部がつく。特徴は甕Z一般と同じであるが文様帯の内に文様が施されていない。 ・底部不明。	・外面は無節の縄文を施し，部分的にナデ調整を加えている。文様帯は磨き仕上げ。 ・内面はナデ調整。	・口縁端部に刻み目をつけB突起をもつ。突起の個数は不明。 ・体部上半に沈線で画された文様帯があるが内には何も施されていない。	・茶褐色。
甕Y_1	8	A463 A465	・形態の特徴は甕Z一般と同じであるが，小型の甕である。 ・平底か。	・文様のある部分は丹念な磨き。 ・体部の文様帯以外の部分には縄文が施されている。	・A463のようにB突起のつくものがある。 ・口縁部外面には，A463では簡略化した羊歯状文と，陽刻によ	・黒色。 ・ススが付着する例が多い。 ・大洞BC併行。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
				・内面はナデ調整か荒い磨き。	る平行沈線文間に刻みを加えたものとを施している。 ・体部上半の文様帯には，A465では羊歯状文が施されている。 ・文様は甕Z_3に比べて精緻である。	
浅鉢 A_1	49	A225〜A229 A582 A583	・形態は滋賀里IIの浅鉢A_1と同じであるが，体部の浅いものや深いものなど変化が認められる。 ・丸底か。 ・A229は口径51cmの大型品である。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・突起をもつものがある。A228はHタイプの突起，A582はCタイプの突起を各々もつ。	・A226は滋賀里II・IIIにおける形態変化のないものの例である。
浅鉢 A_3	64	A230〜A233 A585 A587	・形態は滋賀里IIの浅鉢A_3と同じ。口縁部の立ちあがりの細分も同様であり，その量的な関係は，外面に沈線をもつもの＞水平に近いもの＞垂直に近いものの順となる。 ・A230は，口縁端部外面に細い突帯を貼りつけている。 ・丸底か。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・突起をもつものがある。A233は不明，A585はHタイプの突起を各々もつ。	・A233は255号甕棺の蓋として，A153とともに使用されていた。 ・岡山県船津貝塚，香川県伊喜末遺跡，宮崎県松添貝塚，鹿児島県黒川洞穴遺跡に類例がある。
浅鉢 A_6	1	A234	・外反する口縁部の端部は肥厚している。 ・肩部は稜をなして張り出すが，その径は口径より小さい。 ・丸底か。	・内外面極めて良好な磨き。 ・黒色磨研土器。		
浅鉢 B_1	1	A235	・形態は滋賀里Iの浅鉢B_1と同じだが，体部が浅くなっている。 ・丸底か	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・口縁の突出部とその直下の肩稜部とに，各々棒状刺突文を施す。	・外面に朱を塗り，またススが付着している。 ・長崎県深堀遺跡に類例をみる。
浅鉢 B_2	7	A236	・形態は滋賀里IIの浅鉢B_2と同じ。 ・丸底か。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。		・A236の外面には朱が塗られ，またススが付着している。 ・A236は補修孔をもつ。
浅鉢 E_2	5	A240 A422 A603	・口縁部は不明であるが，体部は大きく張り出している。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・肩部上半に，三角形くり込み，平行沈線，刻み目帯からなるい	

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
		A604 A630	・丸底か。		わゆる橿原式文様を施す。 ・A422は平行沈線文とみうけられるが，組み合わせの単位と破片の関係からこの類に入れた。	
浅鉢 E_4	7	A237 A238 A239 A591 A592 A596	・口縁部は短かく外反し，その端部は丸味をおび，内面が肥厚して段をなしている。 ・体部は浅く，大きく張り出している。 ・丸底か。 ・A237，A238，A591，A592は，口縁端部外面に1本の沈線を施すことによって，端部断面は卵形を呈す。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。 ・口縁端部外面に沈線をもつものは，極めて良好な磨きが施されている。	・A237はAタイプの突起をもつ。 ・口縁端部外面に沈線をもつものは，Bタイプの突起をもつ。	・A591は赤褐色を呈し，焼成良好。 ・A237はIII C墓址黒色泥砂層出土。 ・奈良県橿原遺跡，宮崎県松添貝塚，鹿児島県黒川洞穴遺跡に類例がある。
浅鉢 G_1	1	A429	・やや内傾する口縁部の端部は角ばっている。 ・肩部をつくらずに口縁部と体部とが接合している。 ・底部不明。	・内外面磨き。	・口縁部に山形反転沈線文を施し，沈線間に棒状刺突文をうつ。口縁部と体部との接合部に刻み目を施している。	・滋賀里IIに属すかもしれない。
浅鉢 H_2	1	A245	・形態は滋賀里IIの浅鉢H_2と同じ。 ・丸底。	・外面は逆時計廻りの水平方向にあらい削り調整をおこなう。 ・内面はナデ調整。粘土紐の継ぎ目が残る。		・淡褐色。 ・砂粒を含む。
鉢 B_2	12	A248 A249	・口縁と体部との区別のない鉢形で，滋賀里IIの鉢B_1と比較して大型，深身となっている。 ・底部不明。	・外面は水平ナデ調整し，内面に比べてあらい。 ・内面は磨き。	・突起をもつものがある。	・外面にススの付着する例が多い。
鉢 B_3	19	A247 A595 A597	・形態は鉢B_2と同じ。 ・A597は波状口縁をなし，特殊例である。 ・底部不明。	・内外面磨き。	・口縁部内面に沈線をめぐらす例があり，A247は3本，A597は2本ある。 ・A247にはEタイプの，A595にはHタイプの突起が各々ついている。	・焼成は悪い。
鉢 Z_2	1	A612	・形態の特徴は滋賀里IIの鉢Z_2と同じ。	・内外面とも荒い磨き。	・文様も滋賀里IIの鉢Z_2と同じ。	・北陸系。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
鉢 Z_4	2	A250 A251	・形態は鉢Z_2と同じく幅広い口唇部をもっている。 ・底部不明。	・内外面荒い磨き。	・幅広い口唇部に，縦位の細隆線と円形もしくは方形状の粘土紐を貼りつけている。A251では更に縄文（LR）を施している。	・A250はIII C開析谷黄褐色砂層出土で，補修孔に樹皮紐が残っていた。 ・石川県八日市新保遺跡，同・御経塚遺跡に類例がある。 ・暗褐色。 ・北陸系。
椀 A_1	16	A242	・形態は滋賀里IIの椀A_1と同じ。	・内外面丹念な磨きであるが，A242の口縁付近には粘土紐の継ぎ目が残る。 ・黒色磨研土器。		
椀 A_2	5	A421 A426 A430	・形態は滋賀里IIの椀A_2と同じ。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研。	・文様も基本的には滋賀里IIの椀A_2と同じである。 ・A421は平行沈線文上に棒状刺突文を配し，A430では，口縁端部に刻み目を入れ，平行沈線上に棒状刺突文を配している。（椀A_4の文様に近い）。	・A421は奈良県橿原遺跡に類例をみる。
椀 A_3	10	A241 A427 A428 A432 〜 A434 A600 〜 A602	・形態は滋賀里IIの椀A_3と同じ。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・文様も滋賀里IIの椀A_3と変化はない。 ・A434は三角形のくり込みによる浮彫部に縄文（LR）を施している。	
椀 A_4	5	A425 A632 A633	・形態は滋賀里IIの椀A_4と同じ。	・内外面磨き。 ・黒色磨研土器。	・文様も滋賀里IIの椀A_4と変化はない。 ・A632は，口縁端部に刻み目を施し，その直下の沈線を上限として斜行沈線文を施している。	
注口土器A	2	A244 A625	・A244は体部の張り出す椀形で，注口部は欠損する。 ・底部は丸底。	・A244は内外面ともに磨き。		・灰褐色。
注口土器B	1	A243	・口縁部と体部が明確に分かれる壺形の注口土器と推定される。	・内外面ともに磨いているが，口縁部外面には目の細かい縄文	・頸部の突帯の上方と肩部の突帯上に，各々勾玉状の刺突文が	・淡褐色。 ・厚手のつくり。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
			・底部不明。 ・頸部と肩部上半とに突帯状の貼りつけがある。	が施されている。	施されている。	
壺A	1	A246	・口縁部は短かく直立する。 ・体部以下は不明。	・磨滅が激しく，調整手法は不明。		・淡褐色。 ・厚手のつくり。
蓋	1	A559	・一部欠損しているが，型直径6.2cmあり，対称的な位置に計4個の孔をあけている。	・成形は雑で，器表の凹凸は激しい。 ・内外面ともナデ調整。		・黒灰色。 ・砂粒，雲母片を含む。 ・奈良県橿原遺跡，同・丹治遺跡，大阪府船橋遺跡に類例あり。

滋賀里Ⅳ

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
甕 K_1	1	A 252	・刻みのない一条の突帯が，口縁端部から少し離れた位置についている。 ・A 252は甕Kの典型的な形態でなく，滋賀里Ⅲの甕Eに突帯のついたもので突帯，文の甕が定形化する以前のものであろう。 ・口径は28cm。	・口縁部外面は二枚貝調整の後にナデ調整を加え，体部は二枚貝調整で全面をおおっている。恐らく削り調整と同じく下→上に調整し，頸部付近は水平方向に調整していると考えられる。 ・内面は水平ナデ調整。 ・突帯は口縁部の調整が終ってから貼りつけられている。		・灰褐色～褐色。 ・砂粒・雲母片を含む。 ・A 252の体部内面に有機物が付着している。 ・A 252は290号甕棺の底部のおおいとして，A267，A300とともに使用されていた。
甕 K_2	27	A 253 ～ A 255	・刻みのない一条の突帯が口縁端部から少し離れてつくのは甕K_1と同じだが，調整手法上，巻貝や二枚貝調整のないもの。 ・A 254が典型的な形態で，長い口縁部は一たん直立気味にのび，そして外反して端部にいたる。体部はその最大幅が口縁部との接合部にあるような腰高な形態で，口縁部との接合部には明確な境ができる場合が多い。この形態が突帯文の甕の定型化したものである。 ・A 255は，滋賀里Ⅲの甕Gに突帯のついたものである。 ・口径は22cm～34cm。	・口縁部外面は水平ナデ調整。 ・体部外面は，削り調整と平滑なナデ調整によるものとがあり，多くは削り調整である。削りは頸部付近では時計廻りの水平方向におこなっている。 ・内面は全て，水平ナデ調整。 ・突帯は口縁部の調整が終った後に貼りつけられている。	・口縁上端面に刻み目をもつものは12例あり，押し引きによる菱形刻み目が8例，同じく二枚貝による菱形刻み目が4例である。	・褐色～灰褐色。 ・砂粒・雲母片を含む ・突帯のつく甕は，奈良県橿原遺跡，愛知県馬貝塚遺跡，同・五貫森遺跡，岡山県前池遺跡など，西日本全般に広く類例がある。
甕 L	6	A 256	・甕の形態は甕Kの定型例と同じと思われるが，一条の突帯が口縁端部につけられている。 ・口径は14～16cm。	・口縁部片ばかりであるが，内外面ともに水平ナデ調整。 ・A 256の頸部に削りとられてできた段状のものがあるようで，滋賀里Vに近い特徴といえる。		・褐色～灰褐色。 ・砂粒・雲母片を含む。
甕 M_1	4	A 257 A 258 A 267 A 268	・形態は甕Kと同じであるが，口縁端部から少し離れてつけられている一条の突帯	・口縁部外面は二枚貝調整され，多くはその上にナデ調整を加えている。突帯は最	・突帯上の刻み目は，時計廻りの押し引きによる菱形刻み目が3例，A 258のような	・褐色～灰褐色。 ・砂粒・雲母片を含む。 ・A 257の外面，A

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	分様	備考
			上には刻み目がつけられている。 ・調整手法上，巻貝や二枚貝調整のみられるもの。 ・口径は28～32cm。 ・A 267はとがり気味の丸底である。	後につけられる。 ・体部外面は，削りによるものとナデによるものとがある。削りは下→上に削り上げ頸部付近は時計廻りの水平方向に調整される。A267はごく軽い削りで，粘土紐の継ぎ目が残っている。 ・内面は水平ナデ調整。	同じく二枚貝による菱形刻み目が1例である。 ・口縁上端面には，A 268のような細かい刻み目が1例，A267のような押し引きによる菱形刻み目が1例ある。	258の内外面に有機物かススかが付着している。 ・A 267は290号甕棺にA252，A300とともに使用されていた。 ・和歌山県鳴神貝塚に完形の類例あり。
甕 M_2	192	A 259 ～ A 266 A 269 ～ A 271 A 615 A 634	・形態は甕M_1に同じで，調整手法上，巻貝や二枚貝調整のないもの。 ・突帯文の甕の中で量的に主体をなす類である。定型化した形態のものが圧倒的に多いが，A 266は滋賀里Ⅲの甕F，A 271は同じく甕Gに突帯のついたものである。A 260，A 261，A 269のように口縁部が異状にのびて体部が浅くなる形態は，滋賀里Ⅳの内でも新しい傾向と考えている。 ・A 259は丸底である。 ・口径は18cm～35cmで，12cm～14cmの小型品もある。	・口縁部外面は水平ナデ調整。突帯は最後につけられる。 ・体部外面は削り調整によるものと，ナデ調整によるものとがある。量的には削りによるものが圧倒的に多いが，滋賀里Ⅲにくらべて削りが一般的に軽くなっている。削った後をナデ調整する例もある。 ・内面は全て水平ナデ調整である。 ・A 261，A 262の頸部接合部外面をヘラ状のものではない何かで，雑に一周強くナデている。	・突帯上の刻み目には，押しびきによる菱形刻み目が175例と多く，同じく二枚貝による菱形刻み目は17例である。多くは時計廻りの方向に押し引いているが，少数ながらも逆時計方向のものもある。 ・口縁上端面に刻み目を入れるものは55例あり，細かい刻み目は3例，押し引きによる菱形刻み目は42例，同じく二枚貝による菱形刻み目は17例，同じく長楕円形の刻み目は3例である。口縁上端面の刻み目についても，押しびく方向は時計廻りが圧倒的に多く，突帯上の刻み目と軌を一にしている。 ・A 264は，突帯上に刻み目を入れる際に，その原体が同時に口縁端部をきずつけている。	・褐色～灰褐色。 ・砂粒・雲母片を含む。 ・A 260の内外面，A 265の内面，A 261，A 271の外面に，有機物かススかが付着している。
甕 N	40	A 273	・刻み目をもつ一条の突帯は，口縁端部につけられている。 ・形態は定型化した甕形であろう。	・口縁部外面を二枚貝調整しているものが1例あるが，他は全て口縁部外面をナデ調整している。突帯は最後にはりつけている。 ・体部調整は，はっき	・突帯上の刻み目は，押し引きによる菱形刻み目が35例，同じく二枚貝による菱形の刻み目が5例ある。 ・口縁上端面に刻み目のあるものは6例で，5例が押し引きによ	・褐色。 ・砂粒雲母片を含む。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
				りわかるものがないが，削りとナデの両調整があろう。 ・内面は水平ナデ調整。	る菱形の刻み目で，1例が同じく二枚貝による菱形の刻み目である。	
甕 O	1	A272	・形態は他の突帯のつく甕と同じであるが，口縁部に刻み目のある突帯を2条接してはりつけている。 ・口径は30cm。	・口縁部外面は二枚貝調整の後に，ナデ調整を加えている。突帯は最後にはりつけられている。 ・体部外面は時計廻りの水平方向に軽く削り調整。 ・内面は水平ナデ調整。	・突帯上には，逆時計廻りの方向に押し引いた二枚貝による長楕円形の刻み目がある。	・灰褐色。 ・砂粒を含む。
甕 P	1	A274	・定型化した甕の形態で，口縁部に刻み目のある突帯をつけ，更に肩部に刻み目のない細い突帯をはりつけている。 ・滋賀里Vの2条突帯の甕の先駆的なものと見ることもできるが，器形や手法などからは滋賀里Ⅳの特徴をしめしている。 ・口径30cm。 ・とがり気味の丸底。	・口縁部外面は水平ナデ調整。 ・体部外面は削り調整し，下→上に削り上げて頸部付近は時計廻りの水平方向に削っている。 ・内面は全て水平ナデ調整。	・上段の突帯上には，時計廻り方向の押し引きによる刻み目がつけられている。 ・口縁上端面には押し引きによる菱形の刻み目がつけられているが，大体¾周したところで，施文方向が逆になっている。これは，土器を廻さずに施文した結果であろう。	・灰褐色～褐色。 ・砂粒・雲母片を含む。 ・A274は259号甕棺として，A292とともに使用されていた。

滋賀里Ⅴ

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
甕 N	1	A275	・形態上は滋賀里Ⅳの甕Nと同じで，口縁端部に刻み目のある突帯がつく。 ・頸部接合部にあらい沈線がめぐっている。 ・口径は42cm。	・口縁部外面は従来の水平ナデ調整ではなく，垂直方向の削り調整である。この削り調整はナデ調整と紙一重というほど軽いものであり，滋賀里Ⅴの削り調整の特徴である。 ・内面は水平ナデ調整。	・突帯上には，時計廻り方向の押し引きによる菱形の刻み目がつけられている。	・灰褐色。 ・砂粒を含む。 ・大阪府船橋遺跡に類例あり。
甕 P	5	A276 A277 A279 A281	・滋賀里Ⅳの甕Pから単純に変化したものかは別として，口縁部と肩部とに2条の突帯がつく。 ・形態上，口縁部と体部との区別がなくなり，体部の最も張り出すところから徐々に内傾させて口縁にいたっている。名称としては深鉢の方が適切であろうが，晩期の器形の変遷をふまえて甕とした。 ・口径は33cm～39cm。 ・A277は15cmの小型品であり，果して2条の突帯がつくか疑問でもあるが，一応この類に入れておく。 ・A279，A281は平底である。	・外面は全面にわたり垂直方向の軽い削り調整をおこなっている。多くは下→上に削っているが，A279は上→下に削っている。またA279は，突帯と突帯の間を，垂直方向の削りのあとで水平方向に削り調整している。これは垂直の削りの後に突帯をはりつけ，更に突帯間を口縁部とみる意識があって水平の調整がおこなわれたものであろう。 ・A277の外面は水平ナデ調整。 ・内面は全て水平ナデ調整。 ・円盤状の底部に，幅1.5cmの粘土紐を積み上げて成形している。	・突帯上には，押し引きによる菱形の刻み目がつけられている。多くは時計廻りに施文されているが，A279では逆時計廻りである。 ・A276の口縁上端面には，押し引きによる菱形の刻み目がつけられている。	・灰褐色～黒褐色。 ・砂粒を含む。 ・A279，A281の内面には，帯状に有機物が付着している。 ・A279は227号甕棺，A281は213号甕棺として使用されていた。 ・大阪府船橋遺跡に類例あり。
甕 Q	1	A278	・大きく外反する口縁部からなめらかに体部に移行し，体部は胴部が大きく張り出している。 ・器壁はうすく，特に口唇部はうすくおさめている。 ・口縁部と体部に，うすい突帯を2条はりつけている。 ・口径は28cm。	・外面は垂直方向の軽い削り調整。調整後に突帯をはりつけている。 ・削りの原体は繊維束状のものか。 ・内面は水平方向のナデ調整。 ・粘土紐の幅は1cm～1.5cm。	・突帯上に細かい刻み目をつけている。	・褐色。 ・砂粒を含む。 ・ⅢC墓址黒色泥砂層出土。 ・滋賀里Ⅴの中でも一番新しい特徴をもっている。

滋賀里Ⅳ～Ⅴ

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
甕 F	1	A294	・外反する口縁部はなだらかに体部に移行する。 ・形態上滋賀里Ⅲの甕Fと全く同じであるが，薄手のつくりなのが異っている。 ・口径は30cm.	・口縁部外面は水平ナデ調整。 ・体部外面は時計廻りの水平削り調整。 ・内面は水平ナデ調整。		・褐色。 ・砂粒・雲母片を含む。 ・滋賀里Ⅲのこの類との区別は困難であり，滋賀里Ⅲとなる可能性がある。
甕 G	7	A282 ～ A284 A291 ～ A293	・形態上からは滋賀里Ⅲの甕Gと同じであり，直立気味の口縁部はなだらかに体部に移行している。 ・口径が体部最大幅より小さいA282～A284のタイプと，ほぼ等しいA291～A293との2つのタイプがある。前者の口径は19cm～28cm，後者の口径は29cm～30cm。	・口縁部外面は水平ナデ調整。 ・体部外面は削り調整とナデ調整とによって調整される。削りは，滋賀里Ⅲの削りにくらべて一般に軽く，A282のように下→上に削り上げるものやA284のように時計廻りの水平方向に削るものがある。削った後をナデ調整する例もA293に見られる。 A283，A291，A293はナデ調整がおこなわれ，粘土紐の継ぎ目を残している。 ・内面は全て水平ナデ調整。 ・粘土紐の幅は1cm～2cm。	・A282，A284，A292の口縁上端面に刻み目がつけられている。A282，A292は押しびきによる菱形の刻み目で，A284は細かい刻み目である。	・褐色～灰褐色。 ・砂粒を含む。 ・A291は232号甕棺として使用されていた。 A292は259号甕棺の蓋として，A274と組み合わせて使用されていた。 ・A283の外面にススが付着している。 ・A282，A284は，滋賀里Ⅲの甕Gと差異なく，滋賀里Ⅲとなる可能性がある。
甕 H	1	A285	・短かい口縁部は胴の張った体部にゆるやかに移行し，滋賀里Ⅲの甕Hと全く同じ形態である。 ・口径は24cm。	・内外面ともにナデ調整され，口縁部外面と内面の全ては水平方向に，体部外面は垂直方向に調整し，粘土紐の継ぎ目を残している。 ・調整上からも滋賀里Ⅲと差異はない。		・褐色。 ・砂粒を含む。 ・外面にススが付着している。 ・滋賀里Ⅲとなる可能性がある。
甕 J	3	A286 ～ A288	・口径が14cm～17cmの小型の甕。 ・口縁部はA286，A288のように直立気味のものと，A287のような外反するものとがある。	・内外面をナデ調整しているが，A288の体部は，下→上方向の軽い削り調整の上をナデ調整している。		・褐色。 ・砂粒・雲母片を含む。 ・滋賀里Ⅲのものと差異なく，滋賀里Ⅲとなる可能性がある。
甕 R	2	A295 A296	・A295は外反し，A296は直立気味という差	・A296は内外面とも平滑な水平ナデ調整。		・褐色～黒褐色。 ・砂粒を含む。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
			異はあるが，いずれも口縁部はやや肥厚し，なめらかに体部に移行している。 ・A296の体部は稜をもち，A295の肩部は長いなで肩という特異な形態をとっている。 ・口径は16cm～25cm。	・A295の体部外面は下→上に削り上げており，他の全ての面はナデ調整されている。		・A296は滋賀里Ⅲにさかのぼる可能性がある。
甕 Y_1	8	A333 A462 A464 A606 A607	・形態は滋賀里Ⅲの甕Y_1と同じく小型の甕である。 ・平底。 ・A333は口縁部が内彎しつつ外に開いており，他のものと若干異なっている。	・体部外面は，文様帯を除いて縄文（ＬＲ）を施す。 ・口縁部外面と内面の全ては磨き。	・A333，A606，A607の口縁端部には刻み目とＢ突起がつき，口縁部には羊歯状文，陽刻された刻み目，刻み目と羊歯状文の組み合わせ文が施される。体部の文様帯には羊歯状文が施される。 ・A462の体部文様帯には，平行沈線文と陽刻による刻み目が施されている。 ・A464の口縁部には，平行沈線文と羊歯状文と陽刻による刻み目が施されている。羊歯状文では羊歯の葉が欠落している。	・黒色。 ・大洞ＢＣ併行。
甕 Y_2	2	A334 A608	・基本的には甕Y_1と同じく小型の甕であるが，口縁部が短い。 ・平底か。	・内外面とも磨きをおこなっているが，A334の体部外面は縄文（ＬＲ）を施している。A608の体部外面には削り痕が認められる。	・口縁端部に刻み目を施し，陽刻によるＢ突起形の文様と平行沈線文とを口縁部に施す。	・A334は黒色。 ・A608は白色。 ・大洞ＢＣ併行。
甕 Y_3	1	A553	・特徴は甕Y_1と同じであるが，厚手である。 ・底部不明。	・内外面とも荒い磨きをおこなうが，口縁部外面には縄文（ＬＲ）を施している。	・口縁上端面に列点文を施し，Ｂ突起がつく。 ・体部上半の文様帯には，逆Ｓ字形に変化した羊歯状文を施している。	・黄褐色。 ・大洞ＢＣ併行。 ・つくりは滋賀里Ⅲ甕Z_4に近い。
甕 Y_4	1	A332	・長く外反する口縁部に肩部の張り出さない体部がつく。 ・口縁部と体部との接合部から肩部上半にかけて削り，肩部は稜	・内外面とも磨き。	・口縁部に突起をもつ。	・黒色。 ・当地域製作の土器かも知れない。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
			をなす。小型である。 ・底部不明。			
甕 X_1	1	A 456	・強く外に開く波状口縁で，波頂部中央は弧状に凹む。 ・体部以下不明。	・内外面ともに磨き。	・波頂部内面に三叉文を陰刻し，口縁をめぐって太い沈線が施され，この間に縄文が施されている。 ・外面には，口縁にそって太い沈線がめぐらされ，その間に縄文が施されている。	・黒褐色。 ・石川県御経塚遺跡に類例あり。 ・北陸系
甕 X_2	1	A 454	・口縁部は強く外に開く。 ・体部以下不明。	・外面には細かい縄文がころがされている。 ・内面は丹念な磨き。	・口縁端部にB突起がつく。 ・口縁部内面には，削り出しによる浮彫文が施されている。 ・孔があいているのが特徴か。	・灰褐色。 ・富山県勝木原遺跡に類例がある。 ・北陸系。
深鉢 G	60	A 297 〜 A 305	・口縁部と体部との境のない器形で，滋賀里Ⅲの深鉢Gと形態的には同じである。 ・A 298のように口径が小さくて細長いタイプや，A 299，A 301，A 304，A 305のように，口縁端部があまり内傾せず薄手につくられているものなどは，滋賀里Ⅲには見られなかった傾向である。 ・A 305は口縁端部近くに，突帯が1条つけられている。 ・口径は15〜42cm。	・外面を削り調整するものとナデ調整するものとがある。削りは一般に軽くおこなわれ，ナデと区別のつきにくいものもある。下→上に削り上げ，口縁付近では時計廻りの水平方向に削る。A 298では下→上に削り上げているだけである。 ・粘土紐の継ぎ目の残るものが多く，粘土紐の幅は1cm〜1.5cm。 ・内面は水平ナデ調整。	・口縁上端面に刻み目のあるものは3例で，A 301，A 304は細かい刻み目，A305は押しびきによる菱形の刻み目である。	・褐色〜黒褐色。 ・砂粒・雲母片を含む。 ・A 300は290号甕棺の蓋として，突帯が1条めぐるA 267，A 252と組み合わせて使用されていた。 ・この類の内には滋賀里Ⅲに属するものもあると思われるが，分離はできなかった。
深鉢 Z_3	1	A 451	・端部がうすくおさめられた波状口縁である。	・内外面とも磨き。	・波頂部外面に，両端に凹点をもつ2本の細い縦位沈線文を施し，その下端を起点として1本の太い沈線を口縁にそってめぐらしている。	・北陸系。
深鉢 Z_4	1	A 605	・波状口縁。波頂部下がややくびれて肩部に移行する。外面のくびれに対応する内面を削ることによって，口縁端部を肥大させている。	・外面はナデ調整。 ・内面は磨き。	・波頂部は不明であるが，波頂部下に三叉文を施し，波頂部と平縁部とを縦位沈線文によって画する。この縦位沈線文を起点として，3本の沈線	・北陸系。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
			・肩部をつくり出すも張り出すことなく底部に移行する。		が口縁部をめぐる。 ・波頂部直下の肩部に葉状文を施している。	
深鉢 X_3	1	A450	・波頂部に内彎する突出部をつくり出した波状口縁である。 ・体部は若干張り出すか。	・内外面とも磨き。	・突出部に5本の横位平行沈線文を施し，波頂部中央に三角形のくり込み文を配し，それによって画された左右の空間に4～5本の沈線文を施し，またくり込み文の底辺に隣接して横位三叉文を施している。この三叉文に連結して，4本の縦位沈線文を波頂裾部に施している。 ・口縁にそって5～6本の平行沈線文がめぐっている。	・北陸系。
浅鉢 A_1	59	A314〜A316 A593	・形態は滋賀里Ⅲの浅鉢A_1と同じ。 ・A593は口縁端部に削り出しの突帯をもつ。 ・丸底か。	・内外面丹念な磨き ・黒色磨研土器。		・滋賀里Ⅲに属す可能性がある。 ・A315は広島県中山貝塚に類例がある。
浅鉢 A_3	50	A318 A320 A586	・形態は滋賀里Ⅲの浅鉢A_3と同じ。口縁端部の立ちあがりによる細分の量的関係は，外面に沈線をもつもの＞垂直に近いもの＞水平に近いものの順である。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・突起のつくものがあるが，何ヶ所につくか不明。	・滋賀里Ⅲに属す可能性がある。
浅鉢 A_6	1	A312	・形態は滋賀里Ⅲの浅鉢A_6と同じであるが，肩部から底部への移行が急角度である。 ・丸底か。	・内外面極めて良好な磨き。 ・黒色磨研土器。		・滋賀里Ⅲに属す可能性がある。
浅鉢 A_7	3	A317 A589	・大きく外反する口縁部の端部内面に肥厚による段がある。 ・肩部は明確な稜をなし，その径は口径とほぼ等しい。 ・丸底か。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・A589のように突起(Aタイプ)をもつものがあるが，何ヶ所にあるか不明。 ・なおHタイプの突起もある。	・滋賀里Ⅲに属す可能性がある。
浅鉢 A_8	1	A313	・長く外に開く口縁部は波状口縁をなす。 ・肩部は稜をなすも，その張り出しが小さ	・内外面磨き。	・波頂部の片側に突起(Cタイプ)がつくが，何ヶ所につくものか不明。	・口縁部外面にススが付着。 ・滋賀里Ⅲに属す可能性がある。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
			い。 ・丸底か。			
浅鉢 E_4	36	A322 A590	・形態は各々滋賀里Ⅲの浅鉢E_4と同じ。 ・A322は口縁端部外面に沈線をもたないが，A590は沈線を持つ。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・A590には突起(Aタイプ)がついているが，何ヶ所につくかは不明。	・A590は白褐色を呈し焼成良好。 ・滋賀里Ⅲに属す可能性がある。
浅鉢 E_5	5	A323 A324	・口縁部は極端に短かく，やや外に開いている。 ・体部は大きく張り出すか。 ・底部不明。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。		・滋賀里Ⅲに属す可能性がある。
浅鉢 E_6	1	A321	・他の浅鉢E類にくらべて口縁部が長く，体部は丸味をおびて外に張り出している。 ・丸底か。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・2個で一単位の突起(Cタイプ)がつくが，何ヶ所につくものか不明。	・滋賀里Ⅲに属す可能性がある。
浅鉢 G_2	48	A325 A327 A329 ～ A331	・内傾する口縁部の端部はわずかに外反気味におさめられ，また端部外面を削り出して，端部断面は半円形となる。 ・口縁部の長さには長短のバラエティーがある。(A329とA331) ・A327は，口縁部の上・下に沈線を施している。 ・平底，凹底。	・口縁部外面はやや丹念に磨いているが，体部外面はナデ調整がおこなわれ，砂粒痕を残す例が多い。 ・内面は外面よりも丁寧に，磨き調整されている。		・淡褐色。 ・砂粒を含む。 ・奈良県橿原遺跡，愛知県馬見塚遺跡，同・五貫森遺跡に類例がある。 ・長崎県原山遺跡，福岡県板付・夜臼各遺跡の類例は，口縁端部の特徴がやや異なる。
浅鉢 G_3	1	A326	・形態は浅鉢G_2と同じであるが，口縁部に突帯をもっている。 ・平底。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。		・愛知県馬見塚遺跡に類例がある。
浅鉢 G_4	4	A328	・基本的な形態は浅鉢G_2と同じであるが，波状口縁である。 ・平底が凹底。	・浅鉢G_2と同じ。		・淡褐色。 ・砂粒を含む。 ・愛知県馬見塚遺跡，岡山県黒土遺跡に類例がある。
浅鉢 G_5	1	A306	・長い口縁部はほぼ直立し，端部に突帯をもつ。 ・肩部はわずかにつくられている。 ・底部不明。 ・口径29cm。	・口縁部外面は水平方向の磨き。 ・体部外面は時計廻りの水平方向に削り調整している。 ・口縁部と体部との接合部外面を，ヘラ状のもので一周強くナ		・褐色。 ・砂粒を含む。 ・口縁部外面に朱を塗っている。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
				デている。 ・内面は水平方向の磨き。		
浅鉢 H_3	2	A 336	・長く外反する口縁部以外は不明であるが，滋賀里Ⅲの浅鉢H_2と同じ体部がつくものか。 ・丸底か。	・内外面極めて良好な磨き。 ・黒色磨研土器。	・突起(Hタイプ)をもつものあり。	・滋賀里Ⅲに属す可能性がある。
浅鉢 Y	1	A 319	・大きく外反する口縁部の端部はわずかに立ち上がっている。 ・体部は不明であるが，明確な肩部をつくらない器形か。	・外面には縄文(ＬＲ)が施されている。 ・内面は極めて良好な磨き。	・口縁端部の立ち上がり部に，刻み目が施されている。	・浅鉢A_3と似ているが，縄文手法，胎土，焼成に北陸系の色彩が濃い。
鉢 B_2	14	A 307 A 339	・形態は滋賀里Ⅲの鉢B_2と同じ。 ・A 307は小型品であるが一括した。 ・底部不明。	・外面は水平ナデ調整され，砂粒痕が残る。 ・内面は磨き。	・A 339の内面に沈線が2本めぐる。	・淡褐色。 ・砂粒を含む。
鉢 B_3	8	A 340 A 341	・形態は滋賀里Ⅲの鉢B_3と同じ。 ・A 340の口縁端部に，細い突帯がある。 ・底部不明。	・内外面ともに磨き。	・突起をもつものがある。	・焼成は不良。 ・A 340は愛知県馬見塚遺跡に類例がある。
鉢 B_4	5	A 308 〜 A 311	・形態は鉢B_2と同じであるが，調整手法に差異がある。 ・A 308，A 309のように，口径27cm〜29cmのやや深い器形のものと，A 310，A 311のように口径31cm〜54cmの浅い器形のものとがある。	・外面は削り調整をおこない，その上をA 308のようにナデ調整するものもある。削りは，下→上の方向に削り上げ口縁端部付近は時計廻りの水平方向に削るのが一般的である。 ・内面は平滑な磨研風のナデ調整をおこない，外面の仕上げに対して内面の仕上げを重視している。	・A 310の口縁上端面には，押し引きによる菱形の刻み目がつけられている。	・灰褐色。 ・砂粒を含む。 ・滋賀里Ⅲに属するものもあると思われるが，分離できない。
鉢 Y_1	1	A 467	・口縁上端面に幅広い文様帯のない鉢である。 ・底部不明。	・内外面ともにやや荒い磨き。	・1条の羊歯状文と刻み目帯とで画された文様帯の内には，磨消縄文（ＬＲ）によるいわゆる大腿骨文に似た文様を配している。	・黒色。 ・黒雲母を含む。 ・大洞BC〜C_1か。 ・形態不明であるがA 610もこの類に入るかもしれない。
鉢 Y_2	1	A 552	・厚手のつくりの鉢。 ・底部不明。	・内外面とも磨き。	・口縁付近に文様帯があり，平行沈線文の間に，羊歯状文と2	・大洞ＢＣ併行。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
					条の刻み目帯を施す。	
鉢 Y_3	1	A446	・口縁端部を肥厚させている。 ・厚手のつくり。	・内外面とも磨き。	・口縁外面に数本の平行線文を施し，3本毎にS字を陰刻する。	・大洞BC併行。
鉢 Y_4	1	A554	・口縁端部を薄くおさめている。	・内外面とも磨き。	・口縁端部内面に突起をつくる。 ・体部上半に文様帯をもち，三叉状入組文に類する文様を施す。 ・不完全な磨消縄文。	・北陸系。 ・富山県勝木原遺跡に類例がある。 ・A452，A461，A611は形態不明であるが，この類に属するものか。
椀 A_1	17	A338	・形態は滋賀里II～IIIの椀A_1と同じである。	・内外面磨き。 ・黒色磨研土器。		・滋賀里IIIに属す可能性がある。
椀 C	1	A337	・体部に2つの段をもつ深鉢を小型化した器形で，口縁端部を外開きにおさめている。 ・底部不明。	・内外面丹念な磨き。		・淡灰褐色。 ・奈良県橿原遺跡に類例がある。
椀 Z_3	1	A555	・口縁端部はやや内彎する。	・外面には縄文(LR)を施す。 ・内面やや荒い磨き。	・列点文を施し，その下限に沈線が1本めぐる。	・北陸系。
注口土器A	4	A620 A622 ～ A624	・いずれも注口部のみの断片である。	・外面はナデ調整。	・注口部下面に，A623では沈線文，A624では刻み目帯がある。	・灰褐色。 ・砂粒を含む。
壺 B	1	A594	・口縁部はやや外反する。端部外面に1本の細い沈線がめぐる。 ・口縁部と体部との接合部外面が削り出され，体部はやや張り出す。 ・底部不明。	・内外面とも磨き。		・壺としたが器形に検討の余地がある。
壺 C	1	A289	・口径12cmの口縁部の破片で，形態からみて壺になると思われる。 ・口縁端部から少し離れて刻みのある突帯をはりつけている。	・内外面とも平滑なナデ調整。内面には指ナデの痕跡が認められる。	・突帯上には，逆時計廻り方向の押し引きによる菱形の刻み目がつけられている。	・黒灰色。 ・砂粒を含む。 ・大阪府船橋遺跡に類例あり。
壺 Y	1	A458	・体部の小片。	・外面は極めて良好な磨き。 ・内面はナデ調整。	・肩部上半に文様帯があるようだが，陽刻手法がわかる他は不明。	・小片につき器形も検討の余地がある。 ・大洞C_1併行。
壺 X	1	A556	・口縁部はやや外反しつつ外に開く。 ・体部はやや張り出す。	・内外面極めて良好な磨き。	・頸部に刻み目隆帯をめぐらしている。	・大洞C_1併行。
壺W	1	A609	・口縁部は外に大きく	・内外面とも磨き。	・口縁端部の突出部間	・大洞C_1併行。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
			開き，頸部は細い。 ・口縁端部に山形の突出部(2ヶ所か)をもち，その中央に1本の沈線を施している。 ・体部以下不明。		に，2個の連続する山形突起をつける。	・朱塗りである。
高杯	1	A290	・脚柱部だけの破片であるが，脚柱の中央で直径4cmあり，中実の脚部である。	・脚部外面は下→上の方向にナデ調整している。 ・杯部内面はナデ調整している。		・灰褐色。 ・砂粒を含む。
底部	1	A335	・わずかに凹底となる平底。	・内外面とも極めて良好な磨き。	・底部をめぐる陽刻された同心円文を下限として，雲形文に類する文様を磨消縄文(LR)手法で施す。	・大洞C_1併行。 ・白褐色を呈し，黒斑を残す。
手づくね土器	2	A557 A558	・いわゆる小型の手づくね土器で，口径はA557が4.2cm，A558は4.8cmである。	・つくりは粗雑であるが，内外面ともにナデ調整をおこなっている。 ・A557の内面は，垂直方向に指または太いヘラ状のものでナデ調整している。		・3～5mm大の砂粒と雲母片を含む。 ・褐色。 ・A557はIIIC区谷黄褐色砂層から出土。 ・奈良県橿原遺跡，大阪府船橋遺跡に類例あり。

※分類の標示は，同一器形の同じ特徴をもつものは同一の標示をとり，2型式以上に及ぶ時には，型式によって特徴の変化がつかめるものは記入した。特徴の変化のない場合は，変化せずに継続するのか，あるいはより古い型式に全て属するのか決しがたい。
※滋賀里遺跡に固有な土器は各器形とも，Aから始めて以下分類の標示をおこない，東北・北陸系の土器はZから始めて逆にさかのぼって標示した。
※東北・北陸系の土器の内，滋賀里III～Vに区分したものは同一層に属し，厳密な対応関係を示しておらず，便宜的に出土深度によって区分したものである。

第15表　滋賀里遺跡出土の骨角器の観察

種　類	個数	遺物No.	材　　質	特　　徴	備　考（層位）
根ばさみ A	11	AB1 〜 AB6 AB49 〜 AB52	鹿角	・短かい茎部に対して，受け部が細長い。完形品がないので全長はわからないが，Bタイプのものよりやや長い。 ・受け部端にある切り込みの幅は，Bタイプと同じく3〜4㎜である。 ・鹿角の幹柱状部の縦半割り材からつくられており，小型品を除けば，受け部の一長側面は堅緻質があらわれ，しばしば鹿角の原面も残っている。反対の長側面には海綿質があらわれる。 ・長軸方向に磨いて仕上げている。	・ⅢD区貝塚黒色砂混泥土から9例出土。（AB1〜AB6） ・ⅢD区貝塚灰褐色泥土から2例出土。
根ばさみ B	12	AB7 〜 AB11 AB43 〜 AB48	鹿角	・受け部は茎部よりやや長く，受け部の最大幅はAタイプにくらべて大きい。 ・全長は3.4cm〜4.9cmのものがあり，受け部端の切り込み幅は3〜4㎜である。 ・鹿角からのとり方や仕上げ方はAタイプに同じ。 ・完形品の重量は最小で0.8g，最大で3.4g。	・全てⅢD区貝塚黒色砂混泥土出土。
弓筈	1	AB12	鹿角	・2つの段をつくり出し，それぞれの段部に沈線を刻み，更に先端近くにやや太い沈線を刻んでいる。先端部は欠損しているが，根ばさみのように切り込みを入れていると思われる。 ・荒磨き痕は長軸に対して直角方向に走り更に全面を磨いて仕上げている。内面の荒磨きも長軸に対して直角方向におこなわれている。	・ⅢD区貝塚黒色砂混泥土出土。
牙鏃	1	AB13	イノシシの犬歯	・片面にエナメル層が残るように削って成形し，石鏃のように基部をえぐっている。 ・3辺とも両面より刃付けをおこなっている。 ・エナメル層の側へ，片面穿孔している。	・ⅢD区貝塚黒色砂混泥土出土。
釣針	2	AB14 AB15	イノシシの犬歯	・AB15は軸頭にひもかけをつくり出しているが，鉤先を欠き，AB14は軸頭，鉤先ともに欠損している。 ・AB14は片面にエナメル質をそっくり残しているが，AB15はよく磨いていて，エナメル質をほとんど残していない。	・ともにⅢD区貝塚黒色砂混泥土出土。
モリ・ヤス A	7	AB17 〜 AB23	シカの中手骨・中足骨	・原材を縦に半割りしたものから，両端をとがるようにつくり出している。断面はほぼ三角形に近く，原材の骨の内面にあたる面は凹んでいる。 ・両端部は長軸に対して直角からやや斜方向に激しく荒磨きしている。最後は長軸方向に仕上げの磨きをかけている。	・ⅢD区貝塚灰褐色泥土から6例出土。（AB17〜AB21，AB23） ・ⅢD区貝塚黒色砂混泥土から1例出土。（AB22）
モリ・ヤス B	1	AB31	シカの中手骨・中足骨	・全長4.3cmの小型のヤスである。一方の端部を長軸に対して直角方向に荒く磨いている。他の部分は長軸と平行に磨いて	・ⅢD区貝塚灰褐色泥土出土。

種　類	個数	遺物No.	材　　質	特　　徴	備　考（層位）
				いる。 ・ヤスの使用上の欠損によって何度もとぎ直したことによって，かくも短かくなった可能性もある。	
針	11	AB24 〜 AB28 AB53 AB54	鹿角　3 シカの中手骨・中足骨　7 (AB24〜AB28) 魚の胸ヒレ1	・シカの中手骨・中足骨を材としたものが主体をしめているが，特殊なものに，魚のヒレ骨をみがいているものがある。中手骨・中足骨を縦に割り，一方の先端をとがらすように削り，長軸方向に磨き仕上げをおこなっている。 ・完形品の全長は7.8cm〜10.9cmで，断面は円形となるが，1例やや扁平につくってヤスとの中間形態のものがある。 ・AB24は，針先と反対側の端部をヘラ状に削っている。	・III D区貝塚灰褐色泥土から9例出土。(AB24〜26, AB28) 魚のヒレ骨製もこの層から出土している。 ・III D区貝塚黒色砂混泥土から2例出土。(AB27)
ヘラ状製品	2	AB34 AB37	シカの肋骨 (AB34) イノシシの犬歯 (AB37)	・AB34は，肋骨を縦に半割りした扁平な材を長軸に対して直角方向に荒磨きし，更に長軸方向に仕上げの磨きをかけている。 ・AB37は一面にうまく犬歯のエナメル質をとり入れるように反対の面を長軸に対して直角からやや斜方向に荒磨きしてつくり出している。短軸の幅広い方の端面を磨いて刃づけをおこなっている。	・AB34はIII D区貝塚灰褐色泥土出土。 ・AB37はIII D区貝塚黒色砂混泥土出土。
角斧	1	AB43	鹿角	・幹柱は破損しており，破損部に火を受けた痕跡がある。 ・第1枝の先端部上側面を荒磨きして刃付けをおこなっており，また第1枝の下側面に手づれ状の磨滅した痕跡が認められる。この角斧を使用した時に生じたものかどうか問題となろう。	・III D区貝塚黒色砂混泥土出土。
牙玉	2	AB41 AB42	ツキノワグマの上顎犬歯 (AB42) タヌキの上顎犬歯(AB41)	・歯根部端の形をととのえて，歯根部全面にわたって磨き仕上げをおこなっている。特にAB41は，歯根部を扁平に近く磨きあげている。 ・AB42は全長5.9cmで両面穿孔。AB41は全長2.9cmで片面穿孔。	・いずれもIII D区貝塚黒色砂混泥土出土。
髹形装飾品	1	AB40	鹿角	・鹿角の幹枝の堅緻質を利用してつくられ全面に細かい磨き仕上げがおこなわれている。 ・櫛状部は一部欠損しているが，切り込みが3つある4本歯と推定される。 ・鋭い刃で沈線が3条刻まれているが，3条とも両側面で切れており，一周つながっていない。	・III D区貝塚黒色砂混泥土出土。
小形装飾品	1	AB38	イノシシの指骨	・指骨の末端部を利用して彫刻をほどこしている。一方の端部は欠損している。	・III D区貝塚黒色砂混泥土貝ブロック出土。
腰飾	1	AB39	イノシシの指根骨	・指骨のグロテスクな形状をうまくとり入れて細工している。	・III D区貝塚黒色砂混泥土出土。

種　類	個数	遺物No.	材　　質	特　　徴	備　考（層位）
				・一端は欠損しているが，一方の端部に両面穿孔による孔をあけている。他方の端部は環状にはなっていない。 ・全面に朱を塗っている。	
黒漆塗り柄頭状骨製品	1	AB36	材質不明	・断面が長楕円形の柄頭状製品で，中央部に目釘孔のように貫通する小孔がある。全長は4.7cm。 ・中央の孔を中心として彫刻がほどこされ全面に黒漆を一層塗って仕上げている。	・III D区貝塚灰褐色泥土出土。 ・実物は取りあげて間もなくバラバラになってしまい，実測は現場での実測図をもとにしておこなった。
有孔骨製品	1	AB16	材質不明	・現長1.4cmの扁平な破片で，端部は丸くおさめて，穿孔している。	・III D区貝塚黒色砂混泥土出土。
髪飾状装飾品	1	AB35	鹿角	・鹿角幹枝の堅緻質を利用してつくられており，AB40と似ている。 ・両端部には大小の差こそあれ同じような形のつくり出しがあるが，主体部との接合の仕方において，90°のずれがある。全長5.2cm。	・III D区貝塚黒色砂混泥土出土。
管状装飾品	1	AB32	烏上腕骨	・半折した破損品で，もとは管状品であろう。 ・長さ4cmほどに材を切断したもので，両端部の近くにそれぞれ鋭い刃で刻文している。刻文は単純な平行沈線ではないが，破損のためよくわからない。	・III D区貝塚灰褐色泥土出土。
有孔未製品	1	AB29	イノシシの犬歯	・片面は荒磨きが認められるが，反対の面は全く未調整である。この未調整の面はもともと犬歯のエナメル層がある面にあたる。従ってエナメル層を利用した際の不要品と考えられるが，中央に片面穿孔の孔があいている。製作中にエナメル層がはがれてしまった失敗品であろうか。	・III D区貝塚灰褐色泥土出土。
未製品	10	AB30 AB55 〜 AB57	シカの中手骨・中足骨	・原材を縦に割ったものから，端部を削ってとがらす過程にある未製品または失敗品で，多くはヤスの形態に近いようである。 ・未製品の観察によると，端部をとがらす技術としては，先ず縦方向の荒い削りを2側辺に入れておおよその形をつくる。次に長軸に対して直角からやや斜方向に荒磨きして形を整え，最後に長軸方向にそって細かい磨き仕上げをおこなって，丸味を出している。 最後の仕上げの磨きはなかなか観察しにくいが，最初の荒磨きは擦痕を深く残している。	・III D区貝塚灰褐色泥土から6例。 ・III D区貝塚黒色砂混泥土から4例。 （AB30）
原材	4	AB35 AB44	鹿角	・鹿角に刻み目を入れて切断したものや，更にそれを縦に半割りしたものなどが発見されている。	・III D区貝塚黒色砂混泥土出土。

第16表　滋賀里遺跡出土の木器の観察

種　　類	個数	遺物No.	特　　徴	備　考（層位）
石斧柄	2	AW2 AW3	・いずれも柄部が欠損して全長は不明。AW3は柄部つけ根から焼損している。 ・¼円周の原材から削ってつくり出している。仕上げが丁寧で削り痕はわからない。 ・着装孔は一方に末広がりの断面となっている。	・AW2はIIIC区谷黄褐色砂出土。 ・AW3はIIID区貝塚ピート出土。
石斧柄半製品	1	AW4	・全長59cmの完形品で荒削りをおこなって大体の形をつくり出している。これから着装孔をあけて仕上げをまつ段階のものである。 ・⅓～¼円周の原材からつくり出している。	・IIID区貝塚ピート出土。 ・コナラかクヌギ。
櫂状木器	2	AW5 AW6	・いずれも柄部を欠損しており完形品ではないが櫂にしては小さすぎる。 ・櫂状部には2つの形態がある。AW6は先端を欠いているが，扁平に削り出している。AW5の方は，先端部を厚く残しており，半製品の可能性もある。 ・どちらも¼円周の原材からつくり出している。 ・AW5が完成品か半製品かで用途の推定に影響があるが，一応AW6をもって，この木器の完成品と考えたいが，その用途については今後の課題としたい。	・IIID区貝塚ピート出土。 ・コナラかクヌギ。
櫂状木器未製品	1	AW7	・全長110cmの完形品で，¼円周の原材から荒削りして形をつくり出したもので，特に櫂状部は原材の面がそのまま残っている。	・IIIC区谷第2ピート出土。 ・コナラかクヌギ。
丸木弓	7	AW18 ～ AW22	・端部の欠損するものが多いが，全長145cm～90cmの丸木弓で，木の節をうまく取り入れている。AW21，AW22などは弓以外の網枠などとも考えられないことはないが，一応弓としておく。 ・端部に弭をつくり出しているのはAW18，AW19の2例で，AW18では両端部に，AW19では片方につくり出している。樋を切っているのは片面だけなので，弦が張られたのは，現在弓が曲っている側であろう。 ・AW18は，弓の外側面に樋を刻んでいるが，樋の走っている範囲は，中央部附近で端部には及んでいない。また，もと全面に桜皮を巻いていたらしく，現在部分的に残っている。一方の端部には削りの擦痕が明確に認められる。	・IIIC区谷黄褐色砂出土のものはAW18，AW20AW22の他2例。 ・IIID区貝塚ピート出土はAW19，AW21。
漆塗り弓	3	AW15 AW16	・基本的な形態は丸木弓と同じであるが，いずれも外側面に樋が刻まれており，黒漆が塗られている。 ・AW15には，繊維を6～10条巻きつけたものを一単位として，3単位が一組みとなったものが3ヶ所認められ，この糸巻き部には朱漆を塗っている。 ・AW16では，繊維にかわって，樹皮を3条巻いたものを一組みとしている。	・いずれもIIIC区谷黄褐色砂出土。
木槍	1	AW17	・現長126cmの欠損品で，一先端を扁平にとがらしている。	・IIID区貝塚ピート出土。 ・木槍と考えたが，用途は検討の要がある。

種　　類	個数	遺物No.	特　　徴	備　考（層位）
有孔板	1	AW1	・両端を欠損しているが，台形断面の細長い板材で，両長側に段をつくり出している。孔が一つ両面よりあらくあけられている。 ・平面が梯形の高さの低い突出部を4ヶ所彫り出している。	・ⅢC区谷第2ピート層出土。
小形薄板状木器	1	AW11	・四隅を小判形に削った薄板状のもので，片面はやや内凹み気味であり，この面の3ヶ所に短かい切りキズ痕がある。	・ⅢC区谷第2ピート層出土。
火鑽臼	1	AW10	・小破片であるが，幅3cmの細長い薄板であろうと思われ，2つの孔が認められる。孔は一方向からいずれもあけられており，孔の斜面は火を受けてこげている。火鑽臼の可能性が強い。	・ⅢD区貝塚ピート層出土。
火鑽杵	1	AW9	・断面円形の丸棒で，先端部は丸くとがっており，先端より約5cmほどの間は全面に火を受けてこげている。 ・AW10の孔の大きさと棒の太さは対応する。	・ⅢD区貝塚ピート層出土。
シャモジ形木器	1	AW8	・現長27cmで，柄の端部と杓端部とも欠損する。杓部の先端は刃のように薄くつくっているのかどうかわからない。	・ⅢC区谷黄褐色砂層出土。
木椀	3	AW14	・AW14は土器の椀と全く同じ器形である。仕上げの削り痕が明瞭で，内外ともに口縁部近くは水平方向に削り，外面の下部では斜方向となり，この点に関しても，土器の調整方向と同じである。削り痕の当り幅は4mmである。回転を利用して削ったものでない点は注目される。	・AW14はⅢC区谷第2ピート層出土。 ・他の2片はⅢD区貝塚ピート層出土。
漆塗椀	2	AW13 AW49	・ボール形の木椀の口縁部に七宝文を刻み，内外の全面に朱漆を塗っている。 ・AW49ではっきりしないが，AW13の七宝文は特異で，上段と下段の組み合せ方が異なっている。	・ⅢC区谷第2ピート層出土。 ・文様から滋賀里ⅡかⅢに属する。
漆塗注口容器	1	AW51	・破片ではあるが，もとは内外の全面に朱漆を塗っている。	・ⅢC区谷第2ピート層出土。
漆塗腕輪	1	AW12	・小枝を曲げて輪状に作ったものの断片である。接合部はないが，推定直径15cmほどの輪状のものとなる。全面に朱漆を一層塗っている。	・ⅢC区谷第2ピート層出土。
漆塗櫛	1	AW50	・小片で不明点が多いが，櫛の頭頂部かと思われれる。 ・芯となっているのは，薄板か樹皮のようなものを編んでいるようだ。その上に朱漆を厚く塗って固めている。	・ⅢC区谷黄褐色砂層出出。
籃胎漆器片	破片	AW52	・幅1mmと幅1.5mmの竹状の材を縦と横に約2mmの間隔をおいて編んだものに粗悪な朱漆を塗っている。	・ⅢD区貝塚ピート層出土。
釣手	1	AW53	・樹皮を芯として同じ樹皮を10回以上固く巻きつけている。	・ⅢD区貝塚ピート層出土。
矢柄材？	15以上		・アシかヨシのまだ皮のついたものが，2群に分かれて束ねたような状態で出土した。いずれも弓の近くから出土した。一本として完全なもの	・ⅢD区貝塚ピート層出土。

種　類	個数	遺物No.	特　徴	備　考（層位）
			はなく全長は不明であるが，現長の最大のものは73cmである。	
原材	43	AW23 〜 AW47	・丸木を一定の長さに切断した丸木材と，それを半割りした½円周材，更に¼円周材，⅛円周材がある。 ・量的には½円周材が28例と多い。½円周材と一括したものの内には，単純に丸木材を半割りしたものはむしろ少なくて，多くの場合は，丸木材の中心部に板材をとった両側の残りという方が適切である。従ってこの4分類はあくまで模式化したものである。 ・原材の長さは一定していないが，最小の材で全長65cm，最大の材で全長126cmあり，80cm〜100cmあたりが一番多い。原材のもとの丸木材の太さを推定すると，わかる限りで最小のものは直径約3.5cm，最大のもので約13cmである。 ・丸木から一定の長さに切断する時に，石斧を使って左右よりV字形に打ち込んで切断している。従って，原材の端面はななめになっており，石斧の刃痕がよく残っている。	・ⅢD区貝塚ピート出土は36例。 （AW23〜AW28 AW30〜AW35） ・ⅢC区谷黄褐色砂・第2ピート・黄灰色砂出土は7例。（AW29） ・コナラかクヌギ。

第17表　滋賀里遺跡出土の土製品・紡錘車の観察

種　類	個数	遺物No.	特　徴	備　考（層位）
土偶	4	ＡＣ１ ＡＣ２ ＡＣ４ ＡＣ28	・中空土偶片が３個体と中実土偶らしき破片がある。 ・ＡＣ２は顔面左半分の破片で，目，鼻，耳が残っており，全面に朱を塗っている。３～５㎜大の砂粒を含み，焼成はあまい。 ・ＡＣ１は肩部破片で，すり消し縄文技法を駆使した東北の影響を強く受けたもの。肩の稜線上に，刻み目をもつ２本の隆帯を走らせ，途中にコブを２つはりつけている。砂粒を含まず焼成は堅緻である。 ・中実土偶らしき破片（ＡＣ28）は不明の点が多い。	・ＡＣ１はⅢＣ区谷黄灰色砂出土。 ・ＡＣ２，ＡＣ４はⅢＤ区貝塚黒色砂混泥土出土。 ・ＡＣ28は，ⅢＣ区墓址黒色泥砂。出土。 ・中実土偶の例は，大阪府馬場川遺跡に多くみられる。
スタンプ形土製品	1	ＡＣ３	・小円盤に平面三角形の頭部をのせたもので，頭部の頂平坦面と側面とに三角形のくり込み文を配し，円盤側面に刺突文をめぐらせている。 ・円盤底面には剝離した痕跡がある。 ・砂粒少なく，焼成は堅緻良好である。	・ＡＣ３はⅢＣ区墓址内を流れる６世紀代の溝内から出土しているが，縄文時代のものである。
有孔土製品	1	ＡＣ５	・長径５㎝の卵形の土製品で，中央に２孔貫通させている。この孔を中心に基本的には長軸・短軸ともに３本ずつ，ヘラないしは繊維状のものによる沈線を配している。 ・仕上げのナデもあらく，胎土中には砂粒・雲母片を含んでいる。	・ＡＣ５はⅢＤ区貝塚黒色砂混泥土出土。
耳栓	2	ＡＣ６ ＡＣ７	・やや厚みのある円盤の両面を凹ませたもので，装飾はない。 ・大小の２種あり，ＡＣ６は直径1.7㎝で，つくりはあらい。ＡＣ７は直径3.3㎝で，雲母片を含み丁寧に仕上げている。	・ＡＣ６，ＡＣ７ともにⅢＤ区貝塚黒色砂混泥土出土。ＡＣ６は貝ブロック中から出土。
丸玉形土製品	2	ＡＣ８	・完形品と破片とがあり，ＡＣ８は長径1.5㎝の不整球形で，中央にあらく孔をあけている。砂粒を含む。	・両例ともⅢＤ区貝塚黒色砂混泥土出土。
把手形土製品	1	ＡＣ９	・断面は長楕円形で，約３㎝の長さがあり，剝離面があるので把手のようについていたものであろう。小砂粒，雲母片を含む。	・ＡＣ９はⅢＤ区貝塚黒色砂混泥土出土。
粘土と漆の練製品？	3	ＡＣ10	・焼成品ではなく，粘土と漆を練り固めた製品と思われる。 ・ＡＣ10のように芯のあるものと，他の２例のように芯のない扁平なものとがある。 ・ＡＣ10は細長い木の皮を管状に曲げ，それを止めしばるように細い樹皮を巻きつけたものを芯として，その芯の外側に粘土を漆で練ったものをはりつけている。表面に朱を塗り最後に漆を一層塗って仕上げている。 ・ⅢＣ墓址の207号と81号土坑内より発見された２例は破片のため，残念ながら全体の形状がわからない。81号集骨葬中にはさまっているものの現状からは，イノシシ製腰飾のような形を土製品で扁平につくったものと考えられ，一端に一孔あいている。いずれも表面には朱を塗って	・ＡＣ10はⅢＤ区貝塚黒色砂混泥土出土。 ・他の２例は，ⅢＣ区墓址81号と207号土坑内出土。 ・81号集骨墓出土のものは，集骨を分解していないので，取り出せていない。 ・成分分析は今後おこなって結果を得る予定である。

種　　類	個数	遺物No.	特　　徴	備　考（層位）
			いる。いずれも表面には朱を塗っている。	
土製腕輪	7	AC11 〜 AC14 AC27	・完形品はなく，両端部がわかるものがないが，橿原遺跡で多量に出土しているものと同じように，断面長楕円形の半円弧形の土製品で，両端部付近に孔があくものであろう。 ・断面の長径は1cm〜3.8cmまで大小の各種がある。 ・3〜5mmの砂粒を含み，一般につくりはよくないが，AC14は外表面を丁寧に研磨している。また孔をあけた後に，孔の一端を切っているのも特徴的である。	・ⅢD区貝塚灰褐色泥土出土はAC12，他に1例。 ・ⅢD区貝塚黒色砂混泥土出土はAC11，AC14，AC27，他に1例。 ・ⅢC区谷黄褐色砂出土はAC13。 ・奈良県橿原遺跡に類例が多い。
土版形土製品	1	AC15	・推定直径17.5cmの円盤で，上面はやや内凹みとなっている。 ・円盤上面に連続刺突文によって区画をつくり，その間を楕状のもので，円弧文を描いている。円盤の側面にも楕状のもので斜行文をつけている。 ・砂粒・雲母片を含む。	・AC15はⅢC区墓址黒色泥砂出土。 ・土器の口縁部ではないかとの疑いがもたれたが，土器にしてはカーブがおかしいので土製品とした。
紡錘車	34	AC16 〜 AC26 AC29 〜 AC33	・土器片を利用して，ほぼ円形となるように周囲を打ち欠き，中央に孔をあけている。孔をあけていないもの5例（AC22）やあけかかっているが貫通していないもの（AC16）1例も含めている。 ・直径の最小例は2.4cm，最大は6.3cmで，平均3.8cmとなる。完形品26例の重量は，最小3.5g，最大34.9gで平均11.1gとなる。 ・黒色磨研土器を利用したものが2例あり（AC20）他は全て深鉢か甕を利用しており，有機物の付着しているものもある。 ・周囲を打ち欠いて成形したにとどまるものが圧倒的に多く25例あり（AC17，AC19，AC20，AC23），これに対してその後更に円周端部をこすって仕上げているものは9例しかない（AC16，AC18，AC21，AC22，AC24，AC25，AC26）。この内には，口縁部をとり込んだものが2例ある。（AC24，AC26） ・もとの土器の内面の孔の周囲に，直径にして1.2cm〜3.5cmの間に同心円状の擦痕が走るものが4例あり，（AC17，AC19，AC20，AC23）その内のAC19は，内外両面にこの擦痕がある。	・ⅢD区貝塚ピート出土は2例。 （AC25，AC31） ・同上・灰褐色泥土出土は11例。 （AC18，AC23，AC24，AC30，AC33） ・同上・黒色砂混泥土出土は10例。 （AC16，AC19，AC20，AC22，AC26，AC29） ・ⅢC区谷黄褐色砂出土は7例。 （AC17，AC21，AC32） ・同上・第2ピート・黄灰色砂出土は2例。 ・ⅢC区墓址51号土拡内より1例出土。

第2章　弥　生　時　代

1. 遺　跡　の　調　査

(1)　方形周溝墓（図版9～11，第2・7～9図）

位　置　　ⅢF区北端よりⅣB区にかけて，方形周溝墓群を検出した（第2図）。調査範囲が限定されていたために，墓域の全域を確認することはできなかったが，弥生時代中期前半より古墳時代前期にかけての方形周溝墓が，少なくとも8基以上存在することが知られた。

方形周溝墓は，いずれも比叡山塊から琵琶湖の方向にむかってのびる複合扇状地の先端に近く立地する。各方形周溝墓は，後世の削平によって遺構の上半部はほとんど失なわれ，完存するものはない。

大津市北郊の地域では，すでに1957（昭和32）年に，南滋賀遺跡において弥生時代の方形周溝墓と土壙墓群とが発見されているが[1)]，今回の調査でさらに新しい資料を加えることができ，当地の弥生時代から古墳時代にかけての墓制を明らかにする上で，有力な手掛りを把むことができたといえよう。

以下，今回の調査で検出した方形周溝墓について概述し，各方形周溝墓の提起する問題を若干検討することにしよう。

なお，今回の調査で検出した8基の方形周溝墓のうち，古墳時代に属する3基については，主として第3章で扱うことにした。

ⅣB区3号溝（図版10，第9図）　　1号方形周溝墓の北東約9mの地点で，1辺の溝が検出された。溝は現長で7.7mあり，黄灰色砂層を「U」字形に切り込んでつくられている。溝の方向はN—60°—Wである。溝内には，上層に黒色泥砂層，下層に灰黒色泥砂層がレンズ状に堆積していた。この内，上層の黒色泥砂層中に，やや距離をおいて倒れた状態で2個体の壺が検出された。溝の形状，溝内堆積土の状態，土器の出土状況から考えて，この溝は方形周溝墓の南辺にあたり，西辺は調査区域外にあり，北・東両辺は，2号

溝や現代の溝によって破壊されたものと思われる。出土した土器は畿内の第2様式に併行し，今回発見された方形周溝墓の中では最古の時期に属している。

ⅣB区6号方形周溝墓（図版10，第7図）　西辺と南・北両辺の一部の計3辺が検出されたが，大半は発掘区東方の調査区域外にある。西辺は全長12.3mの規模を有し，その方向はN—21°—Eである。南辺は浅く，北辺は比較的深いが，溝は黄灰色砂層を鋭く「U」字形に切り込んでつくられている。各辺のコーナーでは溝底が若干浅くなる傾向があるが，いわゆる「陸橋部」[2]はなかった。溝内には，上層に黒褐色泥砂層が，下層に黒灰色泥砂層がレンズ状に堆積していた。溝内からは縄文時代後期の土器片から弥生式土器，須恵器・土師器，中世土器までの小破片が出土したが，周溝内におけるこれらの土器が混合して含まれる土層は，肉眼によっては識別が不可能であった。しかし一応古墳時代以降の土器は，後世の削平攪乱による流入と考えられよう。調査範囲内では周溝以外の関連する遺構は検出されなかった[3]。

ⅣB区11号方形周溝墓（図版11，第7・8図）　6号方形周溝墓の北に位置し，連結した状態の西辺と南辺との2辺が検出された。東辺と北辺とは，ともに後世の破壊を受けており，検出することはできなかった。南辺は現長6.9mを測るが，本来はもう少し長いものであったと考えられる。南辺の方向はN—68°—Wである。溝は黄灰色砂層を「U」字形に切り込んでつくられ，溝内には，上層に黒褐色泥砂層，下層に灰黒色泥砂層がレンズ状に堆積していた。この内の灰黒色泥砂層から，保存の良い土器が8個体分出土した。南辺では畿内第4様式に併行する完形の壺2個体，下端部を欠く壺1個体，完形の甕1個体，脚の一部を欠く高杯1個体が出土した。また西辺では，近接した状態で第4様式の壺と甕各1個体が出土した。これらの土器はいずれも溝底からわずかに浮いた状態で出土している。なお，周溝以外の関連する遺構は検出されなかった。

ⅣB区12号方形周溝墓（図版10，第8図）　11号方形周溝墓の北西に位置し，南辺と西辺との2辺が検出された。東辺はすでに削平をうけて消失しており，北辺は調査範囲外に及んでいる。南辺の方向はS—56°—Wである。南辺と西辺とのコーナーに「陸橋部」が形成されているが，この地域が大幅に削平をうけていることから，本来存在したものかどうかは疑わしい。南辺の溝は「U」字形に，西辺の溝は比較的深い「V」字形に切り込んでつくられている。溝内の堆積土は，いずれも黒褐色泥砂一層のみである。西辺の溝底から浮いた状態で，第4様式併行と考えられる壺2個体がほぼ完形で出土したほか，小破片もみとめられた。また，西辺の外側に，東西1.8m，南北1.9mの円形土壙（5号土壙）が

検出された。壙内からはほぼ同時期と思われる甕の破片が出土しているが，それがこの方形周溝墓と関係するものかどうかは不明である。またこの５号土壙が埋葬施設であるかどうかも判断しがたい。

ⅣB区14号方形周溝墓（図版９・10，第９図）　６号方形周溝墓の西に位置し，断続しながらも四辺が全て検出された。東西にやや長い長方形の平面形態であり，長辺の全長は10m，短辺の全長は8.1mを測り，西辺の方向はN—23°—Eである。東北と東南との両コーナーで「陸橋部」が認められたが，付近は後世の大幅な削平を受けていることから，本来「陸橋部」が存在したかどうかは明らかでない。溝の横断面は「V」字形に近く，黄灰色砂層を切りこんでつくられている。溝内には，上層に黒褐色砂泥層，下層に黒褐色泥砂層がそれぞれレンズ状に堆積していた。東辺中央部の溝底にほとんど密着した状態で，第２様式の甕がほぼ完形で，また南辺の東端では口縁部を欠いた第２様式の壺が検出された。なおこの他に時期不明の小片が出土したが，方形周溝墓に関係するものかどうかは判定できない。周溝以外には関連する遺構は検出されなかった。

小　結　今回の調査で検出した弥生時代の方形周溝墓は，すべてⅣB区の山側から湖の方向へ張りだす複合扇状地上に立地し，一群のものとすることができる。

遺跡の広がりは，調査範囲の関係で東西の限界をつかむことはできなかったが，南北限は，ともに浅い谷で区切られている。

５基の方形周溝墓は，先述のようにいずれも一部または大半が欠失あるいは未確認で，その全貌を明らかにし得たものはないが，残存した溝はすべて断面がUないしV字形に整然と切りこまれ，溝内の土器出土状態も，方形周溝墓一般に特徴的なあり方を示していた。

この５基の方形周溝墓の所属年代[4]は，ⅣB３・12・14号が畿内第２様式に併行し，ⅣB11・12・14号は第４様式に併行する。一応，弥生中期のうちに概括されるが，この方形周溝墓群を一群として把え，これに未発見，既破壊の方形周溝墓を考慮すれば，この墓址の存続期間は弥生中期の範囲を越えて，さらに延長するものと推測される。次章で述べるように，弥生時代方形周溝墓群の立地する扇状地と谷一つを隔てた南方の扇状地上とには，古墳時代の前半期に属する方形周溝墓３基が検出されており，この両者は，それぞれ長期にわたって連続する墓址の一部であり，一群として把えるべきものかもしれない。

なお，大津市北郊では，すでに南滋賀遺跡で弥生時代の方形周溝墓と土壙墓群とが発見されており，これと今回発掘した方形周溝墓群との関連を早急に明らかにしなくてはならない。ⅣB方形周溝墓群の場合，土壙墓との併存は確認できなかったが[5]，調査地点西方の

水田下には墓址の中心部が遺存していることは確実なので，今後の調査結果が待たれる。

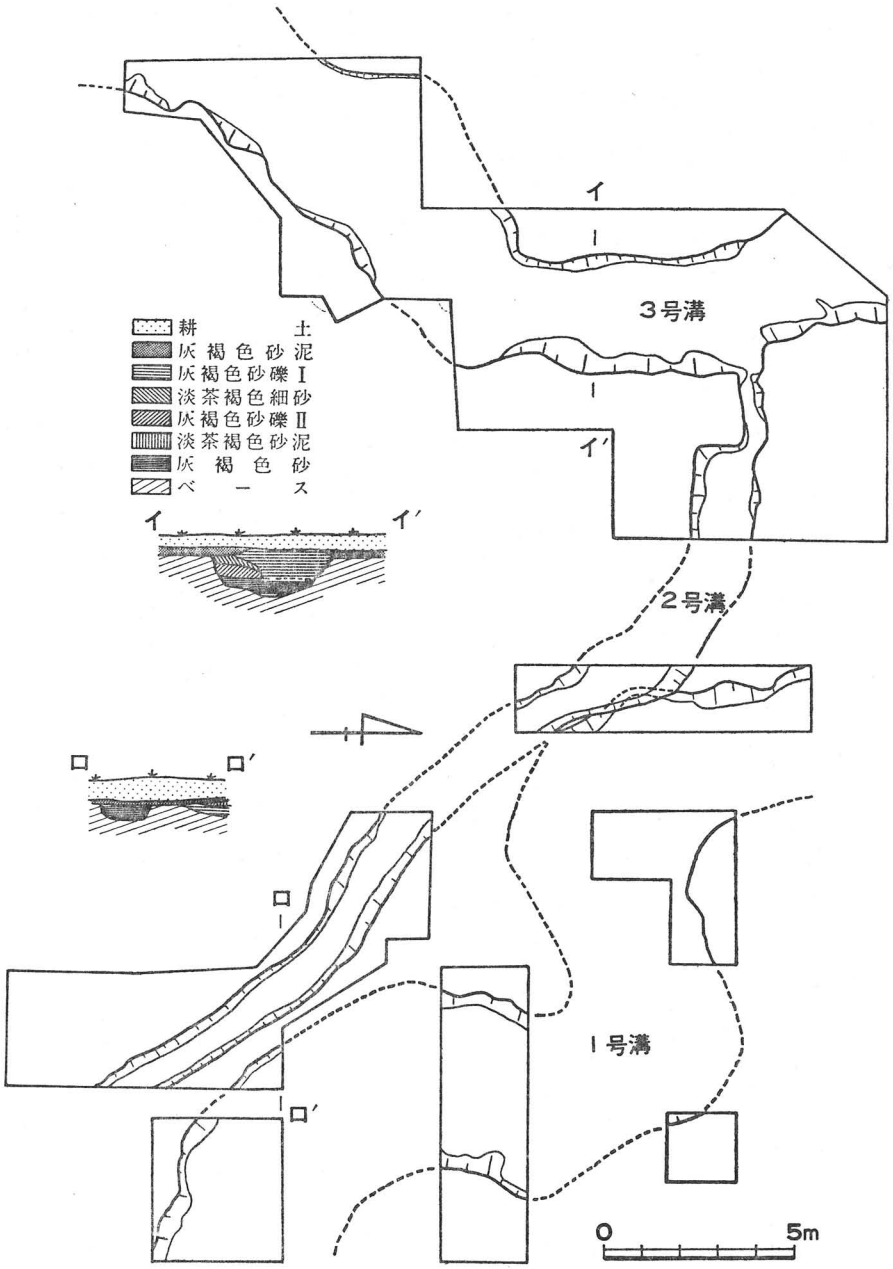
墓址と関連して，弥生時代集落址の所在が問題になるが，今回の調査ではその位置をつかむに至らなかった。しかし，後述のようにほぼ全地区から，多少の差はあれ弥生時代の遺物が出土しており，墓址に対応する集落址の所在を確定し，その内容や墓址との関連を考究できる日も，それほど遠いことではない。

(2) 溝跡・その他（図版12）

Ⅰ区の調査（図版12）　Ⅰ区の調査範囲は柳川の南岸から湖西線北大津駅予定地の北端までである。我々が行った全調査区の最南端部にあたり，その範囲は南北500mにわたる。Ⅰ区の北限である柳川は，もと琵琶湖に突出する柳ヶ崎にむかって流れていたが，1940（昭和15）年，近江神宮造営にともなってその河川敷が埋立られた。その結果，現在の柳川は河口を北にふって琵琶湖にそそいでいる。新路線は北大津駅を出発して，旧柳川等の流れによって形成された扇状地の裾部を走る。路線敷の海抜はおおよそ90m前後である。調査地点の内，扇状地中央部にあたるA・B・C各区は，現在大津市錦織の集落にあたり調査の対象から外さざるを得なかった。後日，このA・B・C区の掘削工事の所見では，泥土・砂土・砂礫からなる互層状の厚い流れ堆積が見られた。このような事情で，われわれが調査を実施したのは扇状地の南半部裾である（D区からF区まで）。扇状地の南半部裾は，現在宅地になっている部分以外は積土や削土を行って耕地化されている。後述するE・F両区で検出された弥生時代の溝以外は，基本的にはA・B・C各区と同様の，流れ堆積砂土中に微量の土器片を含む所見が得られたのみで，何等の遺構も検出されなかった。ところで，調査を行った海抜90m等高線付近は縄文時代の湖岸線と考えられているが，D・E・F各区における土層の堆積状況から，新路線部分は湖岸に近い湿地帯か，もしくはそれに近接する地帯であると見られる。ちなみに1885（明治18）年測量の2万分の1地形図では，この部分が湿地に近接する地帯として表現されている。

北大津駅予定地に近接するE・F区からは弥生時代の溝が検出された。テストグリッドで溝の一角を確認した時点で，溝の周辺をくまなくボーリング調査を行ったが，溝以外の遺構を認めることはできなかった。この所見によって，発掘区を南北25m，東西35mに限定し，溝の平面的ひろがりを追究することに主眼をおいた。その結果挿図10に示したように3本の溝を検出した。発掘区の東側より，1号・2号・3号溝と命名した。各溝は現耕作面下40cm～50cm下に，広範囲に見られる暗茶褐色砂利混泥土層から切りこまれている。

溝の側壁・底部は花崗岩霏爛土の流れ堆積砂からなる。上記泥土層は均質な有機泥土からなり，内に多くの植物繊維と微量の縄文式土器片をはじめ，弥生第２・第３様式の土器



挿図10　Ⅰ区１～３号溝実測図

細片を含む。各溝とも溝底までの深さは約1mで，溝底は南に序々に下ってゆく。しかし，溝の機能は扇状地の高みからの大きく２段階にわかれる流れ堆積によって，失なわれている。１号・３号溝は握りこぶし大の礫を含む砂礫の流入によって一時その機能を損じた。それからしばらくの間，流路として存続したようだが，更に激しい砂礫の流入によって完全に埋没してしまった。２号溝はこの埋没前後，砂土の流入によってその機能を終えたと考えられる。

１号溝の断面図から明らかなように，この砂礫の流入は相当急激な流れ堆積であったと見られる。さて，溝のプランに見られるように，２号溝と３号溝の接合する部分で２号溝が急にその幅を減ずる。水の取入口のような性格をもった遺構と想定して精査したが，何等の施設も発見できなかった。又，この接合部での両溝底のレベル差はない。溝内出土の土器片から溝の年代を考定すれば，１号溝は弥生時代第２様式又は第３様式に併行する。２号・３号溝は弥生時代第５様式の時期と考えられる。両溝内からは縄文晩期末，弥生第１様式から第５様式までの土器細片が流れこんでいた。又，１号溝からは２号溝と切り合う部分の溝底から古いタイプの平鍬１，丸鍬未製品１，加工木片１点が出土している。３号溝からは，溝を完全に埋めてしまった灰褐色砂礫Ⅰ層から，研ぎ直した直後の磨製石斧２点，磨製石鏃１点，石庖丁を加工した有孔円盤１点が出土した。これらの溝の性格であるが，１号溝に関してはそのプランが示す蛇行ぶりから考えて自然流路と考えたほうが適当であろう。２号・３号溝については，規格性は乏しいが，人工の溝と考えられる。ボーリング調査によれば，この２つの溝にともなう遺構の存在は考えられない。調査の結果，10ないし20cmの厚みをもつ暗茶褐色砂利混泥土のほぼ水平に近い堆積が広範囲に確認された。さらに，この泥土層上部に２～３層のきわめて薄い微砂の堆積が確認されている。無遺物で，環元状態を呈する。加えてこの微砂層が２号・３号溝の内部に流れこんでいる状態が検出されている。この所見はすくなくとも，この一帯が始終冠水の状態にあったことを暗示している。明治18年代のこの地点付近の状況を加味して考えれば，これらの溝が湿地もしくは湿地に近接する位置にあることを示している。以上の事から，２号・３号溝が湖岸付近の湿地にともなって作られた排水機能をもった溝と考えられる。これらの所見からこの溝にともなう集落址等の遺構は各溝からさほど遠くない扇状地の高みに位置すると思われる。研ぎ直し直後の磨製石斧や木製農具の出土はそれを示している。なお，本調査地点から北へ100mのグリッドでは，表土下２mの泥土層より，弥生第１様式(中)の土器片が微量出土した。それらの土器はあまり磨滅をうけておらず，生活の場がこれら扇状地の

裾部からすぐ近くにあることを示している。

各区の調査　弥生時代の遺構を確認した地区は，前記の通りⅣB区方形周溝墓群とⅠ区溝跡のみであったが，遺物はこの他の全地区で検出された。

まず，ⅢE区開析谷の各堆積土中より，畿内第1様式(新)に併行の土器片（青灰色微砂層及び暗褐色泥土層），弥生中・後期に属する土器片（灰褐色砂層）若干量が出土した（図版12，第14図)。いずれも土砂と共に流れ堆積したものである[6]。これらの弥生式土器片と同一層中から検出した多量の植物遺体については，放射性炭素による年代測定を実施した[7]。

また，ⅢE区開析谷とほぼ同様の規模をもつⅣB区開析谷の堆積土中からも，若干量の弥生式土器片が出土した。

弥生式土器の小片は，このほか全区にわたって検出されたが，その多くは開析谷中に流れ堆積したもので，量的にも微少であった。しかし，今回調査した湖西の平野部には，二群の墓址があり，しかも微量とはいえ全地区にわたって遺物が点在する状況を考えれば，近くに各期の弥生時代集落が営まれていたことは確かであろう。

2 遺物の検討

(1) 方形周溝墓出土の土器（図版59～61，第50図，第19表）

中期前半の土器　ⅣB区3号溝と14号方形周溝墓出土の土器は共に中期前半第2様式に属する。壷（B1）は唐古第2様式中[8]に類品が見られ，（B2）は南滋賀遺跡出土品[9]中に類例が求められ，腰の高い器形である。（B2）は文様帯の下部を欠いているため断定はできないが（B1，B2，B3）ともに直線文帯以外の櫛描文を施されていない事実は一応注意しておくべきであろう。甕（B4）は口端に押捺手法を有する近江，伊勢湾地方の地域的特色の濃い土器である。

中期後半の土器　ⅣB区11号方形周溝墓では西溝と南溝の2群に分かれて土器が出土したが，共通の特徴をもつ壷が両群から出土したことや，土器が接するように並んで倒れていたり，おり重なるように倒れて埋没している（図版11，第7・8図）出土状況から見て，全ての土器を同一時期の所産とした[10]。甕（B13）の内面箆削りの手法は，近江地方，畿内地方には類例が少ない[11]。甕（B5）は長浜市鴨田遺跡[12]にも類例を見るが，第2様式の後半に出現する「近江型[13]」の甕の系譜に含まれるものであり，この型の甕が確実に第4様式ま

で続くことを示す例として注意しておくべきであろう。

(2) 各地区出土の土器（図版62•63，第51図，第20表）

土器の出土状態　前記の方形周溝墓以外からも弥生式土器は各地区で少量ずつ出土しているが，そのうちでも比較的まとまった資料を得たのはⅠ区とⅢ区であった。すなわちⅠ区の1～3号溝の各溝内と，ⅠD•ⅠE•ⅠF区と，ⅢE区包含層出土の土器群が観察の主たる対象となるのであるが，いずれも殆んどが小破片である上，各時期の土器が同一層内に混在しているという出土状況であり，その内容は必ずしも良好であるとはいいがたい。しかしながらⅠD区，ⅢE区では，少量とはいえ前期の土器のみを出土する層も確認している[14]。こうしたことから観察に際しては各地区出土の土器を一括した上で，大きく前期，中期，後期に分けてあつかった。なお，前期の土器は数量が僅かであるため，同一器種のものについては細分を避け，全て一括してあつかった。

削り出し突帯土器の検出　ⅢE区の青灰色微砂層中より，他の前期の土器片に混じって僅かに一例のみであるが，頸部に削り出し突帯を有する壺形土器を検出した。この削り出し突帯の技法は弥生時代前期の中頃まで遡り得る時期の所産であるとされ[15]，滋賀県下では最古の弥生式土器の一つである。従来滋賀県下では前期の内では最も新しい段階の土器のみが南滋賀遺跡や米原町入江遺跡，安土町大中の湖南遺跡[16]などからの出土品で知られていたのであるが，現在では削り出し突帯の段階のものが，長浜市川崎遺跡でも発見されており[17]，今回の調査によって更に新たな一例をつけ加えることになったが，こうした事実は近江地方における弥生文化の開始時期を，畿内以西の諸地方のそれに従来よりもいっそう近づけることとなったのである。

前期弥生式土器の出土地点　さて今回の調査で得た前期弥生式土器の出土地点をみると，Ⅰ区，ⅢC区，ⅢD区，ⅢE区，ⅣB区というふうに皇子山から滋賀里(第1図を参照)にかけて点々と分布し，主要な遺物出土地点の殆んどから前期弥生式土器を検出している。これらの多くは，より新しい時代の遺物群に混入した状態で出土しており，したがって本来どういう性格のどれくらいの規模の遺構に伴なっていたものかを知ることはできないが，たとえ小規模なものであれ，本地域で始まって間もない弥生文化が一地点に偏在することなく，かなり広域にわたって定着していたことが窺えるのである。

また，前期弥生式土器が検出された各地点から，縄文後・晩期の土器が例外なく検出されているが，これは文化相を全く異にしながらも，縄文後・晩期の生活圏を弥生前期まで

そのまま踏襲したことになり，縄文から弥生への移行期の様相を探る上で，一つの示唆を与えるものであろう。

中期甕形土器の一類型　今回の調査で方形周溝墓以外の地点から得た弥生式土器は，第20表のとおりであるが，これまでに気づいた点を問題として提起し今後の検討を待ちたいと思う。

従来，近江地方における中期前半，第２様式の甕形土器は佐原氏によってＡ・Ｂ２類に分類され，それぞれ畿内型，近江型の甕として理解されてきた[18]。この内Ｂ類はより後出的であるとされ，最近調査された京都市山科の中臣遺跡では第２様式古段階の実体が明確となり，その中には近江型の甕は含まれていないという[19]。さてこのＢ類として分類される土器には，口縁外端をおさえて幅広い端部をなすもの，明確に屈曲して立ち上がる口縁をなすもの，また波状口縁になるものとそうでないものとが一括して含まれているようである。今回の調査で得た土器の内，B_1,B_2としたものや，Ｃの一部もこれに含まれるであろう。そしてこれらの土器群を細分し得ることについては既に「大辰巳遺跡のＢは南滋賀のものに比べて装飾性に乏しく，両者の間に若干の地域差，あるいは年代差が介在する可能性があるが……」という指摘があり[20]，その後においても琵琶湖南岸地域のＢと北・東岸地域のＢとの間の装飾性の差異について言及されている[21]。

以上の研究を受けた上で，今回の調査で得たこの種の甕形土器は，Ｂ類，Ｃ類として分類した。その中でC_2は刷毛目の手法が稀薄になり，口縁内側や頸部に列点文を多用しており，他とかなり異なるが，C_1の発展形態であると考え，同類に加えた。またＢ類，Ｃ類中には，土器片がいずれも小片であるためでもあろうが，南滋賀遺跡や京都市深草遺跡で指摘[22]されたような明確な波状口縁を復原できるものは一例もなかった[23]。

さて我々が分類したＢ類，Ｃ類土器について，その形態上の問題と年代的な問題について気づいた点を記しておこう。まず形態上の問題についてはＢ・Ｃ類の中間的形態ともいえるものが多く見られ，恐らく両者は一つの系譜で結べるであろう。またＡ類の中にも口縁外端を軽くおさえ，その部分に横方向の刷毛目を加えるものがある（B33）ことは，そこにＢ類の発生的要因の一つを窺えることを指摘しておきたい。年代的な点では，今回の調査におけるⅢＥ区灰褐色砂層出土の土器を検討した結果，甕Ｂ・Ｃ類はかなり含まれているが，甕Ａ類（第２様式畿内型の甕とされるもの）および第２様式甕は全く見あたらなかった。またⅣＢ区11号方形周溝墓ではＣ類の甕（Ｂ５）が第４様式の壺と共伴していた[24]。以上のことから従来第２様式の後出的形態である甕Ｂとして包括されていた土器群の内には

第３様式以降に降るものも含まれているのではないかと考えている。かくして甕Ｂ・Ｃ類の型式的問題と年代的問題について，Ｂ・Ｃ類は第２様式の甕Ａ類の要素をも受けて発生し，Ｂ・Ｃ類と発展過程をたどるが，それは第２様式後半に始まって第４様式まで系譜的につながるものであると理解し得るのである。いま，その細分とそれぞれの明確な年代的位置づけをなし得る資料はないが，いずれ我々が分類したＢ・Ｃ類をも含むいわゆる「近江型甕」の第２様式以降における変遷と地域性の問題が具体化されるであろう。

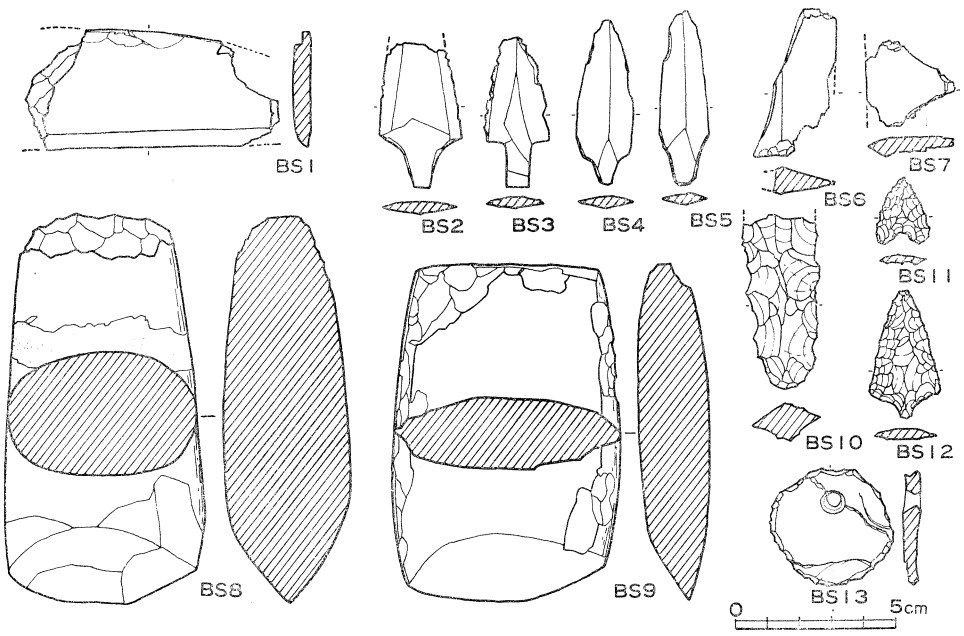
(3) 石器・木器

石　器（図版64—２，第18表）　弥生時代の石器は総数14点出土した。それぞれの出土地点と層位は第18表のとおりである。

石庖丁は破片であるが直刃のかなり大型品になるもようで，中期のものであろう。背には手ずれによる磨滅が認められる。磨製石斧（ＢＳ８，ＢＳ９）は共に完形品であるが，ＢＳ８はアックス，ＢＳ９はアッズである。ＢＳ８の刃部には数回の研ぎ直しが行なわれ，左右端部の損耗状態は不均衡である。また中央よりやや上方に帯状にめぐる敲打痕のような部分があるが，これについては柄の着装と関連づけようとする従来の見解に対し，否定的な意見が最近述べられた[25]。ＢＳ９は大型の片刃石斧で，この形態のものは小型扁平片刃石斧に比べ類例は少ない。出土層からみて共に中期のものである。重量はＢＳ８が510ｇ，ＢＳ９は290ｇである。打製石槍（ＢＳ10）は基部を残す破片である。残存部の最大幅2.3cm，厚さ1.1cmを測り，畿内地方で見られる通有の石槍と変わるところがない。石槍は石庖丁と共に近江地方では類例の少ない石器である。打製石鏃は無茎凹基式のもの（ＢＳ11）と有茎凸基式のもの（ＢＳ12）を各１点ずつ得た。重量はＢＳ11が0.8ｇ，ＢＳ12は2.9ｇである。磨製石剣は２点出土

第18表　弥生時代の石器一覧

種　別	番号	出土層位	石　材
磨製石包丁	ＢＳ１	ⅢＥ区黒色泥砂層	粘板岩
磨製石斧	ＢＳ８	ＩＥ区３号溝 灰褐色砂礫Ｉ層	輝緑凝灰岩層中の玄武岩質熔岩
	ＢＳ９	ＩＥ区３号溝 灰褐色砂礫Ｉ層	
打製石槍	ＢＳ10	ⅡＧ区灰色砂層	サヌカイト
打製石鏃	ＢＳ11	ＩＦ区２号溝 暗茶褐色砂利混泥土層	サヌカイト
	ＢＳ12	ⅢＦ区溝内黒色泥砂層	〃
磨製石剣	ＢＳ６	ⅢＥ区灰褐色砂層	ホルンフェルス
	ＢＳ７	ⅢＥ区黒褐色砂泥層	〃
磨製石鏃	ＢＳ２	ＶＤ区東半２号溝 灰褐色粗砂層	ホルンフェルス
	ＢＳ３	ⅢＥ区灰褐色砂層	〃
	ＢＳ４	ＩＥ区３号溝 灰褐色砂層	〃
	ＢＳ５	ＩＦ区３号溝 灰褐色砂層	〃
磨製有孔円盤	ＢＳ13	ＩＥ区３号溝 灰褐色砂礫Ｉ層	ホルンフェルス

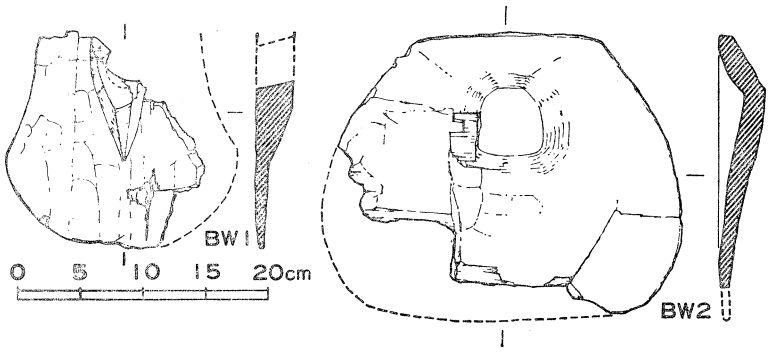


挿図11 各地区出土の石器実測図

している。いずれも小破片であるため，元の形状を窺い得ないが，ＢＳ６は中央に鏑を作っており，残存部での復原幅3.4cm，厚さ8mmを測ることができる。出土層位からは時期を限定できないが中期後半に属するものであろうか。従来県下で発見されている磨製石剣については，西田弘，黒崎直の両氏によってまとめられたものがあるが[26]，それによれば現在確認できるものは12点で，その内今回の調査地点に近いところでは，滋賀里町茶山と錦織町皇子山から各１点ずつ，いずれも鉄剣形のものが発見されている。今回さらに２点の資料を加えることとなったが，中期のある段階では本地域の各集落に１本以上の磨製石剣が所持されていたのではないかと考えている。磨製石鏃は４点出土し，いずれも茎を作り出しているが，鋒の形状が三角形をなすもの（ＢＳ２・３）と，細長く柳葉形に近いもの（ＢＳ４・５）とがある。磨製石鏃は中期中頃以降の「畿内北部を特徴づける石器」[27]の一つともされ，近江地方にもその類例は数多い遺物であるが，近江の東・北半地域と，西・南半地域では少し様相が異なるようである。西・南半地域では有茎式のものが多いのに対し，東・北半地域では最近調査された鴨田遺跡の出土例[28]にも見られるように，無茎式のものが目立った存在となり，中部地方との強い関連性が窺われる。他に有孔円盤が１点出土している。あるいは石庖丁を再利用したものかもしれないが，その用途については不明である。

出土層位から中期のものと考えられる。[29)]

木　器（図版64—1）　弥生時代の木器としてはⅠ区1号溝より出土した広鍬と丸鍬各1点を見るのみである。広鍬（BW1）は身の上半部と片側を欠失して全形を窺い得ないが，身の側縁は刃部にむかって外びらきに彎曲する。刃部は孤状を呈する。着柄孔を穿ってある舟形の突起部は約3㎝と厚くしっかりとしており，その先端部は長く延びない。着柄孔は，柄の角度が身の刃先に対して77°の角度をなすように穿孔されている。身の隆起部がある側の表面には，製作時の削り痕が一部に残っている。カシ材使用。丸鍬（BW2）は下端部の一方を欠失しているが，ほぼ全形を復原できる。それによれば上下23㎝弱，左右28㎝余りの隅丸台形状をなす。着柄孔がとりつけられる部分に向って徐々に高くなり，裏面はそれに対応して中くぼみとなる。しかしながら，着柄孔は未だ穿たれておらず，本資料が未製品であることを示す。カシ材を使用。



挿図12　Ⅰ区1号溝出土の鍬実測図

註　1）田辺昭三『大津市南滋賀遺跡調査略報』大津市教育委員会　1959年

2）「陸橋部」という用語の命名は下記の論文でおこなわれた。しかし本来意図的に造られた施設かどうかが問題となる。

大塚初重・井上裕弘「方形周溝墓の研究」（『駿台史学』第24号）1969年

3）周溝で囲まれた内区に遺体を埋葬した墓壙の確認された例がふえている。大阪府瓜生堂遺跡では封土をもつ方形周溝墓が発見され，封土中に木棺と甕棺とが検出されている。

『瓜生堂遺跡』中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会　1971年

4）方形周溝墓の最古例は現在のところ大阪府池上遺跡の例であり，畿内第1様式(新)の時期に属している。

『池上・四ツ池』16・17　第2阪和国道内遺跡調査会　1971年

5）一般に畿内では方形周溝墓と土壙墓とが単位をなして一つの墓址を構成する例が多い。滋賀県南滋賀遺跡（註1），大阪府瓜生堂遺跡（註3），同宮の前遺跡（富岡好久「考古学上に現わ

れた池田」『新版池田市史』概説編）1971年　などに典型的にみられる。

6）ⅢＥ区の開析谷の調査については第３章の「ⅢＥ区の調査」で詳しく扱っている。

7）年代測定は，京都産業大学理学部助教授山田治氏におねがいした。測定資料は，暗青灰色微砂層～灰褐色粗砂層から出土した流木類である。これらの各層は，弥生前期の層と中・後期の土器片を含む層との中間に位置する。

8）末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』（京都帝国大学文学部考古学研究報告16）　1943年

9）肥後和男「滋賀村出土弥生式土器」（『滋賀県史蹟調査報告』第３冊）　1931年
田辺昭三『大津市南滋賀遺跡調査略報』1959年

10）土器の型式学的検討の結果を過大評価するのは危険である。現状で型式学の成果が圧倒的に大きいのは，遺物学に対する遺跡学の立ち遅れに起因する。

11）佐原真氏より，甕Ｂ13は技法的に西日本の影響を受けているという指摘を受けた。

12）川那辺正雄・中谷雅治他『長浜市鴨田遺跡発掘調査概要』（『滋賀県文化財調査概要』第８集）1972年

13）佐原真「先史時代」（『彦根市史』）1960年，「琵琶湖地方」（『弥生式土器集成』本編２）1968年，「1971年の動向，弥生時代(下)」（『月刊考古学ジャーナル』No.74）1972年
佐原真・田辺昭三「鶏冠井遺跡」（『東海道新幹線工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』）1965年
『彦根市史』や『弥生式土器集成』本編２では，「近江独自の甕形土器」あるいは「本地方に分布の中心をもつ，個性的な甕」という表現であるが，「鶏冠井遺跡」や『月刊考古学ジャーナル』No.74 では，「近江型の甕」あるいは「佐原のいう近江型の甕」という表現が行なわれており，両者の内容も同一と理解されるので，前２者の甕も「近江型の甕」として理解した。本章の(2)の記述においても同様である。

14）ＩＤ—2ny98（4×4）黒灰色泥土層．ＩＤ—2pk48（4×4）黒灰色泥砂層．ⅢＥ—2xw06（1×6）青灰色微砂層，暗褐色泥土層。

15）佐原真「山城における弥生式文化の成立」（『史林』第50巻第５号）1967年

16）肥後和男「滋賀村出土弥生式土器」（『滋賀県史蹟調査報告第３冊』）1931年
田辺昭三『大津市南滋賀遺跡調査略報』1959年
佐原真「先史時代」（『彦根市史』）1960年

17）丸山竜平他『国道８号線長浜市・近江町バイパス遺跡分布調査報告』1968年
大江命他『国道８号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書』1971年

18）前掲註13

19）佐原真「1971年の動向，弥生時代(下)」（『月刊考古学ジャーナル』No.74）ニューサイエンス社　1972年

20）佐原真『彦根市史』前掲註16

21）佐原真『弥生式土器集成』本編２前掲註13

22）佐原真・田辺昭三「鶏冠井遺跡」（『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』）1965年

宇佐晋一・小川敏夫・星野猷二「深草遺跡」（『古代学研究』第39号）1964年

23）したがって我々が分類したＢ・Ｃ類は佐原氏の分類による甕Ｂ（近江型）の内の一部であると考えられる。

24）（Ｂ５）に類似する土器は長浜市鴨田遺跡でも出土しているが，報告書には他の土器との共伴関係が明示されていないので，明確な年代的位置を知りがたい。ただ中期後半以降の土器に伴うことは確かなようである。前掲註12

25）佐原真「1971年の動向，弥生時代(上)」（『月刊考古学ジャーナル』No.68）ニューサイエンス社　1972年

26）西田弘・黒崎直「滋賀県下発見磨製石剣資料」（『滋賀文化財研究所月報』７，８，９）1968年

27）佐原真「大和川と淀川」（『古代の日本』５近畿）角川書店　1970年

28）前掲註12

29）石材の鑑定は，京都大学理学部助教授石田志朗氏におねがいした。

第19表　方形周溝墓出土の弥生式土器観察

器形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	備考
			ⅣB区　3号　溝	
壺	B1 B2	・B1は球形の胴部に長い頸部を有し，口縁部は胴部最大径とほぼ同じくらい広くなる。 ・B2は腰の高い胴部に余り長くはない頸部と外反する口縁部を有する土器と考えられる。	B1―・頸部から胴部上半にかけて1帯6条からなる櫛描直線文を9帯施し，口唇部にも同様の施文を行なう。口唇部下端には同じ施文具で刻み目を加える。直線文の描かれる方向は土器に向って左から右の方向である。 ・内外面とも一部に刷毛目を残す。 B2―・頸部から胴部上半にかけて1帯8条ないし9条からなる櫛描直線文帯を4帯以上配す。描かれた方向は右から左か。 ・内外面の一部に刷毛目を残す。	・B1は奈良県唐古遺跡出土の第2様式壺形土器に類似。 ・B2は大津市南滋賀遺跡出土の第2様式壺形土器に類似。
			ⅣB区　11号　方形周溝墓	
壺	B6 ～ B10	・胴の中程で最大径をとる卵形の胴部に短い直口の口縁部がとりつく。	・口縁部外端を軽く凹線風におさえる。 ・刷毛目調整を基本的な仕上げの技法とする。 ・B6・8・9は，胴部上半に叩き目を残す。 ・B8～11は，胴部下半を篦あるいは先端が粗く鈍い工具で削る。 ・胴部の最下部をナデ仕上げするものもある。 ・内面は原体の目に粗密の相異はあるが，いずれも平滑に仕上げられる。B8は下半部をナデ仕上げされる。 ・B8は胴部上半に篦による記号文様を加える。	・B6・8・10には煤の付着が認められる。
甕A	B13	・「く」字形に屈曲する口縁部は，端部が上下に肥厚する。 ・大きく胴部が張り，最大径は中程にある。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・胴部外面および内面上半部は刷毛目を施し，内面下半部は篦削を加えている。	
甕B	B5	・甕Aに比べ小型で，外反する頸部に続く口縁部は垂直に立ち上がる。	・口縁端部に刻み目を施す。 ・口頸部内面および外面全面に粗い刷毛目を残す。 ・胴部上半にはそれぞれ平行沈線で区切られた内を先端部の鈍い工具による刺突文で埋める文様帯を3帯配し，その間には平行沈線を入れる。	・長浜市鴨田遺跡から類似品が出土。
高杯	B14	・やや深い杯部の口縁端部に内傾する隆起帯を繞らせる。外周の水平線の端部は垂下しない。 ・脚部はラッパ状に開く。	・杯部内外面および脚部外面は縦方向の磨研痕を残す。 ・脚部内面はナデ仕上げされる。	
			ⅣB区　12号　方形周溝墓	
壺A	B11	・11号方形周溝出土の壺と同類であるが，本例の他と異なる点は，口縁端部	・口縁部内外面は横ナデ仕上げされる。 ・胴部外面は刷毛目調整の他，下半部には篦削りを加える。	

器形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	備考
		をやや内傾させ，胴の張りも他に比べてやや大きい点である。	・内面は先端が粗く鈍い工具によってナデ仕上げされている。	
壺B	B12	・卵形に長い胴部に外反する口頸部がとりつく。 ・口縁部内側に2個1対で向いあって2対の瘤状突起がはりつけられている。	・外面は全面にわたって縦方向の刷毛目を施し，内面の頸部以上にも横方向の刷毛目を加える。頸部以下はナデ仕上げされている。	・口縁内側の瘤状突起は近江，伊勢湾地方の地域的特色。
WB区　14号　方形周溝墓				
壺	B 3	・頸部以上を欠く破片。 ・胴部は中央部が大きく張る算盤玉に似た器形をなす。	・胴部上半には1帯10条以上の櫛描直線文帯を4帯配し，文様帯の間は研磨している。 ・胴部外面下半および内面には刷毛目を残す。	
甕	B 4	・外反する口縁部に続く胴部はあまり張らずに底部に移行する。	・外面は全面縦方向の粗い刷毛目を施し，口縁部内面にも横方向の刷毛目を加える。 ・口縁端部には刻み目を施す他，各々向いあう位置を1箇所ずつ押捺する。	・口縁端部を押捺する手法は，近江，伊勢湾地方の地域的特色。

第20表　各地区出土の弥生式土器観察

器形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	備考（層位）
壺	B22 〜 B28 B78 B79	・口縁部は素直に外反し，端部は丸くおさめる。 ・頸部は突帯および平行する沈線あるいは両者を併用した文様で飾られるものが殆んどである。 ・胴部は中程あるいはやや下のあたりで最大径をとり，上半部を突帯で飾られるものと無文のものとがある。 ・底部は大きく厚い。	・外面は原則として，篦による研磨で仕上げられるが，口縁端部付近は横ナデ仕上げされるものがある。また頸胴部の文様帯の近くおよび底部のあたりでは刷毛目を残すものが認められる。 ・内面も研磨を原則とし，一部刷毛目を残すものもある。 ・突帯は削り出しによる幅広い突帯を作り，その内に2条の沈線を施したもの（B22）を除き，全て貼り付け突帯である。突帯の構成は頸部の平行沈線帯の上に1帯のみを配すもの2片，上胴部に5cmの間隔をおいて各1帯を配するもの1片，頸部に2帯以上を平行して重ねるもの1片である。なお突帯には篦による刻み目を施すもの，指による押捺を加えるものがある。 ・沈線は頸部および胴部に施され，頸部と胴部の接合部に生じた段の上に施されるものもある。沈線の数は多いもので1帯に7条を数えるものがある。なお4条で1帯を構成し，それを3帯以上重ねるものもある。沈線間に刻み目	・胎土はいずれの土器においても粗い砂粒を含む。 ・色調は明るい灰褐色を呈するものが多い。 ・前期の層より出土した土器。 B22・26はⅢE区青灰色砂，B24・79はⅢE区暗褐色泥土，B27はⅢE区青灰色微砂，B28はⅠD区黒灰色泥土。 以上のもの以外は新しい時期の層内への混入品である。

器形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	備考（層位）
			を加えるものもある。 ・底部は円板を作り，粘土紐を巻き上げて成形している。	
甕	B29 〜 B32	・口縁部はゆるく外反して端部には全て刻み目が施されている。 ・頸部には沈線がめぐる。 ・胴部はそれほど張らず，そのまま底部に移行する。胴部最大径は口縁径よりも小さい。 ・底部は大きく安定している。厚さは壺よりも薄い。	・刻み目は篦で加えられ，幅広いものと細いものとがある。 ・沈線は篦によるもので，2条から5条のものまであり，それぞれ一帯のみ配されている。 ・外面は原則として，縦および斜目方向の刷毛目により仕上げられており，口縁部付近および内面はナデ仕上げされる。内面を磨研するものもある。	・色調は明るい灰褐色を呈するものが多い。 ・胎土には粗い砂粒を含む。 ・前期の層より出土した土器が1例あり，B31はⅢE区暗褐色泥土。 他の土器は全て新しい時期の層への混入品。
壺A	B35 B36 B97 B99	・やや長い頸部に続く口縁部は大きく外反する。 ・胴部は小片しかないためもとの形態を窺い難いが球形あるいは算盤玉形に近い球状を呈するであろう。	・B35は口唇部に刻み目を施す。頸部には櫛描直線文を数段連ねる。 ・B36は最下段に波状文を加える。 ・上胴部には直線文の上に扇形ないし，孤状の櫛描文を重ね一種の流水文としている。	・B35・36・97はⅠE区暗茶褐色礫混泥土，B97はⅠF区灰褐色微砂。 ・中期前半。
壺B	B37	・外反する口縁の端部を肥厚させる。	・厚い口縁端部の外側に波状文を，口縁内側には扇形文を配し，頸部には刷毛目の跡を残す。	・ⅢE区灰褐色砂。 ・中期中頃か。
壺C	B17 B38 B39	・口縁部の形態は壺Bと同様肥厚させたものと，B17のように端部を垂下させたものとがある。	・厚くした口縁端部の外側に凹線を施す。B17は凹線と直交する6条の沈線を加え，口縁内側には刺突文と波状文を配している。	・B17はⅣB区開折谷土師器包含層，B38はⅢE区灰褐色砂，B39はⅠ区1号溝上部砂礫。 ・中期後半が中心。
壺D	B40 B41	・口縁部を僅かに肥厚させる。	・B41は口縁部の一部に刺突文を加える。	・B40・41ともにⅢE区灰褐色砂。
壺E	B42	・直口する口縁部をなす。	・内外面に粗い刷毛目を残す。	・ⅢE区灰褐色砂。
壺F	B43	・口縁部はゆるく外反した後，端部は垂直に立ち上がる。	・外面は刷毛目，内面はナデによって仕上げる。	・Ⅰ区3号溝灰褐色砂礫Ⅰ。 ・壺D・E・Fともに中期後半か。
壺G	B45 B46	・口頸部は一度外反した後，鋭く屈曲して立ち上がり口縁部を形成する。	・口縁の内外面は刷毛目調整が施される。口縁外面あるいは内面に刺突文を加えるものもある。	・B45・46はⅢE区灰褐色砂。 ・中期中頃ないし後半。
壺H	B85 〜 B89 B98 B100 B102	・口縁部の形態が明らかでない頸胴部の破片で文様のあるものを便宜的に一括した。	・頸部に突帯をめぐらす。 ・平行直線文帯を重ねる。 ・直線文と波状文を交互に配す。 ・直線文とそれに直交する半截竹管による直線文とを重ねる。 ・斜格子文，あるいは斜格子文に扇形文	・B85〜B89はⅢE区灰褐色砂，B98はⅠ区2号溝灰褐色砂，B100・102はⅠ区3号溝灰褐色砂礫Ⅰ，B103は

器形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	備考（層位）
	B103		を加える。 ・刺突文を羽状に配す。	Ⅰ区3号溝灰褐色砂。 ・刺突文を羽状に配する土器は伊勢湾地方の影響を受けたもの。 ・中期中頃が中心。
甕A	B19 B33 B47 B48	・頸部で屈曲した後，大きく外反して口縁端部へ移行し，端部は丸くおさめる。	・口縁端部に刻み目を入れるものもある。 ・外面は縦方向の粗い刷毛目を残し，口縁内面は横方向の刷毛目を加える。口縁内側に波状文や列点文を施すものもある。	・B19はⅣB区2号溝，B33はⅠ区3号溝灰褐色砂礫Ⅰ，B47はⅠE区暗茶褐色砂利混泥土，B48はⅠ区1号溝灰褐色砂礫。 ・中期前半。
甕B_1	B34 B49 〜 B55 B57 B104 B105	・頸部以下を殆んど欠くため全形を窺い難いが，頸部でゆるく大きく屈曲した後，口縁部へ移行する。 ・口縁部は端部をおさえたり，やや内傾させることにより，幅広い立ち上り部を形成する。 ・いずれも小破片であるため，全形は明らかでないが，波状口縁をなす可能性のあるものも含まれる。	・口縁部の立ち上がり部は横ないし斜目方向の，以下は縦方向の粗い刷毛目で仕上げる。口縁内面にも横方向の刷毛目を施し波状文を加えるものもある。 ・口縁端部に刻み目を入れるものもある。 ・頸部に直線文を配するものもある。 ・甕A・Bいずれに属するか不明であるがこの類の底部には木葉痕を残すものがある。	・B34・49・54はⅠE区暗茶褐色混礫泥土，B50はⅢE区灰褐色砂，B51はⅠ区3号溝，B52はⅠE区黄褐色微砂，B53はⅠ区3号溝底部直上砂礫，B55はⅠE区褐色泥砂，B57はⅠ区2号溝灰褐色砂礫，B104はⅠE区暗茶褐色混礫泥土，B105はⅠ区3号溝灰褐色砂礫Ⅰ。 ・中期前半ないし中頃。
甕B_2	B106 B107	・甕B_1類に類似するが，本類の方がはるかに厚手大型である。	・内外面とも粗い刷毛目を施す他，口縁部に波状文や刺突文を加える。	・B106はⅠ区2号溝灰褐色砂，B107はⅠ区3号溝灰褐色砂礫Ⅰ。 ・中期前半ないし中頃。
甕C_1	B56 B58 〜 B65	・頸胴部の境で一度屈曲外反した後，再び明確に屈曲して垂直ないし，内傾して立ち上がり，口縁部を形成する。	・口縁内外の刷毛目の手法は甕B類と同様であるが，他に横ナデ仕上げが目だつ。	・B56・61・64はⅠ区3号溝灰褐色砂，B58はⅠ区2号溝灰褐色砂，B59はⅠ区3号溝灰褐色砂礫Ⅰ，B60はⅠ区1号溝砂層，B62はⅠE区黄褐色砂，B63はⅠ区3

器形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	備考（層位）
				号溝青灰色微砂，B65はⅠE区灰褐色砂礫。 ・中期中頃ないし後半。
甕C_2	B66 B67	・甕C_1と同様である。	・横ナデの他，刺突文が多用される。	・B66はⅢE区灰褐色砂，B67はⅠ区3号溝灰褐色砂礫。 ・中期後半か。
甕D	B68 ～ B70	・頸部以下を欠く小片であるが，頸部で「く」字状に鋭く屈曲し，胴部はかなり張ると思われる。	・口縁端部に箆あるいは櫛歯状の原体による刻み目を加える。 ・外面には縦方向の，内面には横方向の刷毛目を残す。	・B68はⅠ区1号溝青灰色微砂，B69・70はⅢE区灰褐色砂。 ・中期中頃ないし後半。
甕E	B21	・頸部で「く」字状に屈曲し，口縁端部は僅かに内側を突出させている。 ・胴部は中程よりやや上方で最大径をとり，口径よりも僅かながら大きい。	・口縁部と底部付近の内面はナデ仕上げをおこない，他は全面刷毛目を施す。	・ⅣB区15号土坑。 ・中期後半か。
甕F	B20	・頸部で「く」字状に屈曲し，口縁は上下に拡大して幅広い端部を形成する。 ・胴部はかなり張るもよう。	・幅広い口縁端部に凹線文を配する。 ・胴部外面剝離のため調整痕不明。内面はナデ仕上げされている。	・ⅣB区開折谷の土師器包含層。 ・中期後半。 ・壺になる可能性もある。
鉢	B76	・やや内彎気味で口縁端部に移行する。	・口縁上端面に波状文を配す。 ・外面は刷毛目，内面はナデ仕上げされるが，内面の一部にも刷毛目を残す。	・Ⅰ区1号溝。 ・中期後半か。
高杯A	B71 B72 B109	・直口型の杯部をなす。 ・B72は口端を肥厚させる。	・内外磨研仕上げ。	・B71はⅢE区灰褐色砂，B72はⅠ区1号溝灰褐色砂礫。B109はⅠ区2号溝灰褐色砂礫Ⅰ。 ・中期中頃か。
高杯B	B73 B74 B108	・直口型の杯部をなす。	・凹線文を配す。	・B73はⅠ区3号溝砂礫，B74・108はⅢE区灰褐色砂。 ・中期後半。
高杯C	B75	・杯部の外周に水平線をめぐらせる。 ・小片のため水平縁の端が垂下するか否か不明。	・内外面ともに磨研仕上げ。 ・高杯A・B・Cいずれに属するか不明であるが脚部片（B57）も出土。	・Ⅰ区2号・3号溝。ⅢE区灰褐色砂。B75はⅢE区灰褐色砂。 ・中期中頃ないし後半。
器台	B15 B16	・口縁端部をやや肥厚させたり，垂下させる。	・垂下させて幅広くした口縁端部に凹線文をいれたり，あるいは凹線文の上に円形貼文を加える。	・B15はⅣB区開折谷の土師器包含層，B16はⅣB区2号

器形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	備考（層位）
				溝。 ・中期後半。
把手付土器		・把手のみで器形を窺い難い。水差形またはカップ形土器であろう。		・Ⅰ区3号溝，ⅢE区灰褐色砂。
壺A	B44	・細く長い口頸部をなす。	・表面の磨滅が激しく，調整の痕を殆んど留めないが，口縁部には波状文を配しているのがわかる。	・Ⅰ区1号溝青灰色微砂。 ・後期か。
壺B	B18	・大きく朝顔形に開く口縁の端部を上・下に拡大し，幅広い端面をつくる。 ・頸部以下を欠くが，頸部では鋭く屈曲し，腰の低い球形に近い胴部をなすであろう。	・口縁の幅広い端面に，羽状の刺突文を配し，3本1単位の棒状貼文を数単位加える。貼文にも刺突文を施す。 ・外面は磨研，内面はナデ仕上げされている。	・ⅣB区開折谷の土師器包含層。 ・伊勢湾地方のパレススタイル土器の系統をひく。 ・後期ないしそれ以降。
鉢	B77	・頸部で屈曲した後，外反して口端に移行する。	・胴部外面は粗い刷毛目調整，内面はナデ仕上げされている。	・ⅢE区灰褐色砂。 ・後期か。
手焙形土器	B93 B94	・B93は蔽部の一部と鉢部の一部を残す。器形の決め手を欠くが手焙形土器の可能性が強い。 ・B94は蔽部の一部と鉢部との接合部を残す他，別に蔽部口縁の小破片がある。	・蔽部と鉢部の接合部外面には刻目を加え，刷毛目調整した蔽部の下部は3条の横位平行沈線で画した2段の斜格子文帯で飾る。 ・内面はナデ仕上げされている（B93）。 ・蔽部はまず接合部との境に1条の沈線をめぐらせ，それ以上は2本単位の横位の平行沈線で画された3段の文様帯を残す。下から1段目は幅の狭い段を縦位の2本単位の沈線で画し，内部は空白のままとしている。2段目は山形に画された内をさらに斜行沈線で埋める横位の鋸歯文帯を配す。3段目は1段目と対応する位置に置かれた2本単位の縦位の沈線で区画され，一方は空白のままとし，一方は斜行沈線で埋める。なお蔽部の口縁部に沿って一帯，2段目と同様の鋸歯文帯がめぐる模様である。鉢部との接合部には2段の刻み目が施される。内面はナデ仕上げされている。	・B93はⅢE区灰褐色砂，B94はⅣB区2号溝。 ・両例とも煤の付着は認められない。 ・後期。

第3章　古　墳　時　代

1　遺　跡　の　調　査

(1)　方形周溝墓（図版13，第10図）

立　地　今回調査対象としたⅢ，Ⅳ区辺りは，後代の開発によってほとんど平地化しているが，もとは山麓から湖岸の方向にむかって張りだした複合扇状地の裾部にあたっており，かなりの起伏があった。

発掘調査の結果Ⅲ，Ⅳ区ではほぼ東西に走る扇状地の開析谷を四筋確認したが，方形周溝墓群はこの浅い谷に区切られた扇状地の高みに立地する（第1図）。

方形周溝墓群の所在地点は，北から三筋目の谷をはさむ南北の扇状地上で，前章に述べた弥生時代の方形周溝墓群は，すべて谷の北側（北方群）にあり，この章で扱う古墳時代の方形周溝墓群は，谷の南側（南方群）と北側（北方群）とにまたがっている。

ⅢF区方形周溝墓（図版13，第10図）　ⅢF地区の北端に近く，方形周溝墓の東辺，南辺に相当すると見られる二溝が発見された。東溝はN—26°—Eの方向に，南溝は内角115°の角度で東溝につながる。

この溝は，過去に大幅な削平を受けており，わずかに溝底の一部を残すのみであった。発掘調査によって確認した溝の延長は東溝10.5m，南溝5.2mで，もとよりこれは本来の規模を示す数字ではない。

溝はいずれも黄灰色砂層を切り込んでつくられ，溝内には黒色泥砂が堆積していた。なお，南溝では溝内堆積土が外方へ不整形に張り出しているが，この張り出しが本来南溝に付属していたものかどうかは明らかでない。

南北に延びる東溝のほぼ中央部では，溝底が一段深くなっており，その辺りから小型椀（C5）直口壺（C1），甕（C4）各一個体分の土器が溝底より浮いた状態で出土した。これらの土器は，もともと周溝内に置かれていたものと考えてよいだろう。このほか，溝内より高杯脚部破片も出土している。

ⅣA区方形周溝墓（第10図）　ⅢF区方形周溝墓と，道路を隔てて北隣する地点で検出した。この遺構も過去に大幅な削平を受け，わずかに西北から東南方向に走る溝を確認しただけである。したがって，この溝を方形周溝の一辺と断ずるには根拠不足を否めないが，溝が黄灰色砂層をU字形に鋭く切り込んでつくられており，他の方形周溝墓の例ともよく似た状態が観察されたので，敢へて方形周溝墓の1つに加えた。

溝内には黒色砂土が堆積し，この土は若干周溝外の黄灰色砂層上部にも及んでいる。黒色砂土中から，若干の土器片，また攪乱された黒色砂土層中より碧玉製管玉（CS17）1個を発見した（挿図22）。なお，第10図でⅣA区溝状遺構とあるのが，これにあたる。

ⅣB区1号方形周溝墓（図版13－1，第10図）　ⅣA区方形周溝墓の北方約100mの地点にあり，四辺とも確認することができた。

その規模は南北辺10.4m，東西辺10.8mをはかり，ほぼ正方形に近く，南北辺の方向はN－33°－Eであった。四辺は完全に連続し，いわゆる陸橋部は存在しなかった。

溝は各辺とも黄灰色砂層を⌊字形に切り込んでつくられ，溝内には上層に黒褐色砂泥，下層に黒色泥砂の堆積がみられた。

周溝内より，土師器壺，甕，高杯などの破片が出土したが，いずれも小片で原位置を保つものではなかった。

小　結　今回調査した古墳時代の方形周溝墓は，3例とも後世の削平を受け，遺構の保存状態はよくなかった。したがって周溝内外に溝と関連した遺構を検出することはできなかったが，遺存の状態が比較的良好であったⅣB区の一例では，周溝の西辺がわずかに後世の削平を免れ，周溝本来の姿を推測する手がかりを残してくれた。

先に述べたように，方形周溝墓群の所在する扇状地は，なだらかな傾斜をもって西方の山麓から東方の湖岸にむかってひろがっている。今回は，この扇状地の裾部を10m前後の幅で南北に調査したにすぎない。したがって，原地形を考慮しながら方形周溝墓群のひろがりを復原すれば，今回の調査対象は墓域の東限に近いごく一部の範囲で，むしろその中心は，現在水田及び住宅になっている西方の高みにあたっていると推定される。

最近近畿地方では，大阪府宮の前遺跡[1)]をはじめ古墳時代に属する方形周溝墓の発見が相次いで報じられており，このたびの調査で更に新しい例を加える結果となったが，今回の3例は，いずれも5世紀中葉以前の時期に属するものと思われる。

まず，ⅢF区方形周溝墓の場合は，溝内出土の土器がいずれもいわゆる布留式土器[2)]に併行する時期の所産と考えられる。次にⅣA区方形周溝墓の場合は，明確な副葬土器が認め

られず，その所属年代は判然としないが，溝内より検出した土器片によって，ⅢＦ区方形周溝墓とほぼ同時期に属するものと考えられる。また，ⅣＢ区１号方形周溝墓の場合も，溝内発見の土器片中，年代の最も降るものはいわゆる布留式土器に併行する時期のものであった。

古墳時代の方形周溝墓に伴う遺物は，土器のほかに，ⅣＡ区方形周溝墓より発見された細手の碧玉製管玉１個だけである。

この項で取りあげた古墳時代の方形周溝墓は，その所属年代と所在位置から推して一群のものと考えられる。そして，この３例の方形周溝墓が所属する一群の墓域の中心は，恐らくほとんど破壊を受けることなく現在なお地下に埋没しているものと推定される。今回の調査結果をふまえた隣接地の継続調査が望まれる。

なお，この方形周溝墓群に近く，５世紀代以前の古墳が存在するが[3)]，方形周溝墓群と同時代，同地域の今一つの墓制である古墳との関連を明らかにすることは，今後の極めて重要な研究課題となるであろう[4)]。

(2)　竪穴住居址（図版14～16，第11・12図，第21表）

立　地　古墳時代の竪穴住居址は，南からⅣＢ・Ｃ区，ⅤＡ区，ⅤＤ区，の３地点で検出した。

いずれも山麓から湖岸へ向って舌状にのびる扇状地の上に営まれた集落址の一部であり，その中心部は，竪穴住居址を検出した地点の西方にひろがる水田下に，なお良好な状態で遺存しているものと思われる。

各集落址の南・北限は，それぞれ浅い谷によって明確に区分されているが，東・西限特に西方へのひろがりについては，今後早急に調査を実施して確認する必要があろう。

Ⅳ区の竪穴住居址群（図版14・15，第11図）　ⅣＢ区からⅣＣ区にかけて南北約40ｍの範囲で，竪穴住居址10戸を検出した。

個々の住居址に関するデータは，別表（第21表）の通りであるが，観察結果をまとめれば，以下の通りである。

ａ．住居址はいずれも古墳時代前期（庄内期～布留期）に属するが，各住居址間には多少の時間的先後があり，集落そのものは数十年間にわたって営まれたことがわかる。

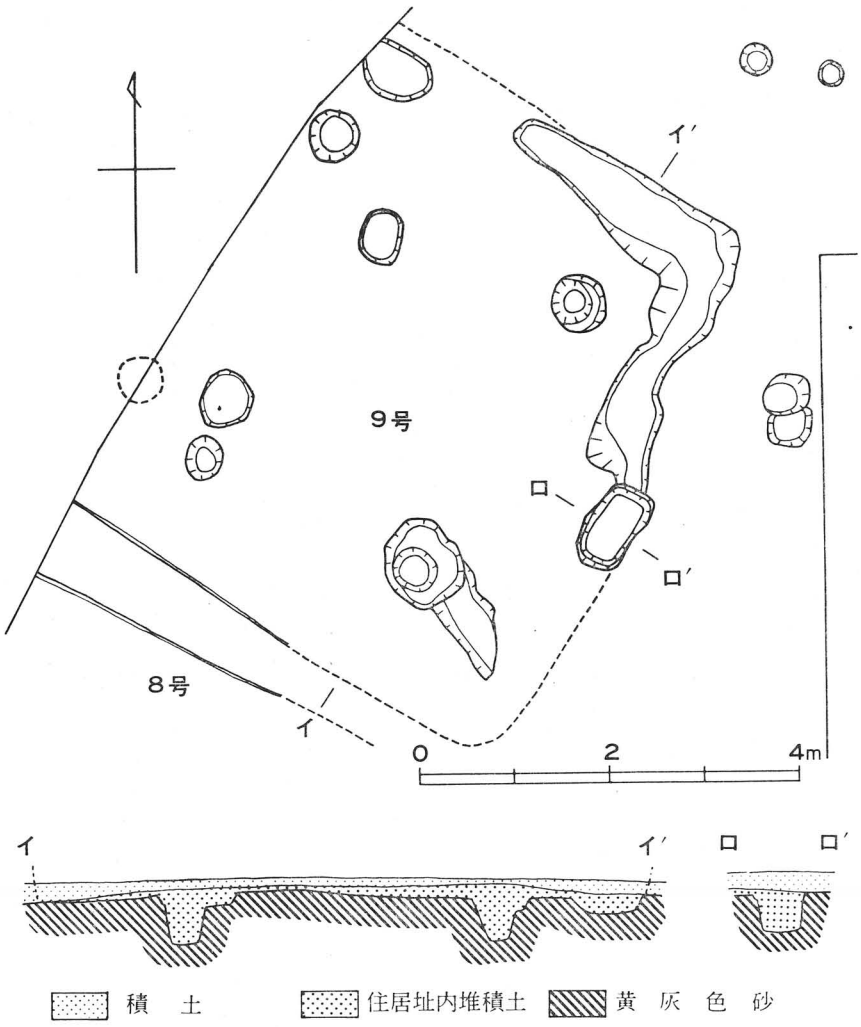
ｂ．10戸の竪穴住居址は，いずれも隅丸方形のプランを有し，著るしい大小の差はない。

ｃ．各住居址とも四本柱で，柱穴の位置はほとんど歪みのない方形に配置され，整然と

した家屋設計がうかがえる。

d．竪穴中央または中央に近く，わずかに炭や灰が残る程度の炉跡が３例見つかっている。

e．10戸中６戸の住居址内で，長方形または楕円形のピットが検出されている。このピットは，６例中１例を除いて，いずれも竪穴住居址内の西南壁中央部に位置する。二段掘りしたピットも２例あり，これは木蓋などを被せたものと想像される。ピットの機能については明らかでないが，住居の入口に設けられた何らかの施設であろうと考えられる。



挿図13　Ⅳ区９号住居址実測図

f．3号住居址では，竪穴の内壁添いに幅約1mの溝をめぐらしたのち，再び溝内へ土を入れて床を平らにしている。どのような目的をもつ施設か明らかでないが，将来類例の発見をまって再検討したい。

Ⅴ区の竪穴住居址（図版16，第12・14・15図）　Ⅴ区では，ⅤA区，ⅤD区東半の2地点で，それぞれ古墳時代後期（6世紀後半）の竪穴住居址を検出した。[5)]

まず，ⅤA区の竪穴住居址1戸は，Ⅳ区の竪穴住居址群が所在する扇状地から，浅い谷を隔てた北側の扇状地上に立地する。

砂層をベースとして建築したもので，床面はかなり凹凸がみられた。竪穴の東北壁中央部に，造りつけのカマドとみられる焼土塊の1ブロックがあり，また，竪穴の外側には，幅20～30cmの溝が，住居を囲むように弧状に走っていた。この地点には，7世紀以後の溝跡が縦横に走っており，遺構の検出には困難を極めたが，この竪穴住居が1戸だけ独立していたとは考え難いので，恐らく周辺の未調査地には，これと同時期の竪穴住居が群在して集落を形成していたものと推定される（図版19，第14図）。

次に，ⅤD区の調査では，2戸の竪穴住居址を切合いの状態で検出した。2戸とも全体を明らかにすることはできなかったが，竪穴住居の構造としては，ⅤA区のそれとほぼ同じと考えてよいだろう。

ⅤD区の調査地点付近は，もともと地形が南から北へ向って徐々に高くなっていたため，後世の数次にわたる削平を受け，当時の地形は甚しく損われている。検出した2戸の住居址も遺存状態が悪く，かろうじて床面の一部と竪穴の輪郭をたどれる程度であった（第15図）。しかし，1号住居址では2個の柱穴から径約12cmの柱根残欠を検出し，削平を免れた床面から屋根の構造材と思われる炭化木材と炭・灰とを検出した。また，この床面から砥石，鉄滓各1個の注目すべき遺物も発見されている。

次に，2号住居址では，竪穴の北西壁寄りに造りつけのカマド跡とみられる焼土を検出したが，その中から，ほぼ完形の土師器甕（C230）と須恵器片とが出土した。

2号住居址は，1号住居址を切って建てられたものであるが，2戸とも古墳時代後期（6世紀後半）に属するものであり，一集落における住居の建て替えと存続期間の時間的な幅を示している。

なお，ⅤD区については今回東半部で上記の通り2戸の竪穴住居址を発見したが，西半部にも古墳時代後期の遺物や炭・灰のブロック等が散乱状態で検出され，集落がこの地点にも及んでいたことを想定させる。

小　結　今回の調査で確認した竪穴住居址は，古墳時代前期に属するもの10戸，古墳時代後期に属するもの３戸であった。古墳時代前期の10戸は１集落址に属するもので，いずれも隅丸方形，四本柱で，竪穴内に炉を有し，また長方形又は楕円形ピットが設けられていたことがわかった。

古墳時代後期に属する３戸は２地点に分れており，それぞれの地点に発見した竪穴住居址の属する集落址の存在を想定した。この古墳時代後期に属する竪穴住居址も隅丸方形，四本柱であるが，古墳時代前期の例との差異は，竪穴内壁に造り付けのカマドを有している点である。造り付けのカマドの出現が何時かを限定することは，今回の調査で結論することはできなかったが，恐らくその時期は，５世紀後半から６世紀前半の数十年間に求めることができよう。

(3)　溝跡・その他

ⅢE区の調査（図版12・17，第13図）　ⅢE区の調査は旧江若鉄道路線敷を対象に行った。旧路線敷は複合扇状地の裾部に位置する。地区全体にわたる試掘の結果にもとずき，発掘調査はⅢ区南端にしぼって実施した。その結果，この地点では複合扇状地の接合部にできた浅い再開析谷に，花崗岩の霧爛土が，古くは縄文時代後期前半から以後中世に至るまでの遺物をともなって次々と堆積していることが明らかとなった。この浅い谷を走る自然流によって堆積した最下層は，旧路線積土下より－2.7m を計り，花崗岩霧爛粗砂よりなる無遺物層である。その平面的ひろがりは南北巾20mで依然浅い谷地形を成している。以後この土層の上部に次々と堆積が行なわれた。

黒褐色泥土層は，植物繊維・茎を多量に含む有機質の泥土層である。縄文後期の土器片を主体に，微量の縄文晩期土器片を包含する。

茶褐色砂礫層は微量の縄文式土器を含む。径10㎝前後の礫と粗砂とからなり，開折谷中央に堆積する。かなり急激な流水にともなって形成されたと見られる。この上部に３～４層の流れ堆積がある。総て無遺物である。断面図（第13図）に示されているように，これらの上層には，細砂を基本に粘土のブロックや微砂の間層が見られ，その堆積が一様の条件でなりたったものではないことがわかる。次いで，暗褐色泥土層が堆積した。微量の弥生前期末の土器片を含み，強い有機分をもつ。この土層は谷の中央で若干凹みながらもほぼ水平に堆積している。この上部に同時期の土器片を含む薄い青灰色微砂層が被る。おそらくこの両層は植物が繁茂していた段階とそれが冠水した段階の所産であろう。浅い開折

谷はこの時点でほぼ埋められてしまった。

その後，弥生時代後期に至る間，旧谷中央に幅約５ｍの自然流が形成された。断面図中央に記録されているように，多量の砂土と共に，径40㎝を計る自然木・同大の木片，多量の雑木をともなっていることから，流れの激しさが想像される。(図版12) この流れ内に堆積したのが，灰褐色粗砂及び灰褐色砂で，微量の弥生式土器片が含まれていた。この段階以後，一帯は再び水を被ったようで，それにともなって灰褐色微砂層が堆積した。少量の庄内式土器を含む古墳時代初頭の土器群，建築材・木片群を一括包含する（図版17—2・3)。土質はきわめて細い粒子からなる砂土で，炭化物を微量含む。なお，建築材・木片群の一部が焼けこげているのが注意された。この微砂層の堆積は再びこの一帯を平坦にしたようである。黒色泥砂層がその上部に堆積した。この土層は基本的には攪乱されながらの流れ堆積である。この泥砂層は発掘区全面にはみられないものの，一層上位の堆積である黒褐色砂泥層下に広範囲にブロック状に残っていることから，もとはかなり広範囲に堆積していたものと見られる。５世紀後半から６世紀代にかけての土師器・須恵器を主体に，微量の古墳時代前期の土器が混在する。これらの土器群にともなって，木製鍬（ＣＷ１）・盤形木器（ＣＷ37）をはじめとする多種類の木器・木片類，子持勾玉・石製模造品（挿図23)，手づくね土器（挿図19)，管玉・ガラス小玉（挿図22）等が検出された（図版17—４)。黒褐色砂泥層は６世紀末の土器を主体とし，平安時代にまで下る須恵器片をも含む。なお，一層上部の茶褐色砂泥は現代層である。一方，その後に実施した新路線部の調査では，均質な砂と微砂とからなる厚い互層状の水平堆積が見られ，現在の水田面より発掘可能な２ｍ下の深さまで無遺物であるという所見が得られた。この事実は，ⅢＥ区旧路線部で認められた遺物包含層出土の遺物が，量的に多く，それらが流れ堆積でありながら磨耗も少ないこと，しかも生産用具や祭祀遺物等をともなっている事などから，調査地点の西方，複合扇状地の高みに相当大規模な複合集落地の存在を示していると言えるだろう。また，ⅢＥ区の調査地点から南方一帯に滋賀里縄文遺跡が所在するが，今回の調査で検出したⅢＥ区の谷は，滋賀里縄文集落が存在した当時，その北方を限るものであった。

ⅣＢ区南半の調査（第７図）　ⅣＢ区南半の扇状地の高みには，弥生時代から古墳時代前期にかけての方形周溝墓群が検出されたが，それに重複して古墳時代後期以降の遺構も検出されている。しかしながら，付近一帯は現代の削平を受けており，遺構の残りは悪く，時期の決定も困難なものが多い。

▶２号溝・４号溝　４号溝はほぼ直角に曲る二辺が確認されているが，これと２号溝が

接続するものかどうかわからない。いずれも鋭く掘り込まれた人工の溝で，溝内には，方形周溝墓の周溝内と同様な土層の堆積が認められ，排水などの溝ではない。出土する土器は微少片ばかりであるが，縄文式土器～6世紀末のものがあり，溝底近くからも6世紀末の須恵器片が出土している。この溝の埋没年代は6世紀末と考えられる。

▶8号溝・9号溝　いずれも上半部を削平され底部が残存した溝で，人工の溝かどうかは不明。溝内には砂土が堆積し，その中から6世紀後半の土器片が出土している。

▶焼土・粘土・炭のブロック　ほぼ「コ」字形の焼土のひろがりが検出され，その上に炭・粘土がのっており，竪穴住居址のカマドの残欠かとも思れるが，付近には柱穴らしきものも確認されておらず，その性格は明らかでない。一部は18号建物の柱穴の上におよんでおり，18号建物よりも新しいことがわかる。炭の中より6世紀後半の土器片が出土している。

▶13号・17号・18号建物　いづれも掘立柱の建物と考えられ，13号建物は3間×5間，17号・18号建物は2間×3間となっている。17号と18号建物は，その規模だけでなく，建築方位も同じであり，同一時期，同一性格の建物が推定される。いずれも，その柱穴の掘り方内に6世紀後半の須恵器片を含み，また，18号建物の柱穴上を覆う焼土・粘土・炭のブロックから6世紀後半の土器片が出土しているので，少なくとも，18号建物は6世紀後半にその年代を求めることができる。

ⅣB区北半の調査（図版17，第13図）　ⅣB区北半の発掘調査地点は，北西から南東にむかって走る自然の流路であり，その流路の堆積土は，主に比叡山麓の花崗岩の霉爛土からなる砂礫層と泥砂層とから成り立っている。この土砂は，縄文後期から古墳時代終末期までの遺物を包含し，長期にわたって順次堆積したものである。流れの方向は年代が下るにしたがって，次第に南よりに変っている。

流路の中のもっとも下層の堆積土は，こぶし大から大豆大までの礫を主体とした砂礫層で，砂礫に鉄分が付着して淡茶褐色を呈する。この層から縄文後期の土器片を微量検出した。次に砂礫層の上部を覆って，緑灰色泥砂層がある。この層は，時期不明の弥生式土器片を微量包含する。

緑灰色泥砂層の上部は灰白色砂礫層，更にその上部には灰白色粗砂層がのっている。粗砂から砂礫へ漸移しており，これは一層として把えることができよう。この堆積土中に含まれる遺物の中心は，いわゆる庄内式土器から布留式土器にいたる古式土師器の一群である。

ちょうどその頃，この流路は，北方の住居地域と南方の方形周溝墓地域とを画する役目を果していた。遺物は，土器の他に各種木器，建築材，自然木なども多い（図版17—1）。

灰白色粗砂・砂礫層の上部には，庄内～布留期の遺物を含む暗青灰色泥砂層があり，その上部に暗灰色粗砂層，茶褐色泥砂と褐色粗砂との互層，黒褐色泥砂層がのっているが，これらの土層に包含される遺物の中心は6世紀後半代に属する。土器，木器は種類・量共に豊富である。この6世紀後半代の遺物を包含する土層は，その状態から推して，谷全面へ一挙に堆積したものであろう。

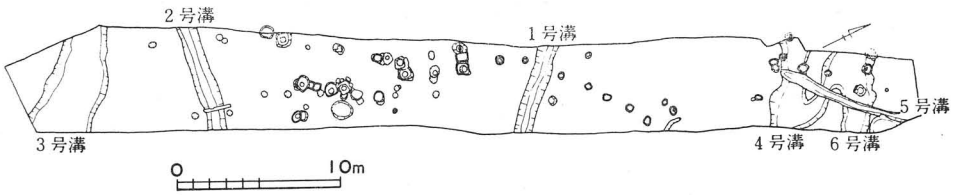
この流路の終末は，7世紀前半の頃である。最上層の堆積土である灰白色砂層がそれにあたる。遺物の量はすくない。

以上ⅣB区北半の調査地点における遺物包含層の形成過程を追ってきたが，概括すれば，この遺物包含層は縄文後期以来古墳時代終末期まで，複合扇状地の接合部にできた浅い開折谷を流れる小川の氾濫と穏やかな流れとが繰返され，その都度，上流地域から日常生活用品が押し流された結果形成されたものであることがわかった。

この地点の調査結果によって明らかなことは，浅い谷をはさんで南・北にひろがる扇状地の高みに，縄文後期以来の人々の生活が展開していたことであり，しかもかっての生活舞台の中心は，調査地点よりも西方山麓よりの水田地帯にいまなお確実に遺存しているということである。

ⅣD区の調査（図版18）　ⅣD区の北半部では，6条の溝跡を検出した。西南から東北の方向に，幅6m前後にわたって調査を実施したが，検出した6条の溝跡のうち，1・2・5号溝は人工の溝跡であり，3・4・6号溝は自然の流路であった。

まず，1・2・5号溝は，いずれも黒灰色泥砂層上面から切り込んでいる。溝の側壁は直線的に鋭く切ってあり，溝幅もほぼ一定であることから，人工の溝跡と判断した。2号溝では，厚板一枚が橋を思わせる状態で検出された（挿図14）。



挿図14　ⅣD区遺構実測図

人工の各溝からは，6世紀後半代の須恵器，土師器が出土しており，1号溝では，他に

枘穴を有する木器，下駄などが出土した。なお，２号溝内最上部の砂層からは７世紀後半に属する須恵器が一片検出されている。

次に，４号溝と６号溝とは，黒灰色泥砂層よりも下層から落ち込みの始まる溝で，両溝は逆N字形に連続している。溝が不整形で，幅や底の傾斜が一定でないところから，これを自然の流路と判断した。溝内堆積土中に含まれる遺物は極めて少量であったが，いずれもそれは６世紀後半に属する。

また，３号溝の場合も，やや末広がりの平面形で，側壁や底の凹凸が激しく，自然の流路と考えられる。

以上，ⅣD区の自然流路とみられる溝跡は，いずれも西北から東南にむかって走るが，これは山側から湖岸の方向へ緩傾斜しているもともとの地形によるものである。なお，これらの各溝跡がその機能を果たしたのは，いずれも短期間であったと推測される。

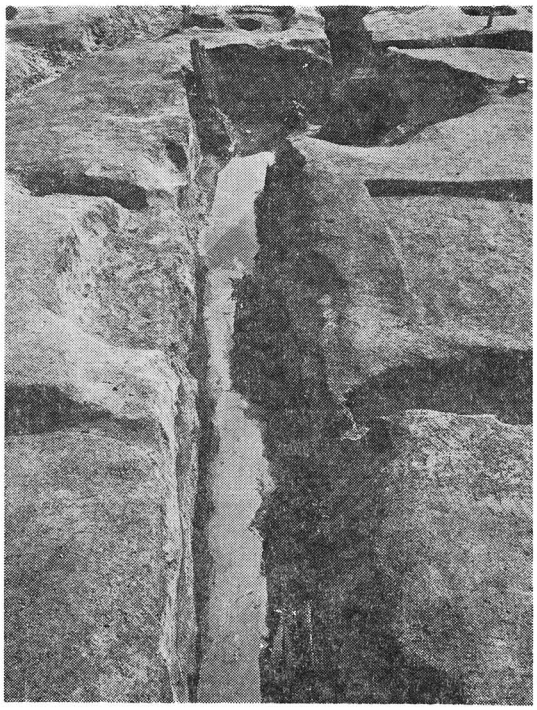
ⅣD区北半部では，上記溝跡のほかに掘立柱建築遺構の柱穴群が点々と検出され，中には柱根を残すもの，一定の間隔と方向とをもち一棟を想定できるものもあったが，その所属年代は，上限が溝跡の年代をさかのぼらず，その下限は，宋銭など中世の遺物を含む包含層[6]が柱穴上を覆っていることから，中世以前に求められる。

ⅤA区の調査（図版19，第14図）　ⅤA区の調査地点は新路線の変電所建設予定地になっていたため，東西約30mにわたって発掘した。この地点では，前項で述べた通り古墳時代後期の１号竪穴住居址のほか，人工の溝や自然流路多数を検出した。以下，各溝跡の調査結果を年代順に概述しよう。

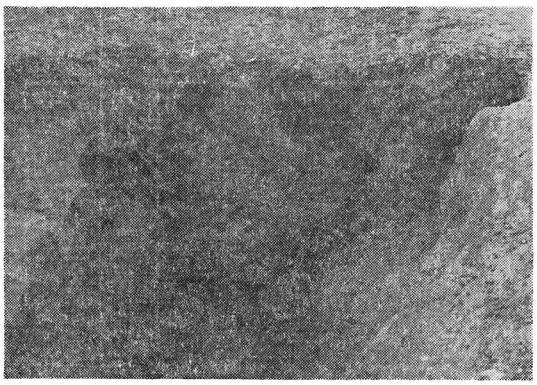
▶26号溝　幅約３m，深さ1.2mの自然流路で，暗灰色泥砂層の下部の黄褐色粗砂層上面から落ち込んでいる。したがって，暗灰色泥砂層を切っている溝よりも年代が古い。溝内からは少量の土師器，鍬（CW2，CW3）などの木器が出土している。

▶18号囲溝（挿図15）　暗灰色泥砂層からほぼ垂直に近く掘り込まれた人工の溝で，幅約１m，深さ約0.8mを測り，溝は１辺８m前後の方形にめぐるものと推定される。溝の内側の壁に添って溝底に杭列があり，杭の多くは抜取られて樹皮だけが遺存していた（挿図15）。溝内の堆積は下部の３層を除けば種々の土が混合した埋土からなり，この囲溝が機能を了えたのち，埋め立てられたものと判断される。埋土からは６世紀末の土器が出土している。

▶25号溝　暗灰色泥砂層から垂直に近く掘り込まれた幅約0.5m，深さ約0.8mの人工溝であり，18号囲溝の東北隅辺りからはじまって東南方へ直線的に走る。あるいは18号囲



挿図15　ＶＡ区18号溝東北辺内の杭列



挿図16　ＶＡ区19号溝の溝内セクション

溝に関連する溝かも知れない。溝内の堆積は，最下層の黄褐色砂層を除けば埋土と考えられる混合土であり，18号囲溝と同じ状態である。この25号溝を排水溝と考えた場合，それが機能した期間はかなり短かかったと推測される。埋土からは６世紀末の土器が出土している。

▶19号溝　　青色砂層から切り込んだ人工の溝で，幅約１m，深さ約0.6m を測る。西北から東南に向って走るが，後代の12号溝によって切られている辺りから南は，25号溝と重複していた。溝内堆積の状態から，排水溝として機能しながら埋没したと思われるが，溝底には手斧，鉋の削り屑とみられる木片が層をなして遺存していたことから，上流に木材加工または建築の現場が所在したことを想定させる（挿図16)。溝内堆積土層の各層から６世紀末の土器片が出土している。

▶13・14・17・24・27号溝　　すべて暗灰色泥砂層を切って流れる自然流路で，かっては西北から東南へむかって走り，池状遺構へ注いでいた。各溝の新旧関係は，24号溝→27号溝→13号溝→14号溝の順になるが，各溝内からは６世紀末の須恵器，土師器，各種木器が出土している。

▶12号溝　　ほぼ東西に一直線に走る溝で，幅約1.5m，深さ約0.5mをはかる人工の溝である。18号囲溝，25・19・22号溝および１号竪穴住居址を切っており，ＶＡ区の各溝の中では最も新しい時期に属する。溝内の堆積は茶褐色泥砂層と黄灰色砂層からなる。旧路

線部分では，その上部へ更に青灰色粘土層がのっているが，この土層は整地の際のものと考えられる。この整地作業は，旧路線部分の溝の南側３ｍと18号溝北辺部までの間にみられ，整地層内からは奈良時代の土器が出土している。溝内より６世紀末の多くの土器と共に奈良時代の須恵器小片が１片出土している。

ＶＡ区各溝の調査結果は上記の通りだが，溝以外に，18号囲溝，12号溝と重複して，３間×４間の掘立柱建築遺構が検出されている。その年代は明らかでないが，切り合いの関係から12号溝よりも古く，18号囲溝よりも新しい時期に属するものと思われる。

次に，18号囲溝の問題だが，ＶＤ区西半部でも同じ性格の遺構と思われる２・４号方形囲溝が検出されている（第15図）。18号囲溝の場合は，その方向が１号竪穴住居址の方向とほぼ一致していることから，同時期の遺構とも考えられる。この囲溝の内区にはなんらの施設も発見されなかった。

また，12号溝の方向が，ほぼ東西線にのっていることから，古代の土地区画と何らかの関係をもつ溝と思われる。

ＶＤ区西半部の調査（図版16・18，第15図）　ＶＤ区は全般にわたって後代の削平を受け，遺構はすべて上半部を失っていた。そのため，各遺構は表土の直下より検出され，しかも遺構につながる生活面が失われていたので，年代の確定がかなり難かしかった。

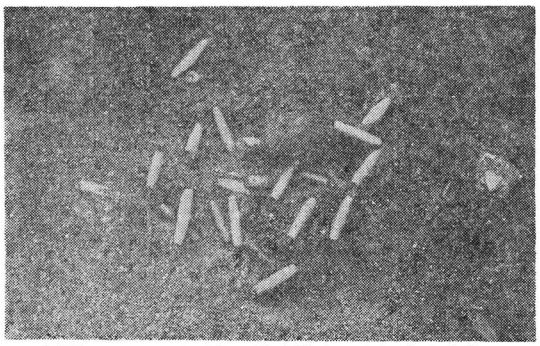
ＶＤ区西半部では，溝跡，掘立柱建築遺構を検出したが，各遺構の調査結果は以下の通りであった。

▶１号溝　溝の大半は後代の削平を受けて消滅し，浅い皿状の溝底のみ残存する。溝内堆積土は黒色泥砂層で，排水用の溝とは考え難い。人工の溝と思われるが，性格は不明で，溝内より６世紀後半の須恵器・土師器片が出土している。

▶４号囲溝（図版16—２）　ＶＡ区18号囲溝と全く同様の方形囲溝で，溝の一辺約８ｍ，幅約0.8m，残存する溝の深さ約0.3mを測る。囲溝の東南辺の中央部に，約１ｍほど溝の断絶があり，しかも溝の両端部溝内には径0.8m，深さ0.6mの柱穴と思われる小ピットがあった。この囲溝の性格を考察する上で，重要な手掛りを与えるものであろう。溝内の堆積土は黒灰色泥砂層からなり，この土は水流による堆積土ではなく，何らかの理由で一時に埋められた不均質な土である（挿図17）。溝内堆積土中より，６世紀後半代の土師器・須恵器，焼土・炭・粘土塊などが出土しており，その状態から推測すれば，この方形囲溝は，６世紀後半代の生活面を壊してつくられ，その後短期間のうちに再び埋め戻されたと考えられる。

▶２号囲溝　４号囲溝とほぼ同規模，同方向の方形囲溝で，約７ｍの間隔を置いて並

挿図17　ＶＤ区西半４号溝（方形囲溝）東南辺と溝内セクション



挿図18　ＶＤ区西半５号遺構内の土錘出土状態

ぶ。大溝や戦後の攪乱溝により大幅な破壊を受けているが，復原すれば，４号囲溝と同じ性格，同時期の遺構としてまちがいないだろう。溝内堆積土や遺物については，４号囲溝と全く同じである。

▶３号溝　　４号囲溝北隅から東北方へのびる溝で，溝底は４号囲溝とレベル差なく連続する。この溝は，４号囲溝北隅から約４ｍ東北よりの辺りから乱れており，その平面形は明らかでない。３号溝東南に５号遺構と名ずけた地点があるが，これは堆積状態，方形囲溝との比較などから，明らかに溝跡であり，しかも一見３号溝に対応する位置にあるので，両者は相関連する可能性もある。３号溝の遺物や溝内堆積土は，２・４号囲溝と同じである。また，５号遺構の場合も同様で，遺物としては，土錘が焼土塊とともに一括出土している（挿図18）。

ＶＤ区西半部では，この他に掘立柱建築遺構の柱穴が点在する。ことに，東西に走る大溝をはさんで南北両地点で，規則的な配置をもつ柱穴群を検出したが，その年代，規模などは不明である。なお，大溝北側の柱穴群中には，柱根を遺存するものが３例あった。

ＶＤ区西半の遺構は以上の通りであるが，注目されるのは２・４号囲溝である。その性格は明らかでないが，先述のＶＡ区18号囲溝と同じ性格の遺構と考えられ，今後類例の発見を待ちたい。

ＶＤ区東半部の調査（図版18・20，第15図）　ＶＤ区東半部は，今回調査した湖西線関係遺跡の最北端に当る。西半部と同様にここでも溝跡，掘立柱建築遺構や，竪穴住居址（前節ＶＤ東半１・２号住居址）を検出しが，各遺構の上半部は大幅な削平を受けていた。

▶８号溝　ほぼ南北に走る人工の溝で，現存幅約２m，深さ１mを測る。溝内には泥土と粗砂とが互層をなして堆積しており，最上層から数個体の古墳時代前期に属する土師器（C201，C203）が出土し，下層からも同時期の土師器片が微量出土した。

▶４号溝　垂直に近く掘り込まれた人工溝で，現存幅約0.5m，深さ約0.4mを測る。溝内堆積土は砂層で，その中から弥生式土器片と古墳時代前期に属する土師器片とが出土している。１・２号住居址と３号溝とによって切られている。

▶７号溝　溝の上半部は削平され，わずかに浅い皿状の溝底を残すだけで，人工かどうかは不明である。溝内砂層より，少量の土師器・須恵器片が出土した。

▶６号溝（図版20）　現存幅約３～４m，深さ約0.8m の溝である。溝内には護岸または建築のための石垣に用いたと思われる花崗岩の切石や杭・板材が出土した。この溝の下部堆積土（砂礫と灰褐色砂）からは５世紀末～６世紀末までの土師器，須恵器が出土し，花崗岩の切石を伴う上部の堆積土（灰褐色砂）からは７世紀前半までの須恵器，土師器が出土している。灰褐色砂層からは，他に下駄，浮子状木製品，曲物，建築材など多量の木製品が出土した。溝内の花崗岩切石群を護岸用の石材と考えれば，６号溝は６世紀末ごろまで自然の流路であり，その後護岸工事によって整備され，７世紀前半ごろには人工の溝として機能していたものと考えることができる。また，この石材を建物の建築に伴う用材とすれば，至近地点に７世紀代の大規模な建造物の存在を推定することができよう。

▶３号溝・５号溝　両溝は西北から東南へむかって，ほぼ平行して走っているが，溝の大半は後代の削平によって失われ，わずかに溝底のみを残している。溝内の砂層からは，６世紀後半から７世紀前半までの須恵器，土師器が出土しており，６号溝とほぼ同時期に共存していたものと思われる。人工の溝かどうかは不明である。

▶１号溝　溝の西側壁と溝底の一部を明らかにし得ただけであるが，かなり幅の広い自然流路である。溝内からは６世紀後半の須恵器，土師器が多量出土した。

▶２号溝　溝底の一部が遺存しており，人工の溝かどうか明らかでない。溝内砂層から奈良時代の須恵器が出土しており，ＶＤ区東半部では最も新しい時期の溝跡である。

上記の溝跡の他に，ＶＤ区東半部ではほぼ全域にわたって柱穴状の小ピットが検出されたが，そのうち１・２号住居址西南では，３間×４間（５間か？）の掘立柱建築遺構が確

認できた。上部が削平されていたため，この建築遺構の年代は不明であるが，溝跡，住居址などとの切合い関係から７世紀前半以降のものと推定される。

2. 遺 物 の 検 討

(1) 方形周溝墓出土の土器（図版65,，第52図，第23表）

ⅢＦ区方形周溝墓，ⅣＢ区１号方形周溝墓，および方形周溝墓と考えられるⅣＡ区溝状遺構からは，いわゆる布留式に併行する土師器が出土している。この内，ⅢＦ区方形周溝墓からは良好な資料が得られた。一部に攪乱を受けているが，本来は完形に近い状態で溝内に埋没していたと考えられる壺・甕・椀が，ⅣＢ区で検出された弥生時代の方形周溝墓と同じ状況で周溝内より出土した（図版13)。この出土状況や土器自身の型式学的検討から，これらの土師器は同時期の所産と考えて誤りはない。甕（Ｃ４）は小若江北遺跡[7)]出土の甕と基本的な点で類似性が認められるが，体部上半部外面を横方向に刷毛目調整する一般的特徴に反して，Ｃ４では全て縦方向に刷毛目調整するという差異がある。壺（Ｃ１）にみられる頸部突帯は，当地方のいわゆる古式土師器壺によくみられる装飾法であり，弥生時代後期以来の伝統とみることができよう。

ⅣＡ区溝状遺構出土の壺は，その大半が破損していて全体の形態が明らかでないが，ⅢＦ区方形周溝墓出土の壺（Ｃ１）と同様のものであろう。

ⅣＢ区１号方形周溝墓の周溝内からは，ⅢＦ区方形周溝墓にみられたような完形に近い土器の一括出土が認められなかった。そのため，出土した小片の土器が方形周溝墓に伴なうものかどうか明らかではないが，甕（Ｃ９）のように小若江北遺跡出土のものに類似するものが認められる。

(2) 竪穴住居址出土の土器（図版65，第52図，第24表）

竪穴住居址出土の土器は，その多くが小片であり，充分な検討の対象となり得ない。また，少しでもその形態のわかる土器に関しても，住居址の床面に密着して出土したものは，Ⅳ区１号住居址の甕（Ｃ23)，Ⅳ区４号住居址の甕（Ｃ30)，ⅤＤ区東半２号住居址カマド内出土の甕（Ｃ230）など少数にすぎず，多くのものが覆土内などの出土になるため，明確な

一括資料としてとらえることはできなかった。しかしながら，第24表に観察したように，Ⅳ区の竪穴住居址出土の土器は庄内式～布留式併行と認めることができ，ⅤA区1号住居址，ⅤD区1・2号住居址出土の土器は，6世紀後半代のものである。

Ⅳ区の竪穴住居址出土の土器は，布留式併行のものを主体とするが，庄内式併行と考えられるものも少量含まれている。1戸毎の一括資料としてはとらえきれないので全体をまとめて扱うこととした。庄内式併行の時期に考えられる土師器には甕がある。この内甕A（C18～C21）は「S字状口縁」で，甕B（C30）は外反する口縁部をもつ。これらの甕は，次項で述べるⅢE区下層の土器に類似している。この他にも，壺（C15），鉢（C38）が同時期のものとなる可能性がある。

布留式に併行する時期のものには，壺（C11～14・C16），甕（C22～C29・C33・C39・C40），高杯（C43），鉢（C31・C32），小型杯（C41・C42），小型丸底壺（C17），小型器台（C34～C37）がある。この内，甕は小若江北遺跡出土のものに類似し，また，小型杯，小型丸底壺，小型器台は小型三種の土器と称され，布留式の指標となるものである。[8)]

(3) 各地区出土の土器（図版66～75，第53～66図，第25表）

前項において方形周溝墓および竪穴住居址出土の土器を扱ったが，それ以外に各地区より多くの古墳時代の土器が出土している。その内，出土量の多い6世紀後半の土器と，それ以前の土器とに大きく二分して扱った。6世紀後半の土器は，各地区で検出された溝，自然流路などから多量に出土し，特に6世紀末の土器がその主体を占めている。一方，6世紀後半以前の土器は，主にⅢE区およびⅣB区の開析谷から出土し，これを整理の段階で古い順にⅢE区下層，ⅣB区下層，ⅢE区上層，ⅣB区上層の4群に分類した。この内，ⅢE区下層に分類したものはⅢE区灰褐色微砂層出土の一括土器であるが，ⅣB区下層（灰白色砂礫層，灰白色粗砂層，暗青灰色泥砂層），ⅢE区上層（黒色泥砂層），ⅣB区上層（暗灰色粗砂層，茶褐色泥砂層など）に分類したものは，それぞれ各層の主体をなす土器を摘出したもので，時期の異なる混入土器は除外した。

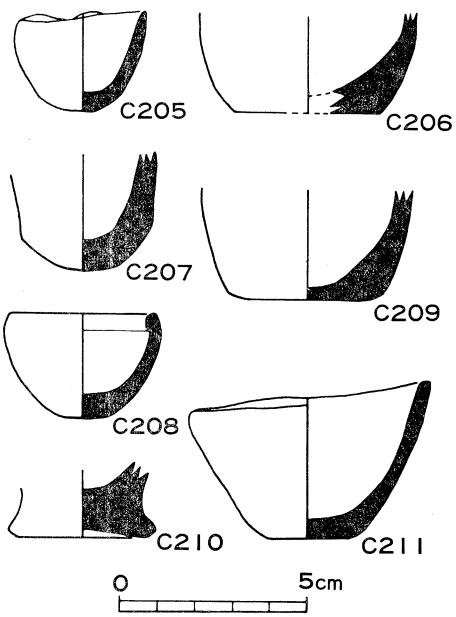
ⅢE区下層の土器（図版66～70，第53～59図）　ⅢE区灰褐色微砂層出土の一群の土器については，目下のところこれを時期的に細分する積極的根拠はなく，同時期のセットとして把えた。第25表に示したようにその器種には，壺A（C44）・B_1（C46）・B_2（C49）・C_1（C78）・C_2（C82・181）・D（C45・56・151）・E_1（C48）・E_2（C50），甕A（C51・52・54・57・124）・B（C53・55・58・115・116・150・153・180・193・201）・C_1（C69・90・136）・C_2（C

63・65・67・70・122・154)・D（C59・64・92・129・131・132)・E（C60・137)・F（C61・62・97)・G（C117)，鉢A（C47)・B（C183)・C（C111・141)，甑（C158)，器台（C100)，高杯A（C66)・B（C73・74・164)，手焙り形土器がある。壺，甕類の底部は，甕D類が尖り気味の丸底と考えられる以外は，全て平底ないし上げ底である。壺Aは近江地方の弥生第5様式の壺[9]から直接系譜を引くものであり，鉢Aの施文も近江，伊勢湾地方における弥生式以来の伝統を引くものであろう。甕Eはやや小型で北陸地方の特徴をもった土器であり，器台（C100）は鼓形器台で，同じく北陸地方の特徴をもったものである。甕D類は，手法・胎土・色調ともに，畿内の庄内式の甕と全く酷似し[10]，畿内からの搬入品である可能性が強い[11]。甕C_1・C_2類は「S字状口縁」であるが，文様で飾るC_1類は琵琶湖地方独特のものと思われる[12]。C_1・C_2類は全て平底で，台の付くものは1例もないことは注目すべきことである。本型式の内容を要約すれば，在地の弥生式土器の伝統を強く残した土器群に，少量の北陸的土器，および畿内からの搬入品と思える土器を含んでいると言える。

ⅣB区下層の土器（図版68～70，第54～59図）　ⅣB区の開析谷では，下層の灰白色砂礫，灰白色粗砂，暗青灰色泥砂の3層から，布留式（この場合，小若江北遺跡の土器をもって代表させる）を最も新しい時期とする須恵器出現以前の土師器が多量に出土した。この3層の内容は時期的に分けられない状態にあるので，ⅣB区下層式として，布留式併行期のセットを摘出し，これに他地点出土のものを加えた。その器種には壺A_1（C79)・A_2（C168)・B（C80・133・134・149)・C（C89・C138)・D（C125)・E_1（C81・85)・E_2（C126・165・167)・F（C77・119)・G（C98)，甕A（C113・166)・B_1（C93・95・99・127・128・130・155・156・169・199)・B_2（C176)・C（C152)・D（C123・160・177・178・179)・E（C114・203)・F（C184)・G（C142・157)，小型丸底壺（C197)，小型杯（C139・140)，高杯A（C145・161・175・196)・B（C187)，小型器台A（C120・162・186)・B（C172)，鉢A（C143・159)・B（C118)，手捏ね土器（C211)がある。このうち壺A_2（C168）と甕B_2（C176）はこの型式よりやや古い時期に位置づけられる可能性がある。壺E_1類は頸部突帯の手法が当地方の特色を示しているが，ⅢF区の方形周溝墓からこの型式と類似した甕（C4）とセットで出土しているので，この型式に入れたが，次の初期須恵器に併行する時期まで続くものかどうか明らかでない。壺B・E_2類，高杯A類，小型丸底壺，小型器台，小型杯は畿内中央部における布留式のセットであり，甕B_2・D類は近江・伊勢湾地方から東日本に多い土器である。甕D類は「S字状口縁」の台付甕で，口縁部以外の全外面に，粗い刷毛目ないしカキ目状の調整を行なっている。これは，ⅢE区下層の甕C_2類（C63・65・67・70・122・154)

に比べてかなり整然とした調整である。この台付甕はⅢE区灰褐色微砂層には1例も出土しなかったもので，布留式に入って初めて出現するものであろう。当地域では[13]，古い時期の「S字状口縁」の甕が全て平底であったように，一般に台付きの土器は稀である。台付きの土器は，尾張以東に多く見られ，近江地方では，湖北・湖東に多い。したがって甕D類は，ⅢE区下層の甕C_1・C_2類と直接つながるものではなく，より東方地域の影響下にあった土器と言える。この時期の甕の中で甕D類が占める割合は僅かであり，畿内的な甕B_1類が圧倒的優位にある。

ⅢE区上層の土器（図版67～70・73，第54～59・63図）　ⅢE区開折谷の黒色泥砂層は，時期的にかなりの幅のある土器を含んでいて，これを型式分類すれば，須恵器出現以前，初期須恵器併行期，6世紀代と大きく3期に分けられる。このうち，質・量ともに中心を占めるものは，初期須恵器併行期のものであるので，ⅢE区上層は，初期須恵器に併行するものを代表させた。その器種には甕A（C96）・B（C84・87・88・91・94・110）・C（C86・202）・D（C83・135），高杯A（C101・102）・B（C106），椀（C112），小型丸底壺（C108・109・144・182），手捏ね土器（C205～210）がある。これらの土師器に伴う須恵器は，大阪府陶邑古窯址群[14]のTK216，TK208，TK23型式に相当するものである。その器形には杯蓋A（C262・266）・B（C260・261・263～265）・C（C259），杯身A（C268・269・270）・B（C272）・C（C271），高杯（C280・281），無蓋高杯（C276），甕A（C277・279）・B（C278），𤭯（C274・275），筒型器台（C282）がある。



挿図19　ⅢE・ⅣB区出土の手づくね土器実測図

ⅣB区上層の土器（図版68～70・73，第54～59・63図）　ⅣB区開析谷の暗灰色粗砂層，茶褐色泥砂層には，6世紀後半代を最も新しい時期とする時期差のある土器が含まれていた。この内，他にあまり出土しなかった6世紀前半～中頃の土器をもって，ⅣB区上層の代表とした。土師器には，当地域で6世紀代には定型化する大甕（C170・188・191）・中甕（C189・192）・小甕（C198・200）の三種類の甕，把手付鉢（C195），甑（C190），鍋（C204）

があり，須恵器には，杯，甕，椀，𤭯などがある。古墳時代の土器の内，今回の調査では最も資料に乏しい時期である。

6世紀後半の土器（図版71・72・74・75，第60～62・64～66図）　6世紀後半代の土器は各地区から多量に出土しているが，そのほとんどが溝ないし自然流路内から検出されたものである。従って6世紀後半代の内でも時期差のある土器が混在して出土しているが，量的に主体を占めるものは6世紀末の土器である。特にⅡH区黒色ピート層からは良好な資料が豊富に得られたので，この層出土の土器を中心に検討することとした。

須恵器には杯，椀，高杯，𤭯，短頸壺，平瓶，甕，器台がみられ，他地区出土の例で補足すると長頸壺，横瓶，提瓶，壺が加わる。杯は全体に浅く扁平な形態で，立ちあがりは矮少化し内傾の度合いが強い。底部の篦削りはおこなわれなくなり，また杯蓋の天井部にも篦削りをおこなわないものが現われている[15]。高杯（C334～337）は長脚二段三方透しが主流を占めている。中型甕（C344）は例外なく焼成が悪く，口縁部の端部を上方もしくは内方につまみ上げている。この口縁端部の特徴は，肥厚の度合いこそ違え大型甕（C349）にも認められる。

土師器には，杯，椀，壺，盃形土器，甑，甕がみられ，他地区出土のものを補足すると高杯，鍋などが加わる。杯（C216）は全体を横ナデ調整し，椀（C212～215）は外面を篦削りし，内面は刷毛による調整が顕著である。甑（C224）は内面の細かい篦削りに手法の特徴がみられる。甕は大きさによって3種類に分けられるが，その大小を問わず口縁部のつくりに当地域の特徴があらわれている。口縁部はやや内彎気味に外傾し，特に大型甕においてより顕著に認められる。口縁端部のおさめ方には大きく2種類のタイプがあり，一つは端部をつまみ上げるもの（例えばC222・231・258など），一つは端部上端面が内傾し平らなもの（例えばC249・251・255など）である。一方この様な特徴を示さない甕も少数ながら存在する。小型甕のC220・221・227は外反する口縁部をもち，口縁端部は丸くおさめている。C228も外反こそ顕著ではないが，端部を丸くおさめている。この中で，C249，C251，C255に代表される甕は当地域の独得の特徴を示すことに加えて，この特徴をもつ甕に限って，器形の大小を問わず口縁部の内面に篦記号がしばしばみられることは注目される[16]。

小　結　古墳時代の土器の内，6世紀後半以前の土器を分類して古い順にⅢE区下層→ⅣB区下層→ⅢE区上層→ⅣB区上層とした。これを従来の畿内の土器型式との関連からみるならば，それぞれ，庄内式併行期（小若江北遺跡で代表させる）→布留式併行期→船橋

OⅡ・OⅢ併行期（5世紀後半）→船橋OⅣ・OⅤ併行期（6世紀前半～中頃）となる。ⅢE区下層の土器とⅣB区下層の土器とを検討すると，その内容が一変していることが認められる。すなわち，庄内式に併行するⅢE区下層では，弥生時代以来の伝統を継ぐ在地性の強い土器が主体をなし，そこに少量の北陸的土器や畿内中央部からの搬入土器が認められた。しかし布留式に併行するⅣB区下層では，畿内的土器が主体を占め，前代から系譜をひく在地性の強い土器が極端に少くなっている。この現象は当地域に限られることではなく，布留式の影響力は質的・量的にも，また距離的にも庄内式のそれをはるかに越えている。[17]

布留式以後，当地域では畿内の影響を強く受けた土器が認められ，5世紀後半（陶邑のTK216型式）には須恵器もみられるようになる。こうした中にあって，6世紀後半の土師器には近江型ともよび得る強い地方的特徴が現われてくる。土師器甕の口縁部のつくりに認められるこの特徴は，7世紀前半の滋賀県狐栗古墳群[18]出土の甕や7世紀後半のVD区大溝出土の鍋（D115）にもみられ，また時代は下って8世紀の例であるが，大津市中保町遺跡[19]や平城宮跡[20]出土の甕などにもみられ，かなり長期間におよぶ近江独特の土師器の存在が考えられる。6世紀後半のこの特徴をもつ土師器甕に篦記号がよくみられることは，合わせて注目する必要がある。

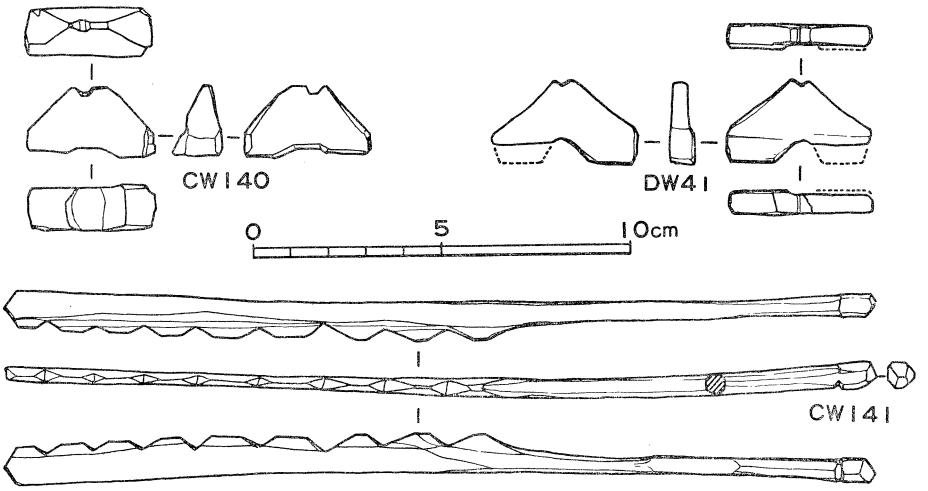
(4) 木器・その他

木　器（図版76～83・90・91，第67～74図，第26表）　今回の調査によって，各地区から古墳時代の遺物を含む多くの溝・自然流路・開析谷が発見された。扇状地の裾部に立地するため地下水位が高く，これらの溝や開析谷の堆積内には，木器や加工木・自然木が保存の良い状態で多数発見され，今回の調査の一つの成果となった。特に，ⅡH区の旧際川河道，ⅢE区開析谷，ⅣB区開析谷，VA区の各溝，VD区東半6号溝[21]からは多くの木器が出土して注目された。

木器に関しては，溝や流路の堆積の性格上年代の確定はできないが，内に含まれる土器の検討により，大半のものが6世紀後半（特に終末）に属すると考えられる。しかし，それよりも下限を古くおさえられるものも発見されている。ⅢE区灰褐色微砂層出土の箱底板（CW40），梯子（CW75），組材（CW77），板材，柱材などは庄内式併行の時期のものと考えられ，ⅣB区の灰白色粗砂層と暗青灰色泥砂層出土の鍬（CW4），鋤（CW7），斧柄（CW12），盤（CW36），鉢（CW50），鉢形木器（CW49），桶（CW41），棒状木器（CW

70・CW74）などは庄内式～布留式の時期に属している。

各地区出土の6世紀後半の木器には豊富な種類がみられる。農具には鍬，鋤，鎌柄，代掻き，田舟，杵，砧などがあり，工具には手斧柄がある。各種の生産活動に使れたものには，うき状木器，糸車，木錘などがあげられ，日常用具としては案，下駄，櫛があり，容器類には，盤，箱，鉢，桶，曲物がある。組材，板材などはⅣB区の開析谷から特に集中して出土している。祭祀に使われたと思われる斉串も出土している。その他に多くの用途不明の木器があるが，特殊なものとして，ⅤA区1号住居址内から出土した琴柱(CW140)と不明木製品（CW141）が注目される（挿図20)。

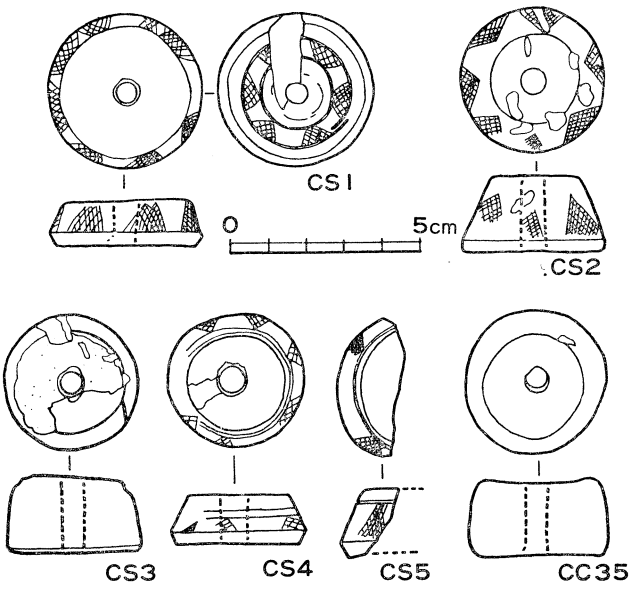


挿図20　ⅤA区1号住居址出土の琴柱・用途不明木器とⅤA区出土の琴柱実測図

出土した木器の内，多くの下駄が発見されたことは注目される。下駄の起源に関しては現在明らかでない[22]。弥生時代の田下駄や大足を別にして，現在知られている最古の下駄に関する資料は，京都市鏡山古墳などの古墳出土滑石製模造品である[23]。これらの模造品では，台板の形は不整形であり，前ツボは一方に偏している。歯は前・後に開き，後孔が後歯の後側にあけられている。5世紀代と考えられているこれらの模造品と今回の調査による6世紀末の下駄とをくらべると，台板の形態や後孔と後歯の位置関係に差異が認められる。一方新しい時代の下駄は，第4章で扱っているが，前ツボが中央にくる点や，台板幅よりも歯幅が大きくなる点などの差異がある[24]。

古墳時代には，下駄は一般的な履物ではない。しかし，今回の調査地区からは小供用と思われる小形の下駄を含む多くの下駄が出土したことは注目される。下駄がどの程度普及

していたものか，あるいはどのような人々がどのような時に履物として利用したものか明らかではないが，当地域の山裾に渡来者の残した墓と考えられている群集墳が数多く存在することは，考慮する必要があろう。

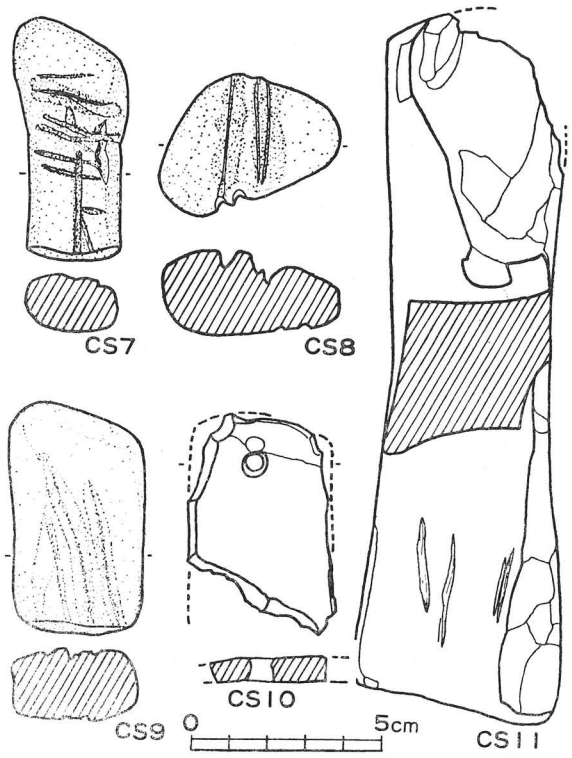


挿図21　各地区出土の紡錘車実測図

石製品[25]　(イ) 紡錘車（図版84—2）　調査した各地区から，6世紀～7世紀に属する滑石製紡錘車5点，土製紡錘車1点が出土した。滑石製品[26]は，その高さや上面の直径に差異が認められるが，多くのものの側面には，内に斜格子文を配した鋸歯文が線刻されており，ほとんどの面が著しく磨滅している。CS1はⅡH区2黒灰色泥砂層の出土で，上面径が他に比して大きく，また高さも低い。側面のみならず，底面にも文様が刻まれている。重量は38g。CS2はVA区14号溝内の出土で，上面径は小さく，高さは逆に大きい。側面に文様が刻まれており，重量は40g。CS3はVA区暗灰色泥砂層の出土で，底径と上面径との大きさの差があまりなく，高さも大きい。文様は認められず，重量は40g。CS4はVD区西半黒色泥砂層の出土で，やや小型であり，重量は25g。側面に文様が刻まれている。CS5はVA区18号溝内の出土であるが，小破片である。側面に文様が刻まれている。土製品（CC35）はVD区東半6号溝内の出土で，堅緻な土師質のつくりで，重量は30g。重量や形態から判断して，紡錘車と考えた。CS1とCC35は6世紀後半～7世紀に，CS2～CS5は6世紀後半にそれぞれ比定される。

(ロ) 砥石（図版85—3）　各地区より多くの砥石ないしはそれに類するものが出土しているが，時期の限定できるものは5点あり，全て安山岩を使用している。CS11はⅣ区1号住居址の出土で，相対する2長側面が使用によって凹んでいる。一部欠損するがほぼ完形品である。CS7はⅣ区5号住居址の出土で，細い条痕が多数認められる。CS8・10

はともにⅢE区黒色泥砂層の出土で，CS10は一端に孔のある携帯用の砥石の断片であろう。CS9はⅤD区東半1号住居址の出土で，2長側面に細い条痕が認められる。CS7・11は4世紀末～5世紀に，CS8・10は4世紀～6世紀に，CS9は6世紀後半にそれぞれ比定される。

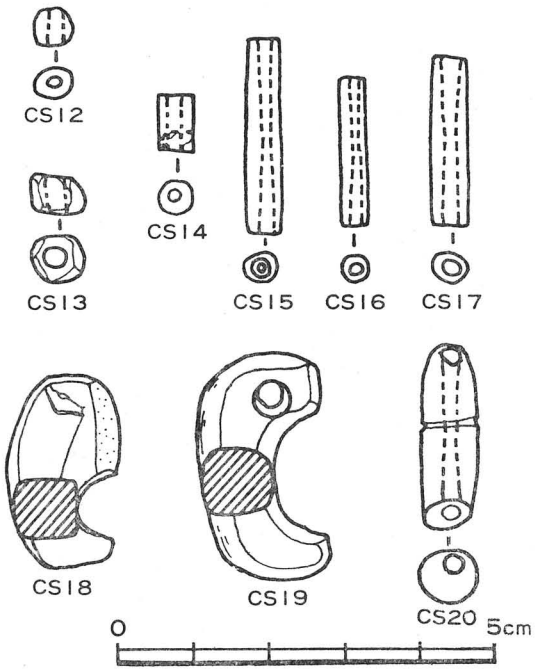


挿図22　各地区出土の砥石実測図

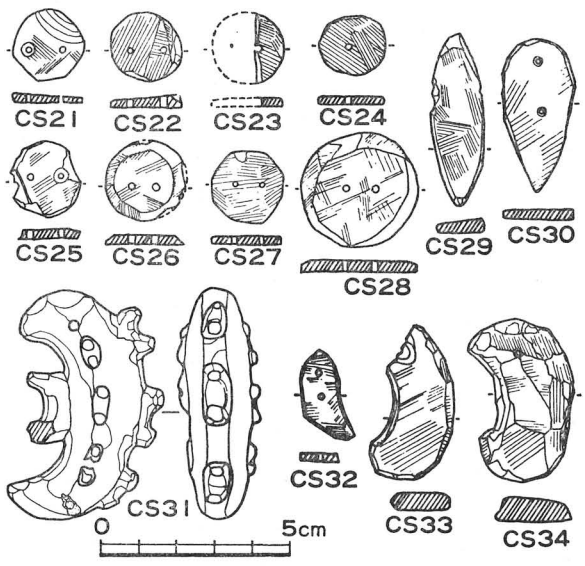
(ハ)　玉類（図版85—2）各地区からガラス小玉，管玉，勾玉などの玉類が出土しているが，この内，ⅢE区出土のガラス小玉，管玉は，滑石製模造品や手捏ね土器などと，本来セットであった可能性がある。また，ⅣB区の硬玉製の勾玉未製品は，玉類の生産のあり方の一端を示しており，注目されよう。

ガラス小玉は2点あり，CS12はⅢE区黒色泥砂層の出土で，トルコ石の青色を呈する。CS13はⅤA区茶褐色砂泥層の出土で，紫色を呈している。管玉は4点あり，内1点（CS14）は破損品である。CS14・15はⅢE区黒色泥砂層の出土で，CS14は淡緑色の珪質凝灰岩製品，CS15は両面穿孔の蛇紋岩製品である。CS16はⅡH区黒灰色泥砂層の出土で，両面穿孔の蛇紋岩製品である。CS17はⅣA区黒色砂層上部の攪乱土中よりの出土で，両面穿孔された濃緑色の碧玉製品である。本例は，方形周溝墓になる可能性があるⅣA区の溝状遺構付近の攪乱土中より出土しており，この遺構に伴ったものと考えられる。

勾玉は2点あり，CS18はⅣB区灰白色砂礫層の出土で，硬玉製の未製品である。硬玉の品質は悪く，わずかに緑色の部分があるだけで穿孔はしておらず，一部には表皮さえ残している。CS19はⅢD区耕土の出土で，片面穿孔による濃緑色の碧玉製品である。CS20はⅢD区青灰色砂泥層の出土で，中央部に溝がめぐり，両面穿孔の結晶片岩製品である。



挿図23　各地区出土の玉類実測図



挿図24　ⅢＥ区出土の石製模造品・子持勾玉実測図

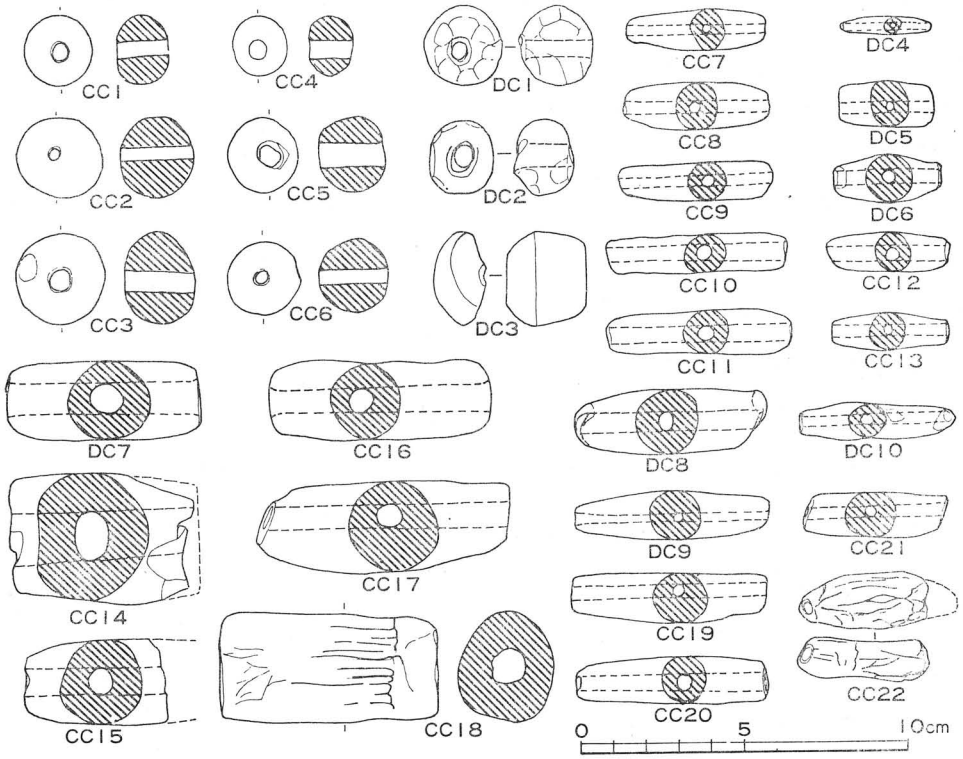
ＣＳ17・18は４世紀～５世紀に，ＣＳ12・15・16は４世紀～６世紀に，ＣＳ13は６世紀後半に，ＣＳ16は６世紀～７世紀にそれぞれ比定され，ＣＳ19・20は少なくとも古墳時代のものと考えられるが，ＣＳ20は縄文時代に属する可能性もある。

㈢　石製模造品[26]（図版85—１）ⅢＥ区の黒色泥砂層から，滑石製の子持勾玉，有孔円板，剣形模造品，勾玉形模造品が出土した。これらは同層出土の手捏ね土器とセットをなしたものと考えられる。黒色泥砂層には４世紀～６世紀の土器が含まれているが，これらの祭祀用品類は５世紀代のものであろう。調査地点より西方のいずれかの地にこの時代の祭祀の場が存在することは確実であり，比叡山の前山か，琵琶湖に注ぐ小河川の水に対する信仰と関連するものではないだろうか。

土　錘（図版84—１）調査地区の各地点から総数約240個の土錘が出土したが，その年代を確定できるもののみを扱うこととし，また７世紀以降の土錘もここに一括して扱った[27]。さらに，土錘は網漁法との関連を念頭において理解すべき遺物であるが，ＣＣ５やＤＣ２～４のように土

錘かどうか判断のつかないものもここに含めて扱っている。

i) 分類　ここでは土錘を５種類にに分類した。Ａタイプは軟質の焼きで横長の棒状を呈し，重量の平均値によって，48ｇを中心とする大型（A—1），８ｇを中心とする中型（A—2），５ｇを中心とする小型（A—3）の３種に細分できる。Ｂタイプは軟質の焼きの球形のもので，９ｇを平均重量としている。この内，ソロバン玉形をしたＤＣ３は特異な存在であるが破片のため不明な点が多い。Ｃタイプは須恵質のものを一括したが，形態上はＡタイプのものと同じである。表面採集のものを含めてもわずか３例しか出土しておらず，当地における古墳時代後期以後の土錘の主体は，軟質のものといえよう。



挿図25　各地区出土の土錘実測図

ii) 使用痕　ⅤＤ区西半の５号遺構からは，総数79個の土錘が一括して出土した。この５号遺構は土錘を焼いた施設が壊わされて溝内に二次堆積したものと推定され，土錘は全て生焼けの様相を帯び，外面には全く傷がなく，未使用の土錘と考えて誤りはなかろう。この他にもＣＣ22は焼成中につぶれたものらしく，５号遺構出土例と同様の外面的特徴を

示している。これらの観察から，土錘のなかで未使用のものと使用されたものの区別ができる。A－1タイプのCC16やDC7の観察によれば，長軸に沿う側面のほとんどが激しく磨滅しているなかで，わずかの幅をもって一長側面だけは磨滅していない。この磨滅痕

第22表　土　錘　の　分　類

地区	層位名	年代	個数 A－1	A－2	A－3	B	C	遺物番号
IIH	黒灰色泥砂層	7C		2(9.3g)	3(5.4g)	1		DC5 DC6 DC12
	暗青灰色泥砂層	7C		1(23.9g)				DC8
	I　砂　層	7C				1		DC3
	黒色ピート層	6C末		8(11.3g)				CC13
IIIE	黒色泥砂層	6C末				9(9.4g)		CC5 CC24
IVA	溝内黒色泥砂層	4C				1(15g)		CC2
IVB	灰白色粗砂層	4～5C				1(5.3g)		CC1
	茶褐色泥砂と砂の互層	6C	1(53g)	3(14g)		5(8.9g)	1(12.5g)	CC3　CC20 CC17 CC19
IV区	5号住居址床面	4～5C	1(30.4g)					CC15
	6号住居址床面	4～5C	1(73.8g)					CC14
IVD	黄褐色砂礫層	6C		1(7g)				
VA	下部黒褐色泥砂層	平安末～中世		1(7.9g)	1(0.7g) 1(4.6g)			DC4
	12号溝内	奈良～		1(12.5g)				
	暗灰色泥砂層	6C後半			1(4.5g)	1(3.2g)		CC4 CC12
VD西半	黒色泥砂層	6C後半	1(83.5g) 10(43.5g)	2(12.6g)		1(10.8g)		CC16 CC18
	5号遺構	6C後半		79(7.9g)				CC7～CC11 CC23～CC33
	大溝上部黒灰色泥砂層	7C末	8(52g)	7(6.5g)				DC10 DC11
	大溝下部黒灰色泥砂層	7C末	8(44.6g)	4(8.7g)		7(7.4g)		DC1, DC13 DC2, DC14
	大溝灰褐色泥砂層	7C末	1(46.4g)	1		2(10.2g)		
	大溝下部茶褐色泥砂層	7C末	3(40.3g)	5(12.2g)				DC7 DC9
VD東半	1号溝粗砂層	6C後半				1(9.6g)		
	6号溝灰褐色砂層	6C末～7C	1	2(9.6g)		3(12.9g)		CC6 CC21

※個数の後の（　）内の数値は，完形品の平均重量を示す。ただし，IV区住居址出土の2例は現存重量である。

を土錘の使用痕と考えるならば，使用した網の種類を考える上で手がかりとなる可能性がある。[28)]

iii) 製作技法　土錘の成形法の一つに，棒状のものを芯としてのり巻きを作るように粘土を巻き込み，成形後芯を引き抜く技法が考えられる。大型のA－1タイプの土錘の孔の断面が楕円形になっている例の多いことは，雑に粘土を巻き込んだ結果と考えられ，孔の内面には擦痕も認められる。両短側面は軽くととのえられているが，CC21のようにヘラ状のもので切っている例は，単なる調整法ではなく，長いのり巻き状のものから複数個体を切り取る技法が存在したことを想定させる。

球形のBタイプの成形法は明らかでないが，粗製で孔の大きいCC5やDC2では，粘土で球状に成形ののち棒状のものを突きさして孔をあけているものと，棒状の芯に粘土を巻きつけて成形したのち芯を引き抜いたものとが認められる。つくりの粗雑さと，孔の大きい点とを考え合わせると，この種の例は前述のように土錘かどうか疑わしい。

iv) 小結　琵琶湖を前面にひかえ，かつ小河川の多いこの地域では，各種の網漁がおこなわれたことが推測される。Ⅳ区の竪穴住居址の床面に廃棄されていた例や各地区からの土錘の出土がそのことを物語っている。当地域では軟質の焼きの土錘が主体をしめているが，VD区西半5号遺構から考えられるように，これらの土錘は当地域で製作されたものである。CC18のように外面を刷毛で調整している例からは，土師器の製作との関連が認められよう。一方，須恵質の土錘が6世紀後半代になって使用されていることは，産地の問題と考え合わせて興味深いものがある。[29)]

註　1）宮の前遺跡の他に和歌山県北田井遺跡にも例がある。
田代克己「近畿地方における展開」（『日本考古学協会昭和46年度大会研究発表要旨』）1971年，　富岡好久「考古学に現われた池田」（『新版池田市史』）概説編　1971年
藤丸詔八郎・笠井保夫『和歌山市北田井遺跡発掘調査概報』Ⅱ　和歌山県教育委員会　1971年

2）ここで布留式と呼ぶものは，大阪府小若江北遺跡の一括土器で代表させている。

3）大津市北郊における前期古墳の分布は以下のとおりである（第1図参照）。本遺跡から北方4kmの大津市下坂本には木岡山古墳群がある。前方後円墳2基，帆立貝式古墳1基，円墳数基からなり，5世紀代の造営と考えられている。
方形周溝墓群の立地する扇状地の西方，丘陵端部に赤塚古墳がある。前方後円墳と考えられるが前方部は消失しており，現存する後円部は径約34mあり，内部主体は竪穴式石室らしい。
独立丘「皇子山」の丘頂には前方後方墳と2基の円墳からなる皇子山古墳群がある。1号墳

は全長60mの前方後方墳で，前方部を南にむけて南北方向に築造されている。後方部に土壙墓4基，前方部に粘土槨1基が検出されている。4世紀後半頃の築造と考えられている。2号墳は周溝をもつ径約20mの円墳で，時期は明らかでないが，墳丘の裾からは畿内第5様式の土器が出土している。3号墳は径約15mの円墳で，詳細は不明。

大津市南方の山頂には膳所茶臼山古墳がある。全長120m の前方後円墳で埴輪をもつ。内部主体は不明であるが，4世紀後半から5世紀前半に比定されている。また南側には小茶臼山古墳と呼ばれる小円墳がある。

『大津市皇子山古墳群調査概要』(『滋賀県文化財調査概要』7集) 滋賀県教育委員会 1971年

4) 方形周溝墓の被葬者を単位集団との関係で位置づけたものに，次の論文がある。
都出比呂志「農業共同体と首長権」(『講座日本史』1) 東京大学出版会 1970年
水野正好「古墳発生の論理」(『考古学研究』72号) 1972年

5) 各々の竪穴住居址が立地するⅤA区，ⅤD区東半では，溝やその他の遺構も検出されている。後述の「ⅤA区の調査」，「ⅤD区東半の調査」を参照されたい。

6) このⅣD区の茶褐色砂泥層からは，宋銭が集中して出土した。遺構や施設に伴うものではなくバラバラの状態での出土であった。その種類などは第4章で扱っている。

7) 坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』笠岡市教育委員会 1956年

8) 田辺昭三編『船橋Ⅱ』平安学園考古学クラブ 1961年

9) 佐原真「琵琶湖地方」(『弥生式土器集成』本編2) 1968年

10) 田中琢「布留式以前」(『考古学研究』46) 1965年
原口正三「大阪府松原市上田町遺跡の報告」(『大阪府立島上高校研究報告』) 1965年

11) 畿内からの搬入品と考えられるものは，特にその胎土・色調が特徴的であり，他の土器とは著しく異質である。この現象は他の遺跡でも認められている。目下，この土器について，東北大学大学院清水芳裕氏に胎土分析をおねがいしている。

12) 滋賀県下物出土に同じものがある。註9に同じ。

13) 平城京跡においても，布留式に伴って出土している。
安達厚三「古墳時代溝出土の遺物」(『奈良国立文化財研究所年報』) 1969年

14) 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966年

15) この種の杯の下限は，地域によっては7世紀中葉前後まで下るものもあり，今後とも十分検討する必要がある。

16) 篦記号には「×」「／」「//」「///」「##」などがある。次の第4章で扱っている7世紀後半の土器が出土したⅤD区大溝出土の畿内風の甕には，篦記号は認められない。なお，このタイプの甕は，以後8世紀代まで続くが，他地域には見られず，近江型の甕と考えてよいだろう。

17) 最近調査された大津市北大津駅遺跡，長浜市鴨田遺跡でも同時期の土器が出土しており，整理の結果が待たれる。

18) 『甲賀郡甲西町狐栗古墳群調査概要』（『滋賀県文化財調査概要』6集）滋賀県教育委員会 1968年

19) 西田弘「大津市中保町遺跡」（『滋賀県文化財研究所月報』6）1968年

20) 平城京の朱雀門下層より出土している。

21) VD区東半6号溝の溝内堆積土には，6世紀後半～7世紀前半の土器が含まれている。この溝内から出土した木器は便宜的に第3章で扱っているが，7世紀前半のものを含むと考えるべきであろう。

22) 後藤守一は下駄を我国独自の履物と考えていた。

後藤守一『日本古代文化研究』河出書房 1942年

一方，中国の河南地方には，木製の台板に鼻緒を装置した履物や，鼻緒はないが下駄のように歯をつくり出した履物が史料にあらわれている。宮本馨太郎『かぶりもの・きもの・はきもの』（『民族民芸双書』24）岩崎美術社 に引用されている『本草綱目』，『三才図絵』にみられる。

23) 滑石製の下駄模造品の資料には以下のものがある。

京都市鏡山古墳	3足
奈良県加瀬出土	1足
大阪府道明寺沢田出土	1足
〃　岸和田付近出土	1足
東京都等々力大塚古墳	1足
群馬県藪塚古墳	1足
〃　白石稲荷山古墳	1足

高橋健自「古墳発見石製模造器具の研究」（『帝室博物館学報』1）1921年

24) 『扇面古写経』，『伴大納言絵詞』，『法然上人行状絵巻』には下駄をはいた人物が描かれている。『扇面古写経』における僧侶の下駄は，前ツボが一方に偏し，歯が前後左右に開いている。『伴大納言絵詞』では，歯は著しく高く，極端な銀杏歯である。『法然上人行状絵巻』では，前鼻緒のない引っかけ式のものである。

25) 石材の鑑定は京都大学理学部石田志朗氏に，また玉類の分析・鑑定は京都教育大学井本伸広氏にそれぞれおねがいした。

26) 滑石という用語は，滑石（Talc），緑泥片岩（Chlorite-shist），蛇紋岩（Serpentine）など，暗灰色や緑灰色の軟らかい石の総称として用いている。

27) 報告書作成の方針で7世紀以降を第4章扱いとしたが，土錘に関しては，6世紀～7世紀にかけて形態上全く変化が認められないので，一括して扱うこととした。

28) A—1タイプの土錘の使用痕の検討から考えられることは，磨滅のない一長側面が，網に土錘を着装した際に上方にきており，他の長側面がこすられて磨滅してもこの上方の部分だけは

こすられることがない。すなわち，地引網か網の底が湖底につくような定置網が推定される。

29）現在までに判明している限りでは，当地域に近い須恵器窯は湖東の鏡山古窯址群で，6世紀後半代に土錘を生産していることが確認されている。

第21表　古墳時代の竪穴住居址

地点No.	形　態	規　模	方　位	施　設	遺　物	備　考
Ⅳ区 1号	隅丸方形	5.08×5.56m	N-25°W	・柱穴4。柱間2.68m。 ・東辺壁際に住居に附属する土坑あり。 ・壁の内側に沿って周溝をめぐらす。	・土坑内から倒立状態で，土師器(C16)。土坑内および周溝内より土師器（C40)。床面に密着して，土師器(C23)。覆土中の土師器(C12，C19，C32，他)。 ・東辺周溝内より砥石（CS11)。	・Ⅳ区2号と重複し，2号よりも新しい。 ・後世の削平甚しい。 ・布留式併行。
Ⅳ区 2号	隅丸方形	5.6×5.6m	N-35°W	・柱穴2本のみ検出。本来4本か。柱間2.9m。 ・東辺に楕円形の土坑。	・土師器(C18，C31)。	・Ⅳ区1号と重複し，1号より古い。 ・後世の削平が甚しい。 ・布留式併行。
Ⅳ区 3号	隅丸方形	6.1×6.1m	N-45°W	・柱穴4。柱間2.0～2.2m。 ・四壁に内接する内部に，床面と同じ高さまで土を充填した幅広い周溝をめぐらす。 ・中央に炉址。内に炭，灰，角礫が残存。	・土師器(C14 C22，C26，C33，C37，C38，C43)。 ・他に床面密着の土師器小片あり。	・Ⅳ区4号と重複し，4号より新しい。 ・後世の削平甚しい。 ・庄内式併行。
Ⅳ区 4号	隅丸方形	5.7×5.7m	N-60°W	・柱穴4。柱間3.2m。 ・周溝は東南を除く三壁をめぐる。西南隅には外方へつづく細い溝がつながる。 ・東南壁に2段掘りの長方形の土坑あり。 ・中央に浅くくぼんだ炉址。内に炭・灰の層。	・床面に密着して土器師（C30)。 ・他に土師器(C24，他)。	・Ⅳ区3号より古い。 ・庄内式併行。
Ⅳ区 5号	隅丸方形	4.4×4.9m	N-45°W	・柱穴4。柱間2.4m。 ・住居址内周溝	・南隅ピットより砥石（CS7)。	・土坑と炉址の間には踏み固められたと思われる堅い部

地点No.	形　態	規　模	方　位	施　設	遺　物	備　考
				は壁からやや離れてめぐる。 ・東南壁に楕円形の土坑。 ・南隅にピット。 ・中央寄よりに炉址，炭・灰。 ・東北側にも1箇所ピットがあるが，住居址に伴なうものかどうか不明。	・土師器(C13，C15，C25，C34，C39) ・土錘(CC15)。	分あり。 ・Ⅳ区6号・7号と重複。6号より古い。7号との先後関係不明。 ・布留式併行。
Ⅳ区 6号	隅丸方形		N-40°W	・柱穴4。柱間2.4m。 ・西側にピットがあるが，住居址との関係不明。	・土師器(C35，他)。 ・土錘(CC14)。 ・西側ピット内より土製品。	・西南隅を残すだけ。形は推定。 ・Ⅳ区5号が廃絶した後，部分的に土盛をして6号を構築。 ・布留式併行。
Ⅳ区 7号			N-30°W	・周溝状の溝が一辺と少し残存。	・土師器(C29)。	・Ⅳ区5号・6号と重複。6号よりも古く，5号との先後関係不明。 ・柱穴が確認されず，住居址と断定することは困難。 ・布留式併行。
Ⅳ区 8号			N-55°E	・北壁が残存するだけ。	・土師器片。	・住居址と断定はできない。 ・布留式併行。
Ⅳ区 9号	隅丸方形？	6.1×6.1m	N-35°W	・柱穴3本のみ検出，本来4本か。 ・柱間3.2m。 ・隅丸長方形の2段掘り土坑。 ・周溝状の遺構。 ・他に柱穴状ピットがあるが，住居址との関係は不明。	・柱穴，土坑等から土師器。(C11，C17，C20，C27，C28，C36，C41，C42，他)	・形態，規模は推定。 ・一部調査区域外におよぶ。 ・附近に他の住居址の存在も考えられる。 ・布留式併行。
Ⅳ区 10号	隅丸方形		N-50°W	・柱穴状のピット3本のみ検出。本来4本か。他の1本が推定される部分は攪乱を受けている。	・土師器片。(C21，他)	・一部激しい攪乱を受ける。 ・Ⅳ区4号と5号との間に位置する。 ・布留式併行。

地点,No.	形　態	規　模	方　位	施　設	遺　物	備　考
				・柱間2.2m。 ・楕円形の土坑。		
ＶＤ区東半1号	隅丸方形？	5.3×5.3m？	N-40°W	・柱穴２本のみ検出。本来４本か。 ・柱間2.2m。	・径12cmの柱痕残存。 ・炭化木材，炭，灰が床面に残存。 ・砥石(CS9)，土師器小片，鉄滓等。	・形態，規模は推定。 ・ＶＤ区東半２号住居址と重複し，２号よりも古い。 ・６世紀後半。
ＶＤ区東半2号	隅丸長方形？	6.4×4.4m？	N-45°W	・柱穴４。柱間1.9～2.8mと3.6mで，柱穴の位置はやや不整形で，台形を呈する。 ・西北辺の中央に竈跡がある。	・竈内から土師器（C230)。 ・他に須恵器片。	・形態，規模は推定。 ・１号住居址と重複し，１号よりも新しい。 ・６世紀後半。
ＶＡ区1号	隅丸方形	4.6×4.6m	N-45°W	・柱穴３本のみ検出。他の１本は12号溝によって破壊されている。 ・柱間2.2～2.3m。 ・東北辺の中央に竈跡。 ・住居址を囲むように22号溝が半円形にめぐっている。	・須恵器杯（C298)，土師器（C249，その他小片） ・琴柱(CW140)，用途不明木器（CW141)・うき状木器（CW18,CW25)。	・遺物は全て床面から浮いている。 ・竈跡の付近に遺物は多いが，住居址の北半部は12号溝によって破壊されている。 ・６世紀後半。

※Ⅳ区の竪穴住居址の年代推定の内，Ⅳ区3号・4号は庄内式併行としたが，これは床面密着の土器が庄内式併行であることによる。しかし周溝や柱穴内からは布留式土器が出土しており，住居址の残存度と考え合わせて，この床面密着土器が本来密着していたかどうかによって住居址の年代は下ることもあり得る。

※床面密着土器のない住居址は，周溝あるいは柱穴内の土器を検討の対象とし，それもない場合は覆土中の土器を検討した。

※住居址の方位は，四壁の内で北を中心とする壁の方位であらわした。

第23表　方形周溝墓出土の土師器観察

遺　構	器　形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	備　考
ⅢF区 方形周溝墓	壺	C1	・球形の胴部に外反する口縁部がとりつく。 ・頸部は一条のはりつけ突帯で飾る。	・口縁外端を軽くおさえて面取りする。 ・胴部は縦方向の篦磨研を施すが，ところどころ削り残された刷毛目が見られる。 ・内面は篦削り。	・頸部の突帯は，この地方でよく見られる装飾法である。弥生時代後期以来の伝統を引くものか。
	甕	C4	・球形の胴部と，頸部で「く」の字状に屈曲して外開きする口縁を持つ。 ・口縁端部は内方へ僅かにつまみ出す。 ・底部は欠いているが丸底であろう。	・口縁内面および，胴部外面に刷毛目を残す。 ・口縁外面はナデ仕上げし，胴部内面は篦削りを加え，壁を薄く仕上げている。	・小若江北遺跡の甕に近い。
	椀	C5	・小型の椀で，丸底の胴部に，頸部でやや屈曲した後，垂直に立ち上がる口縁をなす。	・口縁内面と胴部外面に刷毛目を加える。 ・口縁外面と胴部内面はナデ仕上げをおこなう。	・これ以外に弥生式土器の小片を若干出土。
ⅣA区 溝状遺構	壺		・口縁部と，底部を欠き，全形は不明であるが，おそらく，球形の胴部に外開きの口縁部がとりつくのであろう。	・外面は篦研磨を施し，内面はナデ仕上げしている。	・これ以外に弥生式土器片を若干出土。
ⅣB区 1号方形 周溝墓	壺	C2	・口縁部のみを残す破片で，二重口縁をなす。	・本体は明確な屈曲をせず，屈曲点外面に断面三角形の突帯を貼り付けることにより，二重口縁の形状をなす。 ・内外面とも篦磨研を加える。	
	無頸壺	C3	・やや偏球形の胴部につづいて，僅かに立ちあがる口縁部をなす。	・内外面とも篦磨研を加える。	・弥生式土器かもしれない。
	甕　A	C6 〜 C8	・頸部で屈曲して外反した後，再び内方へ屈曲して，口縁部をなすもの。 ・「S字状」口縁をなすものと，そのまま垂直に立ち上がるものとがある。	・C6，C7のように口縁部や肩部に列点文や，行直線文を施すものが見られる。C7のように篦による刻み目を加えるものもある。C6のように粗い刷毛目を残すものもある。	・C7は弥生後期まで遡る可能性がある。
	甕　B	C9	・小片だが，球形の胴部にやや内彎気味に外方へ開く口縁部がつく器形。 ・口縁端部を僅かに肥厚させる。	・口縁部は内外面ともナデ仕上げしている。 ・胴部は外面に横方向の刷毛目を残し，内面には篦削りを施す。	・小若江北遺跡の甕に類似。
	高　杯	C10	・口縁部および脚端を欠く。 ・杯部には段を有する。 ・脚部は大きく広がるか。	・内外面ともに篦磨研を加える。	・これ以外にも弥生式土器片が若干出土。

第24表　竪穴住居址出土の土器観察

器形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
壺　A	C12 〜 C15	・全形の判明する破片はないが，球形の胴部に外反気味に開く口縁がとりつく形状をなすであろう。底部は小さな平底か。 ・頸部に刻み目のある突帯をめぐらす破片（C15）には直口に近い口縁がつくであろう。	・口縁の内外面をよく篦磨研する。C14は内面に一部刷毛目を残す。 ・C15の胴部外面にも篦磨研の痕が顕著である。	・C12はⅣ区1号住居址，C13，C15はⅣ区5号住居址，C14はⅣ区3号住居址。	・C15は他よりも時期がやや遡る可能性がある。
壺　B	C11	・明確に屈曲して二重口縁をなす。 ・胴部を欠くが，球形のものであろう。	・内外面ナデ仕上げをおこなう。	・C11はⅣ区9号住居址。	
小型壺	C16	・球形の胴部にやや内彎気味に外上方へ開く口縁部がとりつく。	・極めて薄手の作りで，外面はごく粗い刷毛目を残し，内面は平滑なナデ仕上げをおこなう。	・C16はⅣ区1号住居址。	
甕　A	C18 〜 C21	・「S字状口縁」をなす。口縁端部はやや厚みをもつ。 ・口縁部だけの破片であるが，おそらく脚台のつかない平底の器形であろう。	・内外面ナデ仕上げをおこない，一部に刷毛目の見られるものもある。	・C18はⅣ区2号住居址，C19はⅣ区1号住居址，C20はⅣ区9号住居址，C21はⅣ区10号住居址。	・ⅢE区灰褐色微砂層出土のものに類似。
甕　B	C30	・外反する口縁に，頸部で若干の幅をもって，胴部に移行する。	・口縁部はナデ仕上げをおこない，胴部は内外とも細い刷毛目（あるいは通常の刷毛目と区別して櫛歯状工具によるナデツケと言うべきか）を残す。	・C30はⅣ区4号住居址。	・ⅢE区灰褐色微砂層出土のものに類似。
甕　C	C22 〜 C29	・いずれも口縁部だけの小片であるが，球形の胴部に，頸部で「く」字形に屈曲して外開きする口縁部がとりつく。 ・口縁端部を内側へ僅かに肥厚させるものもある。	・口縁の内外面はナデ仕上げをおこない，胴部外面には刷毛目を施し，内面は例外なく篦削りを加える。 ・器壁は極めて薄く，底部内面には指頭圧痕が顕著である。	・C22，C26はⅣ区3号住居址，C23はⅣ区1号住居址，C24はⅣ区4号住居址，C25はⅣ区5号住居址，C27，C28はⅣ区9号住居址，C29はⅣ区7号住居址。	・ⅣB区下層式，小若江北遺跡出土のものに類似。
小型甕	C33 C39 C40	・C33はやや長目の器形。 ・C40は球形に近い胴部から，頸部であまりくびれずにそのまま短い口縁部に移行	・外面には刷毛目を施す。内面はナデ仕上げ。	・C33はⅣ区3号住居址，C39はⅣ区5号住居址，C40はⅣ区1号住居址。	

器形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
		する。			
鉢	C31 C32 C38	・C38は頸部で殆んど屈曲せずに胴部に移行する。 ・他は浅い胴部に外開きの口縁部をなす。	・C38は外面に叩き目を施す。 ・他は刷毛目調整の痕を残す。 ・内面はナデ。	・C31はⅣ区2号住居址，C32はⅣ区1号住居跡，C38はⅣ区3号住居跡。	・C38はその他のものよりも時期の遡るものであろう。
高杯	C43	・あまり大きくない杯部に短かい脚部がとりつく。	・内外面とも篦磨研を施す。	・C43はⅣ区3号住居址。	
小型杯	C41 C42	・浅い胴部から，2段に屈曲して外上方に開く口縁をなす。	・内外面とも篦磨研を施す。	・C41，C42はⅣ区9号住居址。	・小型杯，小型丸底壺，小型器台は，いわゆる小型三種の土器として，布留式（小若江北遺跡の土器で代表させる）に属するものである。
小型丸底壺	C17	・小さな胴部に大きく開く口縁部がとりつく。	・内外面とも篦磨研を施す。	・C17はⅣ区9号住居址。	
小型器台	C34 ～ C37	・口縁端部を丸くおさめるもの（C34）とやや立ち上がり気味に作るもの（C35）とがある。	・内外面に篦磨研を施すが，脚部内面に刷毛目を残すものがみられる。	・C34はⅣ区5号住居址，C35はⅣ区6号住居址，C36はⅣ区9号住居址，C37はⅣ区3号住居址。	
小形甕	C230	・口縁部は外傾し，その端部を上方につまみ出している。 ・体部は扁球形である。	・内外面とも刷毛目調整の後，口縁部の内外面を横ナデ調整し，体部下半を篦削りしている。	・C230はⅤD区東半2号住居址カマド内。	・6世紀後半。
中形甕	C249	・やや縦長気味の球形体部に，短く外傾する口縁部がつく。口縁端部は平らにつくられている。	・内外面とも刷毛目調整の後，口縁部の内外面を横ナデ調整し，体部下半外面を篦削りしている。	・C249はⅤA区1号住居址。	・6世紀後半。
杯	C298	・須恵器の杯で，全体に矮少化し，蓋受けの立ち上がりは極めて低く内傾している。	・つくりは粗雑であり，底部の篦削りの範囲も狭い。	・C298はⅤA区1号住居址。	・6世紀後半 ・陶邑TK209に相当する。

第25表　各地区出土の古墳時代の土器観察

ⅢE区下層式の土師器

器　形	土器No.	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　考（層位）
壺A	C44	・口縁部はわずかに外に開き，端部は内側に小さな段があり，内外両面に小さな刻み目を施す。 ・頸部外面に刻み目を施した突帯を一条めぐらす。 ・体部は最大径が中央よりやや上にあり，肩部が張り，胴部下半はすぼまる。 ・上げ底。	・口縁部内外面は横ナデ。内面の下半には，縦の篦磨研を施す。 ・体部外面は縦の篦磨研をなし，内面は底部から螺旋状に荒い刷毛目調整した後，上半部をナデによって刷毛目を消す。 ・肩部外面には，櫛歯状施文具による平行線文，波状文と篦により小さな刻目文を施す。	・ⅢE区灰褐色微砂。 ・黄褐色，胎土良好，焼成良好。
壺B_1	C46	・口縁部は強く外反して開き，更に途中で内側に段をもって直立する。端部はわずかに外側につまみ出す。 ・体部は最大径が中央にあり大きく張り出す。体部の大きな張りに比べ，頸部は細く，その為体部の形は算盤玉形をなす。 ・上げ底。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面は刷毛目調整後に縦の篦磨研をする。内面は横の刷毛目調整。	・ⅢE区黄褐色砂。 ・黄褐色，胎土良好，焼成良好。
壺B_2	C49	・口縁部はC46とほぼ同様であるが，端部のつくりが丸くなる。 ・体部は張りがC46に比べ小さくなり，全体に球形に近い。 ・上げ底か。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面は上半と下半が逆向きの2段の斜方向の刷毛目調整。内面は刷毛目調整後ナデ仕上げ。	・ⅢE区灰褐色微砂。 ・全体に磨滅が激しい。胎土に砂粒を含む。
壺C_1	C78	・直立する頸部は長く，口縁部は一度外反して開き，更に直立する。 ・体部は最大径が下位にあり，扁球形をなす。 ・平底か。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・頸部から体部最大径部までの外面は，縦の篦磨研で，頸部内面は櫛歯状具による横方向の調整である。 ・体部内面下半は2段の篦ナデ（輪積みの単位に一致している）。上半はナデ調整。	・ⅢE区黒色泥砂。 ・黄褐色，胎土良好，焼成良好。
壺C_2	C82 C181	・口縁部は長くわずかに外に開く。 ・体部最大径が口縁部径よりわずかに大きい（C181）。 ・平底。	・口縁部は内外面横ナデ。C181の内面は刷毛目調整痕がはっきり残り，ナデは認められない。 ・体部内面は横方向の刷毛目調整。 ・体部外面は刷毛目調整後，縦の篦磨研を行なう。	・C82はⅢE区黒色泥砂，C181はⅣB区黒褐色泥砂。 ・いずれも褐色，胎土中に微砂を含む。
壺D	C45 C56 C151	・口縁部は外上方に直線的に長くのびる。 ・頸部が特に細くすぼまるもの（C45）がある。	・C45は内外面篦研磨を行なう。 ・C56は外面が粗い篦磨研で，内面はナデ調整である。	・C45・56はⅢE区灰褐色微砂。C151はⅣB区暗青灰色泥砂。 ・全般に胎土・焼成は良好。

器　形	土器No.	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　　考（層位）
			・C151は外面が篦磨研で，内面はナデ調整である。	・C45は内外面ともに光沢のある黒灰色を呈す。 ・C56は本類に入るものか。
壺E_1	C48	・口縁部は外反して直線的に開く。 ・平底か。	・口縁部内面は横の刷毛目調整。外面は縦の刷毛目調整後横ナデ。 ・体部内面は下→上方向のナデ。外面は縦の刷毛目調整の上を粗く暗文風の篦磨研を施す。	・ⅢE区灰褐色微砂。
壺E_2	C50	・口縁部は外彎して開く。 ・平底か。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面は篦ナデ。内面はナデで平滑に仕上げる。	・ⅢE区灰褐色微砂。 ・暗褐色。
甕A	C51 C52 C54 C57 C124	・口縁部は短く外反する。 ・体部は球形に近いもの（C51，57）とそうでないものとがある。 ・平底ないし上げ底	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面は細いササラ状の条痕を残すもの（C52・57）と篦によると思われる擦痕を残すもの（C51）とがある。 ・体部内面はC51では篦削りを行ない，C52では刷毛目調整を行なう。C54・57には擦痕が見られ篦削りの一種かも知れない。 ・C52は全体に調整・仕上げが不完全で器面に凹凸が見られる。 ・口縁部と体部の接合部外面を篦の先端でナデつけた跡が見られるものが多い。	・C51・52・54・57はⅢE区灰褐色微砂，C124はⅣB区灰白色粗砂。 ・C124は異質なもの。
甕B	C53 C55 C58 C115 C116 C150 C153 C180 C193 C201	・口縁部は短く外反する。 ・体部は張りが小さくやや縦長である。C116は体部の張りが強い。 ・平底か。	・口縁部内外面は刷毛目調整後横ナデを行なう。 ・体部外面は刷毛目調整。 ・体部内面はC53は篦削りを行なう。C115・201は刷毛調整。C55・58・153・180・193は刷毛目調整後ナデ仕上げを行なう。 ・C116は磨滅が著しく手法ははっきりしないが，外面に砂粒の大きな移動が見られる。	・C53・55・58はⅢE区灰褐色微砂，C115・116はⅣB区灰白色砂礫，C150・153はⅣB区暗青灰色泥砂，C180はⅣB区茶褐色泥砂と砂の互層，C193・201はⅤD区東半8号溝。 ・胎土中に砂粒を含む。
甕C_1	C69 C90 C136	・『S字口縁』 ・体部は最大径がほぼ中央にあり，縦長の楕円形である。 ・平底。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面は櫛歯状原体によって縦方向の調整を行なう。 ・体部内面はナデによって器壁を薄く仕上げる。 ・口縁部外面には櫛歯状具による列点文を施すものが多	・C69はⅢE区灰褐色微砂，C90はⅢE区黒色泥砂，C136はⅣB区灰白色粗砂。 ・暗褐色，胎土中に粗砂を含む。 ・外面にはスス付着。

器　形	土器No.	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　　考（層位）
			く，肩部外面には同じく櫛歯状具によって平行線文，列点文や篦による浅い沈線を施し，胴部にも櫛歯状具によって平行線文，波状文を施し，更に突帯をめぐらし，突帯の中央に沈線を施して，縦に刻み目を入れる。	
甕C_2	C63 C65 C67 C70 C122 C154	・『S字口縁』。 ・体部は胴部が強く張り球形となるもの（C70）と張りが弱く縦長のもの（C67，154）とがある。 ・平底。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面は櫛歯状具による調整を行なう。C70では縦方向に調整した後，横方向に櫛目を入れる。 ・体部内面はナデ調整。	・C63・65・67・70はⅢE区灰褐色微砂，C122はⅣB区灰白色砂礫，C154はⅣB区暗青灰色泥砂。 ・褐色，胎土中に粗砂を含む。
甕D	C59 C64 C92 C129 C131 C132	・口縁部は「く」字状に外反し，端部は上方につまみ上げる。 ・体部は最大径が中央より上にあり丸味があるが，下半はややすぼまる。 ・尖り気味の小さな丸底か。	・口縁部は内外面刷毛目調整後横ナデ。内面に横方向の刷毛目を残すものがある。 ・体部外面は肩部から胴部最大径部まで斜めの叩き締めを行ない，その上に細く鋭い縦方向の刷毛目を粗くつける。叩き目幅は2㎜内外で細い。下半は叩き目は見られず縦方向の刷毛目である。下半の刷毛目は浅く太くて，上半の叩き目の上のそれとは異なるものと思われる。 ・体部内面は入念な篦削りで器壁を一定して薄く仕上げ（3㎜程度），口縁部との境には明瞭な稜をつくる。	・C59・64はⅢE区灰褐色微砂，C92はⅢE区黒色泥砂，C129はⅣB区灰白色砂礫，C131・132はⅣB区灰白色粗砂。 ・C59・64・92・129は暗茶褐色，C131・132は褐色。 ・胎土，焼成は良好。 ・外面にスス付着するものがある。
甕E	C60 C137	・『二重口縁』で頸部は短い。 ・体部の張りが小さい小型の器形か。 ・平底か。	・口縁部は内外面刷毛目調整後横ナデ。C60の内面には刷毛目がはっきり残る。C137の口縁外面には櫛歯状具による平行線文を施す。 ・体部外面は横ナデ。内面は篦削り。	・C60はⅢE区灰褐色微砂，C137はⅣB区灰白色粗砂。 ・外面にスス付着。
甕F	C61 C62 C97	・口縁部は外反して開く。 ・体部は肩部が小さく，胴部は張らずに底部に向かってすぼまる。体部径は口径よりわずかに小さい。 ・平底。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部は内外面刷毛目調整。	・C61・62はⅢE区灰褐色微砂，C97はⅢE区黒色泥砂。 ・外面にスス付着。
甕G	C117	・外反する口縁部は先端が内側に折れ曲がる。 ・体部は肩部の張りがほとんどない。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面は縦の刷毛目調整内面はナデ。	・ⅣB区灰白色砂礫。

器　形	土器No.	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　　考（層位）
鉢A	C47	・口縁部は小さく外反する。 ・体部は最大径が口径より小さく，最大径部以下は底部に向けて急にすぼまる。 ・上げ底。	・口縁部外面は横ナデ，内面は横方向の刷毛目調整。口縁端部外面に小さな刻み目を施す。 ・体部外面はナデ調整を行ない，上半には櫛歯状具による平行線文と列点文を施す。 ・体部内面はナデ調整。	・ⅢE区灰褐色微砂。 ・暗褐色，胎土中に粗砂を含む。 ・外面にスス付着。
鉢B	C183	・口縁部は極めて小さく外反する。 ・体部は口縁部との接合部から垂下し，下半部で丸味をもって底部につづく。 ・平底。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面は横方向の荒い叩き締めを行なう。内面はナデ調整。	・ⅣB区暗青灰色泥砂。 ・赤褐色，胎土中に砂粒を含む。
鉢C	C111 C141	・口縁部は外反して開き，更に段をつくって直立する。C111の端部は外方につまみ出され，C141は丸くつくる。 ・体部は肩部，胴部の区別がなく，張りも全くない。 ・平底。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部は縦方向の刷毛目調整後ナデ仕上げ。内面はナデ調整。	・C111はⅢE区黒色泥砂，C141はⅣB区灰白色粗砂。 ・C111の大きな平底は古い要素か。
甑	C158	・口縁部は欠損している。 ・小さな平底，底部穿孔。	・外面は横方向の荒い叩き締めを行なう。 ・内面は篦削り（下半は下→上，上半は右→左方向）後ナデ仕上げを行なう。	・ⅣB区暗青灰色泥砂。 ・底部穿孔は焼成後である
器台	C100	・脚裾部のみ残存する。	・内外面篦研磨する。 ・上部に小さな刻み目と櫛歯状具による平行線文を施す。	・ⅢE区黒色泥砂。 ・赤褐色，胎土良好。
高杯A	C66	・杯部は底部から外に小さく鋭い稜をつくり，外方に直線的に開く。 ・脚部は比較的短い柱部に大きく開く裾部がつくか。	・内外面縦方向の篦磨研。	・ⅢE区灰褐色微砂。 ・赤褐色，胎土良好。
高杯B	C73 C74 C164	・脚裾部のみ残存する。 ・裾部は柱部から段をつくって広がる。C164の裾端部は上・下に肥厚する。 ・棒状の柱部で杯部につながるものであろう。	・内外面篦研磨。 ・C74は裾天井部に4個の円孔を，C164では中央部に隅丸三角形の孔を4孔穿つ。	・C73・74はⅢE区灰褐色微砂，C164はⅣB区暗青灰色泥砂。
手焙り形土器	C76	・蔽部の一部のみ残存する。 ・口縁端部は肥厚する。	・外面は荒い刷毛目の他，刺突文で画された篦描きの綾杉文帯を配する。 ・内面はナデ調整。	・ⅢE区灰褐色微砂。

ⅣB区下層式の土師器

器形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	備考（層位）
壺A_1	C79	・大きく開く口縁部の外面に貼付け浮文を施す。（浮文は2個1組で4対か）	・内外面横ナデ。浮文の部分は縦方向にナデつける。	・ⅢE区黒色泥砂。
壺A_2	C168	・直立する頸部から，口縁部は大きく外反して開く。 ・頸部に沈線をめぐらし，浮文を施す。（浮文は4個か）	・内外面横ナデ。	・ⅣB区暗灰色粗砂。
壺B	C80 C133 C134 C149	・『二重口縁』。C80・133・134は外側に稜をつくるが，屈曲がほとんどない。 C134の口縁端部は内外に肥厚する。	・C80の口縁部外面は篦磨研し，内面は横ナデ。C133・134・149は内外面横ナデ。 ・体部内面は，C80・133・149では篦削りしている。	・C80はⅢE区黒色泥砂，C133・134・149はⅣB区灰白色粗砂。 ・C80は赤褐色，C133・134・149は褐色。 ・C80の外面はスス付着。 ・C149は古い時期のものか。
壺C	C89 C138	・『二重口縁』。一度外反して開いた口頸部は外側に鈍い稜を，内側に段をつくって上方に折れ曲がる。	・内外面横ナデ。	・C89はⅢE区黒色泥砂，C138はⅣB区灰白色粗砂。 ・C138の口縁部上端面をも含めた全面に光沢のある黒色の薄い皮膜がついている。
壺D	C125	・口縁部は「く」の字状に外反する。 ・体部は球形になるか。	・口縁部は横方向の篦磨研。 ・体部外面は横方向の篦磨研。肩部には一部篦削り痕が見られる。 ・体部内面は下半を下→上方向の篦削りした後，上半を左→右方向に篦削りする。	・ⅣB区灰白色砂礫。 ・赤褐色，胎土，焼成ともに良好。
壺E_1	C81 C85	・口縁部は「く」字状に外反して直線的にのびる。端部はわずかに肥厚する。 ・口縁部と体部との接合部に断面三角形の突帯が貼りつけられる。	・口縁部は内外面横ナデ。C81の外面には一部篦磨研が見られる。 ・体部外面は刷毛目調整後，荒く篦磨研するが，刷毛目が多く残る。 ・体部内面は，肩部の粘土紐つなぎ目を篦でナデつけた後，横ナデを行なう。胴部は左→右方向の篦削り。	・ⅢE区黒色泥砂。
壺E_2	C126 C165 C167	・口縁部は長く「く」字状に外反する。	・口縁部は内外面刷毛目調整後，横ナデを行なう。 ・体部外面は刷毛目調整後横ナデを行なう。体部内面はC165が下→上方向のナデ調整し，C167は篦削り。	・C126はⅣB区灰白色砂礫，C165・167はⅣB区暗灰色粗砂。 ・C165の外面にはスス付着。 ・C126はやや異質。
壺F	C77 C119	・口縁部は外上方に直線的に長くのびる。	・C77は内外面篦磨研。 ・C119は内外面入念にナデ調整し，内面には暗文風に細い篦磨研を縦方向に施す。	・C77はⅢE区黒色泥砂，C119はⅣB区灰白色砂礫。

器形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	備考（層位）
壺G	C98	・口縁部はわずかに外反する ・肩部が強く張る。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面はナデ調整し，内面は篦削り。	・ⅢE区黒色泥砂
甕A	C113 C166	・『二重口縁』。屈折部外面に小さな稜をつくる。屈折部以下が短かく，端部はわずかに肥厚する。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面は横ナデ，内面は篦削り。	・C113はⅣB区灰白色砂礫，C166はⅣB区暗灰色粗砂。 ・赤褐色，外面にスス付着。
甕B_1	C93 C95 C99 C127 C128 C130 C155 C156 C169 C199	・口縁部は「く」字状に外反し，端部は肥厚する。 ・体部は球形に近い。 ・丸底。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面は主に横方向の規則性のある刷毛目調整し，肩部はその上を横ナデする。 ・体部内面は篦削りにより，器壁を薄くつくり，口縁部と体部の境には稜をつくる。	・C93・95・99はⅢE区黒色泥砂，C127・128はⅣB区灰白色砂礫，C130はⅣB区灰白色粗砂，C155・156はⅣB区暗青灰色泥砂，C169はⅣB区暗灰色粗砂，C199はⅣB区茶褐色泥砂。 ・胎土，焼成良好。外面にスス付着。 ・C156は完形品で，底部内面に粒状の有機物が付着している。
甕B_2	C176	・口縁部は外反し，て開く。 ・体部は最大径が中央より下位にあり，下半が丸味をおびる。 ・平底。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面は，縦方向の刷毛目調整後，部分的に篦磨研する。内面は刷毛目調整後，右下→左上の方向にナデ仕上げをする。	・ⅣB区茶褐色泥砂と砂の互層。 ・体部外面にはスス付着。
甕C	C152	・口縁部は外反し，端部は丸くつくる。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面は平滑であるが，縦方向の細かい擦痕を残す。 ・体部内面は右→左方向の篦削り。	・ⅣB区暗青灰色泥砂。 ・赤褐色，外面にスス付着
甕D	C123 C160 C177 C178 C179	・『S字口縁』。 ・体部の最大径が中央よりやや上にあり，無花果形につくる。 ・脚台付。脚端部は内側に折り返し肥厚させる。	・口縁部は内外面は横ナデ。 ・体部外面は櫛歯状具による縦方向の調整後，肩部に同じ原体により平行線文を施す。 ・体部内面はナデ調整。器壁は薄い。 ・脚台部外面は櫛歯状具による縦方向の調整。内面はナデ調整。	・C123はⅣB区灰白色砂礫，C160はⅣB区暗青灰色泥砂，C177～179はⅣB区青灰色泥砂。 ・胎土中に砂粒を含む。外面にスス付着。
甕E	C114 C203	・口縁部は外反した後，屈曲して立上がる。 ・体部は下半がほそくすぼまる。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面は荒い刷毛目調整。内面は刷毛目調整後ナデ仕上げ。	・C114はⅣB区灰白色砂礫，C203はⅤD区東半8号溝。
甕F	C184	・口縁部は外反し，端部は丸くつくる。 ・体部は最大径が口径より小さく，肩部は張りが小さく半球形になるか。	・全体に外面は横方向に篦磨研する。内面はナデ調整。 ・口縁部内面の剝離部の観察から，口縁部内面は荒い刷毛目をつけた上に粘土を貼り付け	・ⅣB区茶褐色泥砂。 ・褐色，胎土・焼成とも良好。

器　形	土器No.	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　　考（層位）
			て厚くしている事がわかる	
甕G	C142 C157	・口縁部はわずかに外反する。 ・C157は口径が胴部径より大きい。	・外面は縦方向の刷毛目調整の上を軽くナデる。 内面はナデ調整し，C142の口縁部内面には刷毛目を残す。	・C142はⅣB区灰白色粗砂，C157はⅣB区暗青灰色泥砂。
小型丸底壺	C197	・口縁部は長く，外上方に開き，口径は胴部径よりかなり大きい。 ・体部は口縁部との接合部から垂下し，胴部の張り出しは全くない。直線的な胴部は内に屈曲し，平坦気味の底部をつくる。	・口縁部は内外面ナデ調整。体部外面はナデ調整し，底部外面は篦削り。体部内面はナデ調整。	・ⅣB区茶褐色泥砂。
小型杯	C139 C140	・口縁部に段がつく。	・C139は内外面入念なナデ調整で平滑に仕上げる。底部外面に刷毛目残る。 ・C140は外面ナデ調整，内面は横方向の篦磨研する。	・ⅣB区灰白色粗砂。 ・赤褐色，胎土良好。
高杯A	C145 C161 C175 C196	・杯部は口縁部が外上方に開き，端部は丸くつくる。C145はやや深い杯部をつくる。C175は底部と体部の境にかすかに稜を残す。 ・脚部は比較的長い柱部に裾が広がるものか。	・C145・161は内外面篦研磨する。 C175・196は内外面入念なナデ調整である。	・C145はⅣB区灰白色粗砂，C161はⅣB区暗青灰色泥砂，C175はⅣB区暗灰色粗砂，C196はⅣB区茶褐色泥砂と砂の互層。 ・C145はやや古い要素を，C196は新しい要素をもつか。
高杯B	C187	・杯部と脚部は「く」字状に屈曲する。 ・杯部は底部が小さく，体部は直線的に開く。 ・脚部は小さく，杯底部から直線的に開き，裾端部は更に外に開く。	・杯部は内外面篦磨研。 ・脚部は外面篦磨研，内面は入念なナデ調整。	・ⅣB区茶褐色泥砂と砂の互層。 ・器台との区別は困難。
高杯脚部	C68 C71 C72 C75 C105 C107 C147 C148 C185	・柱部と裾部が明瞭に別れずに裾部が開くもの（C68，72・75・105・147・148）と柱部をつくり，それから裾部が屈折して大きく開くもの（C107・105）とがある。	・C72・75の内面は篦削り後裾部を刷毛目調整し，外面は縦方向の篦磨研を行なう。 ・C107・185の柱部内面は篦削り，裾部内面は横ナデ。柱部外面に篦磨研するもの（C185）がある。 ・C147・148は内面篦削り後ナデ仕上げし，外面はナデ調整。 ・C68・105は内面上部に絞り痕を残し，外面は刷毛目の上を一部篦磨研する。	・C68・71・72・75はⅢE区灰褐色微砂，C105・107はⅢE区黒色泥砂，C147 148はⅣB区灰白色粗砂 C185はⅣB区茶褐色泥砂。 ・灰褐色微砂のものもここに含めたが，時期的には古いものと新しいものを含む。
小型器台A	C120 C162 C186	・杯部は浅く，内彎するものと外反するものとがあり，端部は丸くつくる。 ・C120・162は杯部と脚部の	・杯部は内外面篦磨研。C120の外面はナデ調整し，底部に2本の細い沈線がめぐる。	・C120はⅣB区灰白色砂礫，C162はⅣB区暗青灰色泥砂，C186はⅣB区茶褐色泥砂。

器形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	備考（層位）
		間に貫通孔を穿つ。		
小型器台B	C172	・杯部の口縁端部は直立する。 ・脚部との間に貫通孔を穿つ。	・杯部内面は篦磨研，外面はナデ調整，口縁端部は横ナデ。	・ⅣB区暗灰色粗砂。
小型器台脚部	C103 C104 C121 C146 C163 C174 C194	・脚部のみ現存する。 ・杯部と脚部は「く」字状に外反して開く。 ・C174以外は杯部との間に貫通孔を穿つ。	・脚部外面は縦方向に篦磨研し，内面は横ナデ。C104・146は内面は刷毛目を残す。	・C103・104はⅢE区黒色泥砂，C121はⅣB区灰白色砂礫，C146はⅣB区灰白色粗砂，C163はⅣB区暗青灰色泥砂，C174はⅣB区暗灰色粗砂，C194はⅤD区東半8号溝。 ・C174は異質。
鉢A	C143 C159	・口縁部は短く外反する。 ・体部は半球形で，口径が体部径より大きい。	・内外面ナデ調整。	・C143はⅣB区灰白色粗砂，C159はⅣB区暗青灰色泥砂。
鉢B	C118	・口縁部は極く小さく，体部と明瞭な境をつくらない。 ・体部は半球形。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面は刷毛目調整の上をナデ仕上げする。内面はナデ調整。	・ⅥB区灰白色砂礫。
手捏ね土器	C211	・外上方に大きく開く。	・ナデ調整。	・ⅣB区灰白色粗砂。

ⅢE区上層の土師器

甕A	C96	・口縁部は外反し，端部は内側に折り曲げ肥厚する。	・口縁部内外面横ナデ。	・ⅢE区黒色泥砂。
甕B	C84 C87 C88 C91 C94 C110	・口縁部は大きく外彎して開く。端部はC91が外反りに開き丸くつくる。C88・94・110の端部は内側から薄く削る。C84・87の端部は肥厚し，端面に浅い沈線風の押えを行なう。 ・体部は肩部の張りが小さい長甕。(C94は異質)。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部はC91で見ると，幅2～3cmの粘土紐の輪積みで成形し，外面は輪積みの2段毎に刷毛目調整を行なう。	・ⅢE区黒色泥砂。 ・外面にスス付着。 ・一部6世紀に降るものあるか。
甕C	C86 C202	・『二重口縁』。端部はわずかに肥厚する。 ・体部は最大径が上位にあり，やや縦長になる。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面は荒い刷毛目調整。内面は篦削し，さらに上部を横ナデ。	・C86はⅢE区黒色泥砂，C202はⅣB区茶褐色泥砂。 ・外面にスス付着。
甕D	C83 C135	・口縁部はわずかに外に開く。端部は外につまみ出す。	・内外面ナデ調整，C83の口縁内面には荒い刷毛目が残る。	・C83はⅢE区黒色泥砂，C135はⅣB区灰白色粗砂。
小型丸底壺	C108 C109 C144 C182	・口縁部はやや長く外反する。 ・体部は胴部径と口径がほぼ等しく球形になる。C144は扁球形。	・口縁部は内外面刷毛目調整の上を横ナデ。 ・体部外面は刷毛目調整後ナデ仕上げ。(C144は下半のみを刷毛目調整か。) ・体部内面はC108・109が篦削りでC144・182はナデ調整。	・C108・109はⅢE区黒色泥砂，C144はⅣB区灰白色粗砂，C182はⅣB区茶褐色泥砂。
高杯A	C101 C102	・杯部は円板状の底部から外上方に開く口縁部をとりつ	・杯部内面は口縁部が横ナデで底部は不定方向の刷毛目	・ⅢE区黒色泥砂。

器　形	土器No.	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　　考（層位）
		けた形態をなす。底部と体部との境には明瞭な段をつくる。口縁端部はわずかに肥厚する。 ・脚部は柱部から裾部が大きく屈折して開く。裾端部は上方に肥厚する。	を残す。杯部外面は口縁部は横ナデで，底部はC101が刷毛調整で，C102は篦削りを行なう。 ・脚柱部内面は篦削りし，外面はナデ調整。 ・裾部は内外面横ナデ。	
高杯B	C106	・体部から口縁部は内彎する。	・内外面横ナデ。	・ⅢE区黒色泥砂。
椀	C112	・口縁部と体部は区別されずわずかに外に開く。	・幅1.5cm内外の粘土紐を左まわりに巻き上げて成形する。 ・内外面とも入念なナデで平滑につくる。	・ⅢE区黒色泥砂。 ・赤褐色。
手捏ね土器	C205 〜 C210	・体・口縁部は内彎気味に開く。（C205〜209） ・底部は丸底と平底がある。 ・C210はくぼみ底の底部から一度屈曲したのち外上方に開く。	・内面を削りのままのもの（C206・208・209）とナデ調整を行なうもの（C205・207・210）とがある。	・C205はⅢE区灰褐色微砂，C206〜210はⅢE区黒色泥砂。 ・C210は製塩土器に類似。

ⅣB区上層の土師器

甕A	C170 C188 C191	・口縁部は外反して開く。C170の端部は外に肥厚し，上端面に浅い沈線風の押えを行なう。 ・体部は張りがほとんどない長甕である。 ・C188は完形品。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部は内外面刷毛目調整。 ・C188の内面は刷毛目の上を下→上の方向に削る。	・C170はⅣB区暗灰色粗砂，C188はⅣB区黒褐色泥砂，C191はⅣB区茶褐色泥砂。 ・外面にスス付着。
甕B	C171 C189 C192 C198 C200	・口縁部はわずかに外に開く。 ・体部は球形（C189・192），下ぶくれ（C198），縦長（C200）と様々ある。 ・C192は中甕で，C171は小型品である。	・口縁部は内外面横ナデ。C171には刷毛目が残る。 ・体部外面は上半を刷毛目調整し，下半は篦削りする。 ・体部内面は横方向の刷毛目調整し，C198はその上をナデ仕上げする。 ・C198は幅1.5cm内外の粘土紐を巻き上げて成形する。	・C171はⅣB区暗灰色粗砂，C189はⅣB区黒褐色泥砂，C192はⅣB区灰白色砂，C198・200はⅣB区茶褐色泥砂。
鍋	C204	・口縁部は外反し，端部上面に沈線風の浅い押えが1本めぐる。 ・胴部の張りは小さいが，その最大部に相対する把手をつける。	・口縁部外面は横ナデ，内面は横方向の刷毛目調整を行なう。 ・体部外面は把手とりつけ部位までを縦方向2段の刷毛目調整し，以下は篦削りする。	・ⅣB区茶褐色泥砂。
甑	C190	・口縁部は体部と区別されず，口縁端部の内側に小さな段をつくる。 ・体部は張りがなく把手とり	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部内外面は長い単位の縦方向の刷毛目調整する。	・ⅣB区黒褐色泥砂。

器形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	備考（層位）
		つけ部以下がすぼまる。		
把手付鉢	C195	・半球形の体部から，口縁部はわずかに内彎する。口縁端部は薄くつくる。 ・体部中央よりやや上に，把手のついた痕がある。	・底部外面は篦削りし，他はナデ調整。	・ⅣB区灰白色砂。 ・赤褐色，胎土良好。
脚台	C173		・外面ナデ調整，内面荒い刷毛目調整。	・ⅣB区暗灰色粗砂。

6世紀後半の土師器

椀A	C212 〜 C215	・半円形の体部をつくり，口縁部は丸くおさめる。	・外面は篦による細かい面取りが見られる。 ・内面は刷毛目調整を原則とし，後に横ナデ調整をするものもある。	・C212〜C215はⅡH区黒色ピート。 ・粘土紐の巻き上げ痕が明瞭にみられる。
椀B	C236 C237	・半円形の体部。C236の器壁は薄い。 ・C236の口縁部は丸くおさめ，C237の口縁端部は上方につまみ上げる。	・内面は平滑な横ナデ。 ・C237の外面には刷毛ナデの後，ヘラ削りと横ナデをおこなう。	・C236はⅤA区18号溝，C237はⅤD区東半6号溝。
杯	C216	・平らな底部から直線的に外傾する体部を作り，口縁部を外反させる。口縁端部の内面に条線を施す。	・全体に横ナデ。	・ⅡH区黒色ピート。
盃形土器	C219	・小形でやや内彎気味につくる。	・内外面共に刷毛目調整して外面は細かく削る。	・ⅡH区黒色ピート。
高杯	C217	・平らな底部からやや外反気味に口縁部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。	・杯部は内外面共に横ナデ。 ・脚部の接合部を指押えする。	・ⅤD区東半6号溝。
鉢	C238	・底部は小さく，体部は外上方に大きく開き，口縁部を直立させている。	・外面は底部から体部の中ほどまで刷毛目調整。 ・内面は大きな篦による横ナデ調整。	・ⅤD区西半茶褐色泥砂。 ・胎土に砂粒が多い。
小型丸底壺	C218	・小形のまるい体部。 ・口縁部は内湾し，内面に一条の沈線を施す。	・全体に横ナデ。	・ⅡH区黒色ピート。
甑	C224 C240	・体部と口縁部とが直線的に外傾し，C224の口縁端部は丸くおさめる。C240の口縁端部は外方につまみ上げる。	・内外面共に刷毛目調整し，口縁部は軽く横ナデをおこなう。C224の内面は篦かき上げをおこなう。	・C224はⅡH区黒色ピート，C240はⅤD区東半黒灰色砂泥。
釜	C243 C247	・胴部に比して口縁部が大きく，胴部は直線的に下降させている。	・体部は刷毛目調整し，口縁部はその上を横ナデ。	・C243はⅤA区18号溝，C247はⅤA区16号溝。 ・C247には篦記号がある。
鍋	C241 C242	・口縁部はやや内彎し，端部上面に浅い沈線風の押えがある。 ・体部の最大径部に把手が一対つく。	・内外面共に刷毛目調整し，口縁部は横ナデ。	・C241はⅤA区14号溝，C242はⅤD区東半6号溝。

器形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	備考（層位）
小型甕	C220 〜 C223 C225 〜 C229 C371 C372	・口縁部は外傾しているが，C220・221のように外彎気味のものもある。口縁端部は丸くおさめているが，C225・226のように，端部を上方につまみ出すものもある。 ・体部はおおむね球形につくるが，やや細長いもの（C223）とひしゃげた様な球形のものとにわかれる。	・内外面ともに刷毛目調整の後，口縁部は横ナデ調整。 ・体部下半を篦削りする例もある。	・C220・221・372はⅡH区黒色ピート，C222はⅤA区13号溝，C223はⅤD区東半3号溝，C225・229はⅤD区東半6号溝，C226・227はⅤA区18号溝，C228はⅤA区27号溝，C371はⅡH区3砂。 ・外面にスス付着するもの多い。篦記号のつくものもある。
中型甕	C245 C246 C248	・小型甕とおおむね同様の形態であるが，口縁端部のつくりにはC245のようにつまみ上げるものと，C248のように平らにナデるものとがある。	・体部は内外面ともに刷毛目調整をおこなう。体部下半の外面を更に篦削りするものもある。 ・口縁部は内外面とも横ナデ。	・C245はⅤD区東半6号溝，C246はⅤA区暗灰色泥砂，C248はⅤA区21号溝。 ・C248には「×」の篦記号があり，二次的に火を受けている。
大型甕	C231 〜 C235 C239 C244 C250 〜 C258	・口縁部はやや内彎気味に作る。 ・口縁端部のつくりに変化があり，丸くおさめるもの（C253），つまみ上げるもの（C231・232・235・239・250・252・256〜258），外方につまみ出すもの（C233），平らにナデるもの（C251・255）などが認められる。 ・C257・258は完形品で，砲弾形の体部をもつ。	・体部は刷毛目調整をおこなう。 ・口縁部は横ナデする。この際に，口縁部内面を全く横ナデせずに刷毛目を残すものもある。	・C231はⅤD区西半茶褐色泥砂，C232・233 235・251はⅤA区18号溝，C234・254はⅤA区暗灰色泥砂，C239・244はⅤA区14号溝，C252はⅤA区16号溝，C250・253・255・256はⅤD区東半6号溝，C257・258はⅢC区溝内灰白色砂。 ・C231・235・239には篦記号がある。 ・多くのものの外面にススが付着している。

ⅢE上層式〜ⅣB上層式の須恵器

杯蓋A	C262 C266	・体部はわずかに外開きで，口縁端部は丸くつくる。 ・体部と天井部は突出した小さな鋭い稜で画す。 ・天井部は丸いものと平らなものとがある。	・天井部はほぼ全面を篦削りする。内面は横ナデ調整。	・ⅢE区黒色泥砂。 ・陶邑TK216的要素をもつ。
杯蓋B	C260 C261 C263 C264 C265	・体部はほぼ垂直に立ち，口縁部はわずかに外に開くタイプと内彎するタイプとがある。端部は外側につまみ出し鋭い。C263の体部は外開きで低い。 ・体部と天井部は突出した小さな稜で画す。	・天井部はほぼ全面を篦削りする。 内面は横ナデ調整。	・ⅢE区黒色泥砂。 ・陶邑TK208に相当する。C263はTK216に近い。

器形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	備考（層位）
		・C264・C265の天井部は尖り気味で中央が高い。		
杯蓋C	C259	・口縁端部の内側に段をつくる。 ・体部と天井部とは突出した稜で画す。	・天井部は5分の4を篦削りする。内面は横ナデ調整。	・ⅢE区黒色泥砂。 ・陶邑TK23に相当か。
杯蓋D	C283	・口縁端部の内側に小さな段をつくる。 ・体部と天井部の境は稜をつくらず，わずかに沈線を施すことで画す。	・天井部は5分の4を篦削りする。内面は横ナデ調整。	・ⅣB区暗灰色粗砂。
杯A	C268 C269 C270 C272	・たちあがりは内傾し，端部は丸くつくる。 ・受部は短く，先端は丸くつくる。	・体・底部外面はその3分の2を篦削りする。C269は体部をかき目調整する。内面は横ナデ調整。	・ⅢE区黒色泥砂。 ・陶邑TK208に相当する。C268はTK216的要素をもつ。
杯B	C271	・たちあがりは内傾するが，杯Aより短く，端部内側に段をつくる。	・体・底部外面の5分の4を篦削りする・内面は横ナデ調整。	・ⅢE区黒色泥砂。
杯C	C285	・たちあがりはわずかに内傾し，端部内側に段をつくる	・端部等にシャープさがなくなる。 ・体・底部外面の3分の1を篦削りし，残りの部分と内面は横ナデ調整。	・ⅣB区茶褐色泥砂。
杯D	C286	・たちあがりは短く内傾し，端部は丸くつくる。	・全体にシャープさを欠き丸くつくる。 ・体・底部の2分の1を篦削りし，残りの部分と内面は横ナデ調整。	・ⅣB区暗灰色粗砂。
椀	C287	・平らな底部から，体・口縁部は直立し，口縁部・体部・底部はそれぞれ外に小さな段をつくって画する。	・底部外面は全面篦削りする。 ・体部外面に篦による刻み目を施す。	・ⅣB区灰白色粗砂。 ・製作当初から椀として意図されていたか不明。
高杯脚部	C280 C281	・いずれも脚のみ残存。 ・脚高は低く，C280の脚端部は肥厚し，C281の端部は外に段をつくる。 ・C280は台形の4方透し，C281は長方形の3方透しを入れる。	・C281の外面はかき目調整。 ・C280の脚端部は粘土を内外に巻きつけて肥厚させている。	・ⅢE区黒色泥砂。
無蓋高杯	C276	・口縁部はわずかに外反し，端部は丸くつくる。 ・体部外面に2本の鋭い稜をつくり，その下に波状文を施す。	・内外面ともに横ナデ調整。	・ⅢE区黒色泥砂。 ・陶邑TK23に相当する。
筒形器台	C282	・円筒部の上3段と脚部上半とを現存する。 ・同筒部には細い長方形の4方透しと波状文を各段に施す。 ・脚部は円筒部から水平に広		・ⅢE区黒色泥砂。 ・同筒部の復元は5段にしたが，島根県金崎古墳出土例のように，最下段にもう1段小さな段がつくかも知れない。

器　形	土器No.	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　考（層位）
		がり小さな天井部をつくり，更に鈍い稜をつくって屈折し外開きになる。 ・脚天井部には列点文を施し，円孔を4個穿つ。脚部には列点文・刻み目・波状文を施し，三角形の4方透しを入れる。		
瓦泉	C274 C275	・口頸部は一度外彎してのち，段をつくり外上方にのびる。口縁部と頸部の境にわずかな稜をつまみ出す。口縁部，頸部に各1段づつ波状文を施す。 ・体部は肩部が強く張り，尖り気味の丸い底部につづき，全体に無花果実形をつくる。 ・胴部最大径部に円孔を穿ち，2本の沈線をめぐらし，沈線間に波状文を施す。	・口頸部は内外面横ナデ。 ・肩部から胴部の外面はかき目調整の上を軽く横ナデする。胴部下半から底部はナデ調整。 ・底部内面に棒状具による上からの押え痕が残る。	・ⅢE区黒灰泥砂。 ・陶邑TK208に相当する。
甕　A	C277 C279	・口縁部は大きく外反して開く。端部は平らにつくり，外面に断面三角形の突帯をめぐらす。C279では更に下方に2本の突帯と波状文をめぐらす。	・内外面とも横ナデ調整。	・ⅢE区黒色泥砂。 ・陶邑TK208に相当する。
甕　B	C278	・口縁部は外反して開く。端部は上下に肥厚し，上端面を幅広くつくる。端部外面に2本の断面三角形の突帯をめぐらし，その下に2段の波状文を施す。	・端部や突帯のつくりにおいて甕A類に比べシャープさがなくなる。 ・内外面とも横ナデ調整。	・ⅢE区黒色泥砂。
甕　C	C289	・口縁部は外反し，端部は上方に肥厚し下方に垂れ下がり，幅広い面をつくる。 ・体部は肩部の張りが小さく，なだらかに胴部につながる。	・口頸部外面はかき目調整。 ・体部外面は平行線文の叩きの上をかき目調整し，内面の同心円文は消さずそのまま残す。	・ⅣB区暗灰色粗砂。

6世紀後半の須恵器

杯蓋A	C284 C321 C322	・天井部と口縁部とは鈍い稜線で画されている。 ・口縁端部は丸くおさめられている。	・天井部の2分の1ほどの範囲をヘラ削りする。 ・内面中央の仕上げナデは，単一方向に型式的におこなわれている。	・C284はⅣB区茶褐色泥砂，C321・322はⅡH区黒色ピート。 ・陶邑TK43に相当する。
杯蓋B_1	C267 C317 〜 C320	・天井部と口縁部との境界はほとんどなく，全体に浅く扁平な形態である。	・天井部の篦削りは2分の1以下の範囲にせばまっている。	・C267はⅢE区黒色泥砂，他は全てⅡH区黒色ピート。 ・陶邑TK209に相当する。

器　形	土器No.	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　考（層位）
	C323 C324	・口縁端部は丸くおさめられている。	・内面中央の仕上げナデは，単一方向に型式的におこなわれている。	・C318は短頸壺蓋となるかもしれない。
杯蓋B_2	C291 〜 C295	・天井部と口縁部との境界はなく，口縁端部を垂直からやや内傾気味に押さえている。全体に浅く扁平な形態である。	・全般に粗雑なつくりで，天井部の篦削りの範囲は狭く，未調整のものもある。	・C291・293はⅡH区1砂，C292・294・295はⅡH区黒灰色泥砂。 ・陶邑TK209〜TK217に相当する。
杯　A	C301 C302	・大型であるが，蓋受けの立ちあがりは低く内傾している。	・C302の底部は篦削り。底部内面中央には同心円文のスタンプが認められる。	・C301はⅡH区白色砂，C302はⅡH区3砂。 ・陶邑TK43に相当する。
杯　B	C273 C296 C297 C299 C300 C325 〜 C331	・全体に矮少化し，浅い扁平な形態であり，蓋受けの立ちあがりは極めて低く，内傾するものが大半を占める。	・全体に粗雑なつくりであり，底部の篦削りの範囲も狭く，未調整のものもある。	・C296・300はⅡH区1砂，C297はⅤD区東半6号溝，C299はⅡH区黒灰色泥砂，C325〜331はⅡH区黒色ピート，C273はⅢE区黒色泥砂。 ・陶邑TK209に相当する。
椀	C303	・無蓋高杯の杯部と同様の形態をもち，口縁部と底部との間に櫛描列点文を施す。	・底部は篦削り，他は横ナデ調整し，丁寧なつくり。	・ⅡH区2黒灰色泥砂。 ・製作当初よりこの器形が意図されていたかは明らかでない。
有蓋高杯	C333 〜 C337	・C333は杯部のみ，他は脚部のみ残す。 ・C333の杯は矮少化している。 ・脚部は細長い脚柱部と大きく外に開く裾部からなる。	・裾端部は，C336が内側につまむ他は外につまみ出す。 ・脚柱部内面に絞り目が顕著に残る。	・全てⅡH区黒色ピート。
高杯蓋	C332 C350 C351	・C350は天井部と口縁部とが鈍い稜線で画されているが，C332・351ではその境界がなくなっている。 ・いずれにも内凹のつまみがつく。	・天井部の篦削りの範囲は狭まっている。	・C332はⅡH区黒色ピート，C350はⅡH区1砂，C351はⅤD区東半6号溝。
無　蓋 高杯A	C352 C354	・杯部の口縁部と底部との境に，沈線と波状文とを施す。 ・脚部は余り広がらない。二段三方の透し。		・C352はⅣB区茶褐色泥砂，C354はⅡH区2黒灰色泥砂。
無　蓋 高杯B	C353	・通有の高杯ではなく，杯蓋に低い脚部をつけたもの。	・杯底部は篦削り，他は横ナデ調整。	・ⅤD区東半6号溝。
器　台	C338 C346	・C338の脚部は短い同筒部とずんぐりと張る裾部からなり，三方に三角形の透しがある。	・C338の同筒部内面は未調整。脚端部の外面を短い幅でカキ目調整している。 ・C346の外面はカキ目調整され，内面は横ナデ調整。	・いずれもⅡH区黒色ピート。
甕	C288 C304 〜 C306	・C304は明らかでないが，他は全て口頸部がラッパ状に開き，体部径よりも口径の方が大きい。	・C288の外面は横ナデ調整。内面は底部を篦削りしたのち横ナデ調整。	・C288はⅣB区暗灰色粗砂，C304はⅡH区青灰色砂，C305・306はⅤD区東半6号溝。

器形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	備考（層位）
		・C304は肩部が強く張り出し，体部の最大径部に2本の沈線を入れ，その間に篦による文様を施す。 ・C288は，頸部中央と体部最大径部にそれぞれ2本の沈線を施す。 ・C306は，頸部中央に1本，体部中央に2本それぞれ沈線を施し，体部の2本の沈線間には篦による刺突文を配す。	・C304の体部外面は，篦削りの後横ナデ調整。 ・C305の外面は横ナデ調整。底部外面にはカキ目調整がおこなわれている。 ・C306の底部外面は不定方向の篦削りをおこない，他は横ナデ調整されるが，頸部中央の沈線より上の部分に縦方向のカキ目調整がみられる。	・C306は7世紀に下る可能性がある。
提瓶	C311 C312	・C311の口縁部は短く，端部が内彎し，耳は形式化しているがなお鉤状屈曲をみる。 ・C312の口縁部は細長く，体部の前・背面のふくらみは同じ位である。耳は小円盤を貼りつけている。	・C311の口縁部は横ナデ調整，体部はカキ目調整。 ・C312の口縁部外面には著しい絞り目が見られる。体部前面はカキ目調整し，背面から側面は篦削りをおこなう。	・C311はⅣC区溝，C312はⅤD区西半黒色泥砂。
短頸壺	C307 C308 C340 〜 C342	・短い口縁部は直立気味におさめられているが，C341はやや内彎している。C342は口径も口縁部の高さも他と異なっている。 ・体部は一般に扁球形であるが，C308はなで肩となっている。C340・341の肩部には沈線がめぐっている。	・底部付近は篦削りをおこない，他は全て横ナデ調整。	・C307・308はⅡH区2黒灰色泥砂，C340〜C342はⅡH区黒色ピート。
短頸壺蓋	C290 C316	・いずれも口縁端部は厚手のつくりで，C290では斜めの，C316では水平の平坦面をそれぞれもっている。	・C290の天井部は丁寧な篦削りがおこなわれ，C316の天井部は雑なナデ調整によって仕上げられている。	・C290はⅡH区黒灰色泥砂，C316はⅡH区黒色ピート。
長頸壺	C309 C343	・肩部はなで肩で，体部の最大径部に2本の沈線がめぐる。C309ではこの沈線間に櫛による刺突列点文を配する。 ・いずれも脚台がつく。	・体部の下半は篦削りをおこない，上半部から頸部は横ナデ調整。C309の底部から脚台部は横ナデ調整で，C343の底部は篦削り。	・C309はⅣC区溝，C343はⅤD区東半3号溝。
壺	C313 C314 C339 C361	・C313は口縁部がわずかに外反し，端部が直立している。口縁部の中央に2本の沈線をめぐらしている。 ・C314は口縁部が外反し，端部は外側に肥厚している。体部は丸く，肩部に1本の沈線をめぐらしている。	・C313の体部下半は篦削りをおこない，他は全て横ナデ調整。 ・C314の底部は篦削りをおこない，他は全て横ナデ調整。 ・C339・361ともに横ナデ調整。	・C313・314はⅤD区東半6号溝，C339・361はⅡH区黒色ピート。 ・C314の体部は磨滅が激しい。
平瓶	C310	・肩部は強く張るが鋭い稜線はつくらない。底部は平らである。	・体部下半は不定方向の篦削りをおこない，他は全て横ナデ調整。	・ⅡH区1砂。

器　形	土器No.	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　考（層位）
横瓶	C345 C348	・C345は小型であり，口縁部は短く直立気味におさめ，端部は外側に折り曲げられて肥厚している。体部中央に縦方向の6本の沈線がめぐる。 ・C348の口縁部は外反し，端部は外側に折り曲げられて肥厚している。	・C345の体部は叩き締められた後，中央の沈線のめぐる範囲はナデ調整されている。 ・C348の体部は叩き締められた後，体部中央はカキ目調整されている。	・C345はⅤD区西半黒色泥砂，C348はⅣC区溝。
中型甕	C315 C344 C347 C355 〜 C360 C362 〜 C368	・口縁端部は外側に折り曲げて肥厚させるものが全般的な特徴であるが，C315・355・364・366のように肥厚部の狭いものと，C365・367・368のように幅広いものとがある。またC344・347・356・362のように肥厚させた後，端部を内側につまみ上げるものもある。 ・C359・360・362・363は口径が小さく，壺などになる可能性もある。	・口縁部は横ナデ調整をおこない，体部は叩き締めてつくっているが，C315・365の体部外表は更にカキ目調整している。C366は体部の内外面を更にナデ調整している。	・C315・357・364・365・367・368はⅤD区東半6号溝，C344・347はⅡH区黒色ピート，C355はⅤA区16号溝，C356はⅤD区東半黒灰色泥砂，C358〜360・362・363・366はⅡH区1砂。
大型甕	C349 C369 C370	・口縁端部のつくりに特徴があり，C369は肥厚させていないが，C349・370は折り曲げて肥厚させ，端部をつまみあげている。 ・口縁部外面には文様がほどこされ，更に沈線がめぐっている。C349では櫛による列点文が，C369では篦による波状文が，C370では篦による斜線文がほどこされている。	・口縁部の内外面とも横ナデ調整。	・C349はⅡH区黒色ピート，C369・370はⅤD区東半6号溝。

第26表　古墳時代の木器観察

種　類	遺物No.	形　態　の　特　徴	備　考（層位）
広鍬	CW1 CW2	・CW1は現存長23.4cm，幅16cm，厚さ1.4cmあり，頭部・刃部は厚さが0.4cmと薄くなっている。形態はやや特異で身部中央のやや上方で両側がくびれ，なで肩状をなして刃部に移行している。着柄部の隆起は長さ9cm，幅5.6cm,厚さ2.5cmあり，着柄角度は身に対して70°である。隆起部のある面の反対の面には，幅2.5cm，深さ0.3cmの蟻仕口のくり込みがある。 ・CW2は現存長19.6cm，現存幅14.4cm，厚さ1.1cmあり，約½が残存している。隆起部の厚さは3.2cmあり，着柄角度は身に対して75°である。刃先の残りは良くないが，片面を削って片刃状につくっている。	・CW1はⅢE区黒色泥砂，CW2はⅤA区26号溝出土。 ・CW2は弥生時代に属す可能性がある。
鍬	CW3 CW4	・CW3は現存長14cm，現存幅25cm，厚さ0.6cmあり，両面とも平滑に仕上げられている。身部中央が残存しており，頭部・刃部の形態は明らかでないが，着柄部には隆起をつくり出さず，着柄孔は楕円形を呈し，磨滅痕は認められない。 ・CW4は現存長6cm，現存幅12cmあり，同じつくりの小破片であろう。	・CW3はⅤA区26号溝，CW4はⅣB区暗青灰色泥砂出土。 ・CW4は6世紀後半か。
鋤	CW5 〜 CW8	・CW5，CW6は二又状の形態となる鋤と考えられる。CW5は現存長26cm，現存幅5cmあり，鋤先は薄くつくられ側縁には刃がつけられている。CW6は現存長19cm，現存幅5cmあり，「L」字状のくびれによって頭部と体部とを区別しているが，原形では左右対称の形態につくられていたものであろう。 ・CW7は頭部の形態が明らかではないが，現存長24.4cm，現存幅14.6cm，厚さ1cmあり，刃先は片刃状につくられている。 ・CW8は現存長62cmのスコップ形の鋤で，柄と鋤先は一木でつくられている。柄の現存長は37.4cm，直径約4cmの円形断面であるが，鋤先付近は厚みが増えて長方形の断面となっている。鋤先部は刃先に向って徐々に厚みが減っている。鋤先部中央に不整形な孔が認められるが，二次的なものと思われる。	・CW5，CW8はⅣB区茶褐色泥砂と砂の互層，CW6はⅡH区黒色ピート，CW7はⅣB区灰白色粗砂出土。 ・CW7は庄内〜布留式併行期，他は6世紀後半か。
鎌柄	CW10 CW11	・CW11は全長37.4cmの完形品で，着装孔のある方の端部は刃にそって折れ曲るようにつくり出し，柄の端部には三角形の突起をつくり出している。着装孔は長さ4.7cm，幅0.4cmあり，柄に対してほぼ直角にあけられている。 ・CW10は現存長26.6cm，幅2cm，厚さ1.5cmあり，着装孔のある部分は欠損している。柄の端部には三角形の突起がつくり出されており，着装孔付近に切り込みが一周加えられている。	・CW10はⅤA区19号溝，CW11はⅡH区黒色ピート出土。 ・6世紀後半か。
鎌柄 未製品	CW9	・現存長20cm，幅1.7〜2.8cm，厚さ1.3cmあり，着装孔のある部分は欠損する。柄の端部には荒く突起をつくり出し，各面ともに荒い削り痕を残している。	・ⅡH区黒色ピート出土。 ・6世紀後半か。
代掻き	CW14 CW86	・CW14は台形に近く，CW86は半円形に近い形態である。いずれも長側辺を削って薄く仕上げ，刃付けをおこなっている。着柄孔は方形ないし長方形で，身に対してほぼ直角にあけられている。いずれも加工は荒く，CW86には加工痕がよく残っている。	・CW14はⅣB区暗灰色粗砂，CW86はⅢC区溝内灰白色砂出土。 ・6世紀後半か。

種　類	遺物No.	形　態　の　特　徴	備　考（層位）
		・CW86はほぼ完形品であり，現存長辺50cm，短辺16.4cm，厚さ4cmである。	
田舟	CW15 CW16	・CW15は内部をくり抜いてつくった把手付田舟の断片で，把手は短辺部につくり出され，現存長2cm，直径4～4.4cmの円形断面である。 ・CW16も内部をくり抜いてつくった田舟の½残存したもので，全長107cm，現存幅30cm，高さ12cm，深さ8.2cmを計る。周縁には，短辺部で7.6cm，長辺部で2.8cm幅の平坦面がある。	・CW15はⅣB区茶褐色泥砂と砂の互層，CW16はⅢC区溝内灰白色砂出土。 ・6世紀後半か。
杵	CW33	・全長64cmの完形品で，断面円形の身部と，断面方形の柄部とからなり，ともに丁寧に削られて面取り整形されている。 ・身部の先端より22cmまでの範囲には磨滅破損が激しく，また柄の上端面にも磨滅痕が確認された。	・ⅣB区茶褐色泥砂と砂の互層。 ・6世紀後半か。
砧	CW34	・全長37.2cmの完形品であり，身部は断面楕円形で長径7.2cm，短径6.6cmを計り，柄部は断面円形で径3.2cmを計る。 ・柄部は激しく磨滅している。	・ⅢC区溝内灰白色砂出土。 ・6世紀後半か。
斧柄	CW12	・木の又部をうまく利用してつくられた全長57.6cmの完形品である。身部の長さは15.4cm，幅3.4cmあり，斧を着装する部分は平らに削られ，先端部には突起をつくり出している。柄の断面は偏円形である。 ・柄部全体にわたって磨滅痕が認められる。	・ⅣB区灰白色粗砂出土。 ・庄内～布留式併行期か。
手斧柄	CW13	・木の又部をうまく利用してつくられ，柄部の大半は破損している。身部と柄基部のなす角度は120°を計り，身部は長さ13cm，幅4.1cmあり，鉄斧の着装部は段をつけて区別している。	・ⅣB区黒褐色泥砂出土。 ・6世紀後半か。
木錘	CW31 CW32	・2例とも全長14cmと16cmの完形品で，片面を平坦につくり断面が蒲鉾形を呈する。長側縁の中央に方形の孔があけられている。 ・表面は平滑に仕上げられている。	・いずれもⅡH区黒色ピート出土。6世紀後半か。 ・編物を作る時に使われる錘であろう。
糸車	CW95 ～ CW97	・3例ともほぼ同じ大きさに作られ，全長約24cm，幅約2cmである。両端近くに柄穴があり，軸を受けて目釘が打ち込まれている。 ・表面は入念に仕上げられている。	・3例ともⅢE区黒色泥砂出土。
うき状木器	CW17 ～ CW29 CW144 ～ CW146	・最大例で全長25cm，最小例で全長17cmあり，体部の下端部には円形か方形かの孔が穿たれている。 ・形態にはバラエティーがあり，体部が幅広く扁平なタイプ（CW17～CW20，CW26，CW28，CW29）と，体部の幅がせまく断面円形に近い細長いタイプ（CW21～CW25 CW27）とがある。 ・製作手法からみると，体部の一側面を原材から半截したままかあるいは若干加工するだけにとどめ，他の残りの側面を加工しているものがある（CW19，CW20，CW28，CW29）。一般的には四側面を全て加工しているものが多い。 ・CW17の相対する両側面にはえぐりが入れられている。	・漁網につけられるうきと思われる。 ・CW17はⅤA区14号溝，CW18，CW25はⅤA区1号住居址，CW19はⅤA区13号溝，CW20，CW114はⅤD東半6号溝，CW21はⅣB区茶褐色泥砂，CW22，CW26，CW27はⅡH区黒色ピート，CW23はⅤA区19号溝，CW24はⅡH区3砂，CW28はⅢE区黒色泥砂，CW29はⅤA区暗灰色泥砂，CW145，CW146はⅡH区3黒灰色泥砂出土。

種　類	遺物No.	形　態　の　特　徴	備　考（層位）
			・6世紀後半に属すと考えられるが，CW20，CW144は飛鳥時代に下る可能性もある。
チキリ状木器	CW78	・全長54.4cm，幅5.6cmの完形品で，両端部に枘状のものをつくり出しているが，組材にみられる枘とは形態が異っている。厚さは全面が一定につくられている。	・ⅢE区黒色泥砂出土。
案	CW51	・全長77cm，幅31.4cmあり，両端がやや広がり気味の長方形を呈する。厚さは2.6cmであるが，裏面の両端部に脚を受ける隆起部を削り出し，この隆起部の中央に長方形の孔がそれぞれあけられている。	・ⅢE区黒色泥砂出土。 ・組にみられるような切り痕は全く認められない。
下駄	CW53 〜 CW67 CW142	・各地区より大型品13例，小型品5例，計18例の下駄が出土した。 ・小型品は，全長15〜17.5cm，幅7.8cm〜8.5cmで，大型品は全長22cm〜26cm，幅10cm〜11.7cmあり，CW65は形態も規模も特殊である。 ・台板の形態には4種類認められ，前部・後部ともに尖がり気味につくるもの（CW56），前部幅が後部幅よりやや広い小判形のもの（CW53，CW58〜CW61，CW64，CW66CW67），前部幅と後部幅がほぼ等しい隅丸の長方形のもの（CW62，CW63，CW142），特殊なもの（CW65）とがある。 ・鼻緒孔は前歯・後歯の前方にそれぞれ穿たれ，また前ツボは中軸より左右いづれかに偏よっている。円孔のもの（CW53，CW54，CW56，CW57，CW60，CW65，CW142）の他に，方孔のもの（CW61，CW67）があり，他のものは判別がつかない。CW61のようにやや斜方向に孔が穿たれる例は少なく（CW60，CW64，CW142），多くは台板に対して垂直方向に孔が穿たれている。 ・歯は削り出してつくられ，一番残りのよい下駄（CW59）の現高は3.9cmである。一般に歯は台板の幅と等しくつくられているが，CW59の前歯の一側はやや張り出しており，CW55では台板の幅より狭くなっている。CW63，CW64CW65の歯のつくりは特殊である。	・小型品は子供用，大型品は大人用と考えられるが，大型品の内，CW58とCW59の鼻緒孔の間隔は小型品のそれに近く，女性用とも考えられる。 ・CW53，CW54，CW60CW62の前ツボ付近には指痕が，CW67の後部には踵痕が認められる。 ・CW53はⅡH区1砂，CW54はⅡH区黒色ピート，CW55はⅤA区19号溝，CW56〜CW58，CW64CW67，CW142はⅣB区茶褐色泥砂と砂の互層，CW59，CW66はⅣD区1号溝，CW60はⅤA区暗灰色泥砂，CW61，CW63はⅤD区東半6号溝，CW62はⅣB区黒褐色泥砂，CW65はⅤA区21号溝出土。 ・6世紀後半に属すと考えられるが，CW53，CW61，CW63は飛鳥時代に下る可能性もある。 ・京都府鏡山古墳や群馬県白石稲荷山古墳出土の滑石製模造品では，台板の形は不整形であり，歯は前後に開き，後孔が後歯の後方にあけられている。前ツボが一方に偏している点は同じである。
盤A	CW35 CW36	・いずれも周縁に平坦面を残して内部をくり抜いてつくられた盤で，底面には脚のつくり出しがみられない。 ・CW35は長辺23.8cm，現存短辺9.4cm，高さ2.6cmの破損品	・CW35はⅢC区溝内灰白色砂，CW36はⅣB区灰白色粗砂出土。

種　類	遺物No.	形　態　の　特　徴	備　考（層位）
		であり，CW36は現存長辺12cm，現存短辺7cm，高さ2cmの破片である。	・CW36は庄内～布留期，CW35は6世紀後半か。
盤B	CW37 CW38	・いずれも周縁に平坦面を残し，内部をくり抜いてつくられたもので，底面には脚台部をつくり出している。 ・CW37は長辺32.6cm，短辺13.4cm，高さ4.2cmの完形品で底面の両短側部には，内側に開く「コ」字形の脚台部をつくり出している。 ・CW38は長辺40.2cm，現存短辺13.6cmあり，約½の破損品で，底面の中央に，内側をくり抜いた偏円形の脚台がつくり出されている。破損辺の両端には，補修孔と思われる孔があけられている。	・CW37はIII E区黒色泥砂CW38はIV B区暗灰色粗砂出土。 ・CW38は6世紀後半か。
箱	CW40	・長辺20.2cm，短辺14.8cm，厚さ1cmの底板の完形品で，周縁の計6ヶ所に目釘孔があり，その内の3ヶ所には，一辺0.2cmの目釘が残っている。これとは別に一長辺の中央には孔があけられている。	・III E区灰褐色微砂出土。 ・庄内式併行期。
鉢	CW50	・推定直径50cm，高さ13.7cmの偏円形の大鉢の約½残存したもので，内部はくり抜いてつくられ，厚さは約3cmを計る。破損辺の周縁平坦面には補修孔らしき孔があけられている。	・IV B区灰白色粗砂出土。 ・庄内～布留式併行期か。
鉢形木器	CW49	・長径21.6cm，短径19.8cmの偏円形を呈し，高さは7.4cmで平底をもつ。中央よりやや一方に偏して，一辺約8.6cmの隅丸方形状にくり抜かれている。	・IV B区灰白色粗砂出土。 ・庄内～布留式併行期か。
桶	CW41	・桶の側板の⅛円周残存したもので，底部の復原径は32cm，現存高は28cmである。側板が底部から口縁にかけて内傾する桶の形態が復原され，底板を受けるために，内側に段をつくり出している。	・IV B区暗青灰色泥砂出土。 ・6世紀後半か。
曲物蓋	CW42 CW43 CW48	・復原径はCW42，CW48で約25cm，CW43では約36cmあり，いずれも周縁部を削って，段をつくり出している。 ・CW42では，樹皮紐を共用した目釘が2ヶ所に認められ，目釘は斜方向に打ち込まれている。	・CW42はV D区東半6号溝，CW43，CW48はIV B区暗灰色粗砂出土。 ・CW42は飛鳥時代に下る可能性がある。
曲物底	CW39 CW44 ～ CW47 他3例	・破損例ばかりであるが，復原径は15cm～35cmまで各種のものがある。 ・CW39，CW46には周縁端部より水平に打ち込まれた目釘がある。 ・CW44には補修孔と思われる孔が2ヶ所あけられている。	・CW39，CW44はV D区東半6号溝，CW45はIV B区暗青灰色泥砂，CW46はII H区茶色砂，CW47はV A区13号溝出土。 ・全て6世紀後半か。CW39，CW44，CW46は飛鳥時代に下る可能性がある。
楯	CW98 ～ CW100	・CW98は立楯の破損品で，現存長11.3cm，幅8.1cmあり，厚さは頭部で0.9cmを計り歯先の方へ次第に薄くなっている。歯数は10本で，歯幅は0.4～0.6cmである。 ・CW99は横楯の破損品で，現存長4.3cm，現存幅8.1cmあり，厚みは頭部で0.7cmを計り，歯部は極めて薄い。歯数は明らかでないが，歯幅は0.15cmである。 ・CW100も横楯の破片で，現存長3.1cm，現存幅5cmあり，歯幅は0.1－0.15cmである。	・CW98はV D区東半6号溝，CW99はIV B区暗灰色粗砂，CW100はII H区黒色ピート出土。 ・6世紀後半か。CW98は飛鳥時代に下る可能性もある。
梯子	CW75	・現存長104.8cm，幅13cm，厚さ3.2cmの破損品で，残存している踏み台部は1ヶ所しかないが，剝離した跡からみて，	・III E区灰褐色微砂出土。 ・庄内式併行期。

種　類	遺物No.	形　態　の　特　徴	備　考（層位）
		約18cmの間隔に踏み台部がつくり出されていたことがわかる。踏み台部は残りが悪く，台基底部の長さ13cm，厚さ6.8cmを計る。	
組材	CW77 CW79 CW80 CW84 CW85	・CW84は，現存長48.5cm，幅10cm，厚さ6cmの角材に3.6cm×5.6cmの枘穴をもうけ，現存長94.5cm，幅7cm，厚さ5cmの角材の一端に枘をつくり出して組み合わせたものである。両方の角材の端部はともに焼損している。 ・CW85は，現存長89cm，幅12.5cm，厚さ7.2cmの角材の二面に7.6×6cm，7.4×4.4cmの枘穴をそれぞれもうけ，他の角材を組み合わせている。端部近くの枘穴に組み合わされる角材はほぼ破損しているが，他のものは，全長35cm'，幅9～12cmのやや末広がりの短かい角材が組み合わされている。枘穴のある角材の一端は焼損し，反対側の端部は荒い切断面を残している。 ・CW77は現存長50.4cm，幅8.3cm，厚さ4.1cmあり，一方の端を欠損している。端部寄りの位置に，長さ16.2cm，深さ1.6cmのくり込みをもうけている。 ・CW79は現存長55.8cm，幅10.6cm，厚さ3.6cmあり，一端に長さ7.6cm，幅4.3cmの枘をつくり出している。 ・CW80は現存長49cm，幅6cm，厚さ2.8cmあり，一端に長さ6.2cm，幅2.4cmの枘をつくり出している。	・CW77はⅢE区灰褐色微砂，CW79はⅢE区黒色泥砂，CW80はⅢC区溝。内灰白色砂，CW84，CW85はⅣB区茶褐色泥砂と砂の互層の出土。 ・CW77は庄内式併行期，CW80，CW84，CW85は6世紀後半か。
板材	CW76 CW81 CW82 CW87 ～ CW91	・CW76は現存長93cm，幅23.7cm，厚さは中央部で9.7cmあり，端部でやや薄くなる。片面を平坦に仕上げて断面は蒲鉾形を呈し，一面の左右と一短側端面にそれぞれくり込みがあり，裏面には深部で結合する2個の小穴が穿たれている。 ・CW81は全長65.4cm，幅27.6cm，厚さ2.5cmあり，両端部が「L」字状に削りとられている。 ・CW82は全長82cm，幅24cm，厚さ4cmあり，両短辺とも荒く切断されたままである。中央に径約10cmの孔が雑に穿たれている。 ・CW87は現存長94cm，幅18.4cm，厚さ約8cmを計る。 ・CW88は現存長110cm，短辺部幅12cmあり，一方の短辺部に向って幅は狭くなっている。一端に長さ2.8cmの枘が3個つくり出され，また一面には，この枘の基部に大きさの異なる3個の枘穴が穿たれている。 ・CW89は現存長115cm，幅18cm，厚さ11.6cmの角材で，ほぼ全面が焼けている。両端部付近に径6cmの円孔が貫通して穿たれ，その間に深さ約4cmほどの円穴とも方穴とも決めがたい穴が3個穿たれている。 ・CW90は全長75cm，幅約16cm，厚さ3.4～3.9cmを計り，端部付近に14×7.6cmの長方孔が穿たれている。 ・CW91は全長69cm，幅10.2cm，厚さ4.8cmを計り，両端部とも削りによる整形が認められる。両端部付近に6.6×6cm，4×6cmの方孔が穿たれている。	・CW76，CW81はⅣB区暗灰色粗砂，CW82はⅢE区黄褐色砂，CW87，CW89はⅢC区溝内灰白色砂，CW88，CW90，CW91はⅤD区東半6号溝出土。 ・CW82は庄内式併行期，他は6世紀後半か。CW88，CW90，CW91は飛鳥時代に下る可能性もある。
棒状木器	CW68 ～ CW74 CW126	・CW68は全長153cm，幅約4.6cmの完形品で，両端部より40～50cmの間は四面加工されているが，中央部は丸く仕上げられている。両端部に各々2本ずつ刻みが認められる。 ・CW69は現存長113.4cm，径3.8～4.2cmあり，両端とも欠	・CW68，CW69，CW71～CW73はⅣB区暗灰色粗砂，CW70はⅣB区灰白色粗砂，CW74はⅣB

種　類	遺物No.	形　態　の　特　徴	備　考（層位）
		損している。一部に長さ9cm，深さ1.4cmのえぐりが認められる。 ・CW70は現存長80.4cm，幅4.6cm，厚さ1.8cmの偏平なもので，一端にはコブ状の突起をつくり出している。 ・CW71は全長117.4cm，径2.2～3.7cmの完形品で，両端部は丸く加工している。 ・CW72は現存長88cm，幅4cm，厚さ2.2cmの偏平なもので，一端の両側をえぐって突起をつくり出している。 ・CW73は現存長30cm，径3cmあり，一端が尖がり，全面に削り痕が残る。 ・CW74は全長60cmの完形品で，一端に長さ3.9cm，幅3.6cmの突起をつくり出し，以下の部分を刀状につくり先端は尖らしている。 ・CW126は全長22.5cmの小型品で，一端を尖らしている。全面に削り痕が明瞭に認められ，中央にえぐりを入れている。	区暗青灰色泥砂，CW126はIII C区溝内灰白色砂出土。 ・CW70は庄内～布留式併行期，他は6世紀後半か。
小型木器	CW102 CW105 ～ CW125 CW147 CW148 他11例	・CW102を除いて，他の全ては一括出土品である。 ・各種のものがみられるが，CW105は杵を，CW108は刀子を明らかに模倣しており，CW117がCW127と，CW119がCW103やCW104とそれぞれ大きさこそ違え，相似していることなどから，これらの小型木器は，それぞれ各種の小形模造品ではないかと思われる。	・CW102はIV B区暗灰色粗砂，他は全てII H区黒色ピート出土。 ・6世紀後半か。
斉串	CW130 ～ CW139 CW152 CW153 他10例	・CW139は全長8.6cmの最小例で，CW132は全長22.8cmあるが，CW130は現存長で26cmあり，最大の例となるか。 ・形態上4種類が認められる。端部が剣先状に尖るタイプ（CW130，CW135，CW152，CW153など計7例），端部が剣先状で側辺に切り込みを入れているタイプ（CW133，CW134，CW139の3例），端部を斜めに削っているタイプ（CW131，CW132など計9例），端部を斜めに削り側辺に多くの切り込みを入れているタイプ（CW136～CW138の3例）である。	・CW130～CW132，CW134，CW139，CW152，CW153はIV B区茶褐色泥砂と砂の互層，CW133，CW136はV D区東半6号溝，CW135はII H区黒色ピート，CW137はV A区19号溝，CW138はII H区3黒灰色泥砂出土。 ・CW133，CW136は飛鳥時代に下る可能性もある。
剣先状木器	CW92 ～ CW94 CW149 ～ CW151 他3例	・完形品はないが，一端を剣先状に尖がらせ，先端より約20cmのところに両側よりえぐりを入れている。CW92のように偏平なつくりのものもあるが，他は断面菱形の剣身状につくっている。	・全てIII C区溝内灰白色砂出土。 ・6世紀後半か。
用途不明木器	CW30 CW101 CW103 CW104 CW127 CW128 CW129 CW143	・CW30は全長16.8cm，幅11cm，厚さ5.6cmの完形品で，平面八角形をなし，中央に5.6×6.5cmの方形の孔がある。 ・CW101は直径6.6cm，高さ8.4cmの円柱形をなし，内部を深さ4.4cmの円形にくり抜いている。側面には一対の突起がつくり出されているが，破損のため明らかではない。また側面には目釘孔がやや斜方向に貫通している。外面には黒漆が薄く塗られている。 ・CW103は直径約6.8cm，CW104は直径約9cmの円形品で	・CW30はV A区13号溝，CW101，CW103，CW104はV A区14号溝，CW127，CW143はIV B区暗灰色粗砂，CW128はIII E区黒色泥砂，CW129はIV C区溝出土。 ・CW128を除いて6世紀後

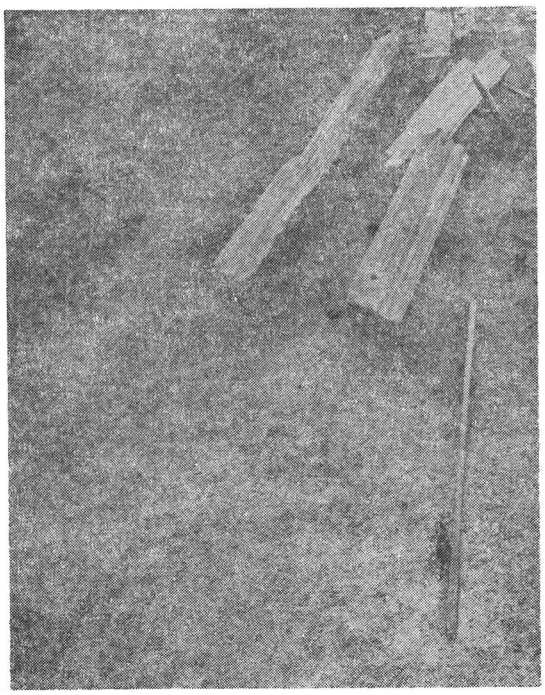
種　類	遺物No.	形　態　の　特　徴	備　考（層位）
		中央にはいずれも孔がある。 ・ＣＷ127は，全長12.4cmの偏平なつくりの完形品で，大型の釘状を呈する。 ・ＣＷ128は，現存長14.4cmの破損品で，端部近くに一辺4cmの方形孔が穿たれ，その下方に一辺1.2cmの方形の孔があけられている。 ・ＣＷ129は現存長12.8cmの破損品で，端部は荒く削ったままであり，同じく荒くえぐる所があり，柄のようなものの未製品と思われる。 ・ＣＷ143は全長20cm，幅2.1cmの完形品で，片面を平坦に仕上げ断面蒲鉾形を呈し，その平坦面に長さ12.3cm，幅1.2cmの長方形のえぐりを入れている。	半か。 ・ＣＷ30は，地引き網のロープが分岐する所に使用されるものに類似する。 ・ＣＷ101は軸頭のようなものであろうか。 ・ＣＷ103，ＣＷ104は紡錘車であろうか。 ・ＣＷ128と類似のものが静岡県登呂遺跡にみられる。
琴柱	ＣＷ140	・高さ1.9cm，幅3.4cmの完形品で，側面は三角形をなし，脚部の厚さは1.3cmあり安定した形態である。頭部には中心よりややずれて切り込みがあり，脚底部の切り込みは浅い。	・ＶＡ区１号住居址出土。 ・ＣＷ141と伴出する。 ・6世紀後半か。
用途不明木器	ＣＷ141	・全長23cm，最大幅1.1cmの完形品で，断面円形の柄部と，幅0.7～1.2cmの不揃いな切り込みを８ヶ所にもつ偏平な部分とからなっている。	・ＶＡ区１号住居址出土。 ・琴柱（ＣＷ140）と伴出した点と，材質が同じ点とから判断して，楽器となる可能性がある。

第4章　飛鳥時代以降

1. 遺構の調査

(1)　溝跡・掘立柱建物の調査（図版18～21，第7・11・14～16図）

ⅤD区大溝[1)]（図版20—1・21，第15・16図）　東西方向にのって造られた人工の溝で，東流する。最小幅約2m，最大幅約4mを計り，深さは約1.2mある。堆積土は上から上部黒灰色泥砂層，ピート層，下部黒灰色泥砂層，灰白色砂礫層とに分かれる（第16図）。上部黒灰色泥砂層から下部黒灰色泥砂層に至る間には，出土遺物からみて大きな時期差はなく7世紀後半に属する。最下部の砂礫層からは6世紀末の土器が少量出土している。この溝は一度修復しており，その為の杭列，板材が発見された（挿図26）。しかし，その修復は大規模なものではなく，下部黒灰色泥砂層が堆積した時点で，杭と板とで部分的に補修した程度のものである。大溝内からは須恵器，土師器，土錘，瓦，木器など多種多様の遺物が発見されている。須恵器には円面硯，杯，鉢，甑などがあり，土師器には高杯，杯，椀，盤，甕などがある。木器としては，櫂，横櫛，殊特下駄，曲物などが出土し，瓦も少量であるが細かい布目痕のある平瓦が出土している。暗文を施した土師器，硯，瓦などの出土することや，溝の造成のあり方など



挿図26　ⅤD区西半大溝内の板・杭材の出土状態

から，この大溝は官衙もしくは寺院などの付属施設と考えられよう。[2)]

ⅤD区東半2号溝（第15図）　ほぼ東西方向に走る溝で，東流する。現存幅40～50cmで，溝底の一部が遺存したものである。溝内からは奈良時代の須恵器（D75），土師器が少量出土している。なお，この遺構については，第3章でも触れている。

ⅤA区12号溝（図版19—1，第12図）　東西方向にのって造られた人工の溝で，東流する。最小幅1.2m，最大幅1.5m，深さ約0.5mあり，西側に幅広く，東側に向けて漸次幅を狭めている。溝内には流れによる砂の堆積がみられ，下部の黄灰色砂層からは6世紀末の土器，砥石などが発見され，上部の茶褐色泥砂層からは8世紀の土器片が1片発見されている。この遺構についても，第3章で触れている。

ⅣC区溝（第11図）　古墳時代前期の竪穴住居址が立地するⅣ区の扇状地上にあり，2号住居址と3号住居址との間に発見された。発掘した範囲は極めて狭く，溝の北肩の一部を確認したにすぎないが，深さは0.7mあり，恐らく東西方向にのって造られた人工の溝ではないかと思われる。溝の堆積は主に砂層からなり，下部の堆積層からは6世紀後半の土器が発見され，上部の堆積層からは8世紀の土器が発見されている。また，この溝は現在の畦畔と重なっている。

掘立柱建物（図版18—3，第7・15図）　ⅤD区西半・東半，ⅣD区，ⅣB区の各地区で掘立柱建物が検出されているが，それについては第3章1節(3)の各項に記載している。

(2)　ⅡH区の調査（図版18・19，第16図）

東西方向に走る現在の際川から南へ60mの間を調査した。旧地形では，この地区は旧際川の蛇行する流路内にあたっている。この流路内からは6世紀後半～平安時代の間の遺物が発見された。しかしながら，本調査区の最北端部（現在の際川に最も近いところ）は比較的安定した微高地となっており，ここに竪穴遺構とピット群が検出された。

竪穴遺構（図版18—4，第16図）　旧際川の一方の肩部を形成する微高地上に立地し，一辺約6mの方形プランの竪穴で，壁高は約25cmあり，床面は東側に向ってやや傾斜している。内部施設としては，竈などの施設は認められず，4個の柱穴が対応する位置に認められる他に，多くのピットが検出されている。これらのピットがこの竪穴遺構に付属するものかどうか明らかではなく，竪穴遺構の埋没後につくられた可能性もある。内部に堆積した黒灰色泥砂層からは7世紀を最新の時期とする土器が出土している。またこの竪穴遺構の西辺と南辺とに平行して溝と柱列が検出されたが，これは竪穴遺構に伴う可能性がある。

溝は竪穴遺構の西辺から1.2mの間隔をおき，幅20cm，深さ5cmを計る。柱列は竪穴遺構の南辺にほぼ平行して認られ，痕跡で検出されたものを含めると6本を数えた。両端の2本は板柱を，内の4本はほとんど加工していない丸太杭を打ち込んでいる。また西端の板柱には丸太杭が副えられており，両者とも焼けていた。

ピット群（図版93）　竪穴遺構の内やその周囲には多くのピットが検出された。竪穴遺構との関連については明らかでないが，ピット内の堆積は竪穴遺構内のものと基本的には同じ黒灰色泥砂層である。ただし，竪穴遺構の西辺より西方には青灰色粘土，木炭，焼土などの薄い層が堆積しており，この混合土がピット内に堆積しているものもある。しかし，この混合土層からも7世紀を最も新しい時期とする土器が出土しており，黒灰色泥砂層との時期差はない。また，この混合土層中より，銅滓，鉄滓，鞴羽口（図版93），金銅製止め具（挿図28）などの遺物が出土していることは注目される。

自然流路の調査（図版18—4）　微高地上に立地する竪穴遺構から南方8mの間は自然傾斜面を形成し，その南方は北西から東南方向の大きな自然流路となっている。現地表面より－5mまで調査したが，花崗岩の霧爛土からなる砂層と砂泥層との互層堆積からなり，時代が下るに従って流路も南方に移動している。下層には6世紀後半の遺物を含む層がみられるが，多くは6世紀後半～9世紀後半の遺物を含み，最終的には大規模な洪水による砂礫層が堆積し，流路は埋没している。この砂礫層の厚さは1mにもおよび，内に巨岩をも含み洪水の規模がいかに大きいかを示している。この砂礫層には遺物が多く，須恵器，土師器，灰釉・二彩・緑釉陶器，瓦など，6世紀後半～9世紀後半までの遺物が出土している。流路埋没後，この地域は湿地の状態にあったらしく，黒褐色砂泥層が全域にわたって堆積している。この層からは12世紀後半代の土師器，木器が多量に出土した。ⅤA区やⅣD区などにおいても同じ内容をもつ土層が確認されており，12世紀末頃には湖岸線の伸長と関連して，生活の場が山寄りに移ったのであろう。

なお，この自然流路の肩部に堆積した黒色ピート層からは，多量の6世紀末の土器，木器が発見されている。

2. 遺物の検討

(1) 土器（図版86～89，第75～78，第28表）

出土地点　7世紀以降の土器は調査区の全域から少量であるが出土している。このうち，やや，まとまって得られたのが，ⅡH区とⅤD区大溝から出土した7世紀代の土器である。このうち大溝からは，溝という性格上，あるいは溝の使用目的が不明である等の制約があるが，ある程度まとまりのある土器が得られた。ここでは大溝の出土品を中心にして土器の形態，手法等を明らかにしつつ，当地域でのこれらの土器の時期，土器の持つ意義について検討する。

須恵器[3]（図版86・87，第75・76図）　杯C（D8～16）は12cm前後の口径に作られており，底部はヘラ切り[4]のままで未調整である。体部は口縁部に向けて外傾させ，口縁部をわずかに外反させているものが多い。杯D（D25～28・30～32）は高台の形態に二種類がある。一はやや外方に張る低い高台をそのまま付したもの，他は高台を付け，その外縁を底部に強く押しつけたもので，端面が外方に向いている。いづれも杯部内面に丁寧な仕上げナデを行なっている。杯蓋（D38～43）は全て宝珠形のつまみを付けており，天井部の頂部付近を削るか，カキ目を施している。内面にかえりを付けるもの〔杯蓋C（D39～41）〕と，付けないもの〔杯蓋D（D38・42・43）〕とがある。鉢（D46）は平底で底部は未調整である。体部には整形時の横ナデ痕跡が顕著である。口縁部は内側に曲げて，やや肥厚する。円面硯（D48・49）の内，D48は器壁が厚く，脚部に大柄の方形の透しを施している。D49は脚部を二段に分け，各段に長方形の透しを上下交互に施している。いずれも硯面を下に向けて焼成している。

土師器（図版88・89，第77・78図）　ⅤD区大溝からは，杯A（D89～98・100），杯C（D101），片口椀（D103），盤（D108・109），高杯（D104～106），鍋（D115），甕（D111～114）が出土している。杯Aには小型のものとやや大型のものとがある。小型のものの底部は未調整であり，体部は篦みがきをおこうなものとおこなわないものとがある。形態は体部からやや内彎気味に外傾させたものを口縁部で外反させて作る。内面には放射と螺旋の暗文を施しているが，暗文を施さないものもある。盤は口縁の形態や手法の上で杯と同様であるが，底部は篦削りをおこない，篦みがきはみられない。高杯Aはやや大型の杯に，低く小

さな脚部をつけている。この脚部には指による整形痕が顕著にみられる。高杯にはこの他に，極めて浅い直線的な杯部をもつ高杯B（D106）がある。甕類は口縁部の形態に特徴がある。外反させた口縁部の端部を上方につまみ上げるものと，丸くおさめるものとがある。この他に，丹塗りの杯（D101）があり，やや高い台をつけ，内面には粗い放射状の暗文を施している。また，大溝の出土品ではないが，ⅡH区より出土した同時期と考えられる蓋（D107）は注目される。足の長い扁平なつまみをつけ，そのつまみの上面には螺旋の暗文を施している。天井部の頂部付近は，つまみを囲む様に三方向の篦みがきをおこない，外周は横方向に篦みがきをおこなっている。この蓋の天井部外面に，「有」「徳」「海」「兎」「魚」「大」などの楷書体の墨書がみられる。「有」「海」「徳」などの文字が繰り返して一列に書かれていることや，重複して書いていることなどから，習書したものかも知れない。

大溝の土器とその年代　今回の調査で，飛鳥時代以降の土器は調査範囲のかなり多くの地点で検出したが，その大半は二次堆積したものであった。

遺構に伴う土器としては，ⅤD区大溝の一括出土品が特に注目される。大溝出土の土器は，概して7世紀後半代に属するもので，7世紀中葉以前に属すると考えられる若干の資料を除けば，ほぼ一型式の土器と認定できる。

大溝出土の土器中もっとも個体数の多いのは，須恵器杯類である。杯身には高台付と無高台とがあり，前者は比較的大型で，口径の大きさも大小2～3種にわかれる。無高台の杯身は，口径がほぼ11～12cm内外で，すべて小型である。

この器形は，陶邑古窯址群のTK—217号窯出土の一群を標式とするTK—217型式に初まり[5]，以後8・9世紀まで続くが，大溝出土の杯身は高台の有無や大小とは関係なく，TK—217型式の例と比べて全般に浅く，体・口縁部の外傾度が大きい。小型杯身の多くは，口縁端部のみわずかに外反するが，この傾向は時期的な特徴と考えてよい。また，小型杯身にやや器形の個体差があるのも，7世紀前半代にはみられない新しい傾向である。

なお，高台付杯身の高台には，D28に代表される踏んばりのよいものと，D27やD29のように高台が低く端面が外向きのものとの2種がある。後者は前者と比べて型式的には新しい段階の特徴と考えられるが，ここでは両者が共存したものとすることができよう。

杯蓋は前記の杯身に対応して各種認められるが，蓋の内面にかえりを有するものが大半で，かえりが無く端部を単に折りまげたものも若干例ある。いずれも宝珠形のつまみを有するがD38の一例はやや特殊である。

杯蓋のかえりの有無は，土器型式の認定上顕著な指標となるが，藤原宮跡の出土例では両者が共存しており，飛鳥浄御原宮跡推定地の場合も両者の共存が知られている。[6] 大溝の土器の年代決定にあたって，この事実は有力な根拠となろう。

次に，大溝出土の土師器について概観すると，最も出土個体数の多いのが内面に暗文を有する杯類で，器形，大きさ，手法とも飛鳥浄御原宮跡推定地の出土品に近似している。D104の高杯は，脚柱部を篦で縦方向に削っているが，これは断面円形の脚柱部をもつ高杯から，10～12角柱の高杯へ移行する過渡期の産物である。

杯類に次いで出土例の多い器種は甕類である。大小各種あり，その特徴も一様ではないが，概括すれば，ここでは前章で指摘したいわゆる近江タイプの甕がほとんど認められず，代って畿内各地で普遍的にみられるタイプの甕が支配的であるという事実は注目される。

口縁部が外彎気味に外上方へのび，その端面が内傾する近江型の甕は，すでに述べた通り6世紀末から8世紀代まで存続することが確認されているが，何故か大溝出土品中にその例を見ず，畿内型が支配的であるということは，単なる偶然とみるよりも，大溝とそれに関連する当地の遺構の性格を示唆するものであると考えるべきであろう。なお，北大津駅構内遺跡から出土した7世紀中葉の土師器甕の場合も，畿内型が支配的である。結論的にいえば，こうした土器のあり方の特徴は，湖西のこの地が大津宮跡推定地であり，大溝をはじめ各地点から検出した7世紀後半代の土器が，大津宮と何らかの関連を有するものであり，今後の大津宮跡研究に一つの手掛りを与えるものであることはまちがいないだろう。

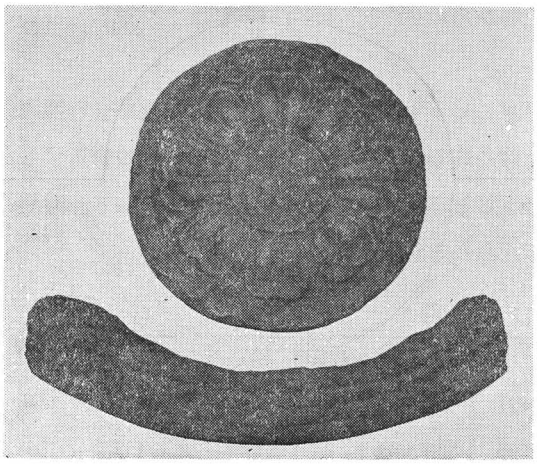
記述が前後するが，大溝出土の一括土器は，全般に飛鳥浄御原宮跡の出土品に，もっとも近似している。そして藤原宮跡の土器より古く，また7世紀中葉以前の畿内各地の土器よりも型式的に新しい。[7] 大溝出土の土器群のもつ諸特徴は，まさにこの土器の年代を大津宮時代（668～672）に比定するにふさわしいといえよう。

大津宮時代に属すると考えられる土器は，大溝の他にⅡH区からも若干例出土している。たとえば墨書のある土師器盤の蓋（D107）も，大溝出土土器と同一時期に考えてよいものである。

大溝出土の土器中，特殊なものとして須恵器円面硯（D48・49），土師器丹塗杯（D101）などがあるが，硯は装飾的要素が簡明で，器高が低く安定感があり，全体に洗練されている。D49の硯面は明瞭に磨耗が認められ，使用されていたことがわかる。なお，ⅡH区では，大溝出土杯蓋（かえりの無いタイプ）と同型式の杯蓋硯がD 107の土師器と共伴して検出されている。

(2) 瓦・木器，その他（図版90～94，第71・79・80図）

瓦（図版94—1，第80図）　調査区域内で瓦が出土したのは，ⅡH区とⅤD区大溝の2ヵ所である。大溝内の瓦は少量で，細かい布目を有する平瓦の小片である。伴出した土器や，瓦の作りから7世紀後半のものと考えられる。ⅡH区出土の瓦は自然流路の9世紀後半の土器を含む層からの出土品である。全体に摩耗が激しいが，軒丸瓦，軒平瓦，平瓦，丸瓦，等が出土している。軒丸瓦は大型の中房と複弁の蓮弁文であり，軒平丸は三重弧文である。他に軒丸瓦には単弁の例もある。これらの文様から，7世紀後半代の瓦である事が窺知出来る。平瓦，丸瓦ともに小片で摩耗している為，製法等については不明である。これらの瓦を観察すると，南滋賀町廃寺出土の瓦と全く同一の内容を持っており，恐らく，そこから流されて来たものであろう。（挿図27）



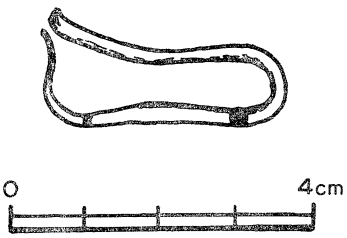
挿図27　南滋賀廃寺出土の瓦

木　器（図版83・90～92，第71・79図，挿図20，第29表）　7世紀以降の木器の内，ⅤD区大溝から出土した木器が注目される。7世紀後半に最終的に埋没したこの東西溝からは，櫂（DW1），特殊下駄（DW2），コテ状木器（DW3），うき（DW29），曲物（DW10・11），櫛（DW14），斉串（DW30・36）が出土し，この他にも杭・柱・板や多くの加工木・自然木が得られた。特殊下駄やコテ状木器などのように従来例のないものを含むこれらの木器・木製品は，7世紀後半にその年代を限定することのできる好資料である。

ⅤD区大溝の出土品を除けば，木器で遺構にともなうものはなく，ⅡH・ⅣD・ⅤA区の平安時代～中世の遺物を含む各包含層から出土したものである。曲物（DW6～8）・甑底板（DW9）・高杯（DW13）・盆（DW12）・漆器（DW15・16）などの容器，下駄（DW4・5），琴柱（DW41），留めぐし，男根状木製品（DW37～39）などがある。

銭　貨（図版93—1，第80図）　本調査で出土した銭貨は第27表の通りであるが，このうち大多数はⅣD区北半部の一括資料であり，数値，種類等が直ちに調査区域全体の傾向ではない。開元通宝は背文を欠いており，又，他の銭貨についても，かなりの粗悪品がみ

られる事から，国内生産の品も混在しているものと考えられるが，中世の銭貨の流通状況の一端を窺知出来る。



挿図28　ⅡH区出土の金銅製止め具実測図

金銅製止め具（図版93—2）　ⅡH区のピット内から出土した。銅を丸く整形し，一方の端を中途から平らたく延ばし，それをピン風に曲げて製品化し，それに鍍金を施している。これは伴出した土器から，7世紀後半のものである。

鉄滓・銅滓・鞴羽口（図版93）　ⅡH区のピット等に流入する焼土，粘土を含む黒灰色泥砂層から出土いる。鞴羽口は小片で全体を窺知出来ない。この羽口には鉄の癒着するものと，銅の癒着するものとがある。先の金銅製品と関連があるものと考えられる。時期は金銅製品と同様，7世紀後半のものと考えられる。

第27表　古　銭　一　覧

銭貨名	枚数	No.	王朝	皇帝	初鋳年代	銭貨名	枚数	No.	王朝	皇帝	初鋳年代
開元通宝	6	DM1 DM2	唐	高祖	621	元符通宝	1	DM18	北宋	哲宗	1098
至道元宝	2	DM9 DM10	北宋	太宗	995	聖宋元宝	2	DM4 DM5	北宋	徽宗	1101
景徳元宝	1	DM17	北宋	真宗	1003	淳熙元宝	1	DM20	南宋	孝宗	1174
天聖元宝	3	DM15	北宋	仁宗	1023	開禧通宝	1	DM3	南宋	寧宗	1205
皇宋通宝	4	DM11 DM12	北宋	仁宗	1039	淳祐元宝	1	DM19	南宋	理宗	1241
至和元宝	1	DM6	北宋	仁宗	1054	咸淳元宝	1	DM21	南宋	度宗	1265
嘉祐通宝	2	DM16 DM25	北宋	仁宗	1056	永楽通宝	1	DM22	明	成祖	1408
元豊通宝	7	DM13 DM14	北宋	神宗	1078	寛永通宝	5	DM23			
元祐通宝	4	DM7 DM8	北宋	哲宗	1086	文久永宝	1	DM24			

註　1）VD区の調査区域の概略等については第3章1節(3)の各項を参照されたい。以下のVA区等についても同様である。

2）VD調査区の北方の水田に，南滋賀町廃寺出土のものと同型の瓦を出土する穴太（あのう）南遺跡（仮称）がある。

3）須恵器の各部分の名称は，田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ　1966年 p.35 の「須恵器各部の名称」に拠った。

4）阿部義平・山沢義貴『水びき成形技法における「ヘラ切り」と「糸切り」』（『日本考古学協

会第36回総会研究発表要旨』）1970年

5）前出『陶邑古窯址群Ⅰ』

6）奈良県教育委員会編『藤原宮』1969年

7）奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原発掘調査概報３』（1973年）及び前出『藤原宮』など参照。なお，飛鳥浄御原宮跡推定地の出土品については奈良国立文化財研究所飛鳥藤原発掘調査部で実見の機会を得たが，詳細についてはいずれ同所より報告がなされる筈である。なお，その折に小墾田宮跡推定地，板蓋宮跡推定地の出土品を合わせて実見したが，大溝出土の土器を検討する際に大変参考になった。所員の皆さんに感謝したい。

その他本章関係の参考文献

- 原口正三編『船橋Ⅰ』平安学園考古学クラブ　1957年
- 中尾芳治「難波宮造営前の遺跡調査報告」（『難波宮址の研究』５冊の２）1966年
- 水野正好『甲賀郡甲西町狐栗古墳群調査概要』滋賀県教育委員会　1968年
- 西田弘「大津市中保町遺跡」（『滋賀文化財研究所月報』６）滋賀文化財研究所　1968年
- 出雲国庁跡発掘調査団『出雲国庁跡発掘調査概報』松江市教育委員会　1970年
- 伊場遺跡調査団『伊場』第４次調査月報１～６　1971年
- 『普正寺』石川考古学研究会　1971年
- 田辺昭三「飛鳥・奈良期の須恵器」（『日本美術工芸』393号）1972年
- 『昭和46年度（第39次・第40次）難波宮跡調査報告書』大阪市教育委員会　1973年

第28表　飛鳥時代以降の土器・陶磁器観察

須恵器・陶磁器

器形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	備考（層位）
杯蓋A	D1 D17 D20	・古墳時代以来の杯蓋の極めて矮少化したもの。	・D1・17の天井部は篦削りされているが，D20の天井部は未調整である。 ・D1の内面中央部には丁寧な仕上げナデが認められる。	・全てⅡH区2黒灰色泥砂。 ・D34～36の蓋と組み合わさって杯身となる可能性もある。 ・陶邑TK217に相当する。
杯蓋B	D34 ～ D37	・宝珠つまみのつく杯蓋で，口縁端部内面には身を受けるかえりがあり，D34～36では口縁端部とかえりの高さが等しい。 ・杯蓋Cにくらべて小型である。	・天井部は篦削りし，他は全て横ナデ調整。 ・内面中央には仕上げナデが認められる。	・D34・36はVD区大溝，D35はⅡH区2黒灰色泥砂，D37はIE区茶褐色泥砂。 ・陶邑TK217～TK46に相当する。
杯蓋C	D39 ～ D41 D44 D45	・杯蓋Bを大型化した形態をとり，宝珠つまみには変形が生じている。D44の口縁部内面のかえりは退化しており，かえりをもつ杯蓋の終末の好例であろう。	・D39・44は天井部を篦削りし，D45は天井部の屈折部付近を篦削りしている。D40・41の天井部はカキ目調整されている。 ・D39・44の内面中央には仕上げナデが認められる。	・D39～41はVD区大溝，D44はⅡH区1砂，D45はⅡH区黒灰色泥砂。 ・陶邑TK48に相当する。 ・杯蓋Dと併存する。
杯蓋D	D38 D42 D43	・杯蓋Cと形態はよく似るが，身を受ける口縁端部内面のかえりがなく，口縁端部を垂直に折り返している。 ・天井部中央につまみがつき，D42では宝珠形のおもかげを残しているが，D38では扁平なつまみとなっている。	・D42・43は天井部を篦削りしている。 ・3例とも内面中央に仕上げナデが認められる。	・3例ともVD区大溝。 ・陶邑TK48に相当する。 ・杯蓋Cと併存する。
杯蓋E	D60	・天井部が平らな極めて扁平な形態をとり，口縁端部は断面三角形におさめている。	・内外面ともに横ナデ調整。	・ⅡH区黒褐色砂泥。 ・奈良末～平安初。
杯　A	D2 D18 D19 D21 D22	・古墳時代以来の杯の矮少化したもので，たちあがりは極めて小さく，受け部の端部と高さがほぼ等しい。	・底部の篦削りは省略され未調整である。 ・内面中央の仕上げナデはない。	・D2・22はVD区東半6号溝，D18はⅡH区黒灰色泥砂，D19・21はVD区西半茶褐色泥砂。 ・杯蓋A（D17・20など）とセットになると考えられる。 ・陶邑TK217に相当する。
杯　B	D3 ～ D7	・口径が小さく身の深い形態で，D3・7では体部・口縁部をやや内彎させ，他のものは直立気味に少し外傾させている。	・D3の底部外面は未調整で，D4～7の底部は篦起しの後，ナデ調整している。 ・内面中央の仕上げナデはない。	・D3はVD区東半6号溝，D4～7はⅡH区黒灰色泥砂。 ・杯蓋Bとセットになる。 ・陶邑TK217～TK46に相当する。
杯　C	D8 ～ D16	・杯Bにくらべて身が浅くなり，体部・口縁部の外傾度が強くなる。口縁端部をD15のように外につまみ出す	・底部は篦起しのままで未調整のものが多く，一部にナデ調整を加えるものがある。 ・底部以外は内外面ともに横	・D8はVD区東半黒灰色泥砂，D9はⅡH区黒灰色泥砂，D10～16はVD区大溝。

器形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	備考（層位）
		ものと，D13のように丸くおさめるものとがある。	ナデ調整。 ・内面中央に仕上げナデが認められる。	・器形にゆがみのあるものが多い。 ・陶邑TK48に相当か。
杯D	D23 〜 D32	・高台の付く杯で，口径は大小の差があるが，体部・口縁部は直線的に外傾する。 ・高台は低く外にふんばるものが多いが，D30のようにふんばりのない例もある。注目されるのはD25・27・29の高台で，高台の下端面を斜めにナデて，端面は外方に向いている。このタイプは型式学的には後出的なものであろう。	・底部外面は未調整で，他は全て横ナデ調整。 ・内面中央に丁寧な仕上げナデが認められる。	・D23・25〜28・30〜32はVD区大溝，D24はIIH区6黒褐色砂泥，D29はIIH区1砂。 ・D25は底部外面に墨痕あり。 ・陶邑TK48に相当か。
杯E	D50 D51 D55 D56 D63 〜 D66 D68 D69	・完形品はなく全体の形態がつかみにくいが，高台はより低くなり，かつ外へのふんばりが弱くなり，高台の付く位置が底部の平坦面の周縁に近い。	・底部以外は内外面とも横ナデ調整しているが，D55は体部外面を箆削りしている。 ・D64〜66・68・69の内面中央に仕上げナデが認められる。	・D50・51はVD区東半黒灰色泥砂，D55・56・64・65・68・69はIIH区灰色砂，D63・66はIIH区黒褐色砂泥。 ・奈良末〜平安初。
高杯	D71 D72	・D71の脚部はラッパ状に大きく開き，裾端部は外方につまみ出されている。 ・D72は欠損部が多いが，脚部は糸巻き状に作り，すぐに終るものか。	・全体に横ナデ調整。	・D71はVD区西半茶褐色泥砂，D72はIIH区黒灰色泥砂。 ・7世紀。
鉢	D46	・底部は平底で，口縁部は内彎する。口縁から底部に向って徐々に器壁が厚くなっている。	・底部外面は未調整。他は全て横ナデ調整。 ・内面中央に仕上げナデが認められる。	・VD区大溝。
盤	D33	・厚手のつくりで，高台は外方にふんばっている。	・底部外面は未調整で，その他は全て横ナデ調整。 ・内面中央に丁寧な仕上げナデが認められる。	・IIH区1砂。 ・VD区大溝出土のものと同時期のものであろう。
瓦塔	D73	・小型の矮少化した形態か。	・頸部の内面には絞り痕が顕著である。	・VD区大溝。
円面硯	D48 D49	・D48は器壁厚く，周縁は陸の面よりも高い。縁帯は大きく，断面三角形につくり，その下部から幅広い透しを入れている。透しは7〜8孔か。 ・D49は，陸が周縁より高く海の部分は深い。断面三角形の縁帯を上・下2本つく	・全体に横ナデ調整。D48の陸の面は指で平滑に仕上げられている。	・ともにVD区大溝。 ・D49は，陸の部分に墨が付着し，自然釉のかかり具合から判断して倒立位で焼成されている。

器　形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	備　考（層位）
		り，下の縁帯をはさんで，6方透しが市松様に入れられている。 ・脚端部は折り曲げて肥厚させている。		
平瓶A	D74	・肩部は鈍い稜をなす。	・底部外面は篦削り，他は横ナデ調整。	・ＶＤ区大溝。
平瓶B	D75	・肩部は明瞭な稜をなし，体部下半の稜線は鋭く底部に移行する。	・底部から体部下半の外面を篦削りし，他は横ナデ調整。	・ＶＤ区東半２号溝。 ・奈良時代。
横　瓶	D76	・頸部は直線的に外傾し，端部で内彎する。	・横ナデ調整。	・ＶＤ区大溝。
短頸壺A	D79	・口縁部は直立気味に外反し，端部上端面を平らにつくる。	・横ナデ調整。	・ＶＤ区大溝。
短頸壺B	D82	・口縁部は極めて短かく，端部は丸くおさめる。肩部はなだらかにつくる。	・横ナデ調整。	・ＶＡ区８号溝。 ・平安時代。
長頸壺	D47 D78	・いずれも体部の破片であり，肩部と体部の境には明瞭な稜がつく。D47では肩稜部のやや上方に一条の沈線がめぐる。	・D47は横ナデ調整。D78の体部下半は篦削りをおこない，他は全て横ナデ調整。	・D47はＶＤ区東半黒灰色泥砂，D78はＶD区大溝。
壺　A	D77	・口縁部は短かく外傾し，端部は折り曲げて肥厚させ，上方につまみ上げている。	・横ナデ調整。	・ＶＤ区大溝。
壺　B	D54 D59 D61 D62 D67	・全て底部の破片で，高台がつく。 ・D54・61は小型である。 ・D54・62はともに灰釉陶。 ・D59は褐色・緑色の二彩軟陶。	・D54･61は底部に糸切り痕。	・D54・61・62・67はⅡＨ区灰色砂，D59はⅡＨ区黒褐色砂泥。 ・奈良～平安時代。
中型甕	D80 D81	・口縁部は外反し，端部はD80では丸くおさめ，D81では垂直に折り曲げている。	・口縁部は内外面ともに横ナデ調整しているが，D81の口縁部下半には叩き目が残る。	・いずれもＶＤ区大溝。 ・D80にはススが付着。
大型甕	D83 D84	・口縁部は外反し，端部を肥厚させて上端を内側につまみ出す。	・口縁部は内外面とも横ナデ調整し，体部は叩き締めた後，外面をカキ目調整する。	・いずれもＶＤ区大溝。
椀　A	D58	・底部のみの破片。内彎する体部に幅広い高台をつける。 ・緑釉硬陶。		・ⅡＨ区耕土。 ・底部外面に「－」のヘラ記号。
椀　B	D85 ～ D88	・D85・87・88は青磁，D86は白磁の破片。 ・D86の口縁部は折り返している。	・D85の外面に蓮弁文，D87の内面とD88の外面とにヘラによる文様がある。	・D85・86はＶＡ区下部黒褐色泥砂，D87・88はⅣＤ区茶褐色泥砂。
皿	D52 D53 D57	・D52は青磁。口縁端部に削りによる装飾がある。 ・D53は内面の途中に段を作る。		・D52はⅣＣ区耕土，D53はⅢＣ区耕土，D57はⅡＨ区耕土。

器形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	備考（層位）
		・D57は緑釉軟陶。		・D52は中世，D53・57は平安時代。 ・D53は猿投製品か。
浄瓶	D70	・灰釉陶。		・IIH区耕土。

土師器

杯A	D89 〜 D98 D100 D144	・口径には大小の差がある。口縁端部のおさめ方には，D89・91・92・94・96・98・100のように外方につまみ出すもの，D90・97のように垂直につまみ上げるもの，D93のように内彎気味のもの，D95・144のように自然におさめるものなどが認められる。	・D89・91・93・95は内外面ともに横ナデ調整。D90・144は内外面ともに横ナデ調整後に篦みがき。D92・94は外面を篦みがきし，内面は横ナデ調整。D92の底部外面はおさえている。D96・100は体部下半外面を篦削りし，他は全て篦みがき。D97・98は底部外面を篦削りし，他は全て篦みがき。 ・調整後，内面に暗文をつけるものが多い。D89・90・91・97は一段の放射状文，D92・94は一段の放射状文と螺旋状文，D100は二段の放射状文，D96は二段の放射状文と螺旋状文，D98は連弧文と一段の放射状文と二段の螺旋状文とをそれぞれもつ。	・D89〜98・100はVD区大溝，D144はIIH区黒褐色砂泥。 ・7世紀後半。
杯B	D135 〜 D138	・口縁端部は丸くおさめている。	・内外面ともに横ナデ調整し，底部外面には指押え痕が認められる。	・IIH区黒褐色砂泥。 ・平安時代〜中世。
杯C	D101 D141 D145	・高台のつく形態である。口縁端部はいずれも外方につまみ出している。 ・D101の内外面に丹を塗る。	・内外面ともに横ナデ調整。 ・内面には調整後，一段の放射状暗文をつける。D141は粗い。	・D101はVD区大溝，D141はVD区西半茶褐色泥砂，D145はVA区下部黒褐色砂泥。 ・7世紀後半。
椀	D99 D102	・口縁端部はD99では上方につまみ出し，D102では外方につまみ出している。	・D99は内外面ともに篦みがき。D102は体部下半外面を篦削りし，他は全て篦みがき。	・IIH区2黒灰色泥砂。 ・7世紀。
片口椀	D103	・口縁端部は内方につまみ出している。	・体部外面は篦ナデ調整し，口縁部外面は横ナデ調整。内面は刷毛目調整。	・VD区大溝。 ・7世紀後半。
盤	D108 〜 D110 D142	・大小の差はあるが，口縁端部を丸くおさめている。	・D108・110は内外面ともに横ナデ調整。D109は底部外面を篦削りし，他は全て横ナデ調整。D142は外面を篦みがきし，内面は横ナデ調整。	・D108・109はVD区大溝，D110はIIH区黒灰色泥砂，D142はVD区西半茶褐色泥砂。 ・7世紀後半。

器形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	備考（層位）
			・内面にはD110を除いて暗文をつける。D108では放射状文，D109では放射状文と螺旋状文，D142では大柄な螺旋状文である。	
高杯A	D104 D105	・浅い杯部に円筒部をもつ低い脚がつく。口縁端部は外方につまみ出されている。	・脚円筒部外面は指おさえするのみで，円筒部内面を除いて他は全て横ナデ調整。脚円筒部内面には絞り痕が顕著である。 ・杯部内面には，D105では放射状，D104では放射状と螺旋状の暗文がつく。	・ＶＤ区大溝。 ・7世紀後半。
高杯B	D106 D143	・ごく浅い盤形に脚がつく。脚部の形態は不明。D106は直線的に外に開く器形である。	・いずれも外面は篦みがきし，内面は横ナデ調整。 ・杯部内面に暗文があり，D106では二段の放射状文の間に螺旋状文をはさみ，D143では大柄な螺旋状文である。	・D106はＶD区大溝，D143はＶＤ区西半茶褐色泥砂。 ・7世紀後半。
高杯C	D139 D140	・椀形に近い深い杯部に，円筒部のほとんどない低い脚のつく小型の高杯。	・底部外面を篦削りする他は全て横ナデ調整。	・D139はⅡH区2黒灰色泥砂，D140はⅡH区黒灰色泥砂。 ・7世紀。
蓋	D107	・薄手のつくりで大型の器形。口縁端部は丸くおさめる。 ・高く扁平なつまみがつく。	・外面のつまみ付近は，つまみを囲む様に三方向に篦みがきし，他の部分は横に篦みがきをする。内面は横ナデ調整。 ・つまみの頂部には螺旋状の暗文をつける。	・ⅡH区黒灰色泥砂。 ・7世紀後半。 ・外面に墨書あり。
鍋　A	D115	・口縁部は外傾し，中途で直立させている。体部は縦長の球形で，中央部に最大径があり，その部分に平面三角形の把手を一対つけている。	・口縁部内外面とも横ナデ調整。体部内外面とも細かい刷毛目調整。	・ＶＤ区大溝。 ・7世紀後半。
鍋　B	D116	・体部下半から底部は欠損しているが，体部と口縁部とは境がなく，口縁端部を外側上方につまみ出している。	・内外面ともに刷毛目調整し，口縁部には横ナデ調整を加えている。	・ⅡH区2黒灰色泥砂。 ・7世紀。 ・外面にスス付着。
小型甕	D112	・口縁部は外傾し，端部は丸くおさめる。体部は球形。	・口縁部内外面とも横ナデ調整。体部は内外面ともに刷毛目調整。	・ＶＤ区大溝。 ・7世紀後半。
中型甕	D111 D113 D114	・体部が縦長になる中型の器形で，口縁部は外傾ないし外反し，端部をD113では内方に，D114では上方につまみ出している。	・口縁部は内外面ともに横ナデ調整。体部は内外面ともに刷毛目調整しているが，D111の内面は篦削りしている。	・ＶＤ区大溝。 ・7世紀後半。

器形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	備考（層位）
大型甕	D152	・体部が著しく縦長になる器形で，外反する口縁部の端部を上方につまみあげている。	・口縁部は内外面ともに横ナデ調整。体部外面は上から下に順次刷毛目調整を行う。体部内面は体部の半ばまで斜めにカキ上げ，それより上部は水平方向に篦ナデしている。	・ⅡH区6黒褐色砂泥。
壺	D146	・体部下半の破片であるが，肩部にひしゃげた把手がつく。	・外面は篦みがき，内面は横ナデ調整。	・ⅡH区1砂。 ・器形には不明の点が多く検討の余地が多い。時期に関しては不明。
皿	D117 ～ D134	・大きく見て大小の2種類が認められる。	・内外面ともにナデ調整。	・D117・122・123・133・134はⅤA区下部黒褐色砂泥，D118～121・124～132はⅡH区黒褐色砂泥。 ・平安時代～中世。
釜	D147 ～ D151	・口縁部の内彎するタイプ（D147～149）と直立するタイプ（D151）とがあり，それぞれにつばが付くが，D150はつばがなく，口縁部が外に張り出す形態をとる。		・ⅤA区下部黒褐色砂泥。 ・平安時代～中世。 ・外面にススが付着。

第29表　飛鳥時代以降の木器観察

種類	遺物No.	形態の特徴	備考（層位）
櫂	DW 1	・現存長72.5cmで柄部が欠損する。水かき部は長さ54cm，幅約12cm，厚さ約2.6cmを計り，先端部は削られて厚さが薄くなっている。片面は水かき部の基部と先端部を除いて，細部の加工がなされていない。	・VD区大溝出土。
うき	DW 28・29	・DW28は全長12cm，DW29は全長10cmあり，いずれも両端を尖らせた紡錘形を呈する。DW28の一端は現代の釣うきの様にやや細身につくられている。DW29は荒い加工が認められ，恐らく半製品であろう。	・DW28はVD区東半Pit51，DW 29はVD区大溝出土。
特殊下駄	DW 2	・形態上は普通の下駄と大した差異はないが，歯が元来ない点と大きさとから普通の下駄と区別される。 ・全長30.9cm，幅14.6cmの小判形の完形品で，台板は縦に2分されており，これを結合させるための孔が3ヶ所に穿たれている。裏面にはこの結合孔を含んで長方形のえぐりが認められ，結合紐が磨擦によって切れることを防いでいる。台板はもともと一枚の同じ材を使っており，補修のためにおこなわれたものか，あるいはある目的をもって元来このように半折されて作られたものなのか，興味ある点であるが明らかではない。 ・前ツボは右に偏よっており，付近には指圧痕がよく残り，特に親指に力が強く加わったことが観察される。	・VD区大溝出土。 ・台板に残る指圧痕から判断して相当強く前にふみ込む動作が復原され，工具や農具として使われたことが考えられる。
コテ状木器	DW 3	・長辺25.8cm，短辺8.4cmの完形品で，上面にはくり抜きによって握り柄を作り出し，裏面は長軸・短軸の両方向に彎曲している。裏面は磨擦によるのか磨滅が激しい。	・VD区大溝出土。
曲物底	DW 6～8 DW 10・11 他5例	・7世紀後半のものはDW10・DW11など計4例ある。直径は18cmほどで，DW10，DW11にはいずれも3ヶ所に目釘穴がみられる。 ・平安末～中世のものはDW6～DW8など計6例ある。直径16～17cmのものが多いが，DW8のように大きい例もみられる。	・DW6はIIH区茶褐色砂泥，DW7はIIH区黒褐色砂泥，DW8はVA区下部黒褐色泥砂，DW10，DW11はVD区大溝出土。 ・DW11の一面には切り痕が認められる。
甑底板	DW 9	・直径15cmあり，中央に円孔が穿たれている。周縁の2ヶ所に目釘穴が残っており，曲物の底板を転用したものか。	・IIH区黄褐色砂出土。 ・平安時代か。
高杯	DW 13	・組み合せ式高杯の脚部完形品で，全長22.2cm，最大幅5.4cmあり，断面は方形を呈する。両端部に方形と長方形の柄をつくり出している。	・IIH区灰色砂出土。 ・平安時代か。
盆	DW 12	・推定直径19.2cmの破損品で，ロクロ引きによってつくられている。底部外面には判読困難な墨書が残っている。	・IIH区黒褐色砂泥出土。 ・平安時代か。
漆器皿	DW 15	・直径9.2cm，高さ1.4cmの皿で，黒漆が塗られている。	・IVD区茶褐色砂泥出土。 ・平安末～中世か。
漆器椀	DW 16	・推定直径9cm，現存高4cmの破片で，黒漆が塗られている。	・VA区暗青灰色泥砂出土。 ・中世か。
下駄	DW 4・5・42	・古墳時代の下駄とくらべて，前ツボの位置が中央にくる点や，歯が台板よりも張り出す点などに差異がみられる。 ・DW4は全長21cmの破損品で，前ツボは中央に位置し，やや高い歯は台板よりも張り出し，特に後歯に著しい。鼻緒孔は円孔。	・DW4はIIH区下部黒褐色砂泥，DW5はIIH区黒褐色砂泥，DW42はIIH区3黒褐色砂泥出土。

種類	遺物No.	形態の特徴	備考（層位）
		・DW5は全長17.7cm，幅8.4cmあり，前ツボは中央に位置し，歯は台板よりも張り出している。鼻緒孔は円孔。 ・DW42は全長15.9cmの小型品で，前ツボは左に偏している。歯のつくりが特異で，台板の中央部をくり抜いて，その前・後をそれぞれ歯としたものである。そのため，前ツボは前歯の前側にあけられる通例をとらず，前歯の後側にあけられている。台板の形が前よりも後の幅が広くなっている点も，通例の下駄と異なっている。鼻緒孔は方孔。	・全て平安時代の遺物を最も新しいものとする層の出土であるが，DW42は形態上古くなる可能性がある。
櫛	DW14	・全長5.3cm，現存幅6cmの横櫛の破損品で，頭部の厚さは1cmあり，歯先にむかってしだいに薄くなっている。	・VD区大溝出土。
斉串	DW30～36	・古墳時代のものと差異はなく，形態上端部を剣先状に削るもの（DW30～32）と，同じ端部のつくりで側辺に切り込みのあるもの（DW33～DW36）とがある。 ・完形品の長さは19cm前後であるが，DW30の現存長は31.5cmである。	・全てVD区大溝出土。
男根状木製品	DW37～39	・DW37は全長15.3cm，長径2.9cmの楕円形断面を呈し，亀頭部のつくりは荒いながらもリアルである。 ・DW38は全長14cm，長径2.7cmの楕円形を呈し，亀頭部のつくりは簡略である。 ・DW39は全長14.2cm，長径2.5cmの楕円形を呈し，亀頭部の細工を終えていない未製品である。	・DW37はIIH区黒褐色砂泥，DW38はIVD区茶褐色砂泥，DW39はVA区下部黒褐色泥砂出土。 ・平安時代～中世。
小形木器	DW26・27・40	・DW26は全長2.8cm，幅2.3cmの完形品で，孔が一対あけられている。 ・DW27は破損品で，もともとは直径6cmほどの円盤状のものであろうか。 ・DW40は現存長14cm，幅2.1cmのほぼ完形品で，形態はさじ形を呈し，身部の断面は三角形，茎部断面は方形である。	・DW26，DW27はVA区下部黒褐色泥砂，DW40はIIH区2黒灰色泥砂出土。 ・DW26は平安末～中世，DW40は7世紀。
とめぐし	DW17～25他多数	・DW17，DW18は未製品であるが，完形品は全長16cm前後で，側面を削って6～7面に面取りしており，両端を尖がらせている。	・IIH区黒褐色砂泥・IVD区茶褐色砂泥，VA区下部黒褐色泥砂などの平安末～中世の遺物を含む層より多数出土。
琴柱	DW41	・高さ2.2cm，幅3.9cmあり，脚の一部を欠損している。厚さは上部で0.4cm，脚部で0.6cmとやや厚いが，古墳時代の琴柱（CW140）にくらべて偏平なつくりである。	・VA区下部黒褐色砂泥出土。 ・平安末～中世。

終　章　発掘調査の成果と課題

――総括にかえて――

はじめに　湖西の平野部は，東に琵琶湖，西に比叡山系の山なみをひかえて南北に細ながく続く。この平野部には，長い年月にわたって山側から押し流されてきた土砂が堆積し，複合扇状地を形成した。現在は耕地化されて平坦に見えるが，もとは扇状地の高みや谷が東西方向にはしり，起伏の多い地形であった。

今回われわれが調査対象とした湖西線予定地は，この湖西の平野部を南北に縦断する。扇状地の高みや谷はほぼ東西にはしっているので，はからずもわれわれはこれを直角に切って調査する結果となり，地形の起伏をたしかめる上で大変好都合であった。

扇状地の高みは，縄文以来各期にわたる生活の場であり，集落，墓地などが営まれた。

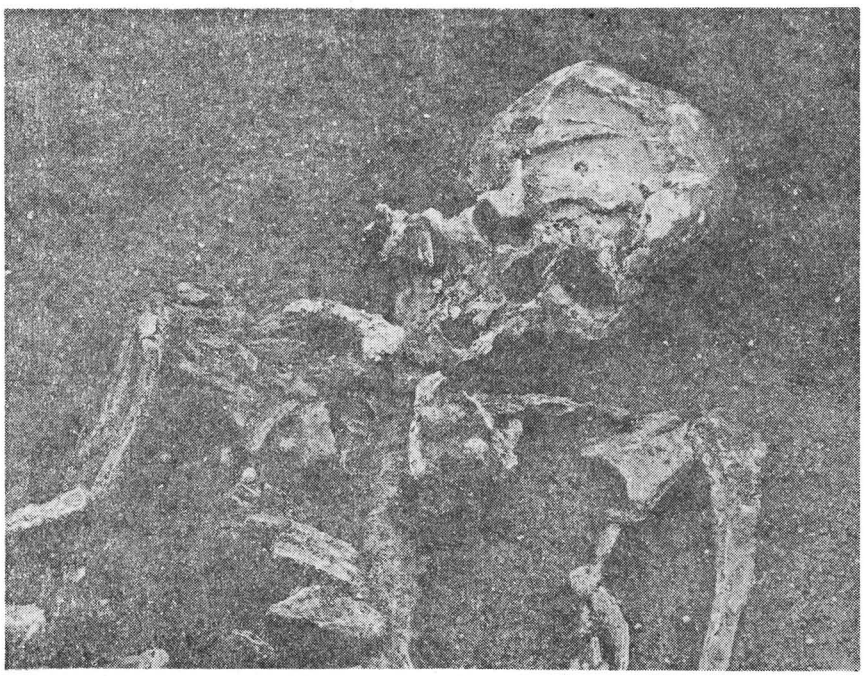
挿図29　比叡山中腹より「大津京」推定地付近を遠望

われわれは，それらの遺構群を各地区にわたって検出し，遺跡の南北限については明確に把えることができたが，調査範囲の東西幅が10～15mに限定されていたため，東西限をたしかめることはできなかった。したがって，報告書の各章で取りあげた遺構群は遺跡全体の一部にすぎず，各遺跡の西への拡がりについては，今後特に注意を払う必要があろう。

この報告書では調査範囲の全域で検出した遺構，遺物を，あらためて時代別にまとめたが，ここでも本文各章に対応して，以下の各項で発掘調査成果の要約と今後の課題を，それぞれ時代別に取りあげることにしたい。

縄文時代　(1)遺跡の範囲　これまでに近畿地方で縄文晩期の遺跡を発掘調査した例はきわめて少く，その知見も断片的であった。滋賀里遺跡の場合も，縄文晩期初頭の標識遺跡として周知の存在であったが，これまでの調査では遺構も検出されず，その範囲も明らかではなかった。したがって，滋賀里人の生活文化相全般についてはほとんど未知であったといってよい。

今回の発掘調査では，従来の研究成果を再確認するに止まったことも多かったが，新資料，新事実の発見に加えて若干の問題点を把むことができた。



挿図30　抜歯人骨（ⅢC163号土壙墓）

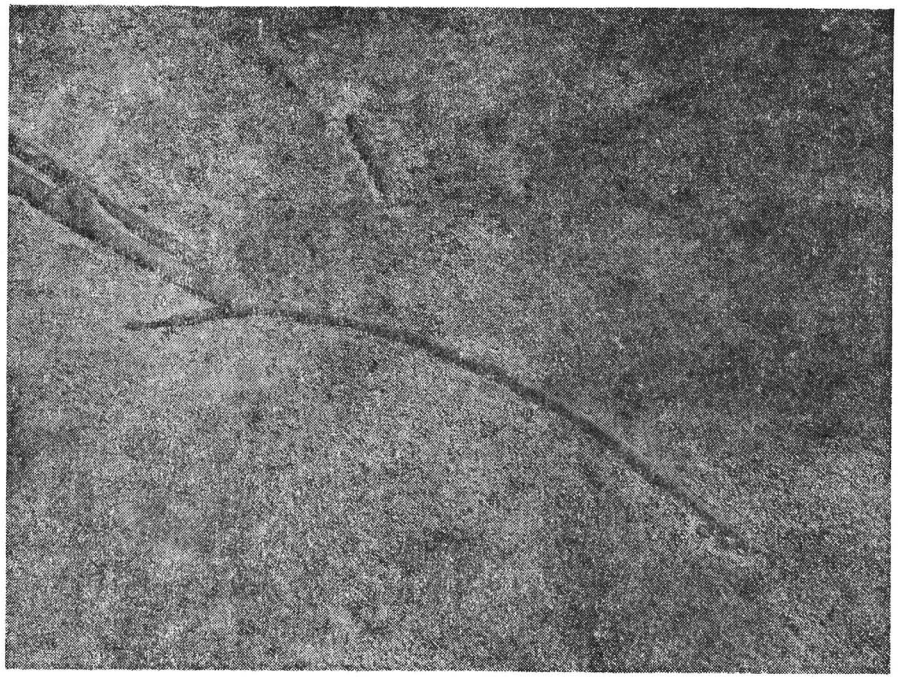
まず滋賀里遺跡の範囲については，南北を浅い谷で区切られた扇状地上に立地することが明らかになった。扇状地の幅は南北110m余りで，北限にセタシジミを主体とする小貝塚があり，南限に近く大規模な墓址が存在する。小貝塚と墓址との間に遺構の検出されないところがあったが，ここはもともと扇状地の最も高い部分に当っており，後世の削平によって遺構は消滅したものと思われる。もし集落址の所在を想定するなら，この扇状地の最高所である削平部が最もふさわしい位置であるように思う。今回の発掘調査では，遺跡の南北限を明らかにすることはできたが，東西については，わずかに幅10～15mの範囲を発掘したにすぎず，そのひろがりを明確にすることはできなかった。遺跡の東限については，昭和23年の調査における知見や地形の復原的観察の結果，扇状地の末端はほぼ発掘地点の東方30m辺りであり，遺跡の範囲がそれより東へ延びているとは考え難い。しかし，発掘地点より西方へのひろがりについては今後の調査をまつほかない。ただ，遺跡の中心は今回の調査地点よりもむしろその西方にあったと考えられ，西方一帯は後世の削平も少なく，遺構を検出し得る可能性は非常に大きい。発掘地点に西隣する旧江若鉄道敷を調査した際にも，広範囲にわたって縄文晩期の遺物包含層が存在したことは，滋賀里遺跡の西方へのひろがりをもの語る証左である。今後，今回調査した地点の西方一帯の地については，綿密な調査の実施と十分な遺跡の保存対策を行う必要があろう。

(2) 墓址と貝塚　滋賀里遺跡における墓址の発見は，今回の発掘調査における大きな成果の一つであった。土壙墓38例，甕棺27例以上を確認したが，墓址の北端部は後世の削平によってすでに消失した埋葬遺構もあったと思われる。また，東西限については，前述のように未確認のため，墓址の規模を明らかにすることはできなかったが，すくなくとも既発見数の数倍の埋葬からなるものであったと考えられる。

土壙墓中の人骨はほとんど屈葬であったが，他に遺体を固く紐で縛ったか或いは木棺の存在を想定させるような埋葬の一例，数体分の遺骨を集めて再埋葬した集骨の例など，特殊な埋葬例もあった。

甕棺中には人骨の遺存した例もあり，その中の一例は，甕棺内に一体分の嬰児または胎児の骨が検出され，遺体をそのまま甕棺に収納したことがわかる。しかし，成年または少年の頭骨や四肢骨のみを納めた例もあり，再葬の可能性が大きく，洗骨などの存在をも想定させる。

土壙基と甕棺とを問わず，副葬品とみられるものは全く発見されず，また，個々の埋葬についても規模，施設などの差異は認められなかった。なお，比較的残存状態の良好な



挿図31　弓（AW18）の出土状態

163，214号土壙墓については，土壙ごとこれを取りあげることに成功した。取上げにあたって，奈良国立文化財研究所沢田正昭技官の全面的指導を受けた。

墓址の内容についてはすでに第1章で詳述した通りであるが，滋賀里における縄文晩期の埋葬のあり方は決して単純ではない。今後，墓址の全域にわたる調査が実現すれば，単に葬法のバラエティをつかむだけでなく，個々の人骨の年令，性別とその所属年代を数的に問題にすることも可能であり，縄文晩期の葬制を明らかにする上で大きな役割を果すことは間違いない。

遺跡の北を限る谷の斜面に，90m² ほどの小貝塚があったが，この貝塚中から土器，石器のほかに各種の骨角器を検出した。この骨角器の発見は，後述の木器群の発見とともに，滋賀里人の生活文化相を明らかにする上で，重要な意味をもっている。遺跡の一部を発掘調査したにとどまったにも拘らず，このように各種の材質にわたる遺物を一遺跡で検出し得た例は，決して多くない。縄文晩期の生活文化全般を把える上で，有意義であった。

(3)　木器の発見　　遺跡の立地する扇状地の南北を限る浅い谷は，それが土砂に埋没した後も伏流水が絶えず，縄文晩期の多くの木器，漆器，植物遺体などを腐蝕させることな

く，今日まで遺存させた。

これまで，縄文時代の植物性遺物は青森県是川，岩手県沼津，埼玉県真福寺など，東日本の各遺跡から出土しており，最近では福井県鳥浜遺跡で縄文前期にさかのぼる木器類を検出し注目された。こうして縄文時代の木器に関する資料は漸増しつつあり，その評価も固定してきたが，従来の出土地域が東日本に偏していたこと，量的になお貧弱であることなどから，縄文時代における木器の生産・使用の実態や，縄文社会の生活全般に占める木器の比重については，まだ正当な評価を受けているとはいえないように思う。

滋賀里遺跡では，土壌条件にも恵まれ，今回の調査で多数の木器を検出したが，その中には石斧の柄，弓，矢柄？，櫂などの生産用具類，容器類，建築材などがあり，縄文木器の多様性をうかがうに十分であった。また，これらの完成品と共に，原材，未製品が大量に出土して，製作工程を復原することができたことは，大きな収獲であった。

容器類には，朱漆塗注口木器，同椀形木器など，漆塗りが目立つ。弓にも朱漆と黒漆とが併用されており，装飾品とみられる骨角器にも黒漆塗りの一例がある。なお，木器の製作技法について，奈良県唐古遺跡出土の高杯形木器や筒形木器を例として，弥生時代に横軸ロクロを使用したとする説が有力であるが，滋賀里出土の椀形木器が横軸ロクロを用いずに製作されたものとすれば，弥生時代の前記木器類を，必ずしも横軸ロクロの使用によるものと考えなくてもよいのではないか。むしろ，弥生時代の木工技術は，稲作農耕文化の一要素として渡来した新技術と考えるよりも，縄文以来の伝統技法の継承を強調すべきであろうと思う。そして，このように考えるとすれば，弥生時代の鉄製工具の評価にも影響があり，その点でも重要な問題を内包しているといえよう。

⑷　縄文晩期の評価　　滋賀里遺跡の出土資料を整理，検討する段階で，われわれは滋賀里出土の縄文晩期に属する土器を５型式に分類した。滋賀里Ⅰ～Ⅴの各型式と従来の編年における諸型式との対応関係は，第１章，１節，⑷項に述べた通りである。

土器の変遷については，従来の研究ですでに明らかにされている諸点を再確認したことも多々あったが，各型式の土器セットを明確にし得たこと，手法の特徴に関する知見を整理し得たこと，各型式に共伴する東北・北陸系土器について岩石学的検討の結果を得たことなど，若干の新知見を加えることができた。

西日本の縄文後・晩期については，はやくから弥生文化の成立との係りにおいて注目されてきた。この観点から土器に関する検討結果をみると，縄文後，晩期における画期点を，後期末の宮滝式と晩期後半の滋賀里Ⅳの段階の，二点に求めることができる。前者は，黒

色磨研の精製土器と粗製の条痕文土器のセットが確立し，土器以外の諸要素についても新しい様相が表われる時点であり，従来の研究で明らかにされている通りである。後者は，黒色磨研土器の量的減少，器形・文様・技法における従来の規制の後退に対応し，もっとも顕著な現象として突帯文の出現を挙げることができるが，この第2の画期は，はやく滋賀里Ⅱの段階にはじまり，滋賀里Ⅲを過渡期として滋賀里Ⅳ，Ⅴに到る。

滋賀里Ⅳ，Ⅴは，晩期後半の時期に，多少の地域差をもちながらも西日本一帯から東海の一部にまでひろがる土器の一環であり，弥生文化成立の基盤を明らかにする上で，特に注目される。ただ，今回の調査では滋賀里Ⅳ，Ⅴを層位的につかむことができなかったので，必ずしも他の遺物との共伴関係が明らかでなく，文化相全般について論ずることはできないが，この段階に有茎鏃が出現するという事実は注目されよう。そして，この傾向は西日本全体に共通するものと思われる。

最近，縄文農耕あるいは縄文稲作について新しい資料や見解がさかんに発表されているが，今回の調査では，滋賀里Ⅰ～Ⅴを通じて縄文農耕の存在に否定的な結果を得た。花粉分析の結果や石器，骨角器，木器などの生産用具の組成をみても，それは明らかである。ただし，前述の様に最も問題となる滋賀里Ⅳ，Ⅴの段階の資料が断片的であることは，縄文農耕の存否論に関しても，最終的には今後の調査を待つほかないといわざるを得ない。

われわれは，調査結果を整理・検討するに当って，稲作前夜としての縄文晩期の生活文化相を歴史的に把えることを目指した。しかし現実に提起できた問題は，およそ目標にはほど遠いものに終った感があるが，それは，まだ手をつけていない多くの資料の検討と，まだ試みていない方法による資料の検討結果をまって，再論する機会をもちたいと考えている。

弥生時代　今回の調査で検出した弥生時代の遺構は，ⅣB区の方形周溝墓群とⅠ区の溝跡のみであった。

方形周溝墓は弥生中期の各段階にわたるもので，検出した5基だけでも相当の時間的な幅をもっている。その所在地点からみても，5基の方形周溝墓は同一墓域内の一群のものであったことは明らかであり，その墓域は西方へ大きくひろがっているものと考えられる。墓址の存続期間についても，この地点の周辺で前期にさかのぼるものや後期に下るものが，今後発見される可能性は大きい。

すでに第2章で述べたように，今回その一部を検出したⅣB区の墓址と，南滋賀遺跡との関連を探り，さらにそれらの墓址とかかわる集落址の調査が実現すれば，単に湖西一帯

の弥生文化の研究に寄与するばかりでなく，弥生時代の集落論や墓制の研究を大きく前進させることになろう。ⅣB区の方形周溝墓群を含む湖西の弥生時代遺跡は，そうした研究に至便な条件を多々持っている。

検出し得た遺構は少なかったが，弥生時代の遺物はⅠ区からⅤ区まで，少量ながらほとんど各地点で出土している。

東西を湖と山地とで限られた当地の立地条件を考慮すれば，この南北に長く点々と発見される弥生時代遺物の散布状態は，なお多くの未発見遺跡が所在することを明示するものであり，今後の調査に期待するところ大である。

なお，弥生式土器に関する問題として，中期の甕形土器について第2章で詳述したような新知見を得たことは特筆される。また，Ⅰ区およびⅢ区で確実に弥生前期中段階にまでさかのぼる土器片が出土しており，近江における弥生文化の成立と伝播の問題を考えるための資料を加えることができた。このほか，11号，14号方形周溝墓より出土した土器群は，一括資料として，今後の編年的研究のための良好な資料となろう。

古墳時代　古墳時代に属する遺構としては，Ⅳ区とⅤ区とに住居址群，Ⅲ区からⅣ区

挿図32　6世紀後半の建築材出土状態（ⅣB区開析谷中の褐色粗砂層）

にかけて方形周溝墓群，Ⅱ区からⅤ区までの各地点に溝跡多数が検出された。

竪穴住居址群のうち，Ⅳ区の10戸はいずれも５世紀前半以前の時期に属し，そこに古墳時代前半期の一集落が存在したことを立証した。また，Ⅴ区ではⅤA区に１戸，ⅤD区に２戸の竪穴住居址が存在したが，いずれも６世紀後半代のものであった。ⅤA区からⅤD区までは約700mの距離があり，２つの集落があったものと考えられる。古墳時代の方形周溝墓は，弥生時代の方形周溝墓群の南端部に近接し，そこから南方へ３基が点在する。

上記の遺構群のほかに多数の溝跡を検出したが，その所属年代はほとんど６世紀末前後の時期に集中する。なお，６世紀末前後の遺物は，これらの遺構と関係なく，調査範囲の全域から出土しており，往時の盛況をしのぶに十分である。

さて，弥生時代に引きつづきこの地が人々の生活舞台として活況を呈していたことは，古墳時代全期間にわたる遺構・遺物の発見された事をみても明らかであるが，わけても，６世紀末前後の時期は一つの頂点であったと思われる。西方の山麓には，６世紀後半以後の大規模な群集墳が点在し，また，平野部には生活の痕跡を点々と残しているのである。

挿図33　溝の護岸用石材と建築材（７世紀前半，ⅤD区東半６号溝）

われわれは，６世紀末前後の遺跡・遺物のあり方にうかがわれるこの地の繁栄を，大津宮の造営に

つながる歴史的展開の前提と考える。その具体的内容についてはほとんど今後の調査をまつほかないが，この湖西の一角に大津宮が営まれることになる必然性は，その前段階における繁栄の歴史をぬきにして考えることはできない。今後，平野部における集落址の調査と，当地に点在する群集墳の調査とを統一的に把握する研究が必要であろう。

次に，今回の調査結果の中で個別に問題とすべき2，3について述べる。

まず，古墳時代の方形周溝墓に関して，同一地域の同一時期に古墳が存在するにも拘らず，依然として弥生時代以来の墓制の一つである方形周溝墓が営まれているという事実に注目する必要がある。湖西地域の場合，この両者の関係を明らかにする上での諸条件に恵まれている。最近，方形周溝墓の性格論が説かれはじめているが，当地のように恵まれた条件をもつ一定の地域内で，古墳や集落址との有機的関連を追究するような，具体的資料にもとずく実証的研究が，何よりもまず必要であろう。

次にⅢE区の谷で検出した一括土器について，われわれはこれを近江における土師器の最古型式とした。この一括土器中に，当地の製品とは思えない庄内式の甕形土器（C59，64，131，132）を含んでおり，この発見は古墳時代初頭の畿内と近江とを結ぶ環として，大きな意義をもつものと考える。

このほか，5世紀中葉から後半にかけて大阪・陶邑古窯址群で生産されたとみられる初期須恵器の一群が検出されたこと，6世紀後半以後に現れる近江タイプの土師器について新知見を得たことなど，古墳時代の土器に関する成果もすくなくなかった。

ⅢE区の谷では，5世紀後半代を中心とする遺物群の中に，子持勾玉，石製模造品，玉類，手捏ね土器など，祭祀品と目される遺物が含まれていた。これらの祭祀遺物は，比叡山の前山を対象とした神奈備信仰か，あるいは谷を流れる水に関する信仰にかかわるものか，いずれにしてもⅢE谷の至近点に祭祀の場があったことを想定させる。

なお，ⅢE，ⅣBの谷から，古墳時代各期にわたる多量の木器が出土したが，用途不明のものも多く，今後，他例を参考にして検討を継続したい。

飛鳥時代以降　今回の発掘調査における主要な課題の一つは，大津宮関係の遺跡を明らかにすることであった。

「日本書紀」によれば，大津宮の存続期間は667年から672年までの足かけ6年間で，壬申の乱の際，宮はことごとく焼失して，以後廃都と化したという。

この大津宮の所在については，これまでに多くの研究があり，大津市街地，同粟津，同旧滋賀村などにその位置を求めている。このうち，旧滋賀村地内に宮都を求める説が有力だ

が，内裏推定地についての見解は一致していない。

われわれの調査した湖西線敷設予定地は，ちょうど従来の大津宮推定地の中の旧滋賀村説にもとずく推定京域のどこかを，ほぼ南北に横切っている。したがってこの調査範囲内における大津宮時代の遺構や遺物は，長い間にわたる大津宮所在論にとって重大な意味をもつことは明らかである。

発掘調査の結果，大津宮時代と確定できる遺構は，ＶＤ区の大溝のみであったが，遺物についてはⅡＨ区の一括品をはじめ，少量ではあるが各地区にわたって検出することができた。

ＶＤ区大溝の所在地は，現大津市穴太の一角にあたる。大溝の所在地は，山側から琵琶湖の方向に張りだしたかなり広い扇状地上に当っており，附近の水田面よりもかなり高い。

大溝は幅４ｍ深さ1.2ｍで，ほぼ東西方向に走る。溝底は西から東へわずかに傾斜しており，溝内からは大津宮時代を中心とする相当量の遺物を検出した。溝内の遺物は精巧な陶硯，特殊な形態の丹塗土師器椀をはじめ，大津宮時代に比定できる須恵器，土師器の良好な一括資料であり，大溝の性格を考える上でも重要な発見であった。第４章でも述べたように，この大溝出土の土師器甕には，他地区の情況と異り，近江タイプと考えられる甕が認められず，畿内に一般的にみられる甕がその主体をなしている。この甕形土器のあり方は，前記の出土遺物相と共に，大溝が単なる集落址などに付随するものではなく，むしろ地域性を離れて中央との接触が強い官衙，寺院などにかかわる遺構であることを物語るものではないだろうか。

次に，ⅡＨ区の出土品であるが，ここは際川のすぐ南にあたっており，遺物の大半は各期にわたって西方の山側から押し流されて再堆積したものであった。

ⅡＨ区西方の山裾には，著名な南滋賀廃寺，弥生時代の南滋賀遺跡があり，ⅡＨ区の出土遺物も，弥生時代から奈良，平安時代までの各時代にわたっている。しかし，この中で最も注目されるのは墨書のある土師器盤蓋を含む大津宮時代前後の土器群である。ⅡＨ区に遺構そのものは存在しなかったが，この比較的まとまった資料は，大津宮にかかわる何らかの遺構が存在することを想定させるに十分である。

このⅡＨ区の土器群は，先述したＶＤ区大溝の出土品と共に，ほぼ大津宮時代に比定することができ，土器編年に基準を与えることになろう。この土器群の編年的位置については，飛鳥における宮跡，寺院址関係の土器との年代関係とも矛盾しない。

最近，大津宮推定地周辺における発掘調査が盛んに行なわれている。われわれの調査が

終了した後にも，大津宮関係の重要な発見は２，３にとどまらない。湖西線の開通にともなって，当地の開発が急激に進行することは目に見えているが，この重大な局面での発掘調査には，今後一層の系統性と組織的取組みが要求されよう。次々に実施されていく調査が，前回の調査成果を正しく踏まえることなく，個人的な経験のいたずらな積み重ねに終るなら，調査に注ぎ込んだ貴重な労力や費用は単なる浪費にすぎなくなろう。

われわれの今回の調査は，大津宮研究に関する成果としては微少なものかも知れない。しかし，遺構や遺物の検出以外に実施した旧地形の復原的研究や，大津宮前代に関する調査など，すくなくとも今後の研究に生かすことのできる幾つかの結果を得たことは，大きな収穫であったと信じている。

「大津京」関係文献目録

『近江輿地誌略』江戸時代
本田　幸「滋賀都址」(『史海』5）1891年
木村　一郎『大津皇宮御趾尊重保存資料』1901年
中田　憲信「弘文天皇御陵考」(『古蹟』3の4）1904年
伴　信友「長等の山風」(『伴信友全集』第4，国書刊行会）1907年
喜田　貞吉「上代帝都の所在に就いて」(『歴史地理』10—1）1907年）
喜田　貞吉「歴代帝都沿革図」(『歴史地理』10—1）1907年
星野　恒「上代歴朝遷都の理由」(『歴史地理』10—5）1907年
喜田　貞吉「大津京遷都考」(『歴史地理』15—1，2，近江号）1910年，1912年
吉田　東伍『大日本地名辞書』（富山房）1911年
喜田　貞吉「本邦都城の制」(『歴史地理』17—1，2，5，6，18—2，4，5，6）1911年
『大津市志』上 1911年
久米　邦武「志賀の都と湖水との関係」(『歴史地理』近江号）1912年
三浦　周行「歴史上より見たる近江」(『歴史地理』近江号）1912年
大西　源一「壬申乱地理考」(『歴史地理』21—3，4，6）1913年
喜田　貞吉『帝都』（日本学術普及会）1915年8月
喜田　貞吉「梵釈寺と其寺址参考地」(『歴史地理』27—4，5）1916年
喜田　貞吉「本邦古代の都市について」(『歴史地理』27—5）1916年
喜田　貞吉『帝都』1921年
太田　亮「近江」(『日本国誌資料叢書』磯部甲陽堂）1925年
牧野信之助『滋賀県史第2巻』1928年
浅海　正三「地中の皇都」(『歴史教育』4—4）1929年
肥後　和男「大津京趾の研究」(『滋賀県史蹟調査報告』第2冊，滋賀県保勝会）1929年
肥後　和男「大津京趾の研究補遺」(『滋賀県史蹟調査報告』第3冊，滋賀県保勝会）1931年
中川　泉三「近江の地理と交通」(『歴史地理』57—4）1931年
川上　多助「都についての考察」(『史学』11—1）1932年
肥後　和男「崇福寺に関する延暦僧録の記事」(『滋賀県史蹟調査報告』第5冊，滋賀県保勝会）1933年
田村　吉永「大津京址に関する一私見」(『大阪朝日新聞』滋賀版）1933年
国松　久弥「日本上古の都市」(『地理学』2—1）1934年
米倉　二郎「条里より見たる大津京」(『歴史と地理』34—1）1934年
佐竹　純耳「南滋賀出土方形瓦の文様について」(『史迹と美術』51）1935年

熊田　葦城「近江志賀宮址」(『日本史蹟大系』２) 1935年
『滋賀県史蹟名勝天然記念物概要』1936年
足立　　康「志賀寺の「内塔」に就て」(『史迹と美術』７—13) 1936年
田村　吉永「大津京考」(『大和志』４－８) 1937年
伊福部隆彦「日本帝都史考」(『都市問題』27—４) 1938年
国松　久弥「本邦都市形態の史的展望」(『都市問題』30—２) 1940年
足立　　康「大津京の位置について」(『建築史』２－５) 1940年
柴田　　実「大津京趾」上，下 (『滋賀県史蹟調査報告』第９,10冊) 1940年，1941年
肥後　和男「大津京」(『歴史教育』14—11) 1940年
足立　　康「大津京址の位置—南滋賀廃寺は宮趾にあらず」(『新風土記』２－１) 1941年
足立　　康「大津京趾評」(『建築史』３－２) 1941年
森口奈良吉「大津京における春日神社」(『大和志』８－４) 1941年
足立　　康「大津宮趾と勧学堂廃寺趾」(『史迹と美術』12—７) 1941年
石田　茂作「香様の起源とその発展」(『考古学雑誌』31—７,８) 1941年
大井重二郎『上代の帝都』(立命館出版部) 1944年
梅原　末治「近江滋賀里崇福寺の塔趾」上，下 (『宝雲』33,34) 1945年
福山　敏男「梵釈寺について」(『史迹と美術』16—１) 1946年
藪田嘉一郎「近江大津宮の位置」(『史迹と美術』16—３) 1946年
藪田嘉一郎「大津宮重論」(『史迹と美術』16—６) 1946年
梅原　末治「崇福寺問題とその経緯」(『史迹と美術』16—７) 1946年
田中　重久「崇福寺趾と梵釈寺趾に関する研究」(『史迹と美術』16—８) 1946年
石田　茂作「崇福寺の遺趾に就いて　附梵釈寺址」(『史迹と美術』17—１) 1947年
石田　茂作「崇福寺問題に就いて梅原博士の示教に答ふ」(『史迹と美術』17—３) 1947年
藪田嘉一郎「山前考(大津京余論)」(『史迹と美術』17—３) 1947年
石田　茂作「近江崇福寺址考証」(『仏教考古学の研究』１養徳社) 1948年
毛利　　久「舎利容器について」(『史迹と美術』200) 1950年
梅原　末治「大和法隆寺杏葉唐草文軒平瓦一類の復原」(『史迹と美術』203) 1950年
岩崎小弥太「天智天皇の立て給ひし常の典」(『日本学士院紀要』９－１) 1951年
石田　茂作「国宝紹介　崇福寺塔心礎納置品」(『ミュージアム』24) 1953年
青木　和夫「浄御原令と古代官僚制」(『古代学』３－２) 1954年
林　　陸朗「近江令と浄御原律令」(『国史学』63) 1954年
高橋　　崇「天智天皇と天武天皇」(『続日本紀研究』１－９) 1954年
滝川政次郎「保良京考」(『史学雑誌』64—４) 1955年
直木孝次郎「天智天皇と皇位継承法」(『人文研究』６－９) 1955年

坂本　太郎「天智紀の史料批判」(『日本学士院紀要』13—3）1955年
大井重二郎「都城の経営について」(『続日本紀研究』3—9）1956年
景山　春樹「大津京関係遺跡の出土品解説」(『近江古美術大観考古篇』第1輯，近江古美術大観刊行会）1960年
景山　春樹「大津京とその関係遺跡について」(『近江古美術大観考古篇第1輯，近江古美術大観刊行会）1960年
田中　　卓「天智天皇と近江令」(『神道史研究』8—6）1960年
山本　栄吾「近江神宮蔵の所謂蠔瓦について—その研究と私見—」(『神道史研究』8—6）1960年
吉井　良隆「天智天皇と近江国」(『神道史研究』8—6）1960年
樋口　清之「上代宮址伝説地の一研究」(『国学院雑誌』62—9）1961年
水野　正好「滋賀県大津市南滋賀町廃寺跡」(『日本考古学年報』昭和48年度）
杉山　信三「古代都城跡および宮殿建築」(『建築雑誌』907）1962年
堅田　　修「桓武天皇の梵釈寺について」(『古代文化』9—2）1962年
岸　　俊男「古代帝都概観」(『仏教芸術』51）1963年
田村　円澄「古代遷宮考」(『史淵』92）1964年
福山　敏男「近江大津京」(『岩波古典文学大系　日本書紀下』岩波書店）1965年
藤岡謙二郎『歴史的景観の美』（河原書店）1965年
西田　　弘『大津市南滋賀町畑尻調査報告』1966年
福山　敏男「大津の宮」(『滋賀県の自然と文化財』滋賀県文化財懇話会）1966年
藤岡謙二郎「大津京と付近の地割」(『滋賀県の自然と文化財』滋賀県文化財懇話会）1966年
滝川政次郎「大津紀行」(『史迹と美術』365,366,367,368。）1966年
滝川政次郎「大津京考」(『法制史論叢』第2冊，角川書店）1967年
滝川政次郎「大津京余論」(『法制史論叢』第4冊，角川書店）1667年
山田　弘道「御寿は長く天足したり——主として万葉地理の立場から——」(『国語と国文学』）1968年
西田　　弘「大津京雑考」(『民族文化』53,54,56,60）1968年
久尾　芳久「律令の編纂」(『日本古代法の研究』法律文化社）1969年

*　　*　　*

邨岡　良弼『日本地理誌料』
西田直二郎「崇福寺跡の発掘を見る」(『竜谷史壇』1）　1928年
福島　成行「天智天皇御陵伝説考」(『史学普及会雑誌』6）
足立　　康「人麿の歌と大津宮趾」(『月光』2—7）
福尾猛市郎「大津京条坊に関する一試見」
坂詰　秀一「宮殿跡研究の現状」(『歴史教育』10—3）

付　　篇

1　縄文式土器の岩石学的分析 ……清　水　芳　裕

2　玉・石器類の鉱物・岩石について ……石田志朗・井本伸広

3　滋賀里遺跡の花粉および植物遺体……那　須　孝　悌

4　滋賀里遺跡より出土した獣骨類について ……亀　井　節　夫

5　滋賀里遺跡出土の魚類遺存体 ……金　子　浩　昌

6　湖西線建設の際に出土した古代遺物の年代測定 …山田　治・富永信成

付　篇　1

縄文式土器の岩石学的分析

——滋賀里遺跡出土の北陸・東北系土器について——

清　水　芳　裕*

本遺跡出土の晩期縄文式土器の構成が，滋賀里式土器に加えて，少量ながら北陸地方にその分布圏をもつ型式の土器と亀ヶ岡式土器とからなっていることは従来から注目されてきている。この近畿地方中央部は，亀ヶ岡式土器の強い影響のもとに独自の地域圏を形成する中部地方以東とくらべ様相を異にして，少なくとも後期後半以降，全体的に西日本的文化圏に属する。この地域において亀ヶ岡式土器が散在的に認められるという事実は，単なる異質の型式土器が混在するという問題だけでなく，縄文時代晩期の近畿地方に現われる地域的特性を理解する上でも重要な意味を内包している。

以前から，この亀ヶ岡式土器は搬入品であるのか，あるいはそれぞれの発見地域で製作されたものか，という点についてはさまざまな解釈がなされてきたが，客観的事実を呈示するにいたらず，問題を残してきている。このことは北陸系土器に関しても同様である。

今回，この二種の型式の土器が本遺跡から出土する現象を具体的な形で捉える一手段として，滋賀里式土器をも含めて個々の土器の製作地を検討することになった。

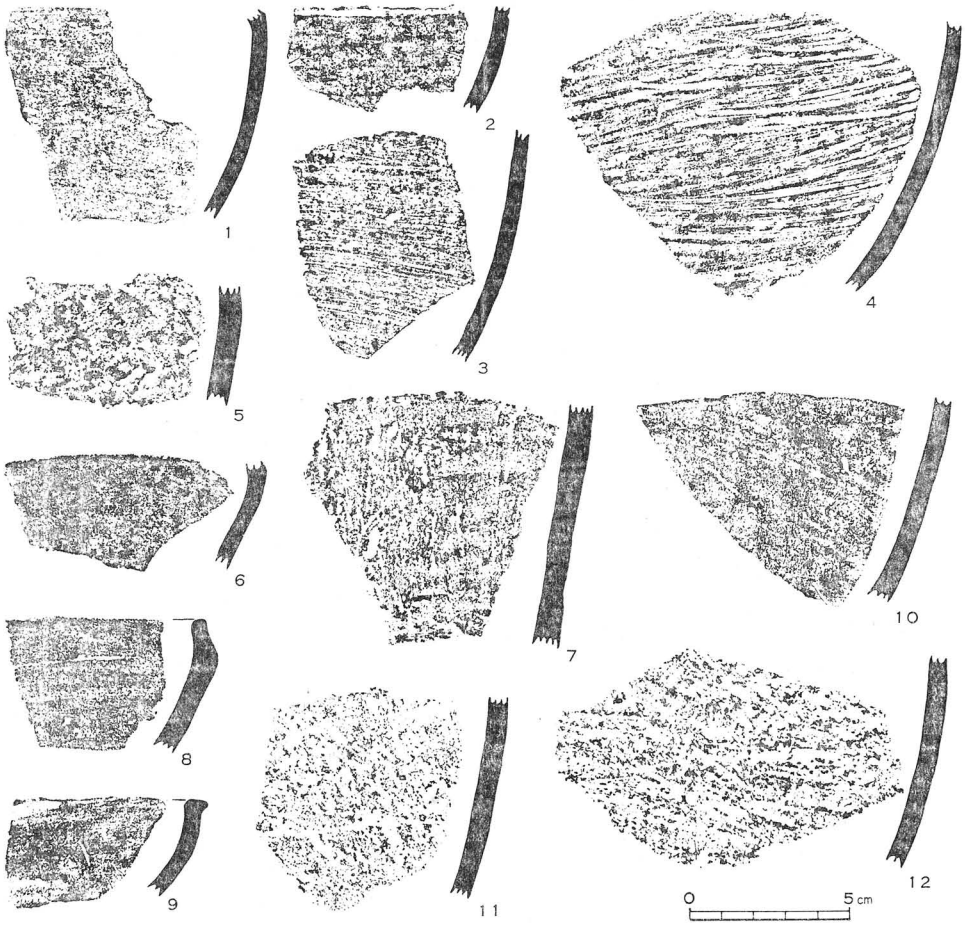
方法としては，土器の薄片をもとに含有する岩石鉱物を偏光顕微鏡によって鑑定し，その結果からいずれの地域の地質構造に基ずくものであるかを比較検討することにした。ただこの方法に限らず，理化学的試料処理に共通の問題であるが，試料とされる土器片は一個体中きわめて小部分であるという難点がある。したがってここでは，一試料の結果を可能な限り多数の薄片から導くよう努めるとともに，薄片中に存在する岩石鉱物を積極的事実として捉えることにした。今後，土器一個体中における岩石鉱物偏在の存否の問題が解決されれば，方法上さらに前進するであろう。

試　料

対象とした試料は（付図1・2，付表1）に示した北陸系土器12片，亀ヶ岡式土器25片と

* 東北大学大学院考古学専攻生

滋賀里式土器12片である。滋賀里式土器のうち，試料番号①～④は滋賀里Ⅱ，⑤～⑧は滋賀里Ⅲ，⑨～⑫は滋賀里Ⅳ～Ⅴとそれぞれ分類されているものである。



付図1　分析資料（滋賀里式土器）

土器中の岩石鉱物

各土器中の岩石鉱物は（付図3・4）に示したとおりである。分類上，単一結晶として存在するものを鉱物とし，個々の鉱物に分解せず複数の鉱物によって結晶をなすものを岩石として大別した。また，石英，カリ長石についてはその成因による形状の差異によってさらに細分した。

地 質 条 件

滋賀里遺跡を中心として，その周辺地域の地質構造について概観しておく。

遺跡は花崗岩からなる比叡山の山麓に形成された扇状地末端部に位置する。また，この地域を含めた琵琶湖周辺部は，かなり広い範囲にわたって形成されている粘板岩，砂岩を中心とする堆積岩類と花崗岩を主体とする。

琵琶湖北端から約50km以北の地域には，安山岩および火山噴出物の堆積からなる凝灰岩など，火山岩類に属する地質構造が広く現われる。この北陸地方の地質は，内陸部と海岸部地域の２つに大きく区分される。内陸部地域は第三紀深成岩を主体とし，部分的に飛騨変成岩がみられる。いっぽう，海岸部地域は，内陸部の地質が形成されたのち，新しい時期の火山活動に伴なう火山砕屑物によって形成されている。したがって，その中間地域には両地質構造が複雑に交錯する部分が存在する。こうした地質構造から明らかなように，現在の海岸部沖積地には両地質の構成物が混在している事がわかる。

土器製作地の検討

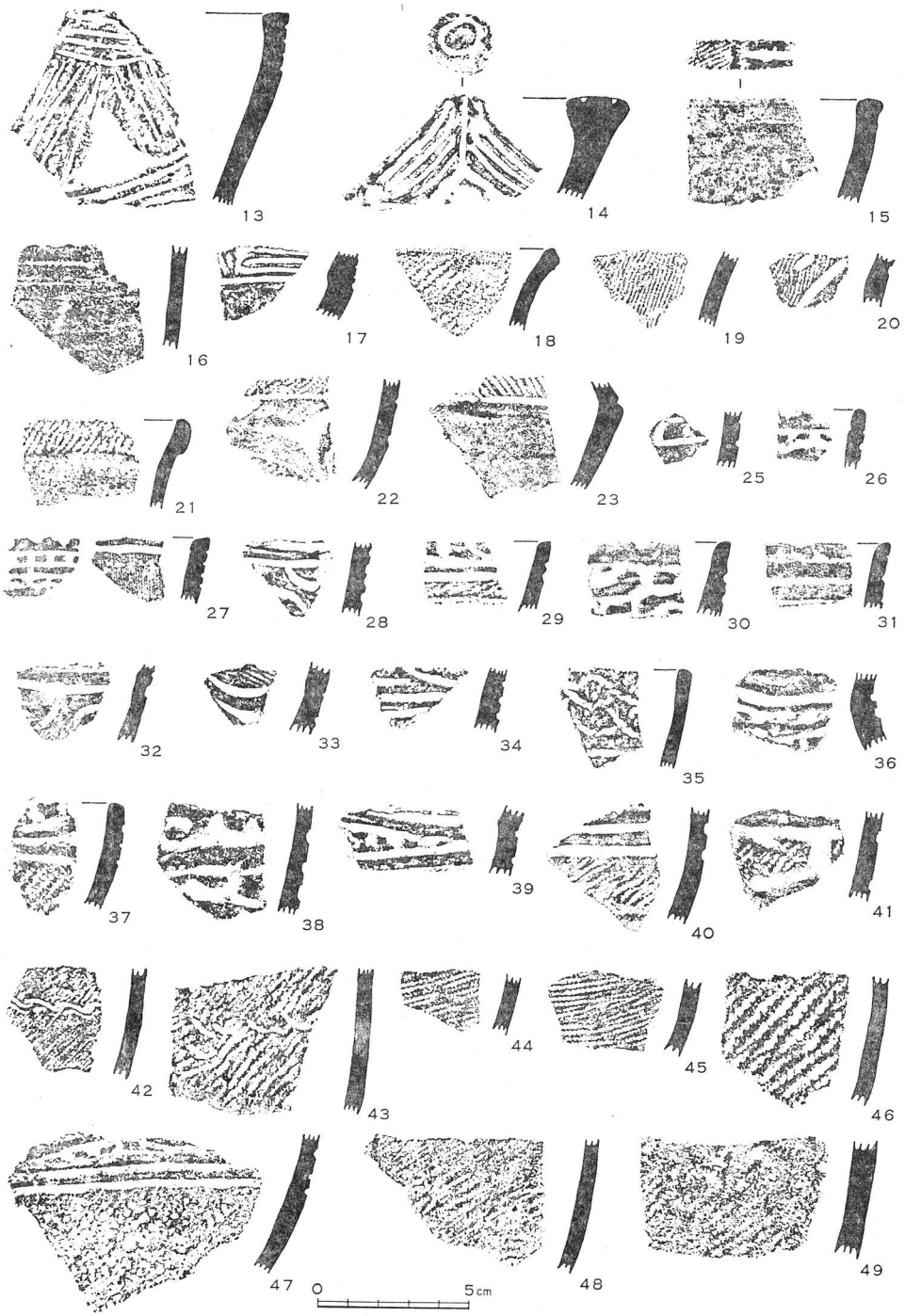
① 滋賀里式土器

各土器片とも，パーサイト構造のカリ長石，微斜長石，花崗岩という花崗岩質の地質構造に特徴的な岩石鉱物のいずれかを含有している。この構成は比叡山をはじめとする琵琶湖周辺部の花崗岩，および堆積岩類からなる地質条件と一致する。したがってその製作地を琵琶湖周辺部の沖積地に求めてよいと思われる。さらに，本遺跡が比叡山山麓の扇状地末端部に立地することから，この地を製作地とする想定を否定する材料は全くない。しかしまた，こうした小地域に限定する積極的根拠もないのでここではひろく琵琶湖周辺部の沖積地という結論に留めておきたい。

② 北陸系土器

（付表１）中の試料⑬～⑮，⑲～㉑，㉓，㉔は，融食形石英（付図３－３）と安山岩（付図４－10）のいずれかを含有している。この点で滋賀里式各土器にみられた岩石鉱物の構成とは明らかに異なる。融食形石英と安山岩は火山岩類に属するもので，琵琶湖周辺部の地質構造からは，導き出し得ないものである。本遺跡を中心として周辺地域に安山岩を含み得る地質構造を求めるならば，福井県北半部から石川県にいたる海岸部を中心とする地域と，大阪府，奈良県の境に位置する二上山一帯があげられる。しかし，この土器群が北陸地方にその型式分布圏をもつことから，その製作地を北陸地方に求めるのが妥当である。

さらに，この二種の火山岩類の岩石鉱物以外に，パーサイト構造のカリ長石（付図３－４）微斜長石（付図３－５），花崗岩（付図４－９）のいずれかを同時に含んでいる。こうした構成のあり方から，北陸地方の沖積地，もしくは火山岩質，花崗岩質の両地質構造が交錯す



付図 2　分析資料（北陸系土器13～24，亀ヶ岡系土器25～49）

る，やや内陸部にいたる地域の河川流域をその製作地とみなすことができる。

以上の事実は，これらの土器がその中心的な型式分布圏にあたる北陸地方で製作され，本遺跡へ搬入された事を証明するものである。

いっぽう，そのほかの⑯～⑱，㉒の試料中にはさきに挙げた融食形石英，安山岩も，それ以外の火山岩類に属する岩石鉱物も存在しない。したがって⑬～⑮，⑲～㉑，㉓，㉔の各試料の場合と同様の製作地とみることはできない。あるいは一個体中に岩石鉱物の偏在があり，薄片中に現われなかったことも考えられるが，ここでは不明としておく。

③　亀ヶ岡式土器

いずれの土器片にも北陸系土器にみられた火山岩質の岩石鉱物は全く存在しない。この結果から北陸地方での製作を想定することはできない。またいっぽう，多くの試料において，岩石鉱物の構成のあり方，堆積岩類の形状および多量性などの点で滋賀里式土器との共通点を見出すことができる。㉕，㉙～㉛，㉞，㊱，㊴，㊶～㊹，㊽，㊾の各土器がこれにあたる。この結果にしたがって判断するならば，その製作地は滋賀里式土器の場合と同様の地域と考えることができる。しかし，さらに明瞭な結果を得るために，今後上記の試料番号以外の土器片の結果とともに，中部地方を含めた周辺部地域の土器との比較などをとおして，より積極的根拠となるべき事実を捉える必要がある。

限られた試料から一定の問題に対して断定し得る結果を導き出すことは容易でない。ここで検討した結果も，一遺跡の試料のみからであるため，消極的な結論に終った面も多い。

しかし，今回の試みによって，滋賀里式土器はいずれも本遺跡を含めた琵琶湖周辺地域という範囲にその製作地を求めることができ，また北陸系土器の大半は明らかに北陸地方から本遺跡へ搬入されたものであるという事実が明らかになった。北陸系土器のこの現象は，北陸地方とこの近畿中央部の遺跡集団との間に直接的な交流が存在したことを示すものである。

＜参考文献＞

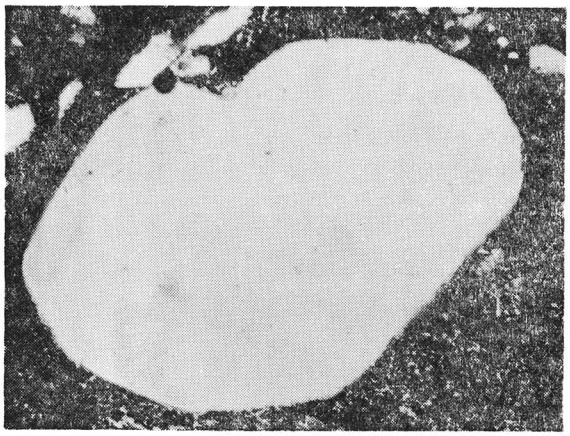
① 坪井清足「滋賀県大津市滋賀里遺跡」『日本考古学年報』1　1948年
② 地質図「金沢」「京都」（50万分の1）工業技術院地質調査所発行　1958年
③ 各県地質図「石川」「福井」「京都」「滋賀」「岐阜」「大阪」「奈良」（20万分の1）
④ 市川浩一郎，藤田至則，島津光夫編『日本列島地質構造発達史』築地書館　1971年

結果を導くにあたり，東北大学理学部・加藤祐三先生から御指導，御助言を仰いだ。記して感謝する。

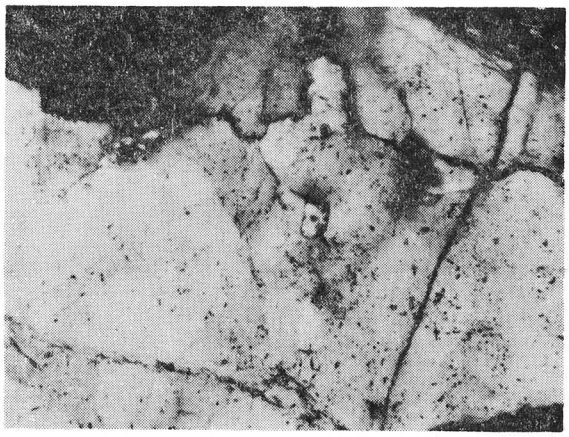
付表1. 土器中の岩石鉱物分類表

		鉱物																岩石							
		石英			カリ長石		斜長石	微斜長石	角閃石	輝石	黒雲母	白雲母	ジルコン	スフェン	緑簾石	不透明鉱物	火成岩				堆積岩		変成岩	
		一般形	波動消光	融食形	パーサイト構造												花崗岩	花崗閃緑岩	石英閃緑岩	安山岩	砂岩	泥岩	結晶片岩	接触変成岩
滋賀里式土器	1	◎	○		○	○	○	○	○		○		○		○		○				◎	○		○
	2	◎	○		○	○	○	○	◎		○										○			
	3	◎			○	○	○		◎	○	○						○					◎		
	4	◎	○		○	○	○		◎	○	○										○			
	5	◎	○		○	○	○				○						○					◎		
	6	◎	○		○	○	○	○	○		○				○		○				○	○		
	7	◎	○		◎	◎	○	○	○		○											○		
	8	◎	○		○	○	○				○											◎		
	9	◎	○		○	○	○				○				○		○					○		
	10	◎	○		○	○	○		○		○													
	11	◎	○		○	○					○						○				○			
	12	◎	○		○	○	○				○						○							
北陸系土器	13	◎			○		○				○									○				
	14	◎	○	○	○	○	○	○			○	○								○				
	15	◎	○	○	○	○	○	○		○	○		○	○	○		○			◎				
	16	◎	○				○	○			○													
	17	◎			○	○	◎	○	○	○	○	○			○		○		○			○		
	18	◎	○		○	○	○				○												○	
	19	◎			○		○	○	○		○						○			○	○			
	20	◎	○	○			○	○	○		○											○		
	21	◎	○				○		○											○				
	22	◎	○		○	○	○	○	○		○											○		
	23	◎					○		○	○	○													
	24	◎			○		○		○		○									○		○		
亀ヶ岡式土器	25	◎	○		○	○		○			○										○	○		
	26	◎			○	○	○		○		○											○		
	27	◎	○		○	○				○	○						○							
	28	◎	○		◎	◎	○				○													
	29	◎	○		○	○			○		○						○				○	◎		
	30	◎			◎	◎	○			○	○													
	31	◎	○		◎	○	○	○			○		○				○				○	○		
	32	◎	○		○	○					○										○	○		
	33	◎	○		◎	◎	○	○	○		○											○		
	34	◎	○		○												○				○			
	35	◎	○		○	○					○										○	◎		
	36	◎	○		○	○	○		○		○				○									
	37	◎	○		○	○	○	○	○		○						○					○	○	
	38	◎	○		◎	◎	○				○						○							
	39	◎			○	○	○	○	○		○										◎			
	40	◎	○		○	○	○				○						○					○		
	41	◎	○		○	○					○											◎		
	42	◎	○		○	○	○				○						○				○			
	43	◎	○		◎	◎	○				○											◎		
	44	◎	○		○	○	○		○		○		○		○						○	○		
	45	◎			○	○	○				○										○			
	46	◎	○		○	○	○	○	○		○						○				○	○		
	47	◎	○		○	○					○											○		
	48	◎	○		○	○	○	○			○											○		
	49	◎	○		◎	◎	○		○		○						○				○	○		

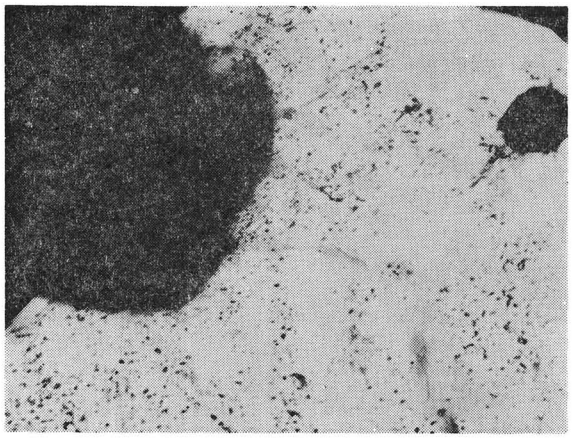
（○は薄片中に「ある」
◎は薄片中に「多量にある」）



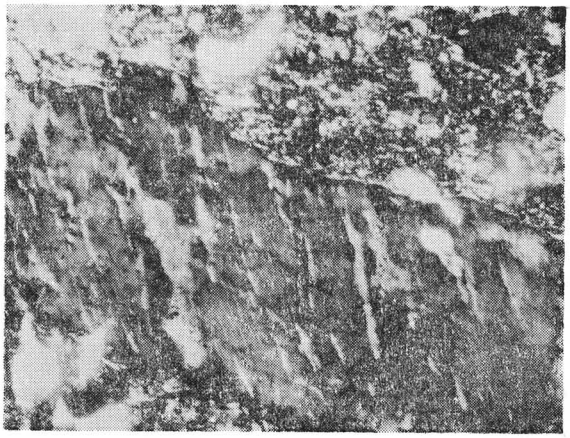
1



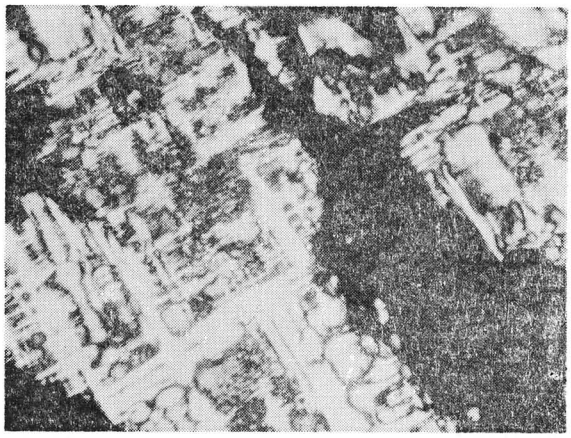
2



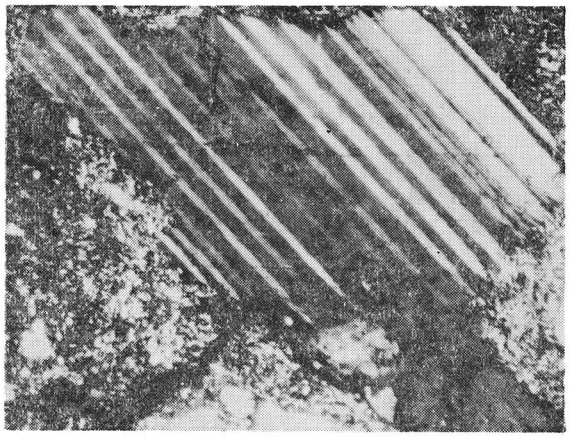
3



4



5

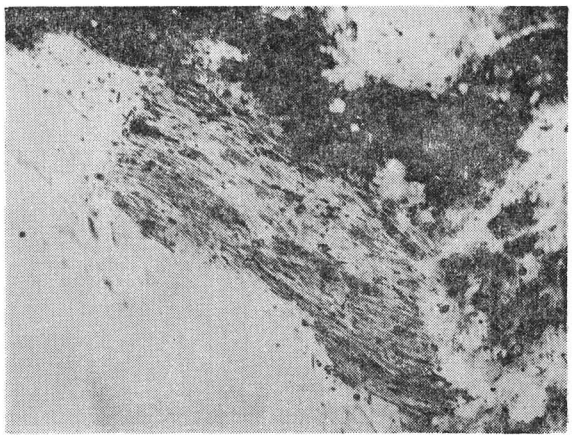


6

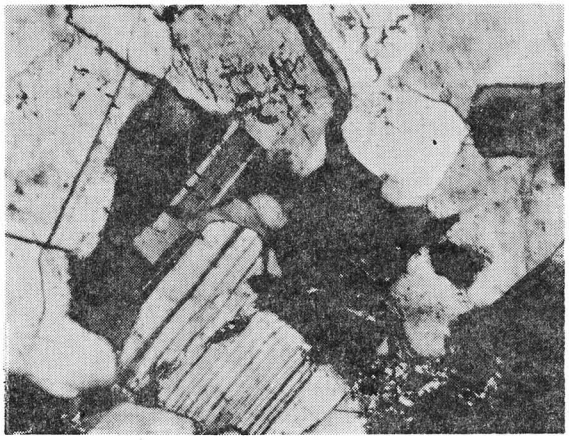
付図 3　土器薄片中の岩石鉱物（×100，直行ニコル）

1　一般形の石英（亀ケ岡式土器—27）
2　波動消光を示す石英（北陸系土器—20）
3　融食形石英（北陸系土器—20）
4　カリ長石のパーサイト構造（亀ケ岡式土器—28）
5　微斜長石（北陸系土器—14）
6　斜長石（亀ケ岡式土器—29）

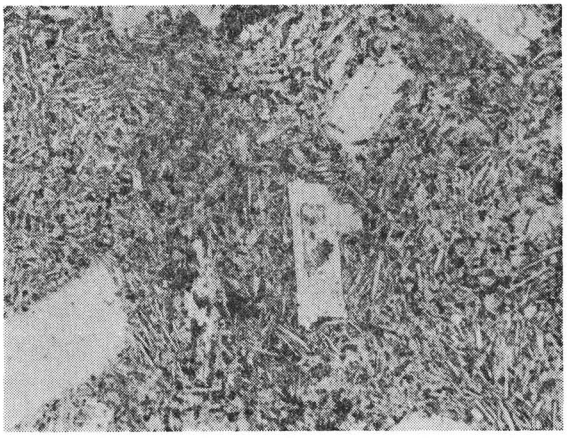
7



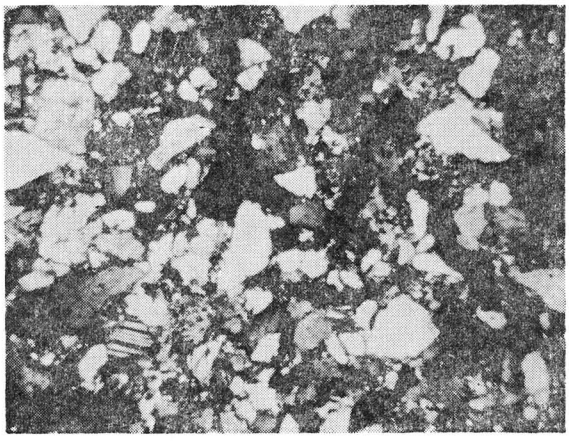
8



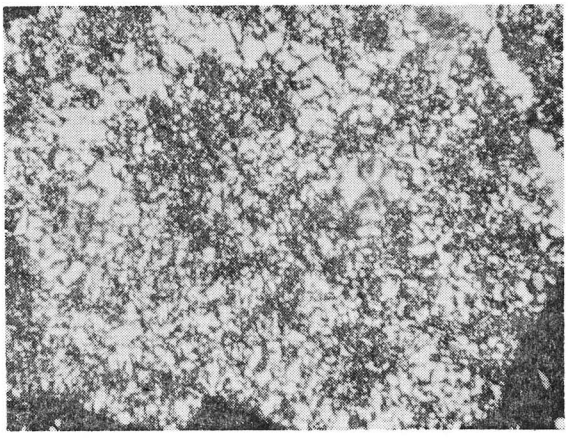
9



10



11



12

付図4　土器薄片中の岩石鉱物（×100　8.10平行ニコル，7・9・11・12直行ニコル）

7　黒雲母（亀ケ岡式土器—44）
8　白雲母（亀ケ岡式土器—44）
9　花崗岩（北陸系土器—17）
10　安山岩（北陸系土器—13）
11　砂岩（亀ケ岡式土器—30）
12　泥岩（亀ケ岡式土器—36）

付　篇　2

玉・石器類の鉱物・岩石について

石田志朗*・井本伸広**

滋賀里遺跡および各地区の各層準から産した鉱物・岩石名は考古学的記載にある。ここでは鉱物・岩石の鑑定の経過と，玉類ならびにサヌカイトといわれる岩石について簡単にのべる。層準や石器の種類と岩質とを考慮した考察は考古学的記載にゆずる。

岩石の肉眼鑑定は石田が行ない，一部について中山勇氏の教えをこうた。またサヌカイトについて阿部正宏氏に教えをうけた。玉類については，井本が実体顕微鏡およびX線回折法により鑑定し，一部益富寿之助氏と中山勇氏のご意見をうかがった。鑑定にご協力いただいたこれらの方々に厚くお礼申し上げます。

Ⅰ　玉　類

9試料の玉類の鑑定結果は付表1に示すとおりである。すなわち，試料番号01，08が碧玉，02がひすい，05，06，011が緑閃石を含む結晶片岩，07，09は蛇紋岩，010は珪質火山岩石基か珪質凝灰岩である。

益富寿之助氏によれば，碧玉（01，08）は島根県玉造が産地と考えられ，このような質のものは他の地域ではしられていないという。またひすい（02）は新潟県小滝産といいきれるものではないが，結晶度のよい点を考慮して一応小滝が産地として可能性があるという。中山勇氏は鳥取県若桜産のひすいにもこのようなものはあり，その他関東地方でもこの程度の質のものは産出が考えられるという。

試料05，06，011はX線回折図では白雲母しか検定されないが，肉眼鑑定であきらかに緑閃石（陽起石，actinolite），緑れん石類（epidote group），緑泥石類（chlorite group）からなり，片状構造をもつ。産地の可能性としては三波川帯の結晶片岩であるが，その他の変成帯でも可能性はある。

試料010は珪質火山岩石基または珪質凝灰岩と考えられるが，益富氏は玉造の碧玉の風化部の可能性があるといわれる。この点は十分検討する必要がある。

Ⅱ　石器類（滋賀里遺跡出土）

石器類は層準あるいは用途により，岩質が異なるようであるが，それらは考古学的記載

* 京都大学理学部地質学鉱物学教室　　** 京都教育大学

付表1　玉類鑑定結果　　井本伸広　　'73.3.12

試料番号	形態	X線回折図にあらわれた鉱物	材質	遺物番号
01	マガタマ（濃緑）	石英	碧玉（jasper），島根県玉造付近に産するものに酷似する	CS19
02	マガタマ（淡緑）	ひすい輝石，曹長石？不明線（明瞭）2本	ひすい輝石を含む曹長岩，新潟県小滝産のものに似る	CS18
05	偏平管状（緑）	白雲母	緑閃石を含む結晶片岩 緑閃石は粗粒のため回折線があらわれていないものと考えられる	AS216
06	管状（緑）半分に欠損	白雲母	〃	AS215
07	管状（長）（緑黒）	蛇紋石（antigorite）	蛇紋岩	CS15
08	管状（濃緑）	石英	01に同じ	CS17
09	管状（短）（緑黒）	蛇紋石（antigorite）	07に同じ	CS16
010	管状（淡緑）	石英，長石類？	珪質火山岩石基または珪質凝灰岩（顕微鏡下で黒雲母が認められる）	CS14
011	管状（緑）	白雲母	05，06に同じ	CS20

X線回折条件　Cu kα，Ni フィルター
30KV，10mA
Sc. Sp. 2°/min
Chatt Sp 20mm/min
Time Conet. 1 sec
Mult 200 C.P.S.
1°−1°−0.3

にゆずる。鑑定した岩質はかなりの種類があるが，多いのはいわゆるサヌカイトとよばれる岩石と粘板岩のホルンフェルスである。他に古生層の砂岩・粘板岩・チャート・輝緑凝灰岩（塩基性火山岩類）や花崗岩類，玢岩，輝緑岩，アプライト（半花崗岩），結晶片岩などがあり，また明らかに中生代末酸性火山岩類や新第三系の砂岩・安山岩・凝灰岩などもある。

古生層の岩石，とくにホルンフェルスや花崗岩は遺跡の近くで手に入るが，その他の岩石は他地域から持ちこまれたものである。中生代末火山岩類は湖東でしられ，湖西でも北部にその礫層はある。新生代の岩石は瀬戸内のものがあるが，裏日本のグリーンタフ地域のものも含まれている可能性がある。

結晶片岩は三波川帯と考えるのが妥当なところであり，とくに点紋帯の岩石はその北帯

にある。領家帯北縁の岩石といえるものもあるが，三波川帯の岩石と同様東西に長く延びる変成帯のものなので，その帯のどの地域であるかは限定できない。

肉眼鑑定で不明なものもいくつかあり，また鑑定したうちでも不確実なものがある。とくに古生層の輝緑凝灰岩のうちの玄武岩質熔岩については，異論がある。これらのうちのやや粗粒なものは，丹波帯の輝緑凝灰岩中には見掛けないもので，貫入岩体である輝緑岩あるいは斑励岩である可能性がある。またホルンフェルスと粘板岩の区別も一部に混同があるおそれがある。しかしこれは熱変質の程度の問題であり，わずかに熱変質をうけたものを〝熱変質をうけた粘板岩〟として分離した方がよかったと考えている。今回それらはホルンフェルスと粘板岩としたものの両方に含まれている可能性がある。

「サヌカイト」について

サヌカイト（讃岐岩，Sanukite）は Weinschenk (1891) の命名・記載した岩石で，香川県国府台白峰の頂部から採集したものである。黒色緻密で鉄槌でたたけば金属音を発する。岩石学的には，斜方輝石とくに古銅輝石の小針状結晶に富み，ハリ質石基を有する古銅輝石安山岩 (Bronzite Andesite) の熔岩である。斜長石の小針状結晶が方向性をもち，またラミナ構造をもつ。風化すると表面が白色となる。

白峰のサヌカイトはほぼ水平にある熔岩流であるが，この上・下の熔岩流はサヌカイトとよく似ているが，構成鉱物がやや異なるものである。これらを讃岐岩質安山岩 (Sanukitoid andesite)，讃岐岩質玄武岩 (Sanukitoid basalt) とよぶ。すなわち前者は普通輝石と単斜輝石をもつ両輝石安山岩であり，後者は橄攬石をもつ玄武岩である。

阿部正宏氏によれば，二上山のいわゆるサヌカイトといわれる岩石は讃岐岩質安山岩に含まれ，無斑晶安山岩とよぶべきもので，古銅輝石を多く含まないことでサヌカイトと区別できるという。

今回，発掘担当者がサヌカイトと思ったもののうち14個をえらんで岩石顕微鏡で観察した。うち９個はいわゆる〝サヌカイト〟であり，残り５個のうち３個は粘板岩のホルンフェルス，１個が粘板岩，１個が斑晶をもつ輝石安山岩であった。ホルンフェルスや粘板岩，斑晶をもつ安山岩などはよく洗えば，肉眼またはルーペによる観察で，〝サヌカイト〟と混同するおそれはないと考えられる。実体顕微鏡をつかい，十分拡大して表面を観察すればより確かである。

いわゆる〝サヌカイト〟がサヌカイトかサヌキトイド岩石かを区別することは簡単ではない。今のところ薄片をつくり，岩石顕微鏡下で小針状の斜方輝石が古銅輝石か紫蘇輝石

かを，その屈折率または光軸角の違いにより判定している。今回はその作業を行なっていないので，斜方輝石による同定はできなかったが，X線回折法によりサヌカイトとの違いがあらわれた。

模式地のサヌカイト3試料と前記のいわゆる〝サヌカイト〟9個のうち3試料とのX線回折図は，いずれも斜長石のピークがあらわれた。しかし両者でその斜長石が明らかに異なり，また各々3個の中では違いが殆んど認められない。この違いを鉱物・岩石学的に検討しなければならないが，現段階ではこの遺跡の〝サヌカイト〟は模式地のサヌカイトでない可能性が大きい。

将来，四国あるいは二上山などのサヌカイトとサヌキトイド岩石を，野外・室内で十分研究すれば，X線回折その他の方法で試料をこわさずに識別することができ石器の産地をかなり限定して推定できるようになる可能性があると考えられる。

ⅢD—2yw42　黒色砂混泥土層

1.　ホルンフェルス

2,3,4,5.　サヌキトイド安山岩

ⅢD—2yo42　黒色砂混泥土層

6,8,12,13,14.　サヌキトイド安山岩

7.　普通輝石安山岩

9,11.　ホルンフェルス

10.　粘板岩

（1～11はフレーク，12～14は石鏃）

ⅢD—2yw42—2 と ⅢD—2yo42—12，—14とをX線回折法によりしらべた。

文　　献

Koto, B. (1916)　On the Volcanoes of Japan V Jour. Geol. Soc. Tokyo vol. 23, pp. 95—127

久野　久（1935）「讃岐国国府台付近における熔岩の噴出順序について」地質雑42巻，505号，653—655頁。

松本　隆（1950）「瀬戸内系火山岩における混生現象」地質雑56巻，663号，529—535頁。

森本良平他（1953）「二上山の地質」地球科学　11号，1—12頁。

Weinschenk, E. (1891)　Beitrage zur Petrographie Japans　Neues Jahrb. Min., Petro., Paleont., B-Bd. Ⅶ. S. 133—151。

付　篇　3

滋賀里遺跡の花粉および植物遺体

那　須　孝　悌*

Ⅰ　試料および処理方法

試料は滋賀里遺跡発掘現場内の4地点（ⅢC—2xu—39，ⅢC—2xu—43，ⅢC—2xy—31・25，ⅢD—2xs—42・30）から採取した縄文時代晩期のもの9個と，それより新しい時代のもの5個，およびⅢD—2xs—46・50地点より採取した縄文時代後期のもの2個を扱った。試料採取日は1972年5月17・18日である。

トレンチの側壁から採取した試料は，塊状のまま持ち帰り，植物遺体については，5％のNaOH水溶液に一昼夜浸し，さらにHClで中和したのち，水にとかして，タイラー標準篩で115メッシュ（0.125mm）以上の大きさの遺体はすべて捕集した。

花粉分析は，現生花粉の混入をさけるよう試料の表面を削り取ったのち，10％KOH（室温24時間）→水洗→$ZnCl_2$（800～1000rpm，60分）→水洗→HF（室温24時間）→水洗→封入（グリセリンゼリー）の順に行ない，400～1000倍の鏡下で木本花粉250個以上を同定した。

Ⅱ　植物遺体

今までに同定できた遺体の種類およびその相対的な産出量は付表1にまとめて示した。縄文時代晩期の遺物包含層には，アラカシ，トチノキ，ヒシがきわめて多く，イヌザンショウ，ノブドウ，エゴノキ，オニグルミ，クリ，アカメガシワなども多い。

これらのうち食用に供したためと思われる破壊の跡がみられるものは，ヒシ，クリおよびオニグルミのみであり，そのうち，ヒシとクリは焼いたあとがある。多量に産出するアラカシのドングリとトチノキの実は，つぶれたような破片も多いが，完形のものも多いため，食用に供したかどうかはわからない。

ヒシの実は非常に多いが，すべて細かく砕かれており，全体の形を復元することは困難であるが，前川文夫氏が千葉県加茂遺跡から報告記載したアズマビシ（*Trapa matsumotoi* F. Maekawa）（前川，1952）とは異なり，シリブトビシ（*T. macropoda* Miki）にきわめて

＊大阪市立自然科学博物館（1973年4月より大阪市立自然史博物館）

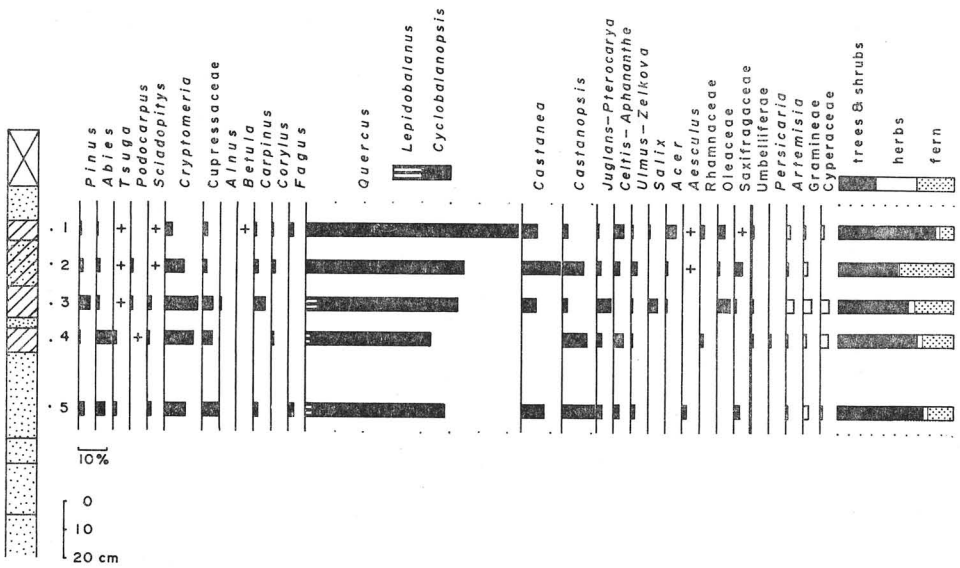
近い形態を示す。ただし，洪積世の化石や兵庫県昆陽池に現生するシリブトビシにくらべると果皮がきわめて厚い。焼けこげた跡と割れ口のようすから考えると，適度に焼いたのち果皮を割って子葉部分を取り出したものと思われる。

縄文時代後期の遺物包含層から産出する植物遺体は，縄文時代晩期の遺体群集と基本的には同じであるが，ヒロハノエビモやスゲ属など，水中または水辺の植物の種子が多い。

Ⅲ　花粉分析結果

扱った試料の花粉群集（一部は付図1に示した）は，いずれも常緑のアカガシ亜属，シイノキ属およびクリ属，スギによって優占され，モミ属やエノキ—ムクノキ属，ヒノキ科も多い。しかし，マツ属やコナラ亜属，草本花粉がきわめて少い。このような花粉構成は，滋賀里周辺や後背地の北白川花崗岩山地における現在の植生が成立する以前の植生，いいかえれば，人間による植生破壊が進行する以前の植生を反映したものと思われる。その点では焼畑農耕の存在は，すくなくとも滋賀里遺跡周辺については肯定しがたい。また，焼畑農耕の対象となったといわれる植物の花粉も検出できなかった。

遺体の多産するトチノキ属の花粉がきわめて少いのは，もともとトチノキの花粉生産量が少いためであり，トチノキが沢沿いの地域に生育していたため遺体が集積しやすかった



付図　1ⅢC-2xy-31.25地点の花粉ダイアグラム

木本（灌木を含む）花粉の百分率は木本花粉のみを基数とし，草本花粉の百分率は花粉総数（木本および草本花粉）を基数として示してある。

ためと思われる。

縄文時代晩期遺物包含層のイネ科花粉は，花粉全体の３％未満であり，粒径の最頻値は31～32μである。しかし，なかには粒径40μ以上53μまでの大きさのものが，イネ科花粉の25％まで含まれている。現在のイネ（*Oryza sativa*）の花粉は，①粒径40～52μ（つぶれると53～57μに達する；尚 NAKAMURA（1969）によると粒径のもっと小さなものもあるという）②孔の内径1.2～3μ ③孔縁隆起が著しく，隆起の外縁線は明瞭である。④孔縁隆起の外径5.4～7.3μ ⑤花粉膜は厚く，光学的には２層に分れ，内層も厚い。⑥孔縁隆起は花粉膜外層の肥厚によるだけではなく，どうじに内層の肥厚によっても表現されるが，内層は花粉粒の内側方向に肥厚する。ただし，内層の肥厚部は周囲と漸移的であるため外縁線はやや不明瞭で，その外径も外層の隆起外径よりやや小さい。⑦花粉膜の表面はほとんど平滑か，もしくは細かな点状紋がある。しかし不定形の波状隆起紋や低い丘状隆起紋は無い，という特徴がある。しかし，滋賀里遺跡の縄文時代の遺物包含層から産出するイネ科花粉は，個々の花粉粒によって特徴に差はあるが，上記の諸特徴にくらべると３ないし４点の明瞭な相違がみられるため，イネ（*Oryza sativa*）の花粉は存在しないと判断した。

Ⅳ おわりに

滋賀里遺跡の植物遺体および花粉を扱うにあたり，京都大学の加藤修氏には発掘現場での試料採取地点の指示をしていただき，また京都女子大学の田中伸子さんには試料の処理およびデータ整理を手伝っていただいた。また京都大学の石田志朗氏，東山高校の池田碩氏には数々の御便宜をはかっていただいた。報文を終るにあたって深く感謝する次第である。

文　献

前川文夫（1952）「加茂遺跡から出た小形の植物性遺物について」：『加茂遺跡』，p. 125—130。

NAKAMURA, J.（1969）Palynological Eridence for Recent Destruction of Natural Vegetation II: Ishizuchi-ike: Annual Rep. JIBP-CT(P), Fis. Y. 1969, p. 102—107.

	Part of remain	ⅢC-2*xy*					ⅢC-2*xu*				ⅢD-2*xs*			
		1	2	3	4*	5*	1	2	3*	4*	3*	4*	5**	6**
Abies firma Sieb. et Zucc. モミ	Cs, L					R					R	C		
Juglans ailanthifolia Carr. オニグルミ	N								C	R	R	R		
Carpinus sp. クマシデ属	F													C
Quercus glauca Thunb. アラカシ	F, L, If					C	R		A	vA	C	C		C
Q. cf. *myrsinaefolia* Blume シラカシ	F, L												R	
Castanea crenata Sieb. et Zucc. クリ	N					R			R	C		vR		
Aphananthe aspera (Thunb.) Planch. ムクノキ	S	R										R		vR
Zanthoxylum schinifolium Sieb. et Zucc. イヌザンショウ	S	R				C	C		C	C	R	C	R	A
Phellodendron amurense Rupr. キハダ	S			R				R		R				R
Mallotus japonicus (Thunb.) Muell. Arg. アカメガシワ	S			R	C	A	vR	**v**R	R				vR	C
Acer sp. カエデ属	F					R	R	vR						R
Aesculus turbinata Blume トチノキ	N					R			vA	A	C	A		vR
Ampelopsis brevipedunculata (Maxim.) Trautv. ノブドウ	S	C				C		**v**R	R	C				vA
Trapa macropoda Miki シリブトビシ	F								C	A	R	A		
Cornus controversa Hemsley ミズキ	S					R		R		R				C
C. brachypoda C. A. Mey. クマノミズキ	S	VR				R								R
Styrax japonica Sieb. et Zucc. エゴノキ	S	C			R	vA	vA	C		vR			C	C
Hippuris ? スギナモ属	S	R	C				R							R
Umbelliferae セリ科	S								R					
Polygonaceae タデ科	S						C		R					
Potamogeton cf. *perfoliatus* Linn. ヒロハノエビモ	S												C	A
Gramineae イネ科	R			C										
Scirpus sp.ホタルイ属	S													vR
Carex sp. スゲ属	S						R							vA
Musci 蘚類	G					C	R	R	vR	vR			R	R

付表 1　滋賀里遺跡出土の植物遺体

Cs：毬果鱗片，L：葉，N：堅果，F：果実，If：雄花序，S：種子，R：地下茎，G：茎葉体.
vA：極多，A：多，C：普通，R：稀，vR：極稀.

付　篇　4

滋賀里遺跡より出土した獣骨類について（図版57，58）

亀　井　節　夫*

滋賀里遺跡の発掘により出土した骨類は多様なものである。そのほとんどは骨片であり，人為加工の骨器・角器も多数存在する。これらから，当時，その地域に生息し，狩猟・加工・食糧の対象となった獣類について概観することとする。

まず，もっとも量的にも，また，個体数においても多いものは，イノシシとシカであり，これらにスッポン，サカナが次ぎ，さらにトリ，ウサギ，アナグマ，タヌキ，カエルがあり，まれにクマ，サル，オオカミ（？）が混在している。この傾向は黒色砂混泥土層においても灰褐色泥土層においても，同様に認められるが，とくに前者が量的にも種類においても勝っている。

イノシシは，ニホンイノシシ *Sus scrofa leucomystax* Temminck であり，頭蓋部，下顎，脊椎骨，牙，臼歯などで代表され，四肢骨は，末端骨を除いて骨片化し，関節部付近のみ残存している。これらのものの大きさから判断して，現生のものよりやや大型であり，成獣，老獣，幼獣が含まれる（図版58—10～13）。

シカはニホンシカ *Cervus nippon* Temminck であり，イノシシと同様に，頭蓋，下顎，脊椎骨，臼歯などで代表される。四肢骨，肋骨はいずれも骨片化している。角も，一個の完全なものを除いて，細片化して人為加工はあきらかである（図版58—1～7・9）。

イノシシ，シカともに，その長骨はあきらかに人工的に割られたものであろう。また，スッポン *Amyda japonica*（Temminek et Schleger）（図版57—16）やトリ（おそらくキジなど）（図版57—13・14）の骨とともに加熱されたものがあり，食用に供せられたものであろう。これらの産状は密集状態であり，各骨が同一個体に属するものもあり，おそらく一頭分をまとめてその場で処理したものであろう。

このほか，ノウサギ *Lepus brachyurus* Temminck の骨もかなり普遍的に見られる。（図版57—18）また，食肉類も数種類が認められる。タヌキ *Nyctereutes Procyonoides* Gray，アナグマ *Meles meles anakuma* Temminck，イタチ *Mustela sibirica* Pallas

* 京都大学理学部地質学鉱物学教室

が含まれるようである（図版57—12・17・19)。これらは主として歯や下顎，長骨の一部で代表されているが，長骨は骨片化することなく，そのままのものがある。

食肉類として，ニホンツキノワグマ *Selenarctos thibetanus japonicus* Schlegel が見られる（図版58—8)。牙玉としても，この上顎犬歯が用いられているが，頭骨や四肢骨の一部も見られることから，遺跡の周辺で生息していたものであろう。また，オオカミ *Canis lupus* Linnaeus のものと思われる臼歯2個と上腕骨1個が出土している（図版57—11)。このものがニホンオオカミあるいはエゾオオカミの何れに属するかは興味があるが，臼歯の形状からみて，かなり大型のものであったことが予想される。

なお，齧歯類，食虫類と思われるものの骨片も認められた。前者にはムササビ *Petanrista leucogenys* Temminnck と思われるものが含まれるほか，ヤチネズミの骨片らしいものも認められた。霊長類として，ヒトの歯（ムシ歯のものも一個あり）や骨片のほか，ニホンザル *Macaca fuscata* Blyth の切歯と臼歯が得られている（図版57—9・10)。

以上のように，滋賀里遺跡出土の獣骨類から判断される獣類の種類はきわめて多種類である。多くは骨片化して，概観の段階では同定できないものも多数あるので，その種類は更に増加する可能性がある。また，資料が豊富であるので，イノシシ，シカについてはその群構成，たとえば年令，性別に関する量比などを求めることもできよう。

骨の同定に関して，樽野博幸，田中正昭の両氏に協力を得た。ここに記して謝意を表する。

付　篇　5

滋賀里遺跡出土の魚類遺存体

金　子　浩　昌*

Ⅰ．魚類遺存体の種類

脊椎動物　*VERTEBRATA*

硬骨魚綱　*OSTEICHTHYES*

真口亜綱　*TELEOSTOMI*

1．サケ科の一種？　*Salmonidae gen. et sp. indet.*

2．ウグイ　*Tsiboloidon hakonensis*

3．コ　イ　*Cyprinus carpio*

4．フ　ナ　*Carassius carassius*

5．ナマズ　*Parasilurus sp.*

6．ギギ科の一種　*Bagridae gen. et sp. indet.*

7．スズキ　*Lateolabrax japonicus*

Ⅱ．魚類遺存体の概要

上記の魚種は，ⅢD—2yv41 (1×1) 灰褐色泥土 (−20cm) よりブロックサンプリングした砂土中より検出された骨を査定したものである。全標本は13cm径シャーレに3個分位の量であり，その大部分は，コイ，フナなどの顎骨，鰓蓋骨などの頭部諸骨，それに肋骨，椎骨であった。しかし，折れて破片になっている標本が多く，そのすべてが同定されたわけではないが，ほぼ種類の上では，上記したものが，遺存骨の大部分であったと思うのである。次にのべる各種魚骨の数量的な面は，このようなわけで，標本のすべてではないことをあらかじめお断りしておかねばならない。

下記のうち，数字は標本の数，計測値は特に記してない限りmmである

1．サケ科の一種

椎骨4

椎体横径 3.4〜4.2，椎体長 2.7〜3.0

* 早稲田大学考古学研究室

採集されたのはいずれも小さいものばかりである。

2. ウグイ

咽頭歯　右2，左1，他に咽頭歯破片1，

鰓蓋骨　右2，左2

標本は完全なものはない。大小の個体が含まれ，大きいので体長30cm弱に達する。

3. コ　イ

歯　骨　右3，左2

咽頭歯　右3，左6

鰓蓋骨　右3＋(1)，左3＋(2)　　（ ）中は破片

フナとともに魚骨の主体をなす種類である。鰓蓋骨は一個の完存標本を除いて他はすべて破損。咽頭歯の保存がよい。咽頭歯でみる限り9個体分（咽頭歯の左右はいずれも異個体である）であり，鰓蓋骨標本も大きさの点ではこれとほぼ一致するものである。咽頭歯の中で，体（全）長が*70cmに達する大きさの咽頭歯1個，35～45cm位の体（全）長をもつのが7個，30cm弱のもの1個であった。

4. フ　ナ

歯　骨　右8，　　左7

咽頭歯　破片のみ4

鰓蓋骨　右11＋(4)　左7＋(3)　　（ ）中は破片

おそらく本遺跡で最も多くの遺骸をのこしていた種類であろう。歯骨と鰓蓋骨が多いのに対して，咽頭歯の少ないのは，フナの咽頭歯がコイのに比べて極めて脆弱であるからである。**出土した標本から複原される個体の体長は，鰓蓋骨からみて標準体長（阿部宗明：原色魚類検索図鑑，北隆館，昭和38年3月）17cm位の大きさのものが最も小さいが，その大きさの鰓蓋骨は僅か2個のみで，他は体長20～25cm位のが7個，他は30～40cm位になる3個体のものであったと考えられる。この他にコイ，フナ類の小椎骨があり，それらは10cmに満たぬ小さな個体のものであった。そのような小椎骨の数はあまり多くないので，漁獲の主

---

* 加福竹一郎：貝塚から出土したコイの咽頭歯，「採集と飼育」Vol. 19, No. 10。昭和32年10月
コイの計測値は主としてこの報文による。

** コイ・フナの遺存骨には，上述したものの他に，大形の基底後頭骨5個と，大小の椎骨がある。椎骨中にはコイ・フナの他の種類も含まれるので，なお精査に時間を要するのでここでは詳しくはふれない。大きさによるおおよその数量は，椎骨長5.5～6.5前後のもの216個，3.5～4.5前後のもの162個，それよりさらに小さく椎体長2.0前後までのもの約100個があった。

対象とはされなかったようである。

5. ナマズ類

歯　　骨　右1
関節骨　　左1
鎖　　骨　右4　左2
前顎骨　(2)
第1胸鰭　右3　左2

標本はフナ，コイに次いで多い。標本のいずれも大形のもので，特にひときわ大きい1個の鎖骨は体長が70cm位に達するかも知れず，他の4個も40cmにはなる個体のものであったろう。関節骨もおそらくこの最大級の個体に属するものであろう。

6. ギギ科の一種

鰓蓋骨　右1
鎖　骨　右1　左1
胸　鰭　右2　左3

出土量は少ない。体長22～23cm位の大きさになる個体のものである。

7. スズキ

椎骨　2＋(2)　　（ ）は破片

椎骨の大形のは椎体横径15.3，同長10.7，小形のので椎体横径8.6，同長7.0である。大形の椎骨は充分に成育したスズキのであり，小形のはフッコとよばれる体長30cm位の若い個体のものである。

Ⅲ. 滋賀里遺跡で知られた魚類相の特徴

滋賀里遺跡で知られた魚類の遺存体はすべて淡水産種であって，純粋の海魚とされるものは含んでいなかった。そのいずれもが琵琶湖水系において捕獲されたものと思われる。琵琶湖岸遺跡として知られるものには，早くに発掘調査された大津市石山貝塚があり，ここでは縄文早期の貝層中より，滋賀里遺跡と同じコイ，フナ，ナマズ，ギギ類の遺骸が検出されている。いずれ機会をあらためて，石山貝塚の出土標本とも詳しく比較してみたいと思っているが，おそらくかなり共通した様相がみられるのではないかと思っている。なお，石山貝塚では，エイ類の尾棘が出土しているが，これなどは意図的に運ばれたものな

のであったろう。尾棘のみ運ばれたのか，魚体ごとであったのかは，出土する魚骨を今少し調べてみなければならないことであろう。

ところで，わが国では河口あるいは内湾の奥にヤマトシジミを主体とする汽水系貝塚が形成され，コイ，スズキなどの魚骨を出土する貝塚例は関東以西の処々で知られるが，純淡水系貝塚は極めて少ない。その一つは，東北地方宮城県北部から岩手県最南部の北上川中流域，つまり仙台平野北部の伊豆沼，長沼という湖沼水域の周辺に分布する淡水貝塚群である。筆者らは，そのうちの一つ岩手県花泉町貝鳥貝塚を昭和45年に発掘調査して，淡水貝塚にみる魚類相の特徴を報告した。そこで知られたのは，大形のフナを主体として，それにウナギがかなり含まれ，さらにギギ類，サケ類，ニゴイなどを含むものであった。東北地方の貝塚にコイの遺骸を全く含まないのも興味深いが，この貝鳥貝塚も同じ後期から晩期にかけて形成された貝塚である。今，両貝塚の諸特徴を詳しく比較する余裕をもたないが，漁撈，狩猟の諸活動面でいろいろ共通点が存在するようである。このようなところから，両遺跡の文化がさらに明らかにされてくるのではないかと考えている。

付篇 6

湖西線建設の際に出土した古代遺物の年代測定

山田　治*，富永信成**

1. 年代測定の原理について

空気中には約８割の窒素，２割の酸素の他に，いろいろの気体が少しずつ混じっているが，植物の生育に必要な炭酸ガスも0.04%の割合で含まれている。この中の炭素は大部分が質量数12の ^{12}C で，ほかに約１%くらい ^{13}C が存在し，放射能をもつ ^{14}C は全体の約１兆分の１くらいの微量で存在する。この放射性炭素 ^{14}C が年代測定の主役をするわけである。

^{14}C はもともと空気中にあるものではなく，地球大気の上層部の成層圏で宇宙線によって作られ，その生成の割合は長年月にわたってほぼ一定であったと考えられる。しかし ^{14}C は半減期約5700年でベータ線を出して崩壊していくので，生成と崩壊の釣合った状態で空気中の ^{14}C の存在比は長い間ずっと一定に保たれていたものと推定される。この期間は相当長いもので，数百万年位は大した変化がなかったであろうとされている。炭素年代測定の限界は高々10万年くらいのものであるから，年代測定の可能な範囲ではほとんど変化がなかったとみなしてよいわけである。しかし，完全に一定であったわけではなく，何万年かの間には数%くらいの変動はあったらしいと考えられる。１%のゆらぎは約80年に相当するので，何万年もの古い試料については問題でないが，数千年くらいから近い時代では１%のゆらぎのもつ意味は大きい。したがって，測定精度の上昇と共に，この微少のゆらぎも問題になって来ている。

さて，植物は生きている間は炭素同化作用を営んで空気中の炭酸ガスから炭素を取りこんで酸素をはき出しているので，植物体中の ^{14}C 濃度は空気中の ^{14}C の濃度と平衡状態にあるが，一旦枯死してしまうと炭素の吸収は止まるので，^{14}C の濃度は崩壊によって時間の経過と共に減少する一方になる。そこで最初は現代の植物中の濃度に等しかったと仮定すれば，古代植物中の ^{14}C 濃度を測定することにより経過した時間が推定できるはずである。ただし，ここで測定できるのは出土した有機物が枯死した年代であって，場合によってはそれを利用して生活していた人間の活動時期とずれることもありうるので注意を要す

* 京都産業大学理学部助教授　　** 京都産業大学理学部学生

る。多くの年輪を持つ大木の場合などではその一番外側の年輪の値が枯死の時点に相当し，中心に近づくにつれ，その年輪数だけのずれが生ずる。

年代測定の試料としては，木材のほかに炭，草根，貝殻などが適当なものである。ただし，試料は皆焼かれてしまうので，保存したい貴重なものを用いるわけにはいかない。

2. 測定の方法

年代測定用試料から取り出した放射性炭素を測るには相当に精密な装置がいる。現在用いられている装置には大別して２通りがあり，一つは試料からの炭素を炭酸ガス，アセチレン，メタンなどの気体にし，大容積の比例計数管内に充塡して放射線を計数するもので，もう一つは試料からの炭素をベンゼンやアルコール等の液体にして液体シンチレーションカウンターで測定する方式である。

気体比例計数管では，試料の量はふつう１リットルないし２リットルで，特別な目的のために10リットル近いものも作られている。測定時間は1000分間程度（約１昼夜）で，それ以上の測定は異常計数が増してくるので不正確になりやすい。この方式での測定誤差は統計誤差だけで１％くらいがふつうで，年数に換算して約80年である。10リットルの計数管では0.3％まで統計誤差を小さくできる。

液体シンチレーション方式では，試料を液体にすることによって体積は気体に比し数百分の１に減るので試料の量をもっと増すことができる。測定時間もずっと大きくとることができる。筆者らはこの方法で統計誤差０.３％くらいまでの測定を行なって来たが，今年の秋から０.１％の統計誤差（年数にして８年）にすることを目標としている。液体シンチレーション法の長所のもう一つは，試料をいつまでも同一状態で容易に保存できることである。疑わしい測定値が生じたときでも，何回もくりかえして測定することにより不慮の事故による測定誤差を除き，厳密かつ容易に再現性を確認できるので，科学における普遍性，信頼性という点でも大きな意義を持つ。一見異様に見えた測定値でも，それが真のものであるか，器械の故障等によるものか，それとも試料の採取の上で疑問点があるのかということが再測定，再検討をくりかえすことによって明らかにできるであろう。

3. 測定とその誤差について

測定値には必ず誤差が伴なう。誤差という言葉はまちがわれやすいが，これは誤りの意味ではない。自然科学的測定においてどこまで測定値が正しいかという目安を示すために

用いる量であって，誤差を持たない測定はない。歴史的にはっきりしている事実でも，某年某月某日の何時何分という表現をすれば正確な時点を示すことができるが，たいてい某年とか，某年某月くらいまでで止まるのと似ている。自然科学では測定できない限界の部分を誤差と称する。したがって，誤差が小さければ小さいほど測定の精度が高いということになる。

ところで，年代測定の場合，この誤差の表現をするのに，数学的な統計誤差だけを一般に誤差として用いているので，この受取られ方が問題である。現在の表記法では，この統計誤差の中に真の値が含まれる確率は約67%しかない。つまり，どんなに正確な測定をしたとしても，表記された誤差の範囲から真の値がはみだしている確率が33%もあるのである。もし，測定値に付加された統計誤差の2倍の値を誤差と考えれば95%の信頼度があることになるし，3倍を取れば99.5%の信頼性があることになるのである。例えばある遺跡の炭素年代測定値が2000±100 B．P．と表記されたとしよう。この遺跡から出土した遺物からの考古学的推定が仮に1800年前とされるとき，一般に人は測定値が合わないと見るのではなかろうか。実は，このくらいなら考古学的推定値と，炭素年代測定値はかなりよく合っていると見なければならないのである。つまり，統計誤差100年の範囲では約67%の確率でしか真の値が含まれないのであるから，200年ずれることがあっても何等ふしぎではないのである。別の言い方をすれば，ある測定機関が真の値を統計誤差範囲に捕えうる割合は100回当り67回しかなく，33回は必ずはずれるというわけである。したがって，統計誤差とはこのようなものであることを受取る側が理解してかかるべきことを痛感するのである。

しかし，一方では，1000年や2000年の年代測定が誤差200年も300年も出ては意味をなさないという声も当然出るであろう。すなわち，弥生時代で25年きざみの編年ができているとするなら，自然科学的方法ではせめて統計誤差10年という測定をしなければならないのである。それでやっと20年ないし30年の幅のうちに真の値が95%位ははいってくることになる。

ようやく今年の秋から筆者らの実験室で1万年以内のものなら統計誤差10年の線で測定できることになったので，今後は考古学からの期待にかなり応じられるであろう。

4. 精密な年代測定のための問題点

現在，炭素年代測定を精密にしたいというときの最大の問題点は，かなり大量の試料が

必要であるということである。大量といっても炭素にして約2モル，すなわち24グラムくらいの試料があればよい。これは乾燥木材で約5倍くらい，120グラム程度に相当し，貝殻なら200～300グラムである。湿った木材では大部分が水と泥であるので更にこの数倍がいるであろう。そしてできればもっと多いほどよい。試料が少なくても測定できなくはないが精度は落ちる。日本では弥生時代の木材や，縄文時代の貝殻などはかなり大量に出土するので，この要求はそれほど過大ではないであろう。しかし，今後の方針としては，重要な遺跡で炭素試料が多量に得られるところを徹底的に測定しておき，中間を土器の編年で内挿してもらう方がよいであろう。

測定精度があがると，今まで気にしなくてよかった程度のもろもろの誤差の原因を考慮していかなくてはならなくなる。空気中の ^{14}C 濃度の変動がどの程度存在するか，地域的に差はないか，試料の種類によって違いがないか，その他いろいろな測定原理の基礎的問題をひとつひとつ解決していくことが必要になる。それらの問題がかなり明らかにされるまでは，炭素年代測定法を余り過信して頂かない方がよいのかもしれない。

5. 試料について

(1) 採取地点ⅢE区・08　開析谷内（大津市滋賀里）

135°1′15″ N

35°51′50 E

(2) 出土状態

流木，自然倒木のごとき木材，

年代測定試料は，いずれも一旦洗滌，化学的処理ののち，メタノールに合成され，液体シンチレーションカウンターAloka601型によって測定された。

6. 測 定 結 果

(1) 流木A　2260±90B.P.
310BC

(2) 同上　2280±90B.P.
330BC

(3) 流木B　2450±90B.P.
500BC

(4) 同上　　2300±130B.P.
　　350BC
(5) 自然倒木　2260±100B.P.
　　310BC
(6) 同上　　2240±100B.P.
　　290BC.
(7) 同上　　2100±85B.P.
　　150BC
(8) 同上　　2290±85B.P.
　　340BC

註：B.P. は Before Present の略で，1950ADを0として計算する。現代の標準はアメリカの国立標準局より国際的標準として販売されているNBS蓚酸を用いた。半減期としては5730±30（年）を用いた。

7. おわりに

この報告は，まだあまり精度のよくない装置で測定したものであるので，かなり大きな誤差を持っており，あくまでも中間報告的なものである。したがって今後はもっと信頼性の高い測定値が得られるはずで，この値に疑念を持たれる方は次の報告を待って頂きたい。なお，これから測定すべき試料のうち，ⅢC・ⅢD区滋賀里遺跡（縄文晩期）の木器の原材および貝殻などがあることを付記する。

昭和48年３月20日　印　刷
昭和48年３月31日　発　行

湖西線関係遺跡調査報告書（本文編）

編　集　財団法人　滋賀県文化財保護協会
　　湖西線関係遺跡発掘調査団
　　田　辺　昭　三
発　行　滋賀県教育委員会
印　刷　有限会社　真　陽　社
　　京都市下京区油小路仏光寺上ル
　　ＴＥＬ　075（351）６０３４

特別史跡安土城跡平面図

（1976年測量）

0　50　100　200m

史跡観音寺城跡平面図

（1980年測量）

0　50　100　200m